muv-luv alternative
TOTAL ECLIPSE
マブラヴ オルタネイティヴ
トータル・イクリプス
帝都燃ゆ
KOUKI YOSHIMUNE
吉宗鋼紀

一九六七年、人類は異星起源種・BETAとの接触によって、生存を賭けた闘争の時代を迎えることになる。それから二十数年間の戦いで、人類はユーラシアの90%を失ってしまう。そして一九九七年、日本帝国の譜代武家の娘として生まれた篁唯依は、祖国を守護する衛士となるため、自分をライバル視する外様武家出身の山城上総らと共に厳しい訓練の日々を送っていた。そうした中、東アジアの最前線は朝鮮半島を南下し続け、BETAの脅威は日本帝国へと迫っていた。

© Muv-Luv: The Answer

ANCHOR

吉宗鋼紀
Kouki Yoshimune

アージュ代表にして、企画広報・プロデュース・シナリオを担当。『マブラヴ オルタネイティヴ』、『トータル・イクリプス』では、シナリオのみならず、戦術機などのメカデザインを手掛けている。

虚祇涼
Ryo Utugi

『マブラヴ オルタネイティヴ クロニクルズ04』などで原画を担当したイラストレーター。本単行本では、カバーと口絵、ピンナップ、挿絵イラストを担当した。

カバーイラスト 虚祇涼

帝都燃ゆ

MUV-LUV

TOTAL-ECLIPSE

吉宗鋼紀

CHARACTERS

帝国斯衛軍付属
山百合女子衛士訓練学校

斯衛武家息女に衛士教育を施す伝統ある軍事訓練学校。武士道と軍務の一貫教育を掲げているが、本編の時代では、未成年子女の速成機関として機能している。

如月（きさらぎ） 佳織（かおり）

嵐山基地を死守するため新任衛士を率いる中隊長。唯依達が配属された中隊の上官で、親藩武家の証である赤色の瑞鶴に搭乗する。

巌谷（いわや） 榮二（えいじ）

元斯衛の経歴を持つ帝国陸軍中佐。テストパイロット時代を含め伝説的な武勇を多く持つ。唯依の父とは親友であり、共に瑞鶴の開発に携わった。

篁（たかむら） 栴納（せんな）

唯依の母。新兵器開発で東京に単身赴任している夫であり当主・祐唯に代わり、篁家を切り盛りしている。

真田（さなだ） 晃蔵（こうぞう）

実戦経験豊富な元帝国陸軍衛士。大陸の戦闘で負傷して内地送還となり、復帰までの期間、斯衛軍へ出向。山百合女子衛士訓練学校で首席教導官を務めている。

石見（いわみ） 安芸（あき）

外様出身の同期生。奔放で快活、思ったことをはっきり口に出す小隊の鉄砲玉。和泉とは良いコンビ。武家の縛りを嫌っている様にも見えるが基本には忠実。

甲斐（かい） 志摩子（しまこ）

外様出身の同期生。柔和で受動的な性格だが武家階級の仕来りには忠実であり、譜代の唯依に対するある種の憧れから、小隊のサポート役を買って出ている。

能登（のと） 和泉（いずみ）

唯依の小隊に属する外様武家出身の同期生。許嫁からの手紙に人目を憚らず一喜一憂するが、日頃は大人びた物言いや一歩引いた物腰で背伸びをしている。

山城（やましろ） 上総（かずさ）

外様武家出身の同期生。別小隊を率いる文武両道の才女。冷静で近寄りがたい雰囲気を常に纏っており、一人でいることが多い。

篁（たかむら） 唯依（ゆい）

武器拵えで高名な篁家の一人娘。父を尊敬し譜代武家の家督継承者たるべく日々研績を重ねるが、己に厳しくあろうとするあまり自問や葛藤が絶えない。

CONTENTS

——既往 …………………………… 5
一九九七年—— ……………… 9
一九九八年—— ……………… 169
——爾今 …………………………… 401
世界設定 …………………………… 407

帝都燃ゆ

MUV-LUV ALTERNATIVE
TOTAL-ECLIPSE

吉宗鋼紀

BETAの日本本土侵攻

日本帝国政府は、BETAの朝鮮半島から日本への上陸を、1999年初頭と予想していた。ところがその予想を覆し、1998年7月7日にBETA群が対馬と北九州に上陸を開始する。時を同じくして不運にも観測史上最大の台風が日本を直撃、連合艦隊の展開が阻まれ、西日本各地では補給線が寸断された。帝国軍はそれでも奮戦し、水際での防戦を続けるが、対馬や北九州での戦闘中に九州中部、中国地方日本海沿岸にも大規模BETA群が同時多発的に上陸、側面を突かれた本土防衛軍は混乱状態に陥り、戦線は瓦解。これらの地方からの疎開を終えていなかった民間人と大陸難民もBETAの襲来に巻き込まれ、混乱に拍車をかけてしまう。そしてBETAの侵攻速度の速さと台風による悪天候のため、九州、本州と四国を結ぶ橋梁群の爆破に失敗。四国にまでBETAが侵入したことにより、九州・中国地方への四国からの側面援護も不可能となり、一気にBETAの本州進撃を許すこととなってしまった。

京都防衛線

ＢＥＴＡの接近を前にして、京都からの民間人の退避と東京への首部機能の移転が始まっていたが、日本人にとって精神的な拠り所でもある古都・京都は、何としても守らねばならない都市であった。帝都を守るため、宮津〜丹波〜明石を結ぶ線を第一防衛線、舞鶴〜篠山〜神戸を結ぶ線を第二防衛線、小浜〜亀岡〜大阪を結ぶ線が最終防衛線に設定され、さらに京都外郭高地及び京都市街が絶対防衛線に設定される。各防衛線上の低地にＢＥＴＡが来たところを、広い射界を取るため高所に設置した砲兵陣地からの砲撃で漸減させつつ、機甲部隊および戦術機甲部隊でＢＥＴＡを叩く。琵琶湖は、大平洋と日本海の間の海上輸送量を向上させるため日本列島を縦断する運河とする大浚渫工事が行われていたが、運河の各水道を上ってきた帝国海軍と米海軍の艦隊が琵琶湖に控えており、京都後方から砲撃及び艦載戦術機で防衛部隊を援護する。さらに舞鶴沖の日本海と大阪湾にも帝国艦隊と国連艦隊が支援のため控えていた。

——既往

宇宙は死が支配する絶望の荒野などではなく、地球生命は孤独ではなかった。

一九五八年、アメリカの無人火星探査計画〝ヴァイキング〟は、地表面に生息する数種の大型歩行生命体を発見した。数億キロメートルの距離を経てもたらされたその報は科学者達を驚喜させると同時に、彼等の雇用者には大いなる希望を、そして出資者達には莫大な富の予兆を授けた。その存在を知る人々の多くは火星生命に対し、〝同じく神の被創造物〟という宗教的な慈しみ、あるいは同胞的な親近の念を抱き、来るべき火星有人探査とファーストコンタクトの夢に熱狂した。

そして数年後、人々は突然理解した。人類もまた、〝等しく生命の摂理に支配される存在〟に過ぎないというシンプルな現実を。

一九六七年、ファーストコンタクトは惨劇となった。突如として月のサクロボスコ・クレーターに現れた火星起源種は、国際恒久月面基地・プラトー1に所属する地質調査隊をひとり残らず食い殺した。サクロボスコ事件と呼ばれるこの惨事以降、彼等は無慈悲な進撃を続け、月面に於けるその版図を思うがままに拡大した。

国連呼称「ＢＥＴＡ」――。

Beings of Extra-Terrestrial Origin and Adversaries of the Human Race

〝人類に敵対的な異星起源種〟と命名されたその渡宙(とちゅう)生命体は、火星、宇宙空間、月面という敵対的環境変化をものともしない強靭な生命力と適応能力、なによりも圧倒的な

物量により、軽武装のみで立ち向かう人類の抵抗を悉く退けて月を席巻した。

一九七三年、ＢＥＴＡは遂に地球侵攻を開始。ユーラシア大陸の中央部、中華人民共和国・新疆ウイグル自治区へ降下ユニットを着陸させた。だが、中国政府はそれは脅威と認識しなかった。国際条約によって搬入兵器を厳しく制限されていた月とは異なり、地球の地上戦に於いては航空兵器を含む膨大な戦力が投入できる。中国政府は優勢に推移する戦況を背景に多国籍軍の派遣を固辞、異星起源種サンプルの独占を図った。ところがその十数日後、状況は一変する。強力な生体発振レーザー器官を有する新種――光線属種の出現によって航空兵器が完全に無力化されると、物量に抗しきれず戦線は瓦解。核による焦土戦術も効果なく、中央アジアは瞬く間にＢＥＴＡの手に落ちた。

翌年、カナダのアサバスカに第二の降下ユニットが降着、北米大陸侵攻が開始された。アメリカとカナダは中国の教訓を活かし、降下ユニットの着陸直後――ＢＥＴＡ個体群の物量展開前に集中的な核攻撃を加え、侵攻の阻止に成功する。だがその代償は大きく、カナダ国土の30％が半永久的な放射能汚染地帯と化した。

以来、〝ＢＥＴＡ大戦〟と呼ばれる二十数年の戦いに於いて、ユーラシア大陸の各国軍は後退と敗走を重ねた。その90％を占めるＢＥＴＡ支配域は、森林、動植物から土壌のバクテリアに至るまで自然環境が根こそぎ破壊され、ハイヴと呼ばれる巨大な巣以外

には何も存在しない平野に均されてしまっている。ＢＥＴＡとの戦いに懸かっているのはヒトの存亡ではなく、地球起源生命の総絶滅なのだ。その現実を目の当たりにした人類は、欧州の陥落を機にようやく国連の下に戦力を結集、各国軍の指令系統を再編し世界規模の統合運用を開始する。だが、人類の対ＢＥＴＡ基本戦略は、壊失戦力の補充を主とする体勢の立て直しとその時間を稼ぐため、〝失地回復と敵殲滅〟から〝ユーラシア封じ込め〟に大きく舵を切っていた。莫大な犠牲の対価として国連の対ＢＥＴＡ総力戦研究計画が得た生態調査データに加え、航空兵力を代替するためアメリカが開発した新概念兵器――戦術歩行戦闘機の量産と実戦投入によって、人類は辛うじてＢＥＴＡの侵攻を遅滞させることに成功している。

そして、一九九七年――現在。

東アジアの最前線はじりじりと朝鮮半島を南下し続け、滅びの影は日本帝国に迫っていた。

一九九七年——

一九九七年四月一四日　日本帝国首都・京都

目の前にふと、ひとひらの桜色――。

10分早く着いた待ち合わせ場所。時間を惜しんで広げた教本の陰鬱な文字列に、ほんのりとした彩りが添えられた。集中が途切れ、足下を流れる川のせせらぎが、街の喧噪(けんそう)が聴覚に帰ってくる。

篁唯依(たかむらゆい)はゆっくりと顔をあげ、その花びらが描いたであろう軌跡を視線で遡った。目の前を通り過ぎていく同期候補生たち。新緑の山肌を背景に散在する寺社仏閣と葉桜。先人がこの地に都を構えて以来、千数百年間変わらずに繰り返されてきた陽春の情景に、唯依は改めて見惚れて目を細める。彼方には穏やかな朝陽に照らされ輝くタワーと街並み。都を格子状に区切る街路。忙(せわ)しなく行き交う車輌は人々の営みの証。日本帝国の首都たる千年の都、その表情は多彩だった。古代と近代、伝統と革新、自然と人工、歴史と日常。それら相対(あいたい)するものが渾然一体となって織り成す市松模様(いちまつもよう)。それこそ正に、日本人が連綿と築き上げてきたものすべて――京都の佇まいこそ正にその顕現(けんげん)なのだ。

ふう、と浅くひと息つき、唯依は橋の欄干(らんかん)に軽く腰を預ける。そして、教本の序文にあった一節を心中で諳んじた。

《——人類は絶滅の淵にある。そして日本の滅亡はそのもっと手前にある》

そう、最前線は今この瞬間にも朝鮮半島を南下している。毎日、ニュースのトップで取り上げられるのは決まって大陸の戦況だった。だが、こんな穏やかな春の日に、誰がそれを地続きの現実として受け止められるだろうか。数十年来の大戦特需と空前の経済成長がもたらした豊かな営みからは、目と鼻の先まで迫る戦火に対する怯えなど微塵も感じられない。テレビモニターの向こう側の現実。先の世界大戦ですら無傷だった堅牢な帝都。そこに生きる彼等にとって、戦場は実際の距離より遥か彼方にあるのだ。

「だからこそ、私達が……」

唯依は我知らず呟いていた。そして、春の陽射しに輝く帝都を見つめながら唇をきゅっと引き締める。

一日も早く斯衛軍（このえぐん）の正規衛士となり、日本帝国皇帝とその全権代行たる政威大将軍を、そして民と国土を命懸けで護る。それは斯衛、即ち武家に生を受けた者の使命なのだ。まして篁家は代々、将軍の居城に参内を許された武器拵（ぶきこしらえ）の名家。その名を汚さぬためにも常に己を律し、他家の子女に対して譜代の範を示さねばならない。唯依は無意識に姿勢を正し、いつしかその数を増して道行く同期生達を目で追った。

白基調に青が差すセーラー服を纏（まと）ったあどけない少女達。歩を進めるその先に、有刺鉄線を戴いてそびえる無骨なコンクリート隔壁とゲートが、そしてその奥には、赤煉瓦

造りの豪奢(ごうしゃ)な洋館が垣間見える。それが唯依達の学舎(まなびや)——帝国斯衛軍付属・山百合女子衛士訓練学校だった。入校から早十数日、見慣れ始めた学舎とその朝の風景。ようやく見えてきた衛士訓練という名の軍事教練とその現実。そして、将来戦場を共にするであろう武家子女達の有りのままの姿。しばらく見つめた後、唯依は何かから逃げるようにして教本に視線を落とす。開いたページの至るところに踊る〝斯衛軍〟の3文字。唯依はそれを真っ直ぐ見据えながら、噛み締めるように呟いた。

「いや……だからこそ、私が……」

帝国斯衛軍——それは、武家出身者を主に編成された城内省(じょうだいしょう)直属の独立武装組織だ。指揮系統だけではなく装備調達から軍律に至るまで、国防省麾下の日本帝国軍とは一線を画しているため、その若年軍事教程(きょうてい)も軍武一環教育を旨とする独自の訓練校で行われている。中でも戦術歩行戦闘機のパイロットたる衛士の教練は、その適正に優れた者が選抜され、目的を同じくする帝国軍の士官学校に比して、贅沢とも言える環境下で育成されていた。そして近年、新(あら)に招集(しょうしゅう)対象となった武家の未成年子女には更なる厚遇(こうぐう)が施されており、軍の錬成(れんせい)施設としては非常に特殊な様相を呈している。その経緯と背景に存在する極めて武家的、あるいは斯衛的な思想と事情。訓練校の生活に慣れるに従って見えてくるのものは、決して心高鳴る高潔の証ばかりではなかった。

「——ごきげんよう、唯依」

唯依はハッと息を飲み、教本を閉じて声の主に目をやる。すると、同じ訓練小隊の一回生3名が、行儀良くお辞儀をしていた。左右に2名を従えた手前には甲斐志摩子（かいしまこ）。日頃の穏やかな言動を裏切らない、しっとりとした佇まいだった。長く伸ばした黒髪の一房が、肩口のセーラーカラーからはらはらとこぼれて滴（したた）る。サイドブロックを後ろで結わえた赤いリボンが、まるで大きな蝶のようだ。

「ご、ごきげんよう」

不意を突かれた唯依は慌てて頭を下げた。顎のラインで切りそろえた髪が、さらりと頬を撫でる。

「な～んだ、また教本読んでたの？　家柄が良いと色々大変だね～」

降り注ぐ声には呆れのニュアンス。顔を上げると、石見安芸（いわみあき）の屈託のない笑顔があった。

「別に、ちょっと時間があったから。暇つぶしに見ていただけだよ」

「うえ～、教本なんて暇つぶしでも見たくないよ！　ホント偉いよね～！　さすがは我が小隊長殿！」

安芸はおどけて敬礼をした。健康的なショートシャギーがふわりと揺らぐ。

「や、やだなあ安芸、からかわないでよ」

「いやいや、待ち合わせはいつも早く来るし、家格で押し付けられる面倒なことも文句言わないでやってるし。ほんと、ウチは外様でよかった～」

「安芸……そういうのは普通にちゃんとやろうよ」
困り笑顔でつっこむ志摩子に安芸はんんっと伸びで応じた。歯に衣着せぬ安芸の物言いはいつものこと、そこに一切の悪意はない。唯依は曖昧で力無い笑いで応じた。
「まったくだわ。外様くくりで同類扱いされる私と志摩子の立場も考えてよ」
眼鏡のブリッジを中指で押し上げながら、能登和泉がわざとらしくため息をつく。
「あのさ～安芸ぃ、お願いだから私の自信の拠り所、奪わないで」
「拠り所ぉ？　……って、いったい何の話？」
その怪訝な表情を気にするでもなく、和泉はひとまわり小柄な安芸の肩に手をかけた。
「武家の矜持はまた別として、実際問題、私、軍で本当にちゃんとやっていけるか、すごく不安なのよ」
「あ～、そういうことか。まあ、そりゃあ確かに不安だよね」
「だからね、難関の衛士教練に選抜されたことだけが、やって行けそうって思える唯一の根拠なの。わかる？」
「うんうん、わかるよ～和泉ぃ、戦車兵や機械化歩兵って悲惨らしいし！　衛士に選ばれてほんっと良かったよね～！」
両手を広げて抱きつこうとする安芸。笑みを浮かべてかわす和泉。軟らかくうねるツインテールがやや遅れてそれを追う。

「なんだよう、なんで避けるんだよう⁉」
「だから～、全然良くないの。あんたが選ばれてる時点で、私のたったひとつの根拠が木っ端微塵なんだから」
「――んなっ⁉　なんだよそれ‼　なんで私が木っ端微塵なんだよ～⁉」
「ちょっと、安芸ぃ……！　和泉も……！」
志摩子の制止はお構いなしに、和泉は芝居がかった挑発を続ける。
「それそれ、そういう所よ。はぁ、やっぱり衛士選抜って、武門の品位は考慮外なのねえ……」
「ぬぬぬぬ……ッ！　だったら和泉っ、あんただって武家の娘らしくしなさいよね！」
「あらあ、ご覧のとおり私は――」
「――男女交際は品位と節度を弁えなさいよっ⁉　せいぜい淫らな愛欲に流されないようにねッ‼」
「――ななな何言ってるのよう⁉　わっ、私達はべ、別にっ、そんな……っっっ！！！」
「も～、ふたりとも～！」
和泉の顔がみるみる紅く染まり、安芸はしてやったりとばかりに意地悪な笑みを混えた。志摩子は恥じ入るように周囲を窺う。その時――。
《ホント、気楽でいいよね～、武家のお嬢様方はさ～》

ドクン――。心臓が唯依の胸郭を打つ。
それは車道を挟んだ向かいの歩道からだった。目だけを遣って確認する。同い年ぐらいの女学生が数人、振り返って唯依達を見ていた。
《朝からあんなはしゃいじゃって。ずいぶん楽しそうだよね～、軍隊なのに》
ドクン――。
《ちがうよ、あそこって〝お嬢様兵隊教室〟なんだって。陸軍の兄キがいってた》
ドクン――。
《え～、軍隊は〝武家子女の嗜み〟ってこと？　あははっ、それじゃ花嫁修行だよ》
ドクン――。
それは決して大きな声ではなかった。だが、唯依には届いた。冷笑と侮蔑に込められた怒りが。
「……あ、安芸、声大きいって……みんな見てるから……！」
「ああ、ごめん。でもさ～和泉が……!?」
ドクン――。
恐らく安芸と同時に、唯依はそれに気付いた。志摩子の配慮する対象は件の女学生ではなかった。

傍らを行き過ぎる同期生たちの一瞥。その苛立ちは唯依たちに投げつけられていた。

ドクン——。

込み上がる苦い想い出。大丈夫、ああいう目で見られるのはもう慣れている——唯依は胸中で繰り返す。だが……。

「……っ」

羞恥に押し上げられて迸りそうな言葉を、唯依はなんとか堪えて飲み込んだ。その様子を気取られるのを嫌い、思わず目を逸らす。すると、顔を見合わせ、くすくすと笑いながら歩き去って行く件の女学生たちが見えた。

「——ふん、あいつらなんだよあの言い草。平和にぶら下がってるだけのくせに……！」

安芸は遠離る女学生の背に悪態をついた。同じ武家子女から向けられた無言の非難を転嫁するかのように。

「こっちは武家ってだけで女も招集されてんだ！　同じ……高校生なのにさ！」

「でも、あの子達……家族が大陸で戦ってるのかもしれないよ」

「わかってるよ志摩子、だからって私達のこと花嫁修業だの習い事だのって……！」

「私、聞いたことあるんだ。帝国軍の訓練校じゃ、私達のことそう言って笑ってるって噂」

「何だよバカにして！　ただの学生のくせにいったいあいつら何様——」

「――ぴりぴり……してるんじゃないかな」
唯依は思わず安芸の言葉を遮った。
「今、未婚女子の徴兵年齢再引き下げが検討されているでしょう。だから……たぶん」
唯依の言葉に、志摩子は距離を増した女学生を見つめながら頷く。
「斯衛は大陸派兵一回でやめちゃったし……私達は任官しても本土配備だものね」
「帝国軍に徴兵されるあの子達は、大陸配属もあり得る。不公平だって思うでしょうね
――同じ高校生なのに」
和泉の最後の言い回しは、意図の有無に依らず意趣返しとなった。ばつが悪そうに目を逸らし、安芸は乱暴に言い放つ。
「そうは言っても若年女子は事務方、せいぜい後方任務でしょ！　私達は……もしBETAが攻めてきたら、戦域の正面で戦うんだよっ」
ドクン――。再び心臓が胸を打つ。唯依は反射的に安芸を見た。
「あいつらが私達をずるいって思うなら……お互い様、だよ……」
その言葉は、唯依の耳には入らなかった。脳裏に焼き付くのは「BETAが攻めてきたら」という例え。即ちそれは、日本が敵の本土侵攻を許す前提だ。意に反してその光景を連想してしまう。腹の底に熱いものが湧きあがるのを感じ、唯依は自身が冷静ではないことを自覚した。

「ねえ……そろそろ、行こう？　装甲剣道部の朝稽古、間に合わなくなるよ」
唯依は微笑みながら、何とかその言葉を絞り出した。己が家格に相応しく努めて穏やかに、小隊を預かる身に求められる責務を果たしたのだ。
「ああ、そうだった！　せっかくいただいだ見学の機会なんだし、遅れたら大変だ」
和泉がそそくさと歩き始める。小走りでそれを追う安芸。
「だいたい今日は、そのために早く集まったのに。まったく、和泉が余計なこと言うから！」
「また人のせいにして～。あんたってほんと、武門の風上にも置けないわ～」
「なんだと～～～！」
何事も無かったかのようにじゃれ合う和泉と安芸。それを見送りながら志摩子はため息をつき、唯依に視線を合わせて微笑む。唯依も微笑みを返して頷き、足早にふたりを追った。
だが、その足取りに反して心は重かった。入校以来、日々目の当たりにする小さな現実が塵（ちり）のように降り積もる。父から学んだ斯衛の理想が覆い隠されてしまうのは、果していつの日だろうか。
唯依の脳裏に先日の座学が過ぎる――。
――ＢＥＴＡ大戦勃発以来、日本はその地理的条件から生産と兵站（へいたん）の要衝（ようしょう）であり続け

た。帝国議会は大陸派兵による前衛本土防衛を国家安全保証の軸に据え、大戦特需を後ろ盾に軍備増強を重ね、ユーラシア防衛を任とする多国籍軍に帝国軍を送り込んでいる。だが、戦況は一度も好転せず、内外からの陸軍兵力拡充圧力は日を追って増すばかりだった。帝国議会は法改正を経て未成年男子の徴兵制限を段階的に緩和し、その要求に応え続けた。だが、後退する最前線が朝鮮半島に至ると、与野党の別なく未成年女子を対象とした志願、あるいは徴兵枠拡大の可能性が真剣に討議され始めたのだ。そして——。

武門に列(つら)なる者、常に先陣に在りて範を示す也——武士道に準ずる規範を旨とする斯衛軍は、世に先んじて未成年子女の軍事教練に乗り出したのである。と同時に有力武家は、城内省に対し応分の待遇を内々に要求した。旧支配階級の流れをくみ、未だ封建的な体制を維持する斯衛軍は、ただでさえマスメディアの興味を惹きやすい。示範(しはん)という崇高な名目で供された軍らしからぬ訓練施設に対して、どこかもの言いたげな報道が続くのは自明だった。それは国民感情の代弁であり、先の女学生の言動はその現れなのだ。斯衛たる出自が負う重い責務と、それ故に厚遇されるという矛盾。非難の一瞥をくれた同期生は自身と同じく、その現実を真摯に受け止めるが故に、心苦しく肩身の狭い想いを重ねているのだろう——唯依はそう思った。いや、そう思うことで、あの視線を自身と切り離したかった。

「なんか……ごめんね、唯依。朝から、その……」
「——えっ、どうしたの、急に」
「うん、なんていうか私、ちゃんとやれなくて……」
唯依は隣を歩く志摩子を見た。心配そうな表情で路面に目を落としている。
「ちゃんとって、別に……。やだなあ、なんで志摩子が謝るの。あれは仕方がないことだよ」
「だって、朝稽古が見たいって言ったのも、みんなで同じ部に入ろうって言い始めたのも私達で……」
「何言ってるの。部活、そろそろ決めなきゃいけないんだし、装甲剣道は私も興味あったんだから」
志摩子はどこか遠慮がちに、上目使いで唯依を覗う。
「私達、唯依の部下なのに……さっきみたいなのって、なんか自覚がないっていうか……」
「やだなあ、部下だなんて教練上の仮編成じゃない。気にしてないよ」
「うん、でも……そのせいで、あんな……」
「志摩子……？」
「だって唯依は、篁家の次期当主なのに……あんなことに巻き込んで……」

唯依はようやく気付いた。奥歯に物が挟まった言い回しで志摩子が言外に追いやっているものに。そしてそれは、本来、正統な礼儀だった。
「ねえ志摩子。私達、同じ候補生でしょ？　だから、今はそういうのなしだよ」
唯依はそう言って軟らかく微笑んだ。志摩子がこれ以上自分を責めないように。このままでは安芸が騒いだことも、女学生や同期生に蔑まれた件も、すべて抱え込み、自分を責めるはずだ。
「それにさっきみたいなのって、私達にはどうにもできないことだよ。だったら今は、目の前のやるべきことをやるしかないじゃない」
「唯依……」
「それでね、はやく一人前の衛士になって、私達の行動で斯衛軍の印象を変えていくしかないよ」
「うん、そうだね、私達が変えなきゃね」
「それにね、こうして登校できるのも今のうちなんだから、何があっても勉強だと思えばいいんじゃない？」
「基礎訓練が終われば、寮生活だね。それはそれで楽しみなんだけど」
「楽しみ？」
「だって、いつもみんなと一緒に居られるし——も、もしかしたら、唯依と同じ部屋に

なるかも知れないでしょ」
　そうだね、という唯依の返事に、照れ笑いを浮かべて再び視線を落とす志摩子。
　甲斐家の家風なのだろうな——唯依は、安堵にも似た気持ちでそれを見つめた。
　原則的に斯衛軍では個人の能力と同等に、将軍家に対する家格が重視される。それは「高位は高徳を要す」というある種の武家思想によるものだが、それ故に最下級の外様武家子女は皆、唯依ほどの使命感を持っていないのが普通だった。特に歳の近い兄姉を持つ者たちは、家督継承意識も希薄である。故に、御家(おいえ)の一粒種という重責を負う唯依と同等の覚悟も、それに代わる動機も持たないのだ。だがそれは彼女達の責ではない——入学以来、唯依は自身にそういい聞かせ、胸中に沸く諦観と羨望の混合物を追い払い続けている。その中にあって志摩子にだけは、ある種の居心地の良さを感じていた。そして今、その理由を得心したのだ。慎ましく嫋(たお)やかなひととなりは、伝統に厳格な家風とその教育の現れでもあったのだろうと。
「——あっ、やだ……!!」
　志摩子は髪とスカートを押さえた。春の突風が川面(かわも)を下り、橋を渡る者達に花びらのつぶてを浴びせる。
「——!?」
　その時、唯依は風に混ざる遠雷にも似た音に気付いた。同時に、先を行く安芸と和泉、

志摩子を含め、歩道にいる候補生の殆どが、一斉に音源に顔を向ける。
市街の上空を避け、山肌に沿って移動する一対の輝き。耳慣れた排気音が、胸中の澱みを一瞬で吹き飛ばす。
「――ねえ唯依っ、あれあれっ!!」
安芸がそれを指さしながら、嬉々として駆け寄る。
「瑞鶴（ずいかく）……」
唯依は喜色を隠さず、その機体の名を口にした。
世界初の戦術機であるF－4〝ファントム〟。その日本仕様であるJ型（77式・撃震（げきしん））をベースに、軽量化と近接格闘戦能力強化を主眼に国内開発された局地防衛用戦術機――それが82式戦術歩行戦闘機・瑞鶴である。〝端正なること折鶴が如し〟と評され、機体名の由来となったその鋭利な外観は、重装甲を是とした第一世代機にあって一際（ひときわ）異彩を放つ。並び飛ぶその姿は、正に瑞兆（ずいちょう）を運ぶ二羽の白鶴そのものであった。
ランディングアプローチに入り高度を落とした最小戦闘単位（エレメント）を追い、唯依は欄干に身を乗り出す。
「82式って、唯依のお父様の？」
「……うん」
乱れた髪に手櫛を入れる和泉に、唯依はうわ言のように答える。煌めくその瞳は、数

キロメートル先の嵐山基地に降下する戦術機の勇姿を追い続けていた。
篁家は戦国の世から武具の拵えに長じ、その勲を以て帝都城参内を許されてきた技官の家系である。父、篁祐唯大尉は、瑞鶴、74式近接戦闘長刀など数多くの国産兵装の設計開発を指揮し、国内戦術機開発の第一人者として名高い。唯依にとって父は誇りであり憧れだった。父の手による機体を鎧い戦場を縦横無尽に駆け、帝国の守護者となる――それこそ、唯依が最も待ち焦がれる日であった。
「あ～、まただよ。うっとりした目で見つめちゃって……」
「ふふふ、こうなっちゃうと唯依、なかなか帰ってこないからね」
安芸と和泉の冷やかしも、ホッとしたような志摩子の視線も、唯依には届かなかった。

数時間後
帝国斯衛軍付属・山百合女子衛士訓練学校　第二講堂

「――8分!!」
スロープ式講堂の教壇に立つ屈強な大男が黒板を力強く叩く。丸太のような腕。その先端、分厚いから掌から広がる節くれ立った指が、むしり取らんばかりに板面を掴む。

「実戦配属された新任衛士の、初陣に於ける平均生存時間だ！　貴様達はこの『死の８分』を乗り越えて初めて、一端（いっぱし）の衛士として帝国に、そして人類に貢献する機会を得る！」

　大男は教卓を叩いて聴講席に座る少女たちを鋭く睨み付けた。右目を覆う黒い眼帯からも圧力を感じるほどの迫力だった。

「いいか？　もう一度言っておく。貴様達の敵は、人類が初めて遭遇した異星起源種だ。ヤツラにはあらゆる言語もルールも通じない。その行動原理、侵略目的、その一切が未だ不明である！　即ちこの戦争は、人類とＢＥＴＡ、そのいずれかが絶滅するまで終わることはない！」

　二限目の座学は「異星起源種概論Ｉ」だった。訓練校で初めて知ることとなった宿敵ＢＥＴＡの詳報は、一切が不明な生態、その出鱈目な形状、見聞きするいずれも大きな衝撃を伴うものばかりであった。中でも教官達が語るリアルな戦場体験は、箱入り武家子女の精神に浅からぬ傷を刻み付ける。

　特に要注意なのが教壇に立つ隻眼の主任教導官――真田晃蔵（さなだこうぞう）だった。真田は実戦経験を持つ教導官不足を補うため、帝国陸軍から斯衛軍に出向してきた現役衛士のひとりだ。容赦のないシゴキには定評があり、候補生達から〝戦術鬼（せんじゅつき）〟・真田として畏れられる名物教官だった。

だが、何れの世界にも、怖いもの知らずの向こう見ずは存在する——安芸と和泉である。
「ねえ、今日はどうする？　よかったら伊勢丹行かない？　ちょっと探したいものがあってさ！」
「え〜、またあ？　ごめん、今日はパスしていい？　かなり寝不足でさ、京都駅まで行く元気ない」
「あ〜、もしかしてカレシ？　長電話しちゃったとか？」
「うん、まあね。そのうえ見学で早起きしたし、今晩も話す約束だからさ。体力温存したくって」
「ちょっとふたりとも、やめなさいよ〜」
唯依の隣に座る志摩子が気持ち振り返り、一段後ろの安芸と和泉に囁く。
「なんだよ青春しちゃってさ〜。友情よりカレシとるのかよ〜」
「そんなんじゃないから。もう、子供みたいなこと言わないでよ」
「あ……いま何で胸見た？　子供ってことか？　子供ってことか!?」
潜めた声が何事もなかったかのように背後から降り注ぐ。志摩子は——もう、と呟き、ため息を吐いて、再び振り返る。
「実はカレの部隊、来週九州へ移動することになったんだって。博多に新設された陸軍基地らしいんだけど……」

「え……？」と安芸と志摩子。和泉の声のトーンが下がったことに、唯依は気付いた。九州・博多は最前線に最も近い内地だけに無理もない。

「だから急に一時帰宅許可が出たらしいんだけど、ほら、昼間は会えないからさ……。普段電話できないこともあって、つい、長くなっちゃうのよ」

「じゃあ、もうすぐ遠距離交際だ。そりゃあ毎日長電話もするわ。今から練習しとかないと！」

「別に練習ってわけじゃないよ……。お互い、何となく不安なだけ。最近、どこも慌ただしいんだって」

「……大丈夫だよ。九州は去年、全島疎開令が出てるんだから、変な女がつくこともないし！」

口ごもって少し空いた間に、和泉に対する安芸の気遣いが感じ取れた。志摩子は振り向いたまま聞き入っている。唯依は軽くため息をつき、ノートに目を落としたまま言った。

「あなた達、今は講義中よ。ちゃんと集中して」

「何言ってんだよ唯依〜。和泉の恋が崩壊の危機に曝（さら）されてんだよ？」

「ちょっと、なんでそうなるのよ」

唯依は意を決したようにペンを置くと、今度こそきちんと注意すべく振り向いて――
「――席次番号19番ッ！」
背後からの怒声。唯依はムチに打たれたように立ち上がった。
「――は、はいっ、教官殿！」
緊張の響きを伴った返事が、広い講堂に響き渡る。あちゃ〜、と背後から安芸の呟き。
「……篁……か、ほう」
名簿を見た真田の眉間に皺が寄る。
「篁候補生――譜代の名門出に、平民である俺の講義は些か退屈すぎたか……あ？　聞く価値はないと？」
「――いえ、教官殿！」
「……だったら続きを言ってみろ。当然、俺の質問も聞いてくれていたのだろう？」
「は、教官殿！　そ、それは……」
「――バカ者ッ！　貴様が口にしていいのは――はい、いいえ、教官殿、質問の答え、この四つだけだッ!!」
怒号が圧力となって打ち寄せ、沈黙が引き波となって講堂を渫(さら)う。残ったのは正面の壁に据え付けられた時計――その乾いた音だけだった。
質問も答えもわからない――だが、正直にそれを告げることは封じられてしまった。

「…………ッ」

晒し者となった唯依は奥歯を噛み締め、込み上がってくる恥辱に耐える。

時計の音。ごめん唯依、と和泉の微かな囁き。その時――。

「――Beings of Extra-Terrestrial Origin and Adversaries of the Human Race　人類に敵対的な異星起源種、という国連呼称です」

冷たく、透き通るような声が静寂を刺し貫いた。唯依は反射的に振り返る。三段高い聴講席の右端。その声に相応しい端正な少女が無表情で正面を見据え、立っていた。

「貴様……」

名簿に目を落とす真田の低い呟きは、猛獣の威嚇に似ていた。多くの者が次に来るであろう音圧と衝撃に備え、身構えるのがわかった。

「山城上総候補生……貴様、許可無く発言するとはいい度胸だな？」

「いえ、度胸の問題ではありません。合理性と効率の問題です、教官殿」

感情が伴っていない回答に、真田は鼻を鳴らした。

「なんだと……？　ふん、発言を許可する――説明しろッ！」

「は。私達に与えられた時間は限られています。1秒でも無駄にしたくありません。従って、訓練部隊全体の利と互助精神の両立を図りました――以上です」

無表情で言い終えた上総は視線を下げ、唯依を見おろす。

どくん――。

目が合ったのはほんの一瞬。その射貫くような鋭さが唯依の心を波立たせる。だが、その視線に宿る色はこれまで浴びせられてきた何れとも違った。不思議なことにそれだけは理解できた。

「……ふん、全体利益と互助とは恐れ入った。……よし、では存分に助け合ってもらおうか」

真田の目が鋭さを増す――。

「――篁並びに山城ッ！　――貴様らの小隊は本日の全教練終了後、グラウンド20周ッ!!」

「「――はい、教官殿！」」

正面やや上方を見据えた唯依と上総のユニゾン。うえ～、と反射的に不平を漏らす安芸。上総の部下達からは唯依への叱責が沸き立つ。

「――連帯責任だッ！　わかったかバカ者どもッ!!」

「「「「「「――はい、教官殿ッ！」」」」」」

真田の怒声をスイッチに、少女6名が弾けたバネのように起立。服従の意志を二個小隊8名で唱和した。

「全員座れ――講義を続けるッ!!」

数十分後
帝国斯衛軍付属・山百合女子衛士訓練学校　中庭

「──な～んか、嫌な感じだよなぁ」
出し抜けに不満を垂らして、安芸はひじきの煮付けを口に放り込んだ。
「あ～、山城さん？」
だし巻き玉子を箸先で一口サイズに切り分けながら、和泉は呟きで応じる。
訓練校の学舎に囲まれた庭園風の中庭は、昼食を摂る一回生で賑わっていた。中でも池を擁する広場の芝生は、競争率が高い人気スポットだった。春らしい穏やかな陽射しに映える華やかな弁当箱、そして色とりどりの総菜。屋外で楽しむ昼食は、入寮後には味わえない通学期間だけの醍醐味である。
「なにが合理性だよ。全体効率と互助ぉ？　劣等生に脚引っ張られたくないってのがミエミエじゃない」
「あら意外、あんた劣等生の自覚あるんだ？」
「ちょっ──言葉のあやだよ、あや！　まったく、どっちの味方なんだよ和泉は～！」
それまで華を咲かせていた装甲剣術の朝稽古に関する感想は、最早跡形もない──唯

依は軽くため息を吐く。
「確かにあの棘々しさは気になるけど、敵とか味方って言い過ぎじゃない？」
両手で包むように保温水筒の蓋を持ち、志摩子が茶を含む。茶道を想わせるその運びと居住まいは、武家子女の面目躍如といったところか。
「でもさっ――」
「――山城さん以前に、元はといえば安芸と和泉の私語が原因なんだから。」
何か反論しかけていた安芸はあからさまに項垂れ、和泉も弁当箱と橋を膝の上に降ろして姿勢を正した。
「う……。ごめん、唯依」
「ほんと――ごめんね」
安芸と和泉は同時に頭を下げた。波打つツインテールの先端が、惣菜すれすれをブランコのように行き交う。
「や、やめてよふたりとも。さっきも謝ってくれたじゃない。だいたい質問聞いてなかったの私なんだし、謝るのはこっちだよ」
唯依も姿勢を正し、深々と頭を垂れる。志摩子もつられてそれに倣う。陽春の中庭に車座で項垂れる少女たち――その絵面には妙な趣があった。
「あ〜も〜〜唯依はなんて良い子なんだ〜〜〜〜！　あの合理性一辺倒の冷血女も少しは

見習えってのよ！」
「やめなよ安芸、人のことをそんな風に言うの」
「やめないよ。思ったことを正直に言ってるだけだもん」
ひょいぱくひょいぱくと、めまぐるしい勢いでぶどう豆を口に運ぶ安芸。真っ正面から拒絶された唯依は、苦笑いでそれを見つめた。
「でもさ、山城さんってわかりやすいよね。なにかっていうと、唯依に張り合おうとするところとか」
「そんなことないよ、和泉……」
「うふふ。それ、気づいていないの、たぶん唯依だけだよ」
「もう、志摩子まで……」
唯依は箸先を口にしたまま、膝先の芝生を見つめた。クラス分けで上総と出会ってからの記憶を探るには、はしたないなと思いつつも、そうせずにはいられなかった。なぜなら、上総の意識を買っていること自体はとうに認識しており、その上でこれといった根拠が見あたらないのだ。まして接点も皆無だったため、個人的な因縁など在りようもない。むしろ、そうであれば幾分が楽だったろう。これまで、唯依が興味の対象となる理由は、非常に限られていた——。
「ちょっと唯依、そこまで思い詰めなくても！」と慌てた様子で安芸。

「うん……そうなんだけど」
「あ、う～ん、そうだなあ～～～。え～とほら、唯依じゃなくて、何か他のことが原因なのかもよ？　ね、安芸？」
「あ～、そうそう！　うん、そう。例えば……家柄コンプレックス、とか？」
「う～ん、それってどうかなあ。山城家っていえば、お金持ちっていうか、事業なんかでかなり手広くやって成功してるイメージだけど」
唯依のあまりの黙考に責任を感じてか、安芸と和泉が別の手がかりを探りはじめた。
「うちみたいな貧乏武家ならともかく、あんな裕福で合理的な人が、家柄にコンプレックスなんて持つかなあ」
「でもさ、たまにニュースで見るけど、〝新興財閥系武家〟とかいわれてるし。あれって完全に皮肉じゃない。そういうのって、結構堪えるんじゃないの？」
「でも、山城家は武に長じた家柄でもあるよ。将官や衛士をたくさん出してて、外様の中では上位を争う程だし、そんな皮肉ぐらいで――」
「――なるほど～、だからか！」
志摩子の言葉を遮った安芸が、目を輝かせる。
「やっぱりそうだよ。武も名誉も富もある。だけど家格だけがない。だから由緒ある譜代武家のお嬢には、思うところあるってわけ」

ドクン——。唯依は緊張を気取られないよう、穏やかに言った。
「由緒あるって……篁だって元々は外様なのに」
一瞬の沈黙。そして——。
「——ええっ⁉　そうだったの……⁉」
「ふえ〜、知らなかったわ‼」
「でもさっ、今の家格って、基本的に関ヶ原で固定化したんじゃ……？」
志摩子と安芸は目を丸くする。和泉も同様だったが、驚きすぎたのか、黙って唯依を見詰めている。驚くのは無理もない。これまでは活字や映像でしかなかった歴史。その一部が、いま弁当を手に目の前に座り、俯(うつむ)いてはにかんでいるのだから
「歴史で習ったでしょう。明治から前大戦中期にかけて武家制度が混乱したって。その時の家格替えされたんだって」
だが唯依は、はにかんでいるわけではなかった。その複雑な表情は、内なる緊張が我知らず表に出ただけのことだ。思い切った告白の結果はまだ何もわからない——安芸達の態度が変わり始めるのは数時間後か、数日後か。
「そんなことが、本当にあったんだねえ……」
志摩子がうわ言のように呟く。箸は完全に宙に止(とど)まっていた。
「代々武器拵えの勲功(くんこう)で、江戸城参内を許されていたことが大きかったらしいよ。でも

本当は引き留めだろうって、父が」
「引き留めって……どういうこと？」と和泉。
「兵器開発に長けた家系を斯衛に止めるためだよ。当時、廃家して民間で起業する技官系外様武家は多かったって」
「ああ、それも習ったね。固定化した家格制度や軍務だけに縛られるのを嫌って、民間で成功したってやつ」
「じゃあ、山城家は武家に止まったうえで、ここまで頑張ったってことか〜」
「武家の商業参入全面解禁は、敗戦後の規制緩和以降だもんね」
和泉の補足に、唯依はゆっくりと深く頷いた。
「そうだよ。それは山城家が誇り高い武家だって証じゃないかな。だから私は、山城さんの言動に、何か含むところがあるなんて思えない。切磋琢磨は武門の本分。家柄なんて関係ないし、訓練校では何の意味も持たないよ」
それは、そうあって欲しいという唯依の願望でもあった。篁家の家格替えは、祖父と父の代には相当な悪影響をもたらしたという。武勲にあらざる異例の格上げであったが故に、ことある毎に譜代、外様の両側から有形無形の圧迫を受けたとも聞く。だが父達は、それに反論も武を以て抗うこともせず、ただひたすら武器拵えの道を貫き、黙々と行動と結果を積み重ねることのみで、家格相応の信を勝ち取ったのだ。だからこそ唯依

は、同様に現在の山城家の成功も、武門の誇りと高潔を貫いた結果なのだと信じたかった。上総の視線に感じた蔑みとはちがうニュアンス。その理由がそこにあると信じたかった。ただ、上総から実のところどう思われてようと、それによって山城家の評価を変えることはない。それが唯依の信念だった。

「——でもさ、だったら尚更不愉快なのかもよ」

止まっていたすべての箸が、和泉の嘆息を切っ掛けに動き出した。

「だって戦後の規制緩和って、逆にいえば家格を完全に固定化しちゃったわけだしさ」

「あ〜そっか、家格替えって抜け路も、もうないしね〜」

その何気ないやり取りを聞きながら、唯依は苦い気分を噛み締めていた。和泉がさらりと言った外様視点の解釈。それが盲点だっただけに、ざらついた不純物が心に染みていく。やはり上総は……。

「どうでもいいけど和泉、あんた意外に歴史詳しいんだね。結構びっくりしたよ」

「安芸〜、あんた武家の娘なんだから自分達の歴史ぐらい、少しはさあ」

「いいんだよ、私は未来に生きるんだから！」

自信満々の表情でふんぞり返った安芸に、和泉はジト目でため息をつく。

「ホント斬衛の自覚ゼロだよね。はあ〜、ますます自信なくなるよ……」

「も〜、またそれ？　やめてよ？　また大騒ぎ——」

困り笑顔の志摩子を他所に、安芸は切なげな表情を湛え、何やら吟じ始めた。
「君とふたりで〰︎想い出の〜あの場所に行きたい〜！　君の優しい微笑みが〜、君のぉ――」
「――ッ⁉」
「君のぉ優しい微笑みが〜、やわらかい君の掌が〜僕のぉ〰︎！」
「――あ〜ッ！　あ〰︎あ〰︎ッ！！！」
びくん――唯依と志摩子は同時に身体が跳ねた。和泉は突然、獣のごとき叫び声をあげ、口を塞ごうと安芸に掴みかかった。
「――あああああんたなんでッ⁉　――なななんであんたが⁉」
「みみむぁ〰︎みみまめみまみぃ〰︎‼」
「も〰︎ふたりとも〜！　騒がないでっていったのに〰︎‼！」
安芸は泣き笑いの様相。その口を親の仇のように塞ぐ和泉は耳まで紅潮していた。志摩子は驚いた拍子に落とした鮭の切り身を恥ずかしそうに拾う。
「――ぷっは〰︎‼　は〰︎おかっしい‼　あはははは‼」
拘束を解かれた安芸は、肩で息をしながら押し黙る和泉を指さして笑った。唯依はどちらにでもなく、ため息混じりに問うた。
「ほんとにもう……それ、いったい何なの？」

「ラブレターだよ。前にさ、和泉がうっとりして読んでたやつ」
「ちょっと安芸、悪趣味だよ、人の手紙読むなんて」
「人聞き悪いな～唯依ぃ。隣で堂々と読んでたから、話しかけたときそこだけ見えちゃったの！」
志摩子が唯依を見て困り笑顔。言われてみれば確かに——和泉が手紙を読みながら微笑んでいる姿を日頃から見かける。元より他人を詮索しない主義の唯依だが、そのあまりに明け透けな様子から、まさかそれが恋文だとは想像し得なかった。
「あのときだって、何度呼んでも上の空でさぁ～。ま、それにしても許嫁のカレと文通なんて、雅（みやび）だねえ……いししし！」
「うるさいな～。大きなお世話よ」
安芸の冷やかしに和泉は顔をしかめて応じ、仕方ないなとばかりに語り始める。
「カレ、新兵だから。電話ひとつするにも周りに気を遣うんだって。だから手紙が一番なのよ」
「え～!?　堂々とかければいいじゃん。いくらＰＸの公衆電話だってさ、恥ずかしがってる場合？」
「順番待ちが毎日凄いんだって。ほら、斯衛軍はずっと増員、増員でしょ？　電話の台数も多くないみたいだし」

「なんかケチくさくない〜？　増員した分電話ぐらい増やすでしょ、普通」
「ほんとだよねぇ……」
ふと脳裏を過ぎる今朝の女学生——そして、その冷たい視線。些細な不備に理不尽を嘆く安芸とそれに同意する志摩子を、唯依は複雑な想いを胸に見ていた。
「——ご馳走様でした」
唯依は話題を変えようと、ゆっくりと丁寧に食後の礼をした。皆がそれに続く。
「は〜お腹いっぱいで幸せ〜。でも次の枠が基礎装剣術で不幸せ〜!!」
安芸がぐぐっと伸び、芝生に倒れ込んだ。弁当箱を片付けながら和泉が、
「なによあんた、未来に生きるんでしょ？　衛士になれるかどうかは、〝総戦武〟の結果次第なんだから気合い入れなよ？」
——斯衛軍の衛士適正が要求する身体能力は帝国軍よりも高い。故に、武家子女の義務教育期間には、陸軍の新兵錬成訓練をベースとした体育カリキュラムが学年に応じて取り入れられている。従って、衛士訓練校への入校時には帝国軍水準の約６割が達成されており、身体能力向上を目的とする初等基礎訓練期間は、帝国軍に比べ非常に短いのだ。その最後に行われる検定試験が総合戦闘武術評価試験であり、候補生達は〝総戦武〟という略称で呼ばれている。基礎装剣術はその中で最も重視される評価教練なのだ。
「——ちょっと、きいてるの？　装甲剣術に未来がかかってるのよ？」

「それとこれとは別〰〰。満腹イコール眠気〰〰〰」
「未来っていえば、放課後にはグラウンド20周もあるの、忘れないでね」
志摩子の突っ込みに、安芸は勢い良く起き上がり、ため息を吐いて項垂れる。
「あ〰〰もう、〝戦術鬼〟め〰〰〰！　あいつには血も涙もないのかよ〰〰〰」
「だから、あれは私達が……」
志摩子に向きなおり、安芸は唇を尖らせた。
「そうかも知れないけどさ〜、入学以来どの教官も同じような話、何回も何回もな〜ん回もするし、いい加減、集中しろって方が無理だよ」
「教官殿は実戦経験がある方々ばかりよ。教科に関係なく皆が同じことを言うなら、それだけ大切だってことでしょう？」
「唯依の言う通りだよ。生き残った人の言葉なんだし」
「そのとおりだよ志摩子！　生き残るための戦訓なら余計、別の話も聞きたいと思わない？」
「そりゃあ、そうだけど……」
「〝戦術鬼〟のヤツ、元々帝国軍でしょ？　だったら斯衛を嫌ってるはずだし、私達を無知のまま戦場に送ろうとしてるのかも！」
「どれだけ想像力豊かなのよ〜。いくらなんでもそれはないでしょ」

鼻で笑ってお茶を飲む和泉に、安芸がぐっと顔を近づける。
「果たしてそうかな～？　疑似生体治療があるのに、これ見よがしに眼帯なんかしてて怪しくない？　今時威圧にもならないのにさ～」
「ん～まあ、それは思わないでもないけど、さすがに、ねえ」
「私の予想ではあれ、ダテ眼帯だよ。大陸での負傷は本当だろうけど、とっくに疑似生体の眼が入ってるって！」
「はいはい、わかったから。怪しい怪しい」
顔と顔がくっつきそうな勢いで迫る安芸を、和泉が両掌でやんわりと押し戻す。
「そう、なのかな……？」
唯依は、言葉と口調を慎重に選びながら続けた。
「確かにあの眼帯は、私達に戦場の現実を実感させる意図もあると思う。でも、自戒のために疑似生体療法を使わない人だって、いるよ」
幼少の頃から信頼を寄せる父の親友——大きな傷痕が刻まれたその面影が浮かぶ。
「真田教官にも何か事情があるんじゃないかな。少なくとも訓練校にいる間は、そのままでいようって思う理由が……」
その時——まるで唯依が言い終えるのを待っていたかのように、昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴った。

数十分後

帝国斯衛軍付属・山百合女子衛士訓練学校　第二グラウンド

「——それまでッ！　下がれッ‼」

初夏を思わせるグラウンドの熱気を、耳慣れた怒声が劈(つんざ)いた。踏み固められた土を蹴る音が一斉に止むと、疲労を孕んだ少女達の叫びが陽炎に戦(そよ)ぐ。

「——礼ッ‼」

「「「——あ、ありがとうございましたッ‼」」」

２名の教官分隊に一方的に打ち倒された小隊４名が、待機位置最後列に収まる。全身を鎧うプロテクターは、見事に土まみれだ。——次、という真田の号令で最前列の小隊が立ち上がり、戦術の確認をしながら、白いラインパウダーで20ｍ四方に区切られた試合域の開始線に向かう。

「——ここで問題です。あの陣形はなんでしょ～か！」

「う～ん、楔壱型(アローヘッド・ワン)……かな？」

開始線で展開した小隊を見て、安芸が出した問題に志摩子が答える。

「正解は……え～、唯依？」

「楔弐型だよ」

「ブブ～、おしい！　志摩子ざんね～ん」

「ううう……」

「残念なのはあんたでしょ」

安芸を揶揄して和泉が志摩子をなだめる。だがこの間、少女たちの視線は試合域に注がれたままだった。

互いに礼を終え、開始準備が整ったことを見極めた主審の真田が息を吸い、その胸板が更に分厚さを増す。

「――始めェッ!!」

五限目は既に後半にさしかかり、基礎装剣術恒例の連携地稽古が始まっていた――。

装剣術――即ち装甲剣術とは、斯衛軍が衛士訓練教程に採用している総合近接格闘術である。日本刀を模した樹脂性の両手長刀を主装備とした剣術に、柔術、合気道、空手などを組み合わせた独自の格闘術であり、戦術機搭乗時の機動近接格闘戦感覚を養うための教科である。戦術機の操縦には、直接的な操縦操作に加え、脳波と体電圧統計による間接思考制御が採用されているため、このような身体を動かす武術教科の修練は実戦の近接格闘能力に直結するのだ。従って、基礎教程では主に個人技の成熟が目的だが、実戦での編成を常に意識させるため、４名の小隊、あるいは二名の分隊

（最少戦闘単位(エレメント)）による連携組手が必ず組み込まれている。連携地稽古とは、小隊、または分隊同士で行う集団乱取りであり、前半で学んだ個人技を確認しつつ、部隊連携に応用する力を養うために行われる。応用課程では二刀流や銃剣術、中隊規模連携なども加わり、高度な戦術や状況判断が要求され、より実戦を意識した教練となる。また、約６週間の初等基礎訓練期間の最後に行われる衛士への第一関門、総戦武では、筆記試験と実技に加え、候補生小隊同士の試合形式による装甲剣術技能検定が行われる。その結果、修了水準に充たない候補生は再教育課程送りとなり、最悪の場合は転科処分となる。

ばばっと、四辺に配された副審４名の旗が一斉に上がる。

「――白一本ッ、それまでッ！　――下がれッ‼」

またしても教官分隊の圧勝。候補生は人数で優るがすべてに於いて劣る。敗北は必然であり、今はその経験から学ぶ時期なのだ。だが、腐っても武家の子女。一方的に蹂躙(じゅうりん)されながらも、候補生の眼には秘めた闘志が見てとれる。

「――次ィッ‼」

交代した主審の号令に――どくん、と胸が鳴る。開始線に向け、唯依の小隊は一斉に歩き始めた。対する教官分隊は斉藤(さいとう)という名の教導官と真田だった。

「私達の番だね……！」

「大丈夫、作戦通りにやれば、上手くいくよ」

目に見えて緊張する志摩子の肩を叩き、唯依は力強く頷いた。
ヘッドギアのベルクロを締める真田を一瞥し、好戦的な笑みを浮かべる安芸。
「ようし、今日こそ一矢報いてやる」
「あまり張り切りすぎると放課後、きついわよ」
和泉も程良くリラックスしているようだった。
「――D小隊、おかっちませッ！」
「「――かしこわッ！」」
円陣を組み、ガツッとポリカーボネイトの面を打ち付け合う。鬨（とき）の声は武家女学校の伝統――〝お勝ちあそばせ〟、〝かしこまりましたわ〟の省略形だ。
初期隊形は鶴翼壱陣（ウィング・ワン）。10m先の開始線、目測で約4mの間隔を空け並立する教官分隊に対し、右翼前衛に唯依、その左斜め後方3mに志摩子、左翼前衛に安芸、その右斜め後方3mに和泉。左右分隊の間隔は約4m。
「――互いに礼ッ！　――始めッ!!」
主審の号令と同時に駆け出す――隊形は維持したまま弧を描いて前進、教官分隊を左右から包み込むように展開する。
まずは教官ふたりを背中合わせにさせて連携を分断。2対1の個別状況を作ったと見せかけ一斉にかかり、左翼側の斉藤教官に和泉が仕留められている横をすり抜け、背後

右死角から安芸、左右から志摩子、唯依の三名で真田を討ち取る算段だ。
　試合域のやや白陣側――即ち、教官分隊の開始線にやや近い位置で彼我剣撃距離に。双方足を止め緊迫のにらみ合い。出ては引き、引いては出る摺り足。じりり、じりりと靴底で土が鳴る。
　状況は唯依たちの思惑どおり、真田と斉藤は互いに背を向け合い、それぞれ候補生分隊と対峙している。唯依は真田の眼を睨み付けながらも、焦点外にぼんやり像を結ぶ安芸に目配せしたい衝動に駆られた。だが、一瞥すれば手を読まれる。そして最悪の場合一本取られる。タイミングは何度も打ち合わせ済みだ――信じて動くしかない。
「――はあああああっ！」
　気合い一閃、唯依は真田に対し上段から模擬刀を打ち下ろす――筸示現流が誇る神速の踏み込みで距離が詰まる。同時に眼帯側の死角から斬りかかる志摩子。
　白一本、と主審の声――恐らくは和泉。展開は作戦通り。真田の右背後からは安芸が来るはず！
「――ッ⁉」
　唯依は我が目を疑う。集中によって引き延ばされた主観時間の中――真田が身体を捻りながら左後方にステップバック、グッと沈み込んで跳ねる――。
「――きゃあああッ‼」

「――ぐはぁっ!!」

――後ろ回し蹴りで志摩子の模擬刀をはじき飛ばし、勢いそのままでブロックのような足を安芸のチェストプロテクターに叩き込んだ。

「――しまッ……!?」

唯依は驚異的な身体制御能力を発揮して踏み込みを浅く修正。先足を軸に上体を捻って無理矢理ベクトル変換。渾身の力で模擬刀を掲げた。

バスン、と発泡樹脂の激突音――腕に重い衝撃。食いしばる歯から低い唸りが洩れる。

「――ほう?」

真田の感嘆――唯依はその一撃を辛うじて受けた。鍔迫（つばぜ）り合（あ）いの形になり押し込まれる。腕が、肩が、脊椎（せきつい）が軋む――力比べでは分が悪い。

「――はあああぁッ!!」

唯依は刃を寝かせていなし、つんのめる真田の脇腹に渾身の膝――が、空を切る。地面を蹴り側転で躱（かわ）した真田が、着地と同時にすくい上げるような一閃。

「――くっ!?」

唯依は弧を描くようにステップバック――模擬刀の切っ先が数センチ先をかすめた。距離をとって体勢を立て直す。

「ふう〜っ……ふう〜っ……!」

背を伝う汗。肺と心臓の要求を無視して深くゆっくりと息を整える——正眼に構える真田を見据えたまま。岩塊を思わせるその巨軀からは想像しがたい柔軟性と俊敏性。いつ対峙しても脅威と驚嘆を禁じ得ない。

これが、実戦を生き残った衛士——ごくり、喉が鳴る。

唯依は視界の端に敵味方の像を探す——真田を覗う志摩子と斉藤に対峙する安芸が背中合わせに。作戦で想定した配置は逆転——今や連携を分断されているのは唯依達だった。こうなっては事前に準備したサブプランも機能しない。まして無意識の連携など、たかが数回の教練のみで望むべくもない。今こそ日々の鍛錬と個々の能力が試されるのだ。

「——いつまで休んでるつもりだッ!?　貴様ら時間切れまでそうしてるつもりかッ!?」

後方から主審の檄が飛ぶ。基礎教程で定められた地稽古は1セット8分間——これまで逃げ切った者はひとりもいない。無論、元よりそのつもりもない。

「——やあああああッ!!」

痺れが切れたか檄に応じたか、安芸が動いた——。

「——たあああっ!!」

視界の右端で志摩子が続く。動きが真っ直ぐすぎる——唯依は数歩踏み込んで左に跳び、そこから一気に距離を詰める。横凪(よこな)ぎの初撃(しょげき)を躱された志摩子は身を捻って上段に

蹴り――空を切るにまかせ回転、模擬刀の二撃目。だが、真田の回し蹴りを警戒してか踏み込みが甘い。

「――志摩子ッ！」

唯依は志摩子の斬り込みを捌く真田の軸足に模擬刀を突き立てる――死角からの攻撃。

「――!?」

横殴りの衝撃――人形のように崩れ墜ちる志摩子が視界に入る。だが、天地が逆だった。

意味を求めて意識が彷徨う――背に衝撃。目に蒼天。鼻腔の奥にはツンとした刺激。聴覚に充満する雑音に混ざる何かの音――シロイッポン、ソレマデ。

「……う……うぅ……!?」

背と脇腹の鈍痛。吐き気。咳。認識が回復し、世界が意味を取り戻す。下がれ、の号令。唯依は、歯を食いしばって立ち上がり、フェイスガードの泥を払った。

「一瞬、迷ったな……」

「え……？」

不意の声に唯依は振り返った。歩き去る真田。その背中越し。

「……その下らん美学は、多くの戦友を殺す」

「まったくさ～、大人げないにも程があるよ。素人相手にさ～」
礼を終え、列の最後尾に戻った途端、安芸が悪態をつく。
「しかたないよ。軍事教練なんだから手は抜かないでしょ」
と、プロテクターに付いた泥を払いながら、志摩子。
「実戦経験のある教官と私達の差を、思い知らせる意味もあるんだろうし……」
「だったらその経験を伝えろっての～！　教練なのに毎度毎度何の評価もアドバイスも無いなんておかしいよ！」
「うん、まあそれはそうだけど……」
「あれだよ、あの教官たち元々帝国軍だから、斯衛に嫌がらせしたいだけじゃ――」
「――はいはい、下らない愚痴はそこまで。二巡目に備えて反省点確認しとこ？」
と、ヘッドギアを脱いで和泉。言葉を遮られた安芸の抗議はどこ吹く風、頭を左右に振りツインテールを整えながら続ける。
「私から見て、速攻が崩れた後のサブプランがまったく機能してなかったかな。連携もバラバラだったし、もっと声出して指示し合った方がよくない？」
「は～、バカだなあ和泉は。言葉で指示したら作戦バレるっての。だから一番最初にやられるんだよ～」
「バカはどっちよ、私が最初にやられたのは作戦でしょ。ちょっと……なにその目。や

めてくれる？」
　哀れみを湛えた笑顔の安芸は、励ますような口調で、
「かわいそうな和泉。開始３秒で場外行きだもん、仕方ないよね？」
「だから、あれは作戦だって言って――」
「――うんうん、そうだね。客観的な上から目線で批評するしか、自分を保てないよね？」
「あ、あんただって最後は場外に蹴り出されたくせに！　だいたいね、外で見てたから
こそ客観的な指摘――」
「――私は和泉の意見、いいと思う」
　唯依は、別小隊の奮闘を見つめたまま呟くように言った。
「私達は連携する以外教官に勝ち目は無い。だったら、手を読まれるリスクより、互い
を把握してフォローし合えるメリットを優先すべきじゃないかな」
　安芸の顔から一瞬で蔑みが霧散し、紅潮した和泉の表情に優越の色が差す。
「そう言われればそうかも……」
「ゆ、唯依〰〰〰！　志摩子〰〰〰!!」
「ほ〜ら見なさい。さすがよね〜。唯依は、ちゃ〜んとわかってるわ」
「ぐむむむ……ぅ」

唯依は3人に応じることなく、同期生の敗北する様を見ていた。いや、心ここに在らずでは〝眺めていた〟というべきだろう。

何故私の意見はそのまま通すのか——唯依の心には部下たちの思考に対する疑念が持ち上がる。

常に皆より私が正しいとでも思っているのか——唯依は胃の奥底に、ドロリとした何かが込み上がるのを感じた。

《一瞬、迷ったな》

ドクン——。

《その下らん美学は、多くの戦友を殺す》

ドクン——。

真田の言葉が何度も過ぎる。唯依は奥歯を噛み締める。

見抜かれていたのだ。志摩子の斬り込みに応じ、数歩踏み込んで反射的に跳んだ左——即ち、真田の死角から軸足を突くことを唯依は一瞬ためらった。そのコンマ数秒の迷いが、安芸を蹴り出した斉藤に対処の時間を与えてしまったのだ。結果、唯依は側面から斉藤の打突をもろに受けて地に這いつくばった——。

真田が用いた〝美学〟という言葉。そして〝下らない〟という揶揄。それは一瞬の迷いを生んだ唯依の精神に対する痛烈な批判だ。敵の弱みを突くのは卑劣、あるいはそれを

潔しとしない思想。そのようなものは近代戦争に於いては愚の極みであり、脆弱の証なのだ。本来斯衛が奉ずる武士道精神とは完全に矛盾する、合理的な勝利至上主義。だが、殲滅戦の様相を呈するＢＥＴＡとので戦争で求められるのは正にそれであり、唯依自身もその現実を理解はしている。だが――。

《その下らん美学は、多くの戦友を殺す》

ドクン――。

篁家が――いや、父と母がその生き様として見せた高潔。それこそが唯依の誇りであり自己同一性、あるいは存在理由だった。それを手放すことは、自身を評価してくれている者達への裏切りであり、内面的な死に等しいのだ。入校以来目にする様々な矛盾。要求されるものと宿命の狭間に在って、割り切る術を持たない己が未熟が、唯依を激しく苛む。

「私は……わかってなんていない……」

声にならない声。

なのに、なぜ――唯依は呟いた。

自身の生命を危険に曝すかも知れない者の言葉を、どうして簡単に――視界は焦点を失い、世界は曖昧な模様と化している。

「――っ!?」

わあっと湧きあがる突然の歓声に、唯依はハッとし、視界に焦点が戻る。
「す、すごい……」
漏れ出る志摩子の驚嘆。目を見開く和泉。
「うそ……」
「なんだよ、あれ……」
唯依は、呆ける安芸の視線を辿る――。
「――!?」
そこには、仏頂面で場外に向かう斉藤。向き直って真田に正対する山城上総と、同期生2名の姿があった。

数時間後
京都市街　路面電車内

日は西に遠離り、藍から茜へと移り行くグラデーションに墨黒(すみぐろ)の電線が車窓を彩る。
唯依と志摩子を乗せた路面電車は、帝都を東西に貫く大通りをゆったりと滑ってゆく。
「痛ったあ……」

志摩子はそう呟いて太腿をさする。その動作は至極緩慢で差し迫った痛みは感じさせない。
「大丈夫？　そこって、真田教官に打たれた……」
「うん、防具付けてたのにね～。グラウンド走ってる途中からなんとなく」
発泡柔軟樹脂とポリカーボネイトで作られた装甲剣術用防具をも通す一撃——真田の太刀筋が唯依の脳裏に過ぎる。
「でも大丈夫だよ。衛生官は軽い打ち身だって言ってたし」
「そっか、ならいいけど……」
如何に武家子女が厚遇されているとはいえ、衛士教練の実技教導で手加減されることはない。それは即ち、万が一の実戦で落命する可能性を高めてしまうからだ。だが、斯衛独特の保護措置は当然ながら存在する。武術系の実技教科には医学的検診がワンセットとなっており、終了毎に全員の受診が義務付けられているのだ。とはいえ、唯依達がグラウンドを走ったのは放課後で検診の後だ。打ち身を圧(お)しての持久走であれば、複合要因による悪化の可能性もゼロではない。何事も無ければいいけど——唯依は心で案じた。
「それにしても、山城さんたち、すごかったよね～」
車内の正面に設置されているモニターを見上げながら、志摩子は太腿をさする。画面

のニュースキャスターは大東亜連合による前線構築と、ブラジル政府の中国難民受け入れ表明に関する速報を淡々と読み上げていた。
「教官から一本取るなんて、なんか夢みたいだと思わない？　なんか私スカッとしちゃった」
「うん……そうだね」
唯依は微笑んで頷きながらも、違和感を拭えなかった。志摩子の感想は正しい。直接対峙したことがあるからこそ、教官の強さも、それに勝つことの困難さも理解している。だが、それが夢であっていいのだろうか。真田に斬りかかったあの時、志摩子は自分が一本を奪うことを本気で信じていなかったのだろうか。だからこのように、晴れ晴れとした気分に浸っていられるのか。掲げた目標を先に達成されてしまったというのに。志摩子が口にする言葉——それが他愛もない感想の垂れ流しだと理解できているにもかかわらず、唯依はその真意の深掘りを止めることができなかった。
「さすがに真田教官には敵わなかったけど、山城さん、最後までよく粘ってたよね」
「他の子達の連携や位置取りもよかった。きっと練習や打ち合わせ、沢山したんだと思う。私達も見習わないと」
唯依は慎重に言葉を選びながら、正直な心情を口にした。志摩子は困り笑いで頷く。
「そうだね〜。でも〝総戦武〟では当たりたくないなあ。あんな連携見せられちゃうと、

ちょっとね〜」

「……うん。そうかもね」

志摩子の言う通りだ――今の小隊では勝ち目がない。端から勝つ気のない者に勝利など決してあり得ないのだ。唯依の心に、諦観の黒いシミがジワジワと広がっていく。

確かに総戦武に於ける装甲剣術技能検定は、競技会とは違い勝敗がそのすべてではない。むしろ初等訓練期間で重視されている連携意識やその練度、次いで個人資質や将来性などが評価対象となる。だが、それらが高い小隊が勝利するのも然りである。そして総戦武の後には、中等基礎訓練期間が控えている。シミュレーター演習に始まり、実機を使った基礎挙動訓練、構造把握のための実機整備など、それこそが衛士候補生にとって本当のスタートラインだ。初等基礎訓練期間の成績が将来を確定するものではないとはいえ、総戦武を突破できなければ何も始まらないのだ。

勝利でこそないものの、山城上総の小隊は、〝教官から一本を奪う〟という、同期生の誰もが成し得なかった結果を残した。部下を指揮し、その支援を受けながら斉藤を直接仕留めたのは、上総自身だった。初等教育期間の候補生としては開校以来3人目の快挙だという。唯依に功(こう)を焦る気持ちは元よりない。だが、同期生という身近な存在が目の前で成した偉業は、他家の範たれという戒めと手を携え、唯依の小さな背中に重くのし掛かっていた。

「——あっ、見て見て唯依、噂をすれば！」
唯依はハッと我に返る。身を捩って窓に貼りつく志摩子は、路面電車と並走する黒塗りの高級リムジンを指さしている。
「……なあに、あの車がどうかしたの？」
「後ろ後ろ、ほら、後部座席！」
目を凝らすと、サイドウィンドウ越しに山城上総の姿が見えた。唯依と志摩子に気付いた様子はない。
「それにしても高そうな車だね～」
感嘆と呆然が攪拌された感想を聞き流しながら、唯依は上総の横顔を見つめる。
どくん——。
講堂で一瞬絡み合った視線が甦る。あの時感じたこれまでとは違う感覚。あれはいったい何だったのだろうか。これまで唯依に——篁家を名告る者に向けられてきた、如何なる悪意とも明らかに一線を画する視線。
「——このような時だからこそ、斯衛に列する者は倹約を旨とし、国民の範たらねばならない！」
堅苦しい顔を作った志摩子が、上総に向けて敬礼をした。
「ちょっと、なにそれ。もしかして、学校長？」

「――似てた？」
得意顔で敬礼する志摩子に、唯依は思わずくすっと息を洩らす。そして――。
「――ん、普通だな！」
唯依も堅苦しい表情を作り、物真似でかえす。見つめ合うニセ学校長――同時に破顔して息を吹く。
「あはは――やだもう志摩子～、ぜんぜん似てないよ～」
「唯依だって――あはははは……あっ！」
笑いながら窓外を一瞥した志摩子は口を押さえ、慌てて正面に向き直った。唯依は反射的に、ちらと目をやる。
どくん――。
上総と目が合った。講堂とまったく同じ、鋭くて冷たいあの視線だった。違っていたのは、入れ替わった互いの位置関係だけ。
「山城さん……なんか怒ってなかった？　バカにしたと思われたかな」
「うん、どうだろう……」
唯依がそう答えると停留所のアナウンスが流れ、路面電車は減速、リムジンは走り去っていった。

「そう言えば唯依のお父様は、まだ大陸に？」
モニターには大東亜連合総司令の会見。大陸の戦況を伝える日本語テロップを見ながら志摩子が尋ねた。唯依は思考を占めていた上総の視線に関する考察を頭から追い出す。
「うん。相変わらず行ったり来たりしてるみたい。日本に戻って来ても、ずっと東京だけど」
「唯依のお父様がそれだけ忙しいってことは、噂の新型機配備も近いのかな」
「さあ、どうだろう……。そうなの、かな」
「え～、だって帝国軍だけずるいじゃない。不知火（94式）、吹雪（97式）って続けて第三世代機配備して」
唯依は申し訳なさそうに微笑む。相手に悪気はない。新たな交友関係の獲得と引き替えに繰り返されるいつものパターンだ。
「あの瑞鶴（82式）をお作りになった唯依のお父様が関わっているんだから、不知火（94式）以上の凄い機体になるに決まってるよ」
「あ、ありがとう、でも――」
「――だって、衛士になった唯依が乗るんだもの。凄い機体するって、お父様だってきっとそう思ってるよ」
目を輝かせて語る志摩子。

父様はそんな人じゃない。開発機の能力を私情で左右するようなことは決してしない——唯依は困惑を悟らせないよう軟らかく微笑む。

「ごめん、志摩子、父は家でそういう話、しないの」

「あ、そうだよ、ね。秘密、守らなきゃいけないもんね……」

志摩子は申し訳なさそうに俯いた。

「やだ私、ひとりで盛り上がっちゃって……。本当に、ごめんなさい」

「いいよそんな。大袈裟だよ志摩子」

「私、唯依のことになると、なんか自分のことのみたいに感じちゃって、つい」

「ありがとう。うれしいよ、そういうの」

私もだよ——そう返すべきなのはわかっている。だが、嘘は言いたくない。唯依は曖昧な微笑みで応じた。

「ごめんね、なんていうか……唯依は、私の憧れだから」

「え……？」

とくん——と、胸が小さく鳴る。志摩子の頬が淡い朱を帯びる。

「だって、唯依はすごいよ、なんでもできるしさ」

志摩子は、デタラメに脚を擦る自身の手に視線を注いだまま、恥ずかしそうに続ける。

「譜代の姫様なのに、全然威張ってなくて……優しいしさ」

「そ、そんなこと……」
「それに……女の子なのに、お世継ぎなんて——ほんとうにすごいよ」
「え……？」
「えへへへ、いっちゃった……」
はにかんで俯く志摩子を見つめる唯依の脳裏に、父・祐唯がかつて言い放った言葉が過ぎる。
《養子をとるつもりなど毛頭ありません——篁の世継ぎは唯依です》
それは唯依だけでなく、母に対する父の想いが込められた言葉だった。
唯依の母・栴納（せんな）の出自は鳳（おおとり）家——五摂家（ごせっけ）の一角たる崇宰（たかつかさ）家筋の名家だった。五摂家とは、皇帝の全権代行たる政威大将軍を持ち回りで輩出する武家の頂点である。その崇宰家が取りなした縁組みとはいえ、家格的には相当な隔たりがある篁に、五摂家直系の鳳から娘が嫁ぐというニュースは、世間の耳目を集めるには充分だった。篁家の野望、あからさまな政略結婚等と邪推したのは芸能マスコミだけに止まらず、家格替えを根に持つ諸武家を含め、当時は相当な風当たりであったという。だが、母は嫁いでのち鳳ではなく篁の女として、父と家名に全身全霊を捧げて尽くした。その数年後、母は唯依を出産した直後に病床に伏し、快癒（かいゆ）するも二度と子を授かれない身となってしまった。
〝世継ぎは男児に〟という古い仕来りが未だ根深い武家階層に在って、篁家もその例外

ではない。ことある毎に他家子息との養子縁組を持ち出す一族に対して、父は娘を当主にすると宣したのだ。父と母の愛に応え、内と外から発せられる誹謗中傷を、行動のみで謂れ無きものと証明する――それこそが己が使命。唯依はそう確信して生きてきたのだ。だが、それが実践できていないという自責の念は、姿形を変え、常にその心を苛むのだった。

「気持ちはうれしいけど……私は、誰かに憧れてもらえるような人間じゃないよ」

唯依は志摩子に微笑んだ。

「え～そんなことないよ、だって唯依は――」

志摩子の言葉を遮るように首を振る。

「ううん、私なんて全然だめ。本当に凄い人を知っているから、余計そう思う」

「そうかな～、そんなことないと思うけど。でも、唯依がそこまで尊敬するぐらいだから、その人が凄いのはわかるよ」

「うん……」

瞼(まぶた)に浮かぶ凛々(りり)しい面差し――唯依の表情は自然と和らぐ。

「その人って、唯依のあこがれなんだね」

「うん……そうだね。志摩子の言う通りだよ。私、あこがれてる」

「どんな方？　もしかして……男の人？」

「ううん、違うよ。母の従姉妹で小さい頃から、私を妹のように可愛がって下さる方……」

するすると言葉が滑り出る。自らを語る際には到底あり得ないことだった。

「歳も三つしか違わないのに、とても優雅で気品があって気高くて……。でも、優しくて美しい……」

何の思考も伴わず、有りの儘をただ伝えるだけでいい。その心地良さは、唯依をいつになく饒舌にしていた。

「とても高いご身分なのにいつも親しく接して下さるの。あなたのお母様に良くしていただいたからって」

「やだ、素敵……」

「その方もね、家督継承序列の筆頭なんだ。だから、いつも気に掛けて下さって……」

「ああ～、それは唯依、絶対あこがれるよ～」

志摩子は頷きながら、うっとりした目で唯依を見つめている。

「身分の上下なく接して、凜として、優しくて、お世継ぎ……全部唯依と同じだね！」

「そんな……たまたま条件が似てるだけだから……」

憧れの対象と同じと言われ、嬉しい気持ちとおこがましいという想いが奔流となって心に渦巻く。微かに上気しながらも困ったように微笑む唯依の手に、志摩子のそれが重

なった。
「ね、もうわかったでしょう？　私が唯依にあこがれる気持ち。唯依がその方へ寄せる想いといっしょだよ」
「いや、だからその、私なんて恭子様と比べたら、とてもっ」
「え……っ!?」
弛緩していた志摩子の表情が驚色を伴って引き締まる。しまった——後悔が浮ついた心に冷や水を浴びせる。
「あの、唯依……恭子様って、もしかしてあの、〝鬼姫〟……崇宰恭子……様のこと？」
「え……ああ、うん……」
志摩子の表情が一気に弾ける。重ねた手がギュッと握られ、顔が更に近づく。
「すごい……！　唯依って、崇宰家の筋なの!?」
「う、うん……」
気が緩みすぎていた——家格替えの真相を伝えても態度を変えなかった志摩子たちに、どこか寄り掛かっていたのだ。父の代に荒れ狂った妬みが今は風化しているとしても、五摂家筋という特別さは、どの世代でも羨望や嫉妬の対象となり得る。調べればわかる情報であったとしても、ただでさえ悪目立ちする篁家に在っては、自らひけらかすべきものではない。

「……誰にも言わないでね。あまり大袈裟にしたくないし、恭子様にもご迷惑だろうから」
「――うん、わかった！　ふたりだけの秘密ね⁉」
秘密の共有が嬉しいのか、志摩子はいつになく溌剌（はつらつ）として力強い。唯依は微笑み返しながらも、自らの迂闊さ、心の弱さを悔いる気持ちに押しつぶされそうだった。敬愛する父と母、憧憬（しょうけい）する従姉妹伯母（いとこおば）、そして尊敬する父の親友。身近に在る先達が示す高潔と高徳――そこに至る道を阻む壁は、霊峰・富士より高く思えた。

一九九七年五月一九日　日本帝国　首都京都
帝国斯衛軍付属・山百合女子衛士訓練学校　第一グラウンド

桜前線は遥か北に去り、陽射しと気温は春の終わりを告げ始める。木々の緑は夏の到来に備え日々濃さを増していた。
「――白ぉ、おかっちませ～っ！」
「――紅（あか）ぁ、おかっちませ～っ‼」
山百合女子の４面あるグラウンドそのすべてに、武家女学校伝統の声援がごった返す。

初等基礎教程期間にある全候補生が、その命運をかけてすべてをぶつけ合っていた。
戦闘武術評価試験の最終評定――装甲剣術技能検定・午後の部が、いま正に行われていた。
「――紅一本そこまでッ!!　――下がれッ!!」
「――互いに礼ッ！」
一試合8分、一小隊につき2試合――午前の第一検定、午後の第二検定各1試合。衛士の始線に立つや否や、それですべてが決まるのだ。従って順番待ちの候補生は、総じて他小隊の検定を見学する。障害物が置かれた実戦スタイルの試験域は見通しが悪い。それ故グラウンドが見下ろせる位置にあるテラスや廊下は、防具を着けた候補生で常に混み合う。ある者は双眼鏡片手に緻密にメモを取り、ある者は声援を送る。そして検定試合が終わる度にその者達の大移動が始まるのだ。対戦表の発表は午前と午後の2回、開始直前であるため、第二検定の相手は昼休みが明けるまで不明だった。そのため、中には午後の対戦相手の目星を付け、４人別々の検定を見学して情報収集する小隊もあった。そのような行為も教官の監視下にあり、減点の対象となる――いや、戦術情報の自発的収集はむしろ加点だなどと、真相も定かでない噂が飛び交い、候補生達が右往左往する様は毎年恒例、山百合女子・5月の風物詩である。
「うわっ……山城さんのＪ小隊、完勝だよ～」

各グラウンド正面に設置された電光掲示場を見て、安芸はうんざりとばかりに脱力する。そこには対戦表と成績、タイムスケジュールが表示されていた。各小隊名の横に勝利を表す〇と敗北を表す×が並ぶ。競技や試合ではないため、本来ならそれは無用の情報だが、候補生の志気を鼓舞するための措置として、数年前から成績も併記されていた。
「6分ちょっとで4－0のオール一本勝ち……やっぱりすごいね」
「それにしても、神の気まぐれというか、なんていうか……」
志摩子と和泉が電光掲示板を見つめてため息を漏らす。唯依達の第一検定は時間切れ3－2の優勢勝ち。上総たちの非の打ち所のないスコアはとても眩かったに違いない。
「私達、大丈夫かな？」
不安げな和泉を安芸が叱咤する。
「ここまで来たらやるしかないよ！　ねえ、唯依！」
唯依は皆に向かって深く頷いた。
「私達が何週間もこの日のために頑張って来たのは、良いスコアを出すことや勝つためじゃなく、次のステージへ進むため——」
唯依の脳裏に、放課後の居残り練習や戦術論を研くための勉強会が過ぎる。それらを通じて積み重ねた時間、互いに培ったものは、今や何にも代え難い絆となっていた。考え方や性格、価値観、それを育んだ背景の違い。装甲剣術と連携戦術という共通言語を

得てからの唯依は、違いという些事によって心を曇らせることはなくなった。むしろ、篁家に関する何を知ってもその態度を一切変えない志摩子、安芸、和泉は、唯依にとって初めて手にした宝物に等しかった。
「私達は衛士になる。そして、斯衛の責務を果たす。——わすれないで、ここは単なる通過点だよ」
唯依達は互いを見合わせ、もう一度深く頷いた。
「——じゃあ、行きましょう」
対戦相手は、山城上総率いるJ小隊だった。

わあっ、と歓声があがる。主審の声。そして乾いた破裂音が遠くに響く——隣のグラウンドで、前の組の決着がついたのだ。
「——ようやくお手合わせ願えますわね、篁さん」
待機場奥の試験域入場ゲートで、声を掛けてきたのは上総だった。直接喋るのはこれで数回目、事務的なやり取り以外言葉を交わしたことはなかった。
「篁示現流の腕前、とくと味わわせていただきますわ。どうぞお手柔らかに」
無表情で目を伏せて黙礼する上総。その端正な顔を、艶深い黒髪が隠す。
「こちらこそよろしくお願いします。全力を尽くしてお相手します」

唯依も軽く頭を下げる。では——と呟き、上総は自分の小隊が並ぶ白の入場ゲートに向かって行った。
「山城さん、さっそく仕掛けて来たね〜、心理戦」
珍しく緊張しているのか、安芸の声はどこか堅い。
「いよいよだね……」
「うん……」
和泉も志摩子も口数が少ない。第一検定の時よりも緊張しているようだ。相手が上総のＪ小隊なら仕方ないところではあるが……。
「大事なのは孤立しないこと。声掛けあいながら、お互いをフォローしていこう」
皆が頷く。
「——紅ッ、Ｄ小隊ッ。白ッ、Ｊ小隊ッ。開始線へ——進めッ！」
検定用の試合域は50ｍ四方であり、教練用より遥かに広い。その上、至るところに貨物コンテナなどが障害物として設置されているため、見通しが利かない。しかもそれらの位置は試合の度に変更される。そのため検定はグラウンド４面同時には行えず、試験２面、障害物移設２面を交互に使用するローテーションが組まれていた。このような手間をかけてまでより実戦に近い状況を準備する理由は、検定の公平性を担保することに

加え、臨機応変かつ迅速な適応能力を評価するためでもあるのだ。

「――互いに、礼ッ！」

試合域の中央線――唯依達と山城達は向かい合って並び、礼を交わす。頭を上げた一瞬、交錯する上総の視線はいつもの色彩だった。

「――共に、開始線へッ!!」

主審の号令で自陣開始線に向かって行進し、円陣を組む。

「――D小隊、おかっちませッ！」

「「――かしこわッ！」」

面を打ち付けるいつもの儀式。三者三様に模擬刀を握り締めて位置に付く。主審がスターターピストルで天を差す。

「――始めッ！」

号令と破裂音――同時に陣営から唯依達は進み出た。唯依と志摩子。安芸と和泉の2分隊。陣形は楔壱型（アローヘッド・ワン）。即時相互支援可能な距離を保ち、ゆっくりと遮蔽物の影を相互にカバーしながら進んでいく。

唯依達はこの数週間、互いの癖や反射的思考を理解することを優先してきた。型通りの連携は何度やっても結果が出ず、結局作戦やサブプランといったロジックを棄て、個々の戦力アップと特性理解、状況対処パターンを積み上げる手法を選択したのだ。しばら

くは成果が出なかったが、時間の経過と共に多くの小隊が作戦パターンの枯渇に陥り、行き詰まりや際限のない手の読み合いに耽って停滞する中、Ｄ小隊は教官から有効ポイントを取るなどの地道な成果を積み上げ続け、今に至るのだ。

　じりり、じりりりと鳴く靴底。堆(うずたか)く積み上がったコンテナの迷路を唯依達は行く。中央線手前、未だ紅の自陣内。三叉路に行き当たる——視線とハンドサインで唯依は安芸に指示する。図書館の教材で簡単なものだけを修得したのだ。もちろん乱戦になれば声によるコミュニケーションに優るものはない。

　クリア——ハンドサインの返答。

　いつ相手と遭遇するか分からない緊張感に全員の息は自然と潜まる。ポリカーボネイトの面は、まるで空気孔がないかのような息苦しさだ。

　クリア——和泉が辺りを見回してハンドサイン。首を振る。

　出方を見る。全周警戒——と、唯依。

　了解——のサイン。

　規則的に波打つコンテの壁面に背を預け、唯依はひとつ息を吐いた。

　試合域が倍以上になっても制限時間は８分。午前中、唯依達は判定勝利だけに、スコアレスやタイムアップなどの消極的な結果で終わるわけにはいかない。

　唯依は三叉路の右、その奥の遮蔽物群に目を遣る。ランダムに折り重なった大小のコ

ンテナが入り組み、完全に視界を塞いでいる。先に回り込まれると厄介な地形。
左は——両側をコンテナに挟まれているものの、十数メートル先まで抜けている。だが、それは双方丸見えであることを意味する。これは飛び道具の戦いではないため、開けていること自体はむしろ、待ち伏せを警戒せずに済むメリットがある。
唯依はどちらを選ぶべきか考える。——遠くにざわめく歓声が潮騒のようだった。
右だ——唯依は即断した。待ち伏せのリスクはある。だが、相手は組織化された連携が強みの上総小隊。ただでさえ強敵な上、自由に動かれたら更に厄介だ。対する唯依達は感覚的な相互連携で臨機応変に対処する。多少の足場の悪さや狭さで修正が必要なほどの戦術や作戦など持ち合わせてはいない。
命令を伝えようと安芸の分隊に目を向けたその時——和泉が両目、そして右奥を指差した。
「「「——!?」」」
和泉以外の全員が、一瞬呆気に取られた。
あれは——唯依は低く呟く。
視線の先には上総がいた。20mほど先だろうか。素知らぬ顔で周囲を見回している。
何ら気負う様子もなく、ただ平然と自然体のまま姿を晒しているのだ。
唯依が次の手を躊躇する間に、安芸が集合のサインを出す——身を隠しながら唯依の

周囲に集合してしゃがんだ。各々の視線は上総と周囲の警戒。
　これまでも作戦無しで臨機応変な状況対応をしてきたが、唯依の命令無しに集合するケースは初めてだった。唯依は釈然としない想いだったが、これも臨機応変の一環なのだと自身を納得させる。声を潜めて志摩子が切り出す。
「ねえ唯依、あれってどういうことかな。囮にしてはあからさま過ぎるよね」
「絶対罠だよ。けどチャンスでもある。脅威度の高い山城さんを真っ先に叩けば有利だし」
「確かにね。山城さん向こうの司令塔だし、自慢の連携も崩しやすくなるわ」
「こっちは臨機応変。いつも即興でやってきたんだ。多少のリスクを負っても、潰しておくべきだよ」
「和泉も安芸も焦らないで——それこそ向こうの思う壷だよ」
　緻密な作戦と連携を重視する上総があえて姿を晒す——意表を突くその動きに、ふたりは完全に浮き足立っている。単純なその行動ひとつで、上総は戦域の空気を完全に支配してしまったのだ。
「とにかく、有利な状況を維持したいって心理に陥るのは危険だよ。別の積極策で相手の土俵を躱そう」
「うん、そうだね。短期決戦で後手に回るほど、不利なことはないものね」

「ったく志摩子は〜、あんた自分の意見ないの？」
「今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょ。で、どうするの唯依」
「左のルートを行って裏を取る。右に主戦力の山城さんがいる以上、仮に待ち伏せされていても数的優位な状況を作れるし」
「見通しの良さは不利じゃない？　左右に狭いのも数が多い方が動きにくいよ」
「司令塔の不在は連携精度を落とすから、地形的な条件を充分カバーできるでしょ。特に、私達ならね」
唯依の策に対する安芸の疑念を、和泉が拾って答えた。
「——わかったよ、じゃあそれで行こう」
「移動速度が命だからね、決して焦らず迅速にね」
「なんかそれ矛盾して——って、唯依、後ろッ!!」
背後の遮蔽物からＪ小隊の候補生達が走り出た——。
「しまっ——！」
唯依は後ろを見ずに立ち上がりながらにダッシュする——振り向く間に打ち込まれたら終わり。初撃範囲外に出る事が常に優先。後方でバシン、と模擬刀の打撃音——。
「——ううっ！」
「——志摩子ッ！　はあああぁぁっ!!」

唯依がいた位置で志摩子が一本取られた——安芸は返す刀で斬りかかり、和泉が続く。だが、数的優位はＪ小隊にある。すぐ行かなきゃ——唯依は踵を返そうとして息を呑む。
「——やあぁッ!!」
走り込みながらの上総の一撃を倒れ込んで躱し、その勢いで前転、立ち上がって軸足回転。切っ先を上総に向け——。
「——はあぁッ!!」
張りのある声と共に既に迫る二大刀目。連撃の勢いを止めなければ——唯依は大股で踏み込み、模擬刀で受け流しながら体を浴びせる。上総は数歩よろけるも踏ん張り、体勢を立て直す。
「さすがですわね、篁さん」
切っ先に重なる上総の鋭い目。息ひとつ乱れていない。あの距離を音もなく走り込んで連撃を繰り出したというのに。
「——いやあぁっ!!」
気合い一閃、唯依は上段の構えから大股で踏み込み、一気に間合いを詰めて三連撃を浴びせる。上総は斜身（はすみ）に構えて模擬刀ですべて受け、鍔迫り合いに。間近での睨み合い。猫科の猛獣を想わせる眼力が唯依の瞳を射貫く。上総は身を捻っていなし、肘撃ちから回し蹴り、模擬刀横薙ぎのコンビネーションを放つ。唯依は体勢を崩しつつも瞬時のス

テップバック、連撃をすべて紙一重で躱し、再び距離を取る。
実力伯仲――いや、上総が優る。睨み合いながら唯依は喉を鳴らした。これまでは教官相手の教程だっただけに初手合わせ。見ているだけでもその能力の高さは感じていた。身体能力や反射神経なら唯依が僅かに上回っている。だが、上総が優るのはその思考力と回転の速さだろう。手の内、出方はすべて読まれている様な気がしてならない。先に動きにくい状況だ。だが――それも上総の策だということはわかっている。
「……ッ……！」
冷徹な上総の目を睨み、唯依は奥歯を噛み締める。この膠着こそ、彼我の特性を分析し勝利という目的を最優先した必勝の策なのだ。堂々とひとりで身を曝していたのは、〝自らを囮にした待ち伏せ〟と思わせることを計算した時間稼ぎだったのだ。司令塔で最高戦力の自身を餌に、これまで作戦を立てないことで消してきたD小隊の弱点――意志決定に時間が掛かる――を引き出し、別働隊が大きく迂回する時間を稼いだ。それは正に唯依が次手で打とうとした策。だが上総はそこに挟撃を上乗せしていた。唯依達はまんまとその策に落ち、奇襲初撃で志摩子を失った。こうなれば選択肢は広い。現時点では最高戦力である唯依を切り離すというセオリーを踏みつつ、数的優位と高い連携精度によって時間を掛けて漸減すればいいのだ――。
弧を描くように摺り足――だが、良いポジションは取らせてくれない。上総の位置取

り、そしてそれに呼応するＪ小隊の同期生たち。安芸と和泉に合流できるラインは、必ず潰される。

唯依は覚悟を極(き)める——結局、上総を倒さなければ先はない。徒(いたずら)に安芸達との合流を強行し、これほどの実力者に背中を曝すなど愚の骨頂。むしろ上総を倒せば流れが一気に変わるのだ。当然、相手もそれは想定しているだろう。だからこそ策を弄せず、打ち負かすのみ。唯依は模擬刀をぎりりと握り直し、上段に構える。

「——やあああああッッッ！！！！」

気合いと供に猛然と踏み込む篁示現流の一閃——。

◇

撤収作業が進む第一グラウンドを、唯依は教室のある４階廊下の窓から見下ろしていた。軍用の大型フォークリフトがコンテナを持ち上げ倉庫へ運んでいく様は、混沌としているようで、その実、綿密に統制されているようでもあった。まさか一台一台すべての動きに事前計画があるとは思えない。だが、導線を決して跨がないその動きに、ただ見とれる。

本当の連携とは、あのようなものを指すのだな——唯依は心の中でそう呟いた。個々

の経験と相互熟知、ルールやセオリーの反復と応用。自分達に欠けているものは多い。
午後の第二検定――上総率いるＪ小隊との試合は、時間切れの判定負けに終わった。上総と唯依の決着は最後までつかず、安芸と和泉は３人がかりの猛攻に耐え抜いた。相手の連携精度からいえば善戦といえる。

《あなた方に完勝できなかった以上、私達の負けも同然ですわね》

試合後の礼を終えた際、上総が放った言葉は、ある意味Ｄ小隊の粘り強さを証明するものだろう。あの上総の分析を越える健闘を見せたということなのだ。だが結果は負け。内容的にはまったく良いところなし。教室で発表された合否結果に、一瞬我が耳を疑ったほどだった。安芸は全身を使って喜び、和泉は心底安堵した様子だった。責任を感じていたのであろう志摩子は泣いていた。唯依も和泉と同じく安堵の気持ちが大きかった。だが、不合格となり涙を浮かべて項垂れる同期生達の姿に、自身が重なって仕方がなかった。

《――ちょっと、あれで合格だなんて、信じられる？》
《なんで二試合とも勝った私達が落とされて、Ｄ小隊が合格なのッ!?　納得いかない

よ‼》
《しかたないでしょ、あっちは譜代の上様がいるんだし。それが現実よ、現実！》
《どうかしら。教官達に袖の下でも渡しているんじゃない？》

先刻、階段の踊り場で耳にした不合格者たちの理不尽な陰口。それを聞いて湧き起こる口惜しさは、彼女達ではなく自身に向かっていた。それを言わせないほどの結果を出せなかった己の未熟に。唯依が晒した醜態が、風化していたはずの誹謗中傷を同期生世代にも甦らせ、篁の名を更に汚してしまったのだ。

「強く……なりたい……」

唯依は無意識に呟いた。それは己の心・技・体すべてに懸かる願いだった。皆に認められ、由無き雑言を遠ざけるに相応しい存在への羨望。だがそれは、望み願えば自然に叶うものではない。だからこそ日々の努力と総括の積み重ねが重要なのだ。来週から始まる実機教程。それに伴う入寮など、新たなるステージに向けて準備すべきことは山ほどある。今、立ち止まるわけにはいかない。だが、それを阻む大きな壁が唯依のすぐ傍に聳え立っているのだ。

唯依の瞼に、上総が浮かぶ。その鋭い太刀筋と眼差しが。渾身の連撃を悉くいなすその体捌きが。鍔迫り合いの刀越しに合わせた視線が――。

「私は……山城さんに、勝ちたい……」
あの時、上総を御（ぎょ）すことができていたならすべてが変わっていただろう。家名を汚す中傷を浴びることも無かったはずなのだ。状況を転換する機会を得ながら為せなかった不甲斐無さ——自身に対する叱責と同等に、唯依の心を占めるのは上総という障壁（しょうへき）の存在とそれに対する想いだった。
「——唯依〜！　お待たせ〜!!」
安芸の呼びかけに、唯依は軽く息を吐き、表情を整える。そして、ゆっくりと振り向いて微笑みで応えた。

一九九七年五月三〇日　京都　伏見区　篁家京屋敷

黄昏の屋敷町は、いつものように優しく上品に出迎えてくれる。教本を片手に帰路を行く唯依は、その瞳に慈しみを湛え、まるで深呼吸するかのように辺りを見回す。手にした教本も今日だけは開く気にはなれない。如何なる形であれ総戦武に合格した以上、もう二度とこの制服を着てこの路を歩くことはない。他愛のない感傷だとは知りつつも、唯依はその眼に刻みつけておきたかった。

「あれ……？」

目に入るものひとつひとつを噛み締めながら角を曲がった唯依は、篁の京屋敷の前に見慣れぬものを見つけた。門に寄り添うように駐車している1台の黒いセダン。運転席と助手席には人が乗ったままだ。唯依はその者達に黙礼をして過ぎ——ふと、とある可能性が閃いて心が躍った。自然に小走りとなって門を潜(くぐ)る。

玄関前には黒いスーツの男が立っていた。唯依は立ち止まってぺこりと礼をすると、再び小走りで庭へ回る。応接間までの廊下。〝今日がどんな日だったか〟というばあやの質問攻め。逸(はや)る気持ちがそれらを端折(はしょ)らせた。手入れされた生垣(いけがき)、灯篭(とうろう)、錦鯉(にしきごい)が泳ぐ池、縁側。刈り込まれた庭木の影で唯依は足を止める。髪と服装を整えながら聞き耳を立てる。微かに聞こえてくる声——。

「——ほう……では、次でほぼ間違いない、と」

「はい、鳳本家からはそのように。他家は昨今の情勢に腰が引けているとか」

やっぱり——唯依は思わず呟いた。母・栴納と言葉を交わす男性。その声を聞き心は更に昂(たか)まった。

「——ただいま帰りました！」

唯依は如何にもそれが普通ですと言わんばかりに、庭から応接室に向けて挨拶をした。黒に近い茜の和服の母と、座卓を挟んで対面していた陸軍制服の男が顔を向ける。

「まあ唯依――おかえりなさい」
柔和だがどこか驚いたような表情で母が応える。床の間を背負った上座の男が、いつもの人懐こい笑顔を湛える。
「――おう、唯依ちゃん、おかえり！　お邪魔してるよ」
「巌谷のおじさま、ようこそいらっしゃいました」
唯依は静々と礼をし、縁側に近付いた。
「これ、唯依。巌谷さんの前でお行儀悪い。ちゃんと玄関からいらっしゃい！」
母は仕方ないなといった表情――巌谷の来訪という特別な日だからと言って、お目こぼしはなかった。
は～い、と言って唯依は引き返す。だが、巌谷が見ている――小走りなどはしたないことはできない。
「――いやあ、驚いた。少し会わないうちに大きくなって。益々祐唯に似てきましたね」
背中に聞こえる巌谷の評――唯依は満面の笑みを浮かべた。成長を認められたことも、父に似ていると言われたことも、すべて嬉しい。もっと聞きたい――庭木の影でそっと立ち止まる。
「ええ、そうなんです。頑固で真っ直ぐ。融通が利かないところまで本当にそっくりで……」

——ああっ母さま、余計なことを〜〜〜！

「はっはっ、それは心配でしょうなあ。祐唯(あいつ)の不器用さは国宝級。余計な面倒を背負い込むことをかけては天才ですから」

——お、おじさまあ〜〜〜！

生まれた時から唯依を知る巌谷——そして父の親友。それだけに言葉の重みが違う。無性に恥ずかしくなった唯依は、そそくさとその場を後にした。

「——じゃあ唯依、おねがいね」

三つ指をついて巌谷に礼をし、梅納は退出した。袖を手繰る手つき。結い髪を押さえる仕草。その物腰と所作(しょさ)からは艶やかさと淑(しと)やかが滲(にじ)み出ている。母と自らの格差は埋めがたい——唯依は既にその是正(ぜせい)を諦めており、父さまに似ているからいいんだ、あるいは当主になるならむしろ男らしさだ、などと正当化している。

とにかくこれ以上同席され、巌谷に余計なことを吹き込まれてはかなわない。唯依の遠回しな退出要求に、母はあっさり応じたのだった。礼に厳格な母が客を残して中座するなど本来あり得ない。だが唯依には勝算があった。持て成しに誠実であるが故に、母は巌谷に振る舞う夕食に一品加えようとするに違いない。それは、篁家秘伝の〝肉じゃが〟だ。父の好物であるため、譜代武家の妻室(さいしつ)にありながらそれだけは賄(まかな)い方(かた)に委ねず、

必ず自らの手で拵える。巌谷もその味を気に入っているだけに、持て成しとしては最良。この時間に唯依が歓待を引き受けるのは渡りに船だったのだろう。そして唯依も、巌谷に肉じゃがを食べていって欲しいと思っている。本当は鍛錬の成果——母に教わって作り方を覚えた——を試したいところだったが、巌谷と過ごす一時の魅力がそれに勝った。

「——先程は失礼しました、巌谷中佐殿」

唯依も母に倣い、手をついて頭を下げた。制帽（せいぼう）を被っていれば、敬礼を極（き）めて見せたいところだ。

「——ふははは、こりゃ傑作だ。いやいや、さすが衛士候補生。立派立派」

「〰〰〰〰！！？？」

いきなり爆笑され、唯依は跳ねるように面を上げた——顔が熱い。

「そりゃあ俺も歳取るわけだ、ふははははは!!」

「お、おじさまぁ……もう、いつもばかにして〰〰!!」

唯依は紅く染めた頬を僅かに膨らまして、上目使いに巌谷を見つめる。

「ああ、やっぱりそっちだなあ、俺にとっての唯依ちゃんは。まあ、まだ候補生なんだし堅く考えなさんな」

楽しそうに笑う巌谷。相変わらずの気さくな人柄に、唯依は居心地の良さを改めて噛み締める。

撫でつけた荒髪。鋭い眼光。精悍な相貌と体躯も相まって、巌谷は対面した者に緊張を強いるという。特に、自らを戒めるために残しているという頬の傷痕は、それを助長しているだろう。だが唯依は、巌谷に対してこれまで一度もそのように感じたことはない。

ああ、そういえば——と、巌谷は何かに気付いた表情で、

「——帝国国民を守るため、身体に気をつけ、しっかり訓練に励んでほしい、とさ。お父さんからの伝言だ」

「ありがとうございます。父さまと最近お会いになったのですか？」

いや、昨日ね——そう言って巌谷は、耳元で受話器を持つ仕草をした。

「娘に言いたいことがあるなら、手紙でも電話でもいいから自分で伝えろって言ってやったよ」

「あはは、父さま筆無精だし電話も苦手ですから。それに集中し始めると時間を忘れてしまうし」

「確かにあっちも色々佳境らしいからなあ。当分は市ケ谷に缶詰だって言ってたよ

書斎に籠もって3日間飲まず食わず。身を案じて小言を言う母に平身低頭——そんな姿はざらだった。子供のように研究開発に没頭する父を思い浮かべ、唯依は思わず微笑み、そして誇らしいと感じた。

「でも、おじさまもお忙しいんでしょう？　お身体、心配です」
巌谷は茶に手を伸ばし――ん、心配いらないよ、と言った。
「俺達開発屋に限らず、このところは斯衛(あっち)軍も帝国(こっち)軍もてんやわんやだからね」
「大陸の戦況、ですか？」
茶を呷る巌谷の目が一瞬鋭さを帯びる。それを見た唯依は自身の迂闊さを悔やんだ――
――機密に抵触する質問だったかもしれない、と。
「――ははは、〝戦況〟ときたか！　さすが斯衛の衛士候補生!!　あ〜、唯依ちゃんが、そんな大人みたいな質問するようになるなんてなあ〜」
「お、おじさまあ〜」
一瞬の緊張を巌谷の高笑いが弛緩させる。ひとしきり笑って巌谷が、
「そういえば総戦武合格、おめでとう」
「――え？　あ、ありがとうございます。でも、おじさまからはもう、お祝いはいただいて……」
「いや、直接言ってなかったからね。お父さんもとても喜んでたぞ？　さすがに連絡ぐらい寄越したろうね？」
「あ、はい、お手紙を」
「ふふふ……そうか、あいつも人の親だったというわけだ」

含み笑い呟く巌谷。唯依は内心気が気ではなかった。総戦武の装甲剣術検定――あの不甲斐ない内容を巌谷はどこまで知っているのか。今は帝国軍に身を置いている巌谷だが、かつては斯衛の譜代武家。しかも、父・祐唯と共に瑞鶴の開発を主導した首席(メイン・)開発試験衛士(テストパイロット)であり、大陸派兵での勇戦、模擬戦に於いて瑞鶴でF―15を撃破するなど、伝説的存在となっている。その気になれば帝国、斯衛の別なく、衛士候補生の成績を閲覧することなど雑作もないはずなのだ。

巌谷は再び茶を啜る。次の言葉を待つ唯依は、いたたまれない。

「じゃあそろそろ実機教程かい？　通学はいつまで？」

唯依の心に光が差す。それを知らないと言うことは……！

「はい！　入寮は明日で、教程は明後日(あさって)からです」

嬉々として答える。よくよく考えれば、多忙な巌谷が唯依の成績をわざわざ取り寄せることなどあり得ない。唯依は自意識過剰を恥じながらも、安堵で頬が緩む。

「おっと、それは悪いことをした。学生生活最後の団欒を邪魔してしまうとは。いや、間が悪かったなあ」

「いえ、おじさまは家族同然ですから。父さまも母さまもそう思ってます！」

ははは、嬉しいねえ――巌谷は慈しむような目で唯依を見つめ、照れくさそうに笑った。

「いよいよ衛士訓練の本番だな。実機教程はやることが数倍に増えるからね。まあ、俺の頃の衛士訓練は今より悠長にやってたんで、滅多なことは言えんが……」

巌谷の表情に微かな寂寞が差す。帝国、斯衛問わず、衛士の養成期間は年々短くなり明確な速成傾向にあった。当然、カリキュラムの効率化やシミュレーターなどの技術進歩によるところも大きいが、逼迫状況に追い立てられた陸軍戦力増強の影響が一番の原因となっている。

「覚悟はできてます。私、一日も早く任官して、おじさまと父さまがお造りになった瑞鶴に乗れるよう、頑張ります！」

「瑞鶴か……。うん、そうだな」

巌谷はどこか遠い目で茶の水面を見つめた。何かを考え込んでいるようにも思える。

「……おじさま？」

巌谷は唯依の問いには答えず立ち上がり、縁側から庭へ降り立った。茜に染まる雲を見上げ、

「空は、いいものだな……」

唯依も縁側に出て、巌谷に倣って空を見上げた。

「特に、日本の空は四季折々の表情がある……」

「はい、そうですね」

確かに美しかった。唯依は巌谷にそう言われるまで気付きもしなかった。空など気にならないほど、目の前のことに必死になって来た証拠だった。
「この美しい四季持つ国を、ＢＥＴＡの好きにさせるわけにいかない」
「はい。それを阻止するには優れた戦術機が1機でも多く必要です。おじさまも父さまも、そのために頑張って下さっています」
唯依は昂揚と決意を胸に宣言する。
「だから私も腕を研ぎ続けます——おじさまと父さまからいただいたご恩と、機体開発のご尽力に報いるためにも！　——そして、早く一人前の衛士になって陛下と殿下を、そして日本を守ります!!」
巌谷は雲を見ている。唯依の言葉を噛み締めている様でもあった。どのような言葉を返してもらえるのか、唯依の胸は期待に高鳴る。
「……いや、そうじゃない」
「……え？」
「……そうじゃないんだよ、唯依ちゃん」
巌谷は雲から目を下ろし、唯依に振り返った。その瞳は見たことのない色に染まっていた。悲しいような、寂しいような、何かを悔やむような——言い様のない何か。
「優秀な武器や戦術機が必要な理由はね、本来、唯依ちゃんみたいな若い人たちを、戦

場に送り出さなくて済むようにするためなんだよ」
巌谷は再び、雲を見上げる。
「お父さんもおじさんも……大人たちは皆、そう願いながら頑張っているんだ」
「……はい」
暫し間を開けて、小さく応えた。はい、と返事するしかなかった。どう応じて良いか、まったく想像がつかなかったのだ。現実の社会は若年徴兵が進み、唯依もまた衛士を目指して軍事教練に邁進している。巌谷はその事実に対し、開発者として責任のようなものを感じているのだろうか。唯依はただ、巌谷の背中を見つめることしかできなかった。
ふと、巌谷は腕時計に目を落とす。
「……さて、顔見せのつもりが、居心地のよさについ長居してしまった。そろそろお暇(いとま)するとしよう」
「——え？　御夕飯、召し上がっていかないんですか？」
「うん、今日はこのあと大事な用があってね。その前にちょっと済ませておきたいことがある」
「そうなんですか……。母さまも残念がると思います。おじさまに食べていただこうと、肉じゃがを……」
「ああ、篁家ご自慢の肉じゃがを食べられないのは、とても残念だ。そうか、だから梅

納さん……いや、ますます悪いことをしたなあ」
　巌谷は母の中座の理由を理解したようだ。心底残念そうなその表情を見て、唯依の心は満たされた。
「あの、おじさま。京都には、何日くらいいらっしゃるんですか？　もしよければ、明日にでもまた」
　縁側に上がった巌谷に追い縋るように訊ねる。
「すまんな。用事が済んだら、すぐに東京にトンボ帰りさ」
「そうです……よね」
　わかりきったことをきいてしまった——唯依は今度こそ迂闊さを後悔した。帝国軍の軍人、しかも新兵器開発の要職にある巌谷が、軍務中にプライベートな時間を割くなど出来ようもない。むしろ今日こそが特別。恐らく軍務の合間を縫い、時間を工面したのだ。だからこそ急な来訪だったに違いない。
「ああ、そうだ。家族の団欒を邪魔したお詫びに、ひとつアドバイスをしよう」
　帰り支度(じたく)を進めながら巌谷が言った。
「人は、自分がそう思いたいようにしか理解しない。たとえどんな事実を見たとしてもね。——だから、ひとつひとつを考え過ぎたり、気にしすぎたりしなくていいんだ。カッチリしてないぐらいが丁度良い」

巖谷はそこで言葉を区切り、唯依に笑いかけた。
「戦術機も人間もね、遊びや余裕がないと脆いもんさ」

数時間後　京都　上京区　煌武院（こうぶいん）家・本邸

閑静な屋敷町の一角にそこはあった。白壁の高塀を巡らせた古式ゆかしい武家屋敷。門を潜って尚、玄関は彼方。その広さは勝手知ったる篁家の優に数倍はあろうか。庭園に差す月明かりと虫の声、せせらぐ水音がその雅びやかさを更に彩る。だがそこには、科学技術の粋を凝らした警備システムと精強な御庭番が潜み、侵入者に目を光らせているに違いなかった。

帝国陸軍技術廠・第一開発局副部長である巖谷榮二（えいじ）中佐は、初めて足を踏み入れる五摂家の屋敷に、らしからぬ緊張を覚えて微苦笑した。それは、かつて自身も斯衛軍衛士だったが故の、遺伝子に刻み込まれた畏怖だろうか。家格を返上して以来、このような厳かな気持ちになったことは一度もなかった。

「――ようこそおいで下さいました。どうぞ、こちらへ」

最敬礼で迎えた団子結いの女官が、薄暗い廊下を先導する。恐らくはこの者も御庭番、

その身のこなしと眼光でわかる。素手で巌谷を絶命させるなど雑作もないはず――しかも瞬く間に。掛けた眼鏡は瞳に宿る冷酷を和らげるためか。

一八六七年、欧米列強の脅威に抗するため、倒幕派大名と将軍家が大同団結し大政奉還が成立した。その中心的役割を担った有力武家――斑鳩（いかるが）、斉御司（さいおんじ）、九條（くじょう）、崇宰、煌武院（こうぶいん）――が現在の五摂家である。帝国議会の上位執政機関である元枢府の長・政威大将軍は、この五摂家当主の中から日本帝国皇帝によって任命され、その国事全権総代として事実上の国家元首となる。第二帝都・東京に在る現在の将軍家は斉御司。そして、煌武院家の現当主は未成年ながら次期将軍職の大本命と目されている。その理由は稀代の傑物であるとも、ＢＥＴＡ禍という難局を忌避する他家の思惑とも噂されるが――。

煌武院悠陽（ゆうひ）――いったいどれほどの人物なのであろうか。密使を通じてやり取りを交わすこと数回、此度ようやく謁見に至った。帝国の行く末を憂い、逆賊の誹り覚悟で描いた秘策を委ねるに相応なのか。巌谷は見極めなければならないのだ。

襖が開き、上品な衣擦れが視界外を行く。巌谷とその秘書官は武家の作法に則り、畳に伏す真の礼で煌武院家当主を迎えた。

「お待たせ致しました――どうか面（おもて）をあげてください」

透き通る声はしっとりとして落ち着きがある。行灯色の間接照明を背負って壇上に座す齢十五にも満たない少女。間近に見る姿は一見年相応、だが圧力とも熱とも感じる存在感を放射している。それは斯衛の遺伝子が感じさせているのではない。見えたのだ。恐ろしいまでの覚悟を極めた者だけがその瞳に宿す光が。だが、その表情に差すごく僅かな影も巌谷は見逃さなかった。それ故に、先刻まで一緒だった唯依の面影が浮かんで重なる。

「過剰な礼は無用です、巌谷中佐。ただ、仕来りに縛られる身故、こうして上座にあることをどうかお許しください」

高い位置で結った黒髪が、切りそろえた前髪と共に僅かにかしぐ。それも仕来りに従ったのであろう摂家公儀装の出で立ちは、生地こそ疑いなく高級だが、五摂家当主にしては些か質素であった。

なるほど、噂は伊達ではない——未成年とは思えぬその言い回し、言葉の選び方、身の運び。これは一瞬も気を緩められない。極限状況で多くの人間を見てきた巌谷の勘が、目の前の少女を一角の人物と直感する。それだけに、その才をどう使おうとしているのか見極めなければ。

「お忙しいところ、お呼び立てしてしまい申し訳なく思います」

「いえ、直接お会いしたいといったのはこちらです。久しぶりに京都の様子も見ておき

たかったので、むしろ好都合でした」
　巌谷は自身の礼儀が武家ではなく一般の範疇に収まるよう務めた。恐らくそれが、少女が望むものであろう。仕来りに縛られる身、と悠陽は言った。かつて譜代武家に列なった巌谷の経歴など、すべて知らされているはずなのだ。その上での言動に潜む意味は、充分咀嚼すべきである。
「して、今宵はどのような御用向きでしょうか？」
「はい。まずは、先日提案申しあげた件、進捗を見て頂ければと……」
　巌谷の目配せに応じて秘書官が包みを開き、ファイルを取り出す。控えていた団子結いの女官がそれを受け取り、怖ず怖ずと悠陽に差し渡した。
　ここが正念場。ファイルの内容は、これまでやり取りしたものより数段踏み込んでいる。国内のみならず、国際問題に発展しかねない非合法手段もオプションに含むものだ。だが、巌谷の秘策を俯瞰すればそれも表層に過ぎない。これを見て僅かにでも顔色を変えるようであれば、到底腹を明かすことなどできない。
　悠陽は黙々と資料に目を通す。衣擦れと紙を捲る音だけが沈黙を埋める。張り付いた表情は微塵も変わらず、至って涼し気——肝は据わっている。第一関門、まずは突破というところか。
　そして数刻、ファイルを閉じて顔を上げると、まっすぐ巌谷を見据えた。

「――兵は勝つことを貴び、久しきを貴ばず」
「……孫子、ですな」
悠陽は黙して応えた。
なるほど、この少女は既に……。巌谷はその覚悟に、少なからず驚嘆した。
避け得ぬ戦なら必ず勝たなければならない、しかし、国にあるすべての益のために長期戦は避けよ。既存の価値観やしがらみに囚われず、それを叶えなさい――将来の国軍最高司令官は巌谷にそう命じたのだ。そして、その上で問われている。あなたはどうするのか、と。本質を見抜くのに必要なのは時間ではない。見抜こうとする側が〝本物〟であるかどうか、それだけだ。悠陽もまたその眼力で巌谷を見定め、その上で問うているのだ。
「――は。身命を賭して」
悠陽は柔らかく微笑んで頷き、〝実戦運用型電磁投射砲計画大綱　極秘〟――表紙にそう書かれた資料を傍らに置いた。
「では承りましょう。煌武院の名にかけて、全身全霊を尽くすとお約束します」
深紫にも似たその黒い瞳に、燃え立つような意志が差す――どうやらこちらも、第一関門は通過できたようだ。これで計画に目鼻がつく。アメリカが独占するＢＥＴＡ由来技術さえ手に入れれば、あとは――。

いかん——巌谷は奥歯を噛み締め、湧きあがる昂揚をねじ伏せた

その眼差しで、悠陽の決意が本物であることは充分理解できる。だが現実的には未だ空手形の域。実際に煌武院家が動かなければ何の意味も無い。とはいえ計画は未だ黎明期である上、そもそもこの急展開は想定外。事の重大性と相手が負うリスクを鑑み、説得には最低でも一週間かかると踏んでいた。それだけに、迅速かつ的確な次の一手を打ちにくい状況にある。だとすればここで腹を割り、不退転の決意を示すのみだ。

「——では御館様、そろそろ本題に」

時間は限られている。相応の覚悟を共有した今、更なる相互信頼の深化を図るべきなのだ。帝国、斯衛、アメリカ——これから向こうに回すのは何れも、手練手管の者がひしめいている。そして、この少女の周囲には利に聡く狡猾な魑魅魍魎（ちみもうりょう）が群れなしているに違いない。信頼の醸成を怠れば、たちまち足をすくわれるだろう。

「実は、先の得物とひと組で運用する前提なのですが、幾分厄介な代物です。彼の国の機密中枢に——」

「——お待ちくださいい巌谷中佐。そのお話を伺う前に、そなたに引き合わせたい者がおります」

反射的に警戒心が沸き立つ。

「引き合わせたい者……ですか……？」

このような謀(はかりごと)に関わる人数は可能な限り少ないに限る――初期段階であれば特に。

これに――悠陽が命じると、件の女官が奥襖を開ける。するとそこには、ジュートミックス帽を脇に、麻のスーツをかっちり着こなした男が、完璧な真の礼で伏していた。

悠陽は軽くため息を吐き、呆れたように命じる――その表情がラフに崩れたのを巌谷は見逃さなかった。

「面をおあげなさい。過剰な礼は不要と申すに……ほんとうに意地悪ですね、そなたは」

はっはっはっ――と、笑いながら男は直る。

「――っ!?」

秘書官が思わず息を洩らす。知った顔だ――しかも、真っ当に考えれば敵。

「初めまして、巌谷榮二中佐。私は――」

「――確か鎧衣左近(よろいさこん)、特務課長でしたか。して、帝国情報部がここで何を？」

「いえいえ、私はしがない街の貿易商。北米担当の外務二課などまったくの無関係ですよ……はっはっはっ」

小馬鹿にしおって――隠す気があるのか無いのか。だが巌谷は苛立ちを表情には出さない。悠陽は必ず見ている。

「まあまあお嬢さん、そう怖い顔をなさらず。お近づきのしるしにひとつ――いかがですかな？」

鎧衣は困惑する秘書官にあぐらを掻いたままにじり寄り、何やら怪しげな像を渡す。
「これはイースター島の土産でして。いえ、買ったのは本土ですがね」
「これ鎧衣、おやめなさい。それは盗聴器ではありませんか」
「はっはっはっ……盗聴器などと、人聞きが悪いですなあ。これは映像送信もできる優れものでして、盗聴器呼ばわりは甚だ心外」
その飄々とした物言いに、巌谷は頭痛を禁じ得ない。だが、あきらかに悠陽は鎧衣に気を許している様子だ。そして、あえてそれを見せている。試されているのは明確だった。
帝国情報省外務二課 特務課長・鎧衣左近。諸外国の諜報機関に〝帝都の怪人〟と呼ばれる日本屈指の諜報員だ。内外問わず、これまで多くの者がこの男に辛酸を舐めさせられている。
「御館様、この者は——」
「——存じています、巌谷中佐」
悠陽は強い意志を込めて巌谷の言葉を制した。
「ですがその畏れこそ、この者の力の証——そうは思いませんか？」
なるほど、味方に付ければ確かに心強い。だが、如何に希有な能力を持っていようとも所詮鎧衣は帝国情報部の諜報員。言わば官僚機構の一員であり、思想も意志も持たず、冷徹に国家システムの命令に従う公僕。だからこそ有能と評されるのだ。この男に味方

の確証を持てる者などいまい。恐らく悠陽さえも全面的に信頼はしていないだろう。そのような者に、日本帝国の未来を委ねてよいのか。下手を打てば更なる先鋭化を招き、自死を早めてしまうに違いない。巌谷がそう考えることを悠陽が折り込み済みだとしても、躊躇するに充分なネガティヴ要因なのだ。

数瞬黙考して後――巌谷は悠陽の目を見据え、僅かに頭を下げた。

「では……その毒、皿ごと喰らいましょう」

悠陽はその瞳に満足そうな色を湛えて頷く。

「はっはっはっ……見目麗しい御館様を捕まえて皿とはひどい」

「おだまりなさい鎧衣」

その他愛のないやり取りを目の当たりにしながら、巌谷は自問していた――俺にその価値があるのだろうか、と。鎧衣に対し僅かでも躊躇を見せた者を、悠陽は必要とするのか。試されていたのだ。そしてこれからも試されるのだ。大事(だいじ)を口にする大人たちが、小異を如何に御すのか――この少女は真っ直ぐ見ているのだ。

「――御館様、ひとつ伺います」

「なんでありましょう、中佐」

巌谷は自問の答えを探るべく、悠陽に質す。
「鎧衣課長と私を繋いだのはなぜでしょう。御身を介して御することもできたはず」
悠陽は、なんだそんなことかと言わんばかりの表情を湛えて微笑む。
「そなたが望むもの。それと同じものを切望する者が、この者に列なっているからです」
ほう、そう来たか――不意に示唆されたもうひとりの存在。
「では、私と望みを同じくする者が、今ここに呼ばれていないのは如何に？」
悠陽の瞳が真っ直ぐ巌谷を捉える。それは心の奥底まで見透かされそうな深い紫。
「人の巡りには機があり、機が紡がれるには絆が必要です。そして、絆には人が欠かせませんから」
深いねえ――巌谷はにやけそうになるのを堪えた。巡りとは出会いであり、機はタイミングであろう。〝望むもの〟を同じくする者と巌谷の絆が鎧衣――だが、今はそのタイミングではない。そしてその〝望むもの〟とは果たして、在るべき日本の未来か、G元素か、あるいは――。
「ご高配には感謝します。ですが、今日初めてお会いしたにも関わらず、とんとん拍子に事が運びすぎて些か戸惑っているのも事実。……なぜ、私にそこまで？」
その微笑みに明らかな喜色が灯り、瞳に嫋（たお）やかな色が差す。なんて女だ――巌谷は、俺があと15年若ければ、などと不謹慎な思いを巡らせた。悠陽は巌谷が戸惑っていない

ことなどわかっている。自分が試されているのを心底楽しんでいるのだ。そして――。

「……中佐のお覚悟に対する私なりの筋通し――そう受け取っていただければ幸いです」

悠然と微笑む悠陽。

「……なるほど」

俺も毒だというわけか……それを皿ごと喰らってやろう、と。――もう充分だった。

どれ程の経験をすれば、この年端の少女がここまで信念を貫けるようになるというのか。巌谷はかつて斯衛であったが故に、悠陽が見てきたもの、背負って来たものの重さと残酷さ、その深さを理解できる。この少女は自らの宿命さえ利用し、自身を閉じ込める世界を変えようとしているのだ。

《――過剰な礼は無用です、巌谷中佐》

《――仕来りに縛られる身故、こうして上座にあることをどうかお許しください》

《――兵は勝つことを貴び、久しきを貴ばず》

《――煌武院の名にかけて、全身全霊を尽くすとお約束します》

斯衛に在って斯衛でないこの不埒者にも、相応の役はまだある、というのか――巌谷はふん、と鼻を鳴らす。悠陽に見せつけられた器の差に、むしろ心が躍った。皿どころの騒ぎではない。ふた回り以上離れた斯様な少女が、煮え立つ毒瓶に手を挿し入れることを厭わないというのだ。そしてこの少女は、遠からぬ未来、帝国をその身に背負う。ならば供にすべての毒を喰らうのみ。

巌谷は鎧衣に向かって手を差し出した。

「ありがたく頂戴しよう。その、土産とやらを」

一九九七年六月七日　日本帝国　首都京都
帝国斯衛軍付属・山百合女子衛士訓練学校　衛士強化装備更衣室

「――やだこれ、きっつ～い！」

「あ～、も～～～！　真面目にダイエットしとけばよかった……！」

初のシミュレーター教程を控えた強化装備更衣室は黄色い叫声で沸き返っていた。地味で辛い基礎体力強化課程が終わり、いよいよ始まる本格的な戦術機教程に候補生達はその表情に複雑な輝きを灯していた。衛士強化装備を装着するのは勿論、実物を見るの

も初めてである。一端（いっぱし）の斯衛軍人へと至る新たな経験と未知の体験は、少女達に期待と不安、昂揚と困惑を交互にもたらす。

「うわ、内側ぬるっとしてるし！　それになんかひんやりする!!　うえ〜!!」

白と薄灰を基調とした候補生用の77式衛士強化装備——その第一層装備（データスキン）である全身一体型の強化検知皮膜に脚を差し込んで、安芸が顔をしかめる。

「うぅ……私、ひとつ上のサイズにしてもらおうかな……」

志摩子が困ったように眉を寄せる。強化検知皮膜を一糸まとわぬ双丘の下まで引き上げ、次の行動を躊躇していた。並んで着替える和泉は、積層柔軟装甲に覆われた第二層（アーマー）装備（スキン）を既に装着しつつある。

「大丈夫よ、一度上まで上げちゃえば。なんか凄く伸びるし」

志摩子は不安げに頷いて渋々両袖に肩まで腕を通す。そして意を決したかのように頷き、きつく張る強化検知皮膜を伸ばしながら無理矢理胸に被せ、両肩外側のラインジップを首筋まで引き上げた。

「あっ、本当だ！　体温のせいかな……じわじわフィットしてきたよ」

志摩子の両乳房は、強化検知皮膜の圧力で最初は寄せられてひとかたまりになっていた。だが、徐々に自然な形状と位置に復帰していき、数十秒後にはまるでボディペインティングかコーティングでもしたかのように、データスキン皮膜が一部の隙間もなく身

体の凹凸に密着していた。
「うわ、なにこれなにこれっ⁉　なんか……肌に染み込んでくるみたいな感じしない⁉」
「筋電圧を検知しやすくするためだから。ちょっと気持ち悪いけどしかたないよ」
唯依は暗に急かす思惑でそう答えた。安芸はいちいち不平と不満を漏らしながら着替えているため、比較的遅れ気味なのだ。
「でもさ～、実際着てみると結構しんどいよ、これ。股の排泄物ドレーンとか……すっごい違和感だしさぁ。なんかガニ股になりそうだよ～！」
「あんたね～、騒いてないで、早く着替えちゃいなさいよ――」
「――早く第二層装備（アーマースキン）着たほうが良いよ。感覚欺瞞（かんかくぎまん）が効いて気にならなくなるから」
唯依は割って入る。和泉の言葉と表情は、何れも呆れと苛立ちのニュアンスが非常に強く、言葉を続けさせれば安芸が食ってかかるのは眼に見えていた。大騒ぎにエスカレートする前に芽は摘むに限る。だが、なんとか抑えたかと思った矢先、ようやく着替えを終えた志摩子が安芸という名の火に油を注ぐ。
「なんていうか……強化装備って……ちょっと恥ずかしくない……？」
「ホント最悪だよ～。教官達、絶対イヤラシイ眼で見るよこれ～！」
「座学でやったでしょ。これが私達を色んな意味で護るんだから、文句言わないの」

「でもさ～、なんでこうっすら透明かな～。何となく透けて見えてないか……？」

――衛士強化装備の第一層装備（データスキン）は、柔軟・伸縮性に優れ、厚さ1ミリにも充たないその強化検知皮膜は、筋電圧計測のほか、耐衝撃・防刃性能、耐熱耐寒、抗化学物質性を有しており、高度な耐環境性能によってあらゆる状況から衛士を保護する。柔軟な積層高分子装甲で覆われた第二層装備（アーマースキン）には、メインコンピューターの他、主要な生命維持・環境維持装置が収められている。外顎部のヘットギアは主に網膜投影装置や通信装置等の情報伝達系が収められており、戦術情報伝達や個人の精神、肉体情報のモニタリングも随時行っている。頸部プロテクターには、メインコンピューター等の主要電子機器の他、カウンターショックや圧力注射などの救命機構や生命維持装置が。肩上部と上腕部、大腿外側と膝部、背部、脚端部のブーツには、体温調整機能や水循環システム、排泄パックなどが収納されている。安芸が気にしている第一層装備（データスキン）の透明度は、候補生用の無着色皮膜が原因であった。第一層装備（データスキン）自体は資源として循環再生はするものの、基本的には短期使い切りの消耗品である。そのため、損傷頻度の高い教導段階に於いてはコスト的に有利な無着色皮膜が採用されているのだ。それによる副次的な利点として挙げられるのは大きくふたつ。視認性確保と精神鍛錬である。訓練期間中は実機運用中の重大事故発生率も高いため、負傷箇所の即時目視確認ができることは、救命上有利である。また、前線では施設の性区別が設営コスト上不可能であるため、羞恥心の鈍化と視覚的陳

腐化による性衝動の抑制効果は　円滑な組織行動確保の観点に於いても重視されていた。
「——安心していいわよ、安芸。いくら教官が飢えたおじさん連中だって、どうせなら見応えがあるものを選ぶはずだからね」
「あんたそれどういう意味——って和泉……なんでいま胸見たっ!?　ちょっ——志摩子までっ!!」
「あははは、別に私は何も言ってないからね〜」
胸を掌で押さえながら、安芸はジト目で３人の胸を見回す。そして低く唸るといきなり両腕を延ばし、右手で和泉、左手で志摩子の乳房を鷲づかみにした。小さく悲鳴を洩らす志摩子。
「——うわ、硬っ！　何なのあんたたちのおっぱい!?　コンクリ……って、あれ？　やわらかくなった」
和泉は何にも動じず安芸に胸を揉ませるまま、蔑むような眼差しで安芸を見下ろす。
「強化皮膜はね……急激な外部加圧には分子構造の偏移で硬くなるのよ。これ、座学でやったけど？」
「あ……そうだっけ？　あははは！」
「あははじゃない！　なにがコンクリよ、まったく失礼ね」

「ねえ……もういいでしょ安芸〜」
　やや身体をくねらせながら、志摩子は頬を桜色に染めて困り顔。唯依は大騒ぎにならなかったことを安堵し、じっと我が手を見詰めた。
　掌を握り、開き――そしてまた握って開く。
　とうとうここまできた――強化装備という非日常を纏い、改めて実感する衛士への本格的な第一歩を噛み締める。篁家の名を背負う者としての、本当の戦いがこれから始まるのだ。そして、自身の壁として聳え立つ者に目を遣る。並び立つロッカーに遮られて見えない、上総が居るであろう方向を見据え――。
「――よし」
　唯依は小さく、だが鋭く呟いてロッカーの扉を閉めた。

一九九七年七月一五日　日本帝国　首都京都
帝国斯衛軍付属・山百合女子衛士訓練学校　愛宕山実機演習区域

『――揃いも揃って何だその様はッ！　シミュレーター教程に戻りたいのかッ‼』
　オープン回線に主任教導官である真田の豪咆(ごうほう)が轟く。

『——戦術機は貴様らにとって武具甲冑（ぶぐかっちゅう）でもあり馬でもあるッ！　手足のように使いこなせなければお話にならんぞッ!!』

視界一面に迫り後方へ跳び去る膨大な機外映像情報。現実と仮想現実——網膜投影されたそれらの差を見分けることはできない。だが、本能とも言うべき直感がその映像から漂う死の香りを嗅ぎ取るのか、神経と精神の圧迫は時間を追う毎に増し、スロットルを踏み込む右脚を、あるいは飛行姿勢を制御する右腕を強ばらせる。本来、撃震のベースとなったF－4ファントムでは、スロットルは左操縦桿（スティック）にレイアウトされている。だが、訓練校の練習機はすべて右フットペダルに配されていた。これは瑞鶴を始めとする日本仕様機に合わせたもので、その割り振り自体は設定で任意に変更が可能だが、近接戦を重視する機体に於いては両腕の操作系を機体制御に当てるのが通例であった。

『——いいかッ！　低くッ、速く——這うようにだッ！』

77式戦術歩行戦闘機・撃震の教導一個中隊15機が、演習区画の森林を匍匐飛行（NOE）で翔け抜ける。両肩部に青いラインが引かれた教導機を先頭に、練習機を示すオレンジラインの4機が横隊で続く——それら楔型隊形を取った三個教導小隊が一列縦隊を組んで飛行していた。だが、各小隊の先頭を行く教導機以外は、何れも匍匐飛行（NOE）とは到底言い難い高度に散在し、その航跡も不安定に揺らいでいた。シミュレーターでは上々の結果を得ていた編隊飛行だったが、初の実機演習となった今日、候補生達は眼を覆いたくなるよ

うな醜態を曝していた。

『――C－02ッ！　実戦だったら貴様はもう沸騰してるぞッ!!』

　隣接する戦域に複数の光線級（レーザー）が存在する――シミュレーター、実戦の別なく、訓練想定に常につきまとう付加条件だった。光線属種（レーザー）によって航空優位が崩壊し人類が圧倒的劣勢に立たされた以上、衛士たる者は、あらゆる局面でその存在を意識しておかなければならないのだ。

「――低く速く這うように……ッ！」

　唯依は歯を食いしばり、視界に投影された上空の危険領域グリッドを意識しながら高度を下げる。

　警告と警報――進路上に一段と高い樹林帯が。唯依は反射的に操縦桿（スティック）を引く――だが上昇幅が鈍い。跳ね上がる心拍。脳裏に過ぎる主脚先端と樹木の接触――その結末は墜落による地面への激突か、あるいは僚機への衝突か。高度を上げようとして更に操縦桿（スティック）を引く。だが、上昇しない――近接警報が響き渡る。次の瞬間、過剰入力注意警告ウィンドウが翻（ひるがえ）る。

「――――ッ!!」

　唯依は自身の感覚と懸命に格闘しながら、自律補助プログラムと対立しないよう、慎重な操縦桿（スティック）操作で引き上げ幅を緩める。

『——Ｄ－０１ッ！　貴様これまで何を学んで来たッ！　計器を信じろバカ者ッ‼』

真田の怒声に眼を細める唯依——これはシミュレーターでは一度も経験しなかったトラブルだったのだ。

戦術機の飛行。それを厳密に言えば長距離水平噴射跳躍（ホライゾナルブースト）である。常時飛行することを前提に設計されていない戦術機の〝飛行〟は、流体力学的に不可能の領域にある。それを無理矢理にでも飛ばしているものは、跳躍（ジャンプ）ユニットに搭載されたロケット／ジェットのハイブリッドエンジンが誇る高い推力重量比——そして、コンピューター制御によるＦＢＷ（フライ・バイ・ワイヤ）（第三世代機以降はＦＢＬ（フライ・バイ・ライト））の自律補助である。その中でも撃震などの第一世代機は特に空力特性がピーキーであり、僅かな入力でも機体は挙動を乱してしまう。それをリカバーしようとする自律制御との感覚的なズレを〝機体が思うように追従しない〟と衛士が錯誤し、手動で入力増しをするケースが最も危険である。双方がより大きな修正を交互に繰り返した結果、衛士はパニックを起こし、機体は制御不能に陥って墜落に至るのだ。

衛士の精神が作用する操縦の危険性——座学を想い返しながら唯依は固唾を呑む。やはり実戦はすべて違う。どれほどリアルになろうと、シミュレーターだけでは不足なのだ。

唯依は無意識に戦域マップを一瞥、上総機のマーカーを確認する。そのラジオコールナンバー『Ｊ－01』は、一度たりとも怒声の対象になってはいなかった。

短く息を吐き、気を引き締め直す。そして再び、機体操作に全神経を集中する――。
『――G－04何をやっとるかぁッ！　貴様は今ので黒コゲだッ!!』
オープン回線のレシーバーに響く怒声は、その勢いと頻度を更に増していた。

数時間後
帝国斯衛軍付属・山百合女子衛士訓練学校　中庭

「――あ～～～～～、つっかれたぁ～～～～！」
休み時間であるのを良いことに、安芸は身体を投げ出すように木陰に倒れ込んで脱力する。夏服のセーラーがたくし上がり、脇腹が露わになる。いつもならそのはしたなさに何らかの突っ込みを入れる和泉もその元気はないようで、力無くその隣にへたり込んだ。
「この怠(だる)さって……いつか慣れたりするのかしら……」
「午前が実機演習だと……お昼、辛いよね」
和泉の傍に腰を下ろして、志摩子は胸を擦った。

「こっちはだるいのに全員揃うまで姿勢崩せないしさ～！　食欲ないのに早食いしないと怒鳴られるし……最悪だよ、実機の後の昼飯は～～～！」
強化装備の感覚欺瞞が解除されると、長時間の高G機動に晒された内臓や骨格、筋肉の疲労が一気に倦怠感として襲いかかってくる。実機搭乗20時間——シミュレーターでは再現不可能な『G疲労』に、候補生達は未だ悩まされ続けていた。
「この怠さも内臓筋が順応するまでの我慢だよ。あと20時間くらい実機搭乗すれば、大丈夫になるんじゃないかな」
身体の重さと胸焼けにも似た不快感を堪えながら、唯依は希望的観測を口にした。和泉が気怠そう顔をあげて応じる。
「私はもっとかかるかも……。今日もずっと上下に動いてたし……」
「私もかなあ……。さっきだって、過入力で何度も墜落しそうになって縦揺れ繰り返したから……」
降り注ぐ陽射しと蝉の声——とうとう堪りかね、唯依も安芸の傍らに腰を下ろす。
「それにしても山城さん、悔しいけどさすがだよね～。結局一度も怒鳴られなかったし……」
唯依の膝に頭を乗せながら見上げる安芸に——うん、そうだね、と頷く。志摩子は安芸の上着の乱れを正しながら、

「山城さんだけじゃなく、Ｊ小隊はみんなすごいよ。教官の指摘が一番少なかったもの」
「あの子達、山城さんの言いなりでロボットかよってバカにしてたけど……やっぱり努力してんだなって思った」
「当たり前でしょ。言いなりだったとしても、山城さんのオーダー叶えてるだけで、十分凄いわよ」
手をひらつかせて顔を扇ぎながら、和泉は安芸のスカートを直す。
「あ〜、私無理だわ。山城さんの小隊でやっていける自信ない。絶っ対無理！」
「何言ってんの、あんたは自信以前の問題でしょ。連携しっかりやれないんじゃ、向こうからお断りよ」
「フ〜ンだ。別にいいよ、入れてもらわなくても！　ま、総戦武の借りは来月の模擬戦でキッチリ返すしさ！」
「もう安芸ったら。今度の演習は個人戦なのに、どうやって借りを返すのよ〜」
「いいじゃん、Ｊ小隊とうちらの勝ち星で比較すれば。連携とか余計なものがないだけに、勝ち負けはっきりするし！」
「ああ〜うん、まあ、そうかも知れないけど……」
困り笑顔で目を合わせる志摩子に、唯依は微笑んで応じる。だが心ここに在らず。その脳裏には、総戦武で対峙した上総の姿が甦っていた。安芸の言う模擬戦とは、戦術機

操縦技術の総合修得率を中間考査する機体操作技能評価演習である。部隊連携教程に進むか否かを判断する考査故に、総戦武とは異なり1対1の個人戦方式で行われる。そして、その試合は実力が近い者同士で組み合わされるため、個人技能で首席を争う唯依と上総が当たるのは確実なのだ。誰にも邪魔されることなく、上総との試合に集中できる――唯依は躍る心を懸命に抑えつけた。

「……しっかし、あついな～。なんかさ～、アイス食べたくな～い⁉」

安芸が頭を左右に転がす。唯依は太腿のこそばゆさにびくんと反応し、我に返る。

「買ってくればいいじゃないよ。まさか、だるくてPX行くの面倒とかいわないでしょうね～」

「PXじゃだめなんだよ～。種類が少ないうえにツボを外したセレクト！　あ～、噂のジャリジャリ君ガリガリ君ラ・フランス味が食べたいよ～～～‼」

「――ちょっとやめて安芸っ、くすぐったいからっ……！」

だだをこねるように左右するその頭を、唯依は身をくねらせながら両手で押さえ付けた。安芸は両頬を寄せられたまま叫ぶ。

「――そうだ！　今晩寮抜け出してさ、みんなでコンビニ行こうよ！　うまいって噂のジャリジャリ君ラ・フランス味、買いに行こう！」

「コンビニか～。懐かしい響よね～。確かにお菓子もアイスも、選びたい放題だねぇ……」
和泉が遠い目で微笑み、それを見た志摩子の困り笑顔が唯依を捉える。
「だめだよ、そんなの。校則にも寮則にも違反してるでしょう。次の休暇まで我慢して」
「そうだよ安芸。そんなことしたら私達、受講停止処分になるかもしれないよ」
唯依に追従（ついしょう）した志摩子に、安芸が眼を細め、口を尖らせる。
「志摩子はコンビニが恋しくないのかよ～。通学の時は当たり前のように行ってたのに、入寮したら休暇の時だけなんて理不尽だと思わないのかよ～!?」
唯依は正論で正すべきか逡巡した。安芸の言葉は軽率に過ぎる。だがそれも武家子女同士、しかも信頼する小隊の仲間内故のことであるのも理解はできる。しかしながらここ最近、特に細かい不平不満が増えている様に感じてならない。なぜ安芸はこんなにも奔放なのか。同じ外様子女でも、和泉や志摩子、他の同期生はここまでではないのだ――。
「――しかも眼と鼻の先にあるんだよ!?　すぐ戻ってこられるんだしさ～」
志摩子は唯依の表情を伺うように一瞥して、なだめる。
「仕方ないよ安芸、私達は武家に生まれたんだから。範を示す立場なんだし、そういうの我慢しなきゃ」
「ふ～ん……。そういうの、ホントに受け容れてるんだ……」

「え……？」
それは小さな呟きだったが、安芸を膝枕をする唯依には十分届いた。そして、そのあまりに突飛で想定外の内容に思わず聞き返してしまったのだ。何事も無かったかのように安芸は上体を跳ね起こす。
「……いや、なんでもない！　——ところでこの後って、なんだっけ？」
「午後はシミュレーター演習、別科は部隊連携概論の予習。一日の教程ぐらい憶えておきなさいよ」
「なんかカリキュラムの変更ばっかだしさ～、つい忘れちゃうんだよね～」
あはは、と笑う安芸。その様子はいつもと変わらない。だが唯依はあの呟きが引っ掛かる。見下ろした膝の上、髪で隠れた横顔。その際の表情が定かでなかったことも、気掛かりを大きくしていた。
「なんかこのところやたら詰め込んでない？　このくそ暑い中、こうも演習演習じゃ参っちゃうって！」
「訓練校が演習ばかりなのは当たり前だよ、安芸」
「何が当たり前だよ志摩子～。私らと同い年の連中は、外で自由にポッチー食べたりしてんのにさ～！」
「あはは、やっぱりお菓子なんだね～安芸は」

困り笑顔で笑う志摩子。唯依は安芸を見詰める――。
如何に世間から〝お嬢様兵隊教室〟と揶揄されようとも、山百合女子は斯衛軍という軍隊に列なる教導組織だ。即ち、日々の努力は強制、教程カリキュラムは上層部の都合で左右されようとも、黙って従うものなのだ。その結果、候補生の肉体と精神は日々改造され、精強な衛士へと近付くのである。そのシステムに対する志摩子の忠誠は、常に唯依を安心させる。だが――。

《ふ～ん……。そういうの、ホントに受け容れてるんだ……》

唯依が知る限り、安芸があのようなことを口にするのは初めてだった。その場限りの不平不満は多くても、他者の信念やその根幹に言及することはなかった。それ以前に、それぞれの家柄に複雑な背景を持つ武家のソサエティーでは、互いに余計な詮索をしない傾向が強い。安芸達が篁のお家事情に触れないのは、それを知らずか、或(ある)いはその流儀に倣ったものと納得していた。それだけに、あの呟きがどうしても引っ掛かる。それは唯依の思考に浮かんだとある疑念と結びついた。このところ安芸が前にも増して奔放に振る舞う理由――それは、ストレスではないのか。外様とは言え武家の娘である安芸が、その存在意義の根幹を疑うに等しい発言をしたのだ。ある意味、相当追い詰められ

ているのではないか。だとすれば今夜、安芸はひとりでも脱寮しかねないと考えるべきだ。如何なる理由があれ、そのような規律違反は個人的には論外。小隊指揮官である唯依が問われる責任以上に、篁の名を汚すにはあまりにも不釣り合いで理不尽だ。だが、便宜上とはいえ小隊指揮官であるが故に、配下の者の心と身体に気を配らなければならないのも事実だった。

和泉と安芸、志摩子の交わす他愛のない会話を聞きながら、唯依はどうしたものかと思案する。そして――。

「――ねえ、安芸。こういうのはどう？」

出し抜けに切り出した唯依に、安芸と和泉、そして志摩子はキョトンとして振り返る。

「さっき安芸が言ったように、来月の模擬戦で私達がＪ小隊に白星で優ったら、皆でコンビニに行くの」

「……え？」

志摩子が眼を見開いて見詰める。安芸、和泉も意外といった表情を隠さない。唯依はゆっくりと頷いた。

唯依の妥協点。それは、将来を見据えた経験の獲得とある種の時間稼ぎだった。斯衛軍には武家籍をもたない一般志願兵〝黒を纏う者〟達が数多く所属している。譜代武家に在って部隊を統率する立場を目指す身であれば、安芸への対処は、武家の価値観を共

有しない部下をどのように御すか、という格好の予行演習となる。将来への有効な投資であれば、ある程度のリスクも妥協できる。だが、私欲のための脱寮が規律違反であることに変わりはない。そこで唯依は一計を案じたのだ。安芸に明確な目標を設定し、それに向かう日々の努力に意味を持たせることで、ストレスをエネルギーに変える。そして、以前完敗した者に勝利するという達成感が安芸に成長と自覚を促し、矮小な願望を凌駕することに期待したのだ。仮に思惑通りにならなかった場合でも、8月末まで引っ張ることさえできれば、返上となった夏期休校の代替休暇が模擬戦空けに数日ある。コンビニはそこで行けばいいのだ。しかし、唯依は信じていた。安芸の中に宿っているであろう武家の矜持を。そして、努力の果てに勝利を手にすれば、必ずやストレスを克服してくれることを。

「なるほど……コンビニはご褒美ってわけかあ」

和泉が感心した様子でにやける。

「別にそこまでの意味はないけど——ね、どうかな？」

唯依に重ねて尋ねられ、安芸は眉根を寄せて思案顔をした。

「う～ん……でもそんな先じゃあなあ……」

「………」
唯依は苛立ちを禁じ得ない。自身が最も汚したくないものを差し出したというのに、それがまったく伝わっていない素振りなのだ。
「……でもね、これが私が譲れるぎりぎりの線だよ、安芸」
面に出ないよう、必死に表情を繕う。ストレス故に、天の邪鬼な反応を見せているだけかも知れないのだ。
「まあまあ、ここはあんたも妥協するところでしょ。規則にうるさい唯依がここまで引いてくれたんだからさ」
和泉が安芸の肩を軽く叩いて慰める。その前で志摩子が指を弄んで不安を示した。
「唯依、本当に大丈夫なの？　だって、もし見つかったら……」
穏やかに微笑んで頷く――さすが志摩子はわかっている。唯依が差し出したものの重さを。
「――よし、わかった！　それまではＰＸのチョコモナカで我慢する!!」
いきなり立ち上がった安芸が、唯依に向き直りニッと笑う。
「そのかわり勝ったらコンビニだよ――約束だからね!?」
微笑みながらの念押しに、唯依に合わせ、和泉と志摩子が頷く。まずは一安心。無謀な行為を先延ばしにできたのだ。そして何より、唯依にとって一番の収穫は、急に慌た

だしさを見せ始めた日々の教練に、明確な目標と意味を持たせられたことだった。ともすれば上総との決着のみに注力しかねなかった模擬戦に、小隊で臨む意義と目的を見出せたことは、唯依自身にとっても良い結果だった。

「――そうと決まったらこんな所でダラダラしてらんない！　――ほら、行くよっ!!」

安芸は言い終わるやいなや走り出す。

「――ちょっ、安芸！　……なんなのよ、もう！」

「――まずはＰＸのアイスモナカだよっ！　早くしないと置いてくよ～!!」

「あんなに文句言ってたのに。結局食べるんじゃない」

和泉は億劫そうに立ち上がり、唯依と志摩子にあきれ顔で微笑み、渋々といった足取りで後を追う。

「私達もいきましょ」

唯依はそう言って立ち上がり、スカートを払って歩き出す。心なしか、身体も胸焼けも軽くなっている気がした。

「あれは……」

ＰＸに隣接するラウンジで、唯依は上総を見つけた。そしてその光景は意外だった。

上総は４人掛けのテーブルに座って本を読んでいる。夏の陽射しを映すカーテンと逆

光になった上総のシルエット。その強いコントラストが、何人の接近も許さない空間障壁のようでもあった。

「――どうしたの、唯依」

歩を緩めた唯依に、志摩子が振り返る。そしてその視線を追って上総を見つけ、再び唯依を見て悪戯っぽく微笑む。

「ああ、噂をすれば。それにしても山城さん、あの席がお気に入りなんだね。いつもあそこに座ってるし」

「へえ……そうなんだ」

昼休みに上総を見たのは、入校以来初めてだった。唯依達は荒天なら教室で、それ以外は概ね中庭で昼休みを過ごしている。ラウンジが上総の定番であれば、顔を合わせないのも道理だ。だが、唯依にとって意外だったのは、その周囲にJ小隊の同期生が見あたらないことだった。上総ほど小隊の連携を重視しそれを実践せしめる者であれば、昼休みもさぞ有効に活用しているのだろうと、勝手に思い込んでいた。

「……まあ、気にはなるよね。さっきJ小隊に勝つんだって決めたしさ。特に唯依は、模擬戦で山城さんと当たるだろうからね」

「え……ああ、別にそういうことじゃないよ。なんか、山城さんがひとりでいるのって、意外だったから」

志摩子は再び上総に目を遣る。

「彼女、休み時間はいつもひとりで過ごすらしいよ。色々考えたいからひとりにして欲しいんだって」

「えっ、そうなんだ……」

「うん。山城さん、あれだけの連携や作戦考えるでしょ？　だから邪魔しないようにしてるって、Ｊ小隊の子が言ってたよ」

「Ｊ小隊の……？」

「うん、蓮川（はすかわ）さん。総戦武で戦ってから、仲良くなったっていうか、まあ、たまに話すようになって」

「そうなんだ……」

唯依は逆光に浮かぶ上総の横顔を見詰める。真剣な眼差しが射貫くのは教本か、あるいは戦術指南か。何れにせよそれは、上総自身も唯依との対戦を予見しての備えだろう。何故かはわからない。だが、そう思えてならなかった。いや、そうであって欲しいというただの願望かも知れない。唯依はそこまで考えて、はっと息を呑んだ。己が精度を保ち研ぎ澄ますため、小隊の同期生さえ寄せ付けない上総の決然と孤高――その様に、羨望にも似た想いを抱いている自身の心に気付いてしまったのだ。

「志摩子、行こう……」

「——あ、待ってよ唯依」
敗北感にも似た言い様のない想いを噛み締めながら、唯依は足早にＰＸに向かった。

一九九七年八月二八日　日本帝国
首都京都　帝国斯衛軍付属・山百合衛士訓練学校　愛宕山実機演習区域

駆動音を伴って管制ユニットが機体に引きこまれ、気密音と一瞬の闇の後、全周映像が視界に広がる。唯依は機体周囲の安全とステータスを口頭確認。教官の移動許可を受け、降着姿勢で待機していた撃震を自律起動させ、主脚移動で前進。兵装チェック。右主腕に発泡樹脂製の74式近接用模擬長刀、左主腕に同じく発泡樹脂製の92式多目的追加模擬装甲。全ステータスに異常なし。
視線を上げる。開けた戦闘域の遥か遠方には、鏡映しの如く主脚前進する撃震が見える。肩にはオレンジ色のライン。違うのは機体番号のみ。装甲越しに感じる、鋭く冷たいあの視線——。
とうとうこの日が来た——唯依は逸る心を落ち着かせるため、深呼吸。フラッシュバックする数十分前の出来事。試合の組み合わせ発表。対戦相手は予想どおり山城上総。何

の足枷もない状態での決着――互いに目は合わさずとも、それを望んでいるのがわかった。
　部隊連携教程に進むための関門――戦術機操縦の総合技術修得率を中間考査する機体操作技能評価演習は、最後の評価試合を迎えようとしていた。突撃砲などの飛び道具なしの近接格闘戦は、斯衛軍、帝国軍の別なく、日本衛士必修の技能である。山岳地帯が多い日本に於いて距離を取った機動砲撃戦を展開できる戦域は限られており、ことに戦術機が投入される最終局面――艦砲・野砲などによる長距離面制圧、戦車・機甲部隊による中距離打撃の後――では、彼我距離は自ずと密接する。加えて、物量を最大の武器とするBETAとの密集近接戦ともなれば、砲弾が底を突いても補給もままならない状況が容易に現出するのだ。その際モノを言うのが直接打撃兵装を用いた機動近接戦である。山岳、閉鎖空間、市街地などの難戦環境をモノともせず、戦車にも航空機にも不可能な空陸応変の立体機動と三次元的な空間戦術を成し得る特性こそが、戦術機を対BETA陸戦兵器の主力にして王座に位置付けているのだ。
『――開始座標確認』
　網膜内に四角く切り取られた主審・真田が号令する。
「――紅、篁候補生、座標確認」
『――白、山城候補生、座標確認』

彼我距離５００ｍで対峙する複合材の巨人。
『——現座標を維持。号令を待て』
「『——了解』」
オープン回線に重なるふたりの声——。
号令する真田の背後には、遠く離れた野営テントで観戦する候補生達の歓声が響いていた。個人成績で常に首席を争う唯依と上総の組が演習の〝取り〟であるのは偶然ではあるまい。教導官達の演出か、はたまた粋な計らいか——固唾を呑んで見守る候補生達の緊張と昂揚は今や最高潮に達し、口々に武家女学校伝統の声援を送っていた。中でも安芸は、喉も涸れよとばかりに大声を張り上げ、いつも以上に熱の籠もった応援だった。それもそのはず、コンビニと脱寮を懸けた星取りは、現在Ｄ小隊が劣勢なのだ。安芸が優勢勝ち、和泉と志摩子が時間切れ引き分け。対するＪ小隊は一本勝ちと優勢がそれぞれ1、引き分け1という結果だった。明確なＤ小隊の優位を示すために、安芸が唯依に一本勝ちを望むのも自明と言えよう。だがそれ自体は唯依にとって些事だった。この勝負、唯依にはいくつかの負けられない理由があった。そのひとつは篁示現流。免許皆伝こそ未だ至ってはいないものの、門下生としてこれ以上の醜態は重ねられない。もうひとつは74式近接長刀。その設計と開発は父・祐唯が指揮したものだ。訓練用の模擬刀もそれに伴って開発された父の作。それを手にしている以上、他者に遅れは取れない。ま

して、総合仮想情報演習システムの視覚欺瞞効果によって、その見た目が実刀と寸分違わないとなれば尚更である。最後に己が使命。篁の家名を負う者として果たすべき務めと在るべき姿。そしてそれを阻む壁――山城上総を克服し前進を果たすこと。
唯依はゆっくりと深く呼吸し、対峙する練習機のコックピットを半眼で見据える。裸眼で見れば発泡樹脂製の訓練用アーマージャケットに覆われ一回り着膨れているであろう機体は、やはり総合仮想情報演習システムによって、いつもと違わぬ姿で屹立している。
「ここで、足踏みするわけにはいかない……」
自然に漏れ出た呟きが、上総に聞こえたかどうかなど、唯依は気にも止めなかった
『――只今より評価演習を開始する。規定時間は8分。双方、構えッ！』
どくん――。心臓がひと鳴り。
右を引き、74式長刀を増加装甲から突き出す様に構える上総の撃震。
『――始めェッ!!』
真田の豪咆――その背後に候補生たちの歓声が沸き立つ。
だが――唯依は微動だにしない。それは上総も同様だった。最初の手合わせで互いにその実力を思い知ったのだ。際立った優劣はない。8分という制限時間と経験から導き出せば、切り結ぶのは恐らく数大刀――無駄な手数こそ隙にも等しいのだ。
「…………」

唯依は相手の呼吸を読み取ろうと、機体とパラメーターウィンドウを睨み続けた。生身ならば筋肉や筋、視線などの微妙な動きからその心の動きを読み取ることも可能だ。だが戦術機には人のそれとは別の予備動作がある。衛士の近接戦技能は、その機体の自律的予備動作を如何に消しながら、無駄のない重心移動と挙動連鎖を成し得るかで優劣が決する。そして、それを適えるために学んで来たのが篁示現流であり、装甲剣術なのだ。身体に染みついた技能は間接思考制御によって、戦術機の挙動や反応に大きく影響する。戦術機の主たる衛士が、生身の格闘戦もさることながら機体による近接格闘戦に於いて喫する敗北は、即ち先陣に立つべき武家の責務で遅れを取ることに他ならない。

極度に張り詰めた空気が両肩に覆い被さる。時間にして開始から数十秒――永遠にも似た停滞。上総機を凝視するあまり、逆にすべてを見透かされているかのような錯覚に囚われる。次々と湧き出る総戦武の記憶を、唯依は懸命に思考の外へ追い出す。

「――!?」

網膜いっぱいに広がる演習場。対峙する両機の間を、一羽の鶚が悠然と横切る――そして、それは唐突に始まった。

両機ともほぼ同時だった。摺り足で円を描くよう、だが確実に互いの距離を詰めていく。次第にそれは駆け足となり、必殺の間合いを制する争いと化す。

「――はあああああッ!!」

大股の踏み込み――間接思考制御が拾ってロケットブースト。合わせて上総機が長刀を突き出す――読まれていた⁉

「――くッ‼」

唯依は神速の手捌きで太刀筋をずらし、上総渾身の突きに打ち下ろす――激突する長刀と長刀。滑る刀身から幻視の火花が流れ出る。互いにいなす形で機体が接触――すれ違い様に跳躍（ジャンプ）ユニットを反転させ、後退しながら定常回転。上総のような使い手に背は晒せない。

「なんて重さ……！」

網膜には主腕関節・加重超過警報が明滅。総合仮想情報演習システム（JIVES）による真剣と紛うばかりの衝撃。剣術に精進する者同士――間接思考制御によって再現されるその挙動は、機体の人工筋肉たる電磁伸縮炭素帯（カーボニック・アクチュエーター）の連結張力を十全に使い切っていた。

「――むッ⁉」

再び対峙した上総機は下段に構え長刀の切っ先を揺らす――予備動作を読ませない気か。唯依はその動きに思わず眼を奪われた――その瞬間。

「――くッ⁉」

身を捻るように左外に踏み込まれる。反射で応じて機体を反転――だが、上総機は水平噴射跳躍（ホライゾナルブースト）で加重した斬り込みを叩き込んでくる。

強化装備の感覚欺瞞を越える衝撃——咄嗟に追加装甲で受けて難を逃れた。横殴りの衝撃で大きく傾いだ機体がたたらを踏む。自律制御が跳躍ユニットを起動、カウンターでひと吹かしして姿勢を安定させた——。

「——ッ!?」

絶好の機だったはず。だが上総は二の大刀を浴びせては来なかった。いや、物理的に不可能だったのだ。唯依は瞬時に理解した。最初の踏み出しから無理矢理機体を水平軸で転じ、下からすくい上げるような噴射水平斬を繰り出したのだ。それを為すだけでも、相当な反射神経と機体制御技能である。二撃目を考えない仕掛け——上総は今、勝負を決めに懸かったのだ。強化装備によって完全に調整されているはずの体温が僅かに上がる。

上総機は正眼に構え直すと、再び切っ先を左右に揺らす。そして集中の途切れを試すかのように、混ぜ込まれる予備動作のフェイント。唯依の精神力は、徐々に削られていく。

ドクン——。

まただ。装甲越しに感じる上総の視線——講堂で初めて目にした、あの眼差しだ。この数ヶ月間、度々あった。ふと気付くと、あの何とも形容しがたい視線が唯依を射貫いていた。今またあの眼が、消耗する精神までも見透かそうとしているのか——。

「――やあああああッ!!」

その視線を振り払うかのように、唯依は袈裟斬りに打ち込む――躱されることを見越して噴射定常回転（ブーストターン）、二大刀目と回し蹴りを連続で浴びせる。上総機は短距離跳躍（ショートジャンプ）でステップバックし、間髪入れず斬り込んでくる――。

「くぅ……ッ!!」

体勢を崩した唯依機は何とか追加装甲で初撃を防いだが、ここぞとばかりに猛然と打ち下ろされる連撃を受けながら後ずさりするのが精一杯だった。視界に踊る警告ダイアログとウィンドウ。追加装甲の耐久値がみるみる削られ、関節の過負荷は逆に積み重なる一方だ。唯依は機体反応の遅さに苛立つ。その時、オープン回線に舌打ちが聞こえた。

唯依は驚く――生身の勝負なら気付くはずもない小さな舌打ち。だが、高性能マイクとレシーバーによって生々しく耳に捻じ込まれた上総の感情は、唯依の口元を自然と緩ませる。あの上総が感情を顕にしている――反応の遅さに苛立っているのは向こうも同じなのだ。

邪魔だ――唯依は視線でウィンドウを消去。二手先を読みながら斬撃モーションの合間に追加装甲のチャージ――上総機の体勢を崩す。すかさず横薙ぎの一閃。だが上総は後方への短距離跳躍（ショートジャンプ）でそれを躱し、着地と同時に追加装甲を放棄、諸手突きで水平噴射（ホライゾナル）跳躍（ブースト）。唯依は間一髪、体捌きで回避するも隙を晒し、再び上総の連撃を追加装甲で堪え

る状況に陥った。
「——くッ!!　同じミスを……ッ!!」
追加装甲を打つ両手持ちの長刀——電磁伸縮炭素帯(カーボニック・アクチュエーター)が吸収しきれない衝撃に、機体が軋む。途切れも隙も見せない上総の連撃。総戦武の時とは打って変わった、猛獣のような激しさとしなやかさ。同じ人間の戦いだとは到底思えなかった。
『——ほら、どうしましたのッ!?』
どくん——。
『こんなものですの——篁さんっ!?　がっかりさせないでッ!!』
どくん——。
恐らくそれは上総の独り言だった。だがその声色には、どこか喜色めいたものが宿っていた。連撃に耐えながら後退る(あとじさ)唯依の脳裏に、ラウンジでひとり本を読む孤高の姿が過ぎった。
《——休み時間はいつもひとりで過ごすらしいよ》
《——色々考えたいからひとりにして欲しいんだって》
そうだ——唯依は気付く。これこそが上総本来の戦闘スタイルなのだ。護るべき者も

指示するべき者も持たない、解き放たれた山城上総の本能。己の戦いのみを追求する純粋――。

どくん――。

警告が翻る――追加装甲耐久値ゼロ。衝撃による加重で左主腕及び左主脚関節に重大な障害。がくんと左に傾ぐ姿勢――。

どくん――。

視界を埋め尽くす上総機が両手持ちの長刀を大きく振り上げた――もう、絶好の勝機を逃す気はないらしい。

生存本能、あるいは性的衝動にも似た熱が、粟立つ肌と共に下腹から脊髄を駆け上がる。圧倒的な劣勢に追い詰められていながら、込み上がって止まない喜びに、唯依は我知らず口角を引き上げた――。

どくん――。

――衝撃に続く轟音が響き渡り、土煙が視界を遮る。そしてすべては動きを停めた。

管制ユニットに充満するのは、耳慣れたコックピットの音のみ。世界のすべてが停滞しているかのようだった。

網膜に、四角く切り取られた真田が翻る。
『——紅、一本ッ！　それまでッ!!』
唯依は無意識に止めていた呼吸を再開し、酸素を求めて激しく喘いだ。
「——くはぁッ……はぁッ……はぁッ……！」
目の前には、膝を突いて前に傾ぐ上総の撃震。その左肩口には唯依機の長刀が接触ギリギリの間を空けて制止していた。
「——はぁッ……はぁッ……勝っ……た……？」
『——演習開始座標まで後退ッ！　下がれッ!!』
自律歩行で開始座標に向かう——唯依は自身の認識が正しいのか確信を持てず、データリンクで主審カメラのログ呼び出し、再生した。
多目的装甲の耐久力を失い、左に崩れた唯依機——。
その隙を逃さず、上総が放った両手長刀による上段からの一撃——。
唯依機は増加装甲を廃棄しながら、左に倒れ込む勢いで跳躍ユニットを噴射、がら空きの上総機脇腹を掴んで体を入れ替え、転倒を防止——。
渾身の撃ち下ろしで前に重心があった上総機は、そのまま全重量を乗せた一撃で大地を斬りつけた——。
跳躍ユニットの自律起動でバランスを取りながら、唯依機は片腕で上総機の肩口に振

り下ろす――。
上総機が膝をついて長刀を抜きそのまま切り上げる――。
暫しの間を置いて、真田の号令――。
唯依は無言のまま再生を止め、バックレストに力無くもたれ掛かった。
深々と大地に突き刺さったその切っ先が、上総の二ノ大刀を大幅に遅らせた。電磁伸縮炭素帯(カーボニック・アクチュエーター)の連結張力を使いこなせるが故に、その一撃はあまりにも威力が有り過ぎたのだ。
「本当に……勝てたんだ……」
再生映像を見ても、唯依はそれを自分がやったとは信じられなかった。思考ではなく反射で身体が動いたのだ。もう一度やれと言われても、寸分違わぬ再現は二度と出来ないだろう。瞼に浮かんでは消えゆく上総の姿。講堂で、教室で、訓練で、総戦武で、唯依を見据えるあの眼差しが甦る。そして、最も心に焼き付く映像――ラウンジでのあの姿。
「私……山城さんに……勝てたんだ……」
心の底から勝利したとは思えなかった。みっともなく、泥臭い勝利だった。だが、今はそれだけで十分だった。

《一瞬、迷ったな》
《その下らん美学は、多くの戦友を殺す》
過日、真田に浴びせられた言葉が耳に甦る。
その言わんとするところと、この泥臭い勝利に明確な繋がりは見いだせない。だが唯依は、少しだけその答えに近づけたような気がした。

◇

長く遅い夏の夕暮れが夕雲を茜に染め始め、山陰に建つ山百合女子の校舎は薄紫に沈む。未だ鳴き止まぬ蝉たちの合唱が、盆地特有ともいえる暑気の記憶を呼び起こした。
「そろそろまずいかな……」
校舎裏の壁に寄りかかっていた唯依は、バスタオルを弄ぶ手を止めた。強化装備のバッテリー残量が急に気になり始めたのだ。その暑苦しい外観に因らず、強化装備は着用者を環境から隔絶し、快適な体感温度を維持する。ただしそれは、電力の供給が続く限りの話である。唯依たちに貸与されているのは訓練用の低コストタイプ。フル充電でも４時間が活動限界だが、教程での使用であればそれで十分だった。コックピットに着座し

ていればその間機体の余剰電力で充電されるが、模擬戦終了後の野外デブリーフィング、撤収作業、帰校などで、かれこれ3時間以上経過していた。

「早く終わらないかな……」

網膜の隅に点滅するバッテリー残量。同期生たちは今頃、強化装備を脱ぎ、シャワーを浴びながら演習結果の話題で盛り上がっている頃だろう。模擬戦と自身への評価について

ひと通りの感想を述べた後、恐らく唯依と上総の試合評と結果についての話になるはずだ。家に纏（まつ）わる背景も含め、多くの面で耳目を集めるトップ2の戦いは、気怠い演習後のシャワーブースにはもってこいの肴だろう。遠慮気味にひそひそと話されるのも、上総がいる空間でそれを聞くのも嫌だった。幸い今日は後に教程がなく、寮の夕食にさえ間に合えば問題はない。バッテリー切れの強化装備というリスクさえ気にしなければ。

「あ……」

何気なく見渡した校舎裏の広場に意外なものを見つけ、唯依は思わず声を漏らした。それは、上総だった。おおよそ30m先、第二グラウンドに続くピロティを歩いている。唯依と同じく強化装備を着用したまま、見紛うことなき美しい黒髪をなびかせて。黄昏時の茜空に照らされた凛とした横顔に、光眩（ひかりまぶ）しいラウンジで見た横顔が重なる。その視線を追うと、そこには水飲み場があった。

恐らく上総も同じなのだろう――唯依は確信した。

唯依を見据えるあの視線――。

総戦武で刃を交えた手応え――。

模擬戦での戦いぶりと通信から漏れ聞こえた生の人間性――。

そして、あのラウンジで見た孤高と決然――。

唯依と同じく、同期生がひしめく更衣室に居場所がないのだ。上総のことは殆ど知らないにもかかわらず、自然にそう確信できた。

言葉や日頃の態度――表層にあるものをいくら重ねても、その人が何ひとつ見えないことがある。逆に、ほんの僅かなことを知っただけでも、その人を深く理解できることもある。それは唯依がこれまで重ねて来た、短くはあっても紛擾（ふんじょう）に満ちた人生から得た教訓だった。

だからこそ、もう少し知り合いたい――唯依は素直にそう思った。それは決して勝敗に依るものではなく、ごく自然にそう思えたのだ。これまで殆ど言葉を交わしていないだけに正直なところ気後れはする。だが、自分から同年代の者と仲良くなりたいと思ったのは幼児期以来のことだった。せめて今日という日を切っ掛けとしたい――唯依は心からそう望み、一歩踏み出した。

その突飛な行動に、唯依は面食らった。

胸の鼓動を聞かれてしまうのではないか――そう案じるほど緊張しながら、唯依は必要以上に足音を忍ばせ、上総に近付いていった。そしてそれは、10ｍほどの距離まで接近した頃に起きたのだ。水飲み場に到着した上総は水道の蛇口を捻ると、脚は綺麗に伸ばしたまま上体だけを前に折り、いきなり何の躊躇もなく、頭から水を被り始めたのだ。

どの学校にも大抵ひとつはある、校庭脇に作られたコンクリートの水飲み場。その木訥とした日常風景の傍らに、強化装備という非日常を纏った長い黒髪の美少女が脚を開いて立ち、１㎜たりと膝を曲げることなく上体を折って頭に水を浴びている――どこから突っ込んで良いかわからないその光景。そして、その外見や日頃の言動からは想像もつかないワイルドな振る舞いは、唯依の度肝を抜き、同時に緊張を完全に吹き飛ばした。

暫し唖然としながら豪快な洗髪を眺めていた唯依は、気を取り直し再び歩を進める。今度は足音を忍ばせず、至って普通に。

「あの……山城さん」

コンクリートを叩く水の音で接近に気づかなかったのか、声を掛けた瞬間、上総の身体はぴくんと反応した。驚かせてしまったかもしれない――唯依は少し気まずい。

上総はまるで見えているかのようにスッと蛇口を掴み、下を向いたまま水を止め、両手で束を握るようにして髪を絞る。そして、綺麗に前屈したまま顔だけを唯依に向けた。

「……なにかしら」

その感情の読めない目に、唯依は固唾を飲む——上総の立場で考えれば、今一番会いたくない者が恐らく自分であろうことは、想像に難くない。
「あの、よかったら……これ……」
差し出されたタオルを一瞥して、唯依を見詰める上総の瞳——そこに、あの独特の色はない。それだけははっきりわかる。だが、その眼に宿る感情そのものは、まったく読めなかった。
永遠のような数秒——喉が渇く。上総の艶やかな黒髪から滴る雫の音。そして降り注ぐ蝉の合唱。
どくん——。唯依は一瞬、我が目を疑う。上総の表情は——。
「ありがとう……使わせていただきますわ」
上総は目を瞑ってタオルを受け取った。
唯依は安堵のあまり、脚の力が抜けそうになる。そして、タオルで挟むようにして髪を拭く上総を見詰めた。
タオルを受け取る直前——礼を言う上総の顔にほんの一瞬、呆れたような笑みが差した。唯依にはそう見えた。それが本当に微笑みだったという確信は持てない。だが、そんなことはどうでもよかった。この小さな切っ掛けは、大きな変化の第一歩になるという確証を得たのだから。

一九九七年九月一六日　日本帝国　首都京都
帝国斯衛軍付属・山百合衛士訓練学校　候補生食堂

「――いよいよ今夜、物資調達作戦実行の時が来た。現時刻を以て作戦呼称を『嵐山の嵐』とする!!」

　真顔の安芸が声を潜めて一同に宣した。食堂に同期生は疎(まば)らだったが、慎重を期してのことだろう。

「あらしやまのあらしって……」

「嵐山の嵐作戦開始は夕食後の１９００(ひときゅうまるまる)！　集合の際は夏期行動服着用のこと。全員時計合わせ――!!」

「要はあれでしょ、寮に戻ってもわざわざ制服着たままで居て、食後のデザート買いにコンビニ行くってことでしょ」

　和泉の解説を震えて聞いていた安芸は机を叩いた。

「も～ノリ悪いな～～～あんた達はあっ！　雰囲気だよ、雰囲気っ!!」

「え～、面倒くさいなあ。今日は一応休暇なんだし、コンビニなんて自由に行けるじゃない」

　カリキュラム変更の影響で返上となった夏期休校。その代休はあらゆる意味で惨憺たるものだった。模擬戦明けと言われていた日程は延び延びとなり、ようやく為された告知はその前日——つまり昨日。あげくに、土日込みの5日間と予告されていた期間は平日1日に短縮されたため——つまり今日、殆どの候補生は面倒がって帰宅せず、結局のところ手持無沙汰から訓練校でシミュレーターなどの自主訓練に励み、貴重な休暇を浪費する羽目となっていた。

「あ～、も～～～ッ！　こっちは唯依にまんまと嵌められたんだからさ～っ、雰囲気くらい味わったっていいじゃないかよう‼」

「人聞き悪いよ安芸。唯依は嵌めてないし、嘘も言ってないじゃない」

「そりゃそうだけどさ！　試験の後に代休あるなんて、あのときは小隊長止まりの情報だったわけでしょ」

「ごめんなさい、安芸。確かに騙したって言われてもしかたないと思う——」

　唯依はぺこりと頭を下げた。ストレスを抱えた安芸をケアしながらも規則を破らず、嘘にもならないよう色々計算した結果だ。自身の家名や斯衛の名誉を守るためだったことも事実である以上、感覚的な安芸にどう思われようと仕方がない。ただ、模擬戦の勝利以降、安芸が斯衛の根幹を疑うかのような言葉を発することが無くなったのは、唯依にとって救いだった。不平や不満は相変わらずではあるが、心なしかその数は減ったよ

うに見える。
「やめてよ唯依、そういうの～。だいたい脱寮することが目的だったわけじゃないし。私はあくまでジャリジャリ君ラ・フランス味が食べられればいいんだしさ」
「だったら今から行けばいいでしょ。わざわざそんな遅くに行く必要ないじゃない」
「――あるの！　ドキドキ感大事なの!!　門限ギリギリのスリルを味わいながら行くからいいんじゃないか！」
「はあ～？　あんた、何言ってるの」
「わかってないな和泉は。単なるコンビニが、そのひと工夫で素敵なアミューズメントになるんだよ」
なるほど、と唯依は得心した。漫然と行くより、門限に近い方が買い物にも緊張感が増すのは確かだ。この所の詰め込みやカリキュラム変更のストレスに対して、安芸は不満を漏らすなりに工夫しているのだ。繰り返す日常に違う味付けをして楽しむ努力を――。
「わかった――嵐山の嵐作戦、命令受領します」
「え～!?　ちょっと唯依、本気？」
和泉の反応は些か大袈裟だった。唯依の受諾が余程意外だったのだろう。志摩子も目を大きくして口を押さえている。

「本気も何も、別に規則を破っているわけじゃないでしょう。それに安芸の言う通り、同じコンビニでも、そのほうが楽しめると思——っ!?」
　喜色満面で破顔した安芸が、勢い良く唯依にしがみついた。
「——育ちがいいだけあってさっすが、粋ってもんがわかってんな〜唯依は！　じゃあ決まりねっ、１９００あざみ寮玄関集合っ！」

　川のせせらぎと虫の声が心に沁みる晩夏の遊歩道を、唯依は一歩一歩懐かしむように歩く。その行く手には闇夜に煌々と輝くコンビニエンスストア。
「——だからってさ〜、なんでわざわざ制服なのよ」
「でも、外出する時は制服着用って、候補生手帳にも書いてあるよ」
「そ〜いうこと！　在りし日の自由を再現するには、これしかないでしょ！」
　この時間に来て、よかったな——唯依は会話に加わることなく、五感で得る季節感をじっくりと味わった。９月の夜は夏と秋の汽水域だ。日中は未だ残暑厳しい日もあり、夜の気温には秋の気配を感じる。川面を撫でる風、かすむ雲を照らす月光。そのすべてが去りゆく夏を惜しんでいるかのようだった。
「いらっしゃいませ〜」
　独特の入店メロディと店員の平坦な声、そして目映い光が唯依達を迎え入れた。

「――さ、ここからは時間との勝負！　ジャリジャリ君、ジャリジャリ君っと！」
「はいはい、しかたないわね」
「ちょっとダメだよ、走っちゃ――もう」
安芸は一目散に奥のアイスコーナーを目指す。まんざらでも無い様子の和泉と、呆れた様子の志摩子がそれに続く。唯依は軽く息を洩らして微笑み、菓子の棚を目指した。
「――ごきげんよう、篁さん」
蛇いちご味のポッキーに手をかけた瞬間、背後から懸けられた耳慣れた声――唯依は慌てて振り向いた。
「山城さん……！　ご、ごきげんよう」
「あなた方も、今お帰り？　今夜は妙に路が混んでいましたわね」
上総はそう応えながら、周囲を一瞥する。唯依は思い出す――上総は今朝、迎えの車に乗って帰宅したことを。久々に街で買い物でもしたのだろうか、その手には派手なメタリックシルバーのショッピングバッグが下げられていた。
「あ、ちがうの。私達はただ買い物に来ただけ」
「あら、そうでしたの」
水飲み場のやり取り以降、ふたりの関係に劇的な進展こそなかった。だが、必要最低限の挨拶や事務的な伝達以外の言葉――とはいえ、戦術論や指揮官論だが――を交わす

ようになり、唯依としては、確実な前進を実感しているところだった。志摩子がＪ小隊の蓮川という同期生と交流があることも、話しかける口実としては好都合だった。
「——ノォォォォォォオウッ！！！」
突然コンビニに響き渡る安芸の叫声——そこはかとなく漂う絶望と悲哀の余韻。
「——な、なんですのっ、はしたない……！」
目を大きくする上総。唯依は一瞬呆然とし、アイスコーナーに向かった。そこには両脇を志摩子と和泉に抱えられ、力無く項垂れる安芸の姿があった。
「——どうしたの安芸!?」
上総と挨拶を交わす和泉と志摩子を他所に、唯依は安芸の顔をのぞき込んだ。
「——安……芸……!?」
唯依は思わず息を呑む。その印象はまるで色素が抜けたかのよう。濁ったその目は四白眼。台形状に弛緩した口の奥から、異文明の呪詛、あるいは旧支配者の愚痴にも似た微かな音が聞こえていた。唯依は縋るようにあきれ顔の和泉を見上げた。
「速報。ジャリジャリ君売り切れ……」
和泉の言葉にビクンと痙攣する安芸。唯依はアイスボックスを見る。カラフルなアイス類の中にそれはあった。
「え……ジャリジャリ君、あるよ……ね？」

ビクンビクンと痙攣する安芸。困り笑顔で首を振る志摩子。
「唯依、それはサイダー味。安芸が食べたかったのはラ・フランス味だよ」
安芸ビクン。
「そうだったね……ごめん」
「石見さんの様子、尋常じゃないですわね……いったいどうなさったの？」
「うん、実は……」
ここに至る経緯を――唯依はまず、Ｊ小隊への勝利を約束履行の条件にしてたことを詫び、安芸がジャリジャリ君ラ・フランス味だけを楽しみに、この１ヶ月頑張って来たことを説明した。
そうでしたの――上総は派手なショッピングバッグから取り出したものを安芸に差し出す。
「――こっ……これは……!?」
人類に回帰した安芸が、それを両手で掴む。そして、初めて見るそれが何であるかを認識した全員が口を揃えて――。
「「「――ジャリジャリ君ラ・フランス味ッ!?」」」
「差し上げますわ。よろしければお召し上がりになって」
「で、でも――あう……あうあ～～～～～！！！」

安芸は微妙な感情の狭間に揺れているようだった。個人的反発はないにしても、これまで仮想敵に据えていた上総の施しを受けることへの抵抗と、ラ・フランス味への抗い難い本能の欲求——。あまりの二律背反なのか、表情がかなりおかしいことになっている。上総は殆ど表情を変えずに——。

「これまで辛抱なさったのでしょう？　私の小隊に勝利したのだから、貴方にはこれを召し上がる資格がありますわ」

「や、山城さん……」

「さあ、遠慮なさらず。でも、店内で召し上がってはいけませんわよ？」

「だけど……それじゃ山城さんの分が……」

目を潤ませてジャリジャリ君を見詰める安芸に、上総は頷く。

「気になさらないで、私は大丈夫ですわ」

そう言って上総はショッピングバッグを差し出す——。

「「「——ッ!?」」」

甚だ失礼な話ではあるが、唯依はその品位を欠く派手なメタリックシルバーのバッグを、ある意味らしいと言えばらしいと想いつつ、あえて見ないようにしていた。だがそれは間違いだった。ショッピングバッグであることや、それが上総の趣味だと思ったこと自体、侮辱であることは何ら間違いではない。違っていたのはその用途だった。

メタリックシルバーのコンビニロゴ入りクーラーバッグ――その中には、マチュピチュの城壁並に詰め込まれたジャリジャリ君ラ・フランス味が――。
「――なんじゃこりゃあああああ！！！」
ジャリジャリ君を握りしめて立ち上がる安芸の慟哭が全コンビニを揺るがす。対して上総は表情ひとつ変えず――。
「見ての通り、ジャリジャリ君ラ・フランス味の買い占めですわ」
「――全部あんたのせいじゃねえかぁぁぁ〰〰ッ！」

「あ〰〰〰、これだから金持ちってヤツは……！」
レジでお釣りを受け取りながら、安芸が不平を垂れる。隣のレジで会計を終えた和泉がその脇を通りながら――。
「もういいじゃない安芸。買い占めって言ったって、Ｊ小隊の子たちの分も込みだったわけだしさ」
「ったくさ、４人で何個喰うつもりだよ……３食毎でも９日分じゃんか」
「購入の上限設定がない以上、買い占めも正統な商行為ですわ」
はいはい――安芸はそう言って上総の反論を軽く流す。結局ジャリジャリ君ラ・フランス味は、２小隊分の８本を残して返品された。唯依は、上総の行動を意外なこととし

て受け止めていた。数の多少はさておき、小隊員の分までアイスの差し入れを買うという思い遣りに溢れる行為は、ラウンジや模擬戦で見せた孤高からは想像しがたいものだった。そして恐らく、高級品ではなく、意図して庶民的なコンビニ商品を選んでいるに違いないのだ。

「——あ、ごめんなさい……！」

考え事をしていたため、出入り口で数人の一般女学生と鉢合わせる。経済的繁栄とその謳歌を全身で表すその女学生達は、学校や恋人の愚痴で楽しげに盛り上がっていたが、山百合の制服を見るなり一斉に押し黙った。唯依は、以前のように何か揶揄されるのではないかと反射的に身構える。だが女学生達は、まるで楽しく会話していたことが罪であるかのように、気まずげに目を逸らしながら店の奥へと消えていった。

「なんだ、あいつら。唯依が謝ってんのに……」

安芸が振り返って女学生の背中見据える。唯依はそのまま店外に歩を進める。

「——いきましょう安芸、そこに立ってると邪魔になるわ」

コンビニエンスストアからあざみ寮に向かう川沿いの遊歩道を、唯依達は上総に譲ってもらった氷菓を口にしながら歩いていた。噂に名高いその濃厚な甘味と強い洋梨の香り——口々に感想を述べながらの帰路は、往路に比べ幾分賑やかだった。

「今ごろJ小隊の子達もこれ食べてるんでしょうね。寮中に梨の臭いが漂ってそう」
「そうだね、もうとっくに着いているだろうし」
既に平らげた和泉に志摩子が応えた。前を歩く安芸は両腕を頭の後ろの回し、口に咥えた木の棒を苛立たしげに上下させる。
「だいたい、この距離で車ってどれだけ贅沢なんだよ。斯衛は倹約を旨として――的なのはどこいった～！」
ごきげんよう――そう挨拶をすると、上総は運転手が閉めるドアとスモークウィンドウの向こうに消えた。同乗の誘いは一切無かった。彼女のことだ、親切心を発揮した痕跡を残すための無駄な小芝居など絶対にするまい。全員乗せられない以上、どう思われようが黙って立ち去ることを選んだのだ。
《人は、自分がそう思いたいようにしか理解しない。例えどんな事実を見たとしてもね》
《だから、ひとつひとつを考え過ぎたり、気にしすぎたりしなくていいんだ》
上総の行動を考える内に、唯依は何故か巌谷の言葉を思い出した。
「寮に帰る途中でコンビニに寄っただけなんだから、そんなこと言ったら気の毒よ？」

「わかってるよ唯依。山城さん、別にヤな奴じゃないし……。ちょっと感覚はずれてるけどさ」
「確かに。安芸にアイス分けてあげるなんて、意外と面倒見いい感じじゃない？」
星空を見上げながら感心する和泉に、根本までちびたアイスを上品に囓りながら志摩子が頷く。棒の片面に乗っかった最後の一口が今にも落ちそうで、傍で見ている方が落ち着かない。
「なんかリーダーシップっていうか、カリスマ性凄いって蓮川さんが言ってた。だから何が何でもついて行かなきゃって気になるらしいよ？」
「なるほどね。それがJ小隊の連携精度の秘密ってことか」
和泉の感想を聞きながら、唯依はラウンジの上総を想い返していた。カリスマ性。リーダーシップ。細やかな思い遣り。そして、孤高と決然。いずれも自身には思い当たらない才能と能力だった。模擬戦で豹変ぶりから察すれば、公に於いても個に於いても、上総は飛び抜けた才能を持っていると思えた。
「——ちょっと、なんでまた教程の話になってるの！　ただでさえ自主練で休暇が潰れたんだ、夜ぐらいそういうのやめない⁉」
「仕方ないよ、私達候補生なんだし。それ以前に斯衛なんだから。武家に生まれた以上は——」

結局落とさずに氷菓を完食した志摩子を、安芸が忌々しげに遮る。
「――まったくさあ～、そんなんだからあんな奴らになめられるんだって」
「あいつらって……ああ、コンビニで会った女学生達のこと？」
「そうだよ唯依。あんたの挨拶無視したあいつら！　どうせ平和がタダだと思ってんだよ――ったく、いったい誰のおかげで遊んでられると思ってんだ！」
「ああ、なんかいいよね、あの子達、しあわせそうで。いつも友達と一緒でさ……」
志摩子が唯依を見て、困り笑顔で小首を傾げる。
経済成長とその謳歌を体現した同年代の者達――その姿が、語っていた愚痴が、脳裏を過ぎる。恐らく何不自由なく、気ままに暮らし、それ故些細な不自由に過敏になり、無くても生きていけるモノのために右往左往するのだろう。
「ほんと、いいよなあ……毎日当たり前のようにコンビニ行けて、当たり前のようにジャリジャリ君食べてさ」
安芸がコンビニを振り返りながら、心底羨ましそうにぼやく。そこにいつもの勢いはない。
「多分、好きなだけ彼氏と電話して、自由に連絡取れて、休みの日は好きなだけ会えるんだろうな……」
京都の街の灯をぼんやりと眺める和泉。その眼は、街の様々な場所を順々に追ってい

るようでもあった。
唯依は自分は何が羨ましいだろうと考えたが、何も浮かんでは来なかった。安芸や志摩子、和泉が羨んだそれは、一般的には至極普通の日常なのだろう。だが武家に生を受けた者達にとって、今やそれは絶対に叶わない夢であり幻にも等しいように思える。唯依はむしろ、哀れまれているような気分だった。家格や家柄云々ではなく、そういった一般的な幸福を羨む意識を共有できないことが異質であると糾弾されているような、肩身の狭さを覚えていた。
山城さんは、あの子達を羨ましいと思うだろうか——唯依はあの涼しげな瞳を想い返しながらそう問うた。
「——おさむらいのおねえちゃん!!」
突然張り上がる子供の声に唯依達は脚を止め、慌てて声の主に振り返った。何か事故か——緊張と困惑が同時に覆い被さる。如何に武家とはいえ、侍と呼ばれることなど滅多にないのだ。
「あ……！」
夕食後の散歩だろうか。遊歩道の数十メートル後方に、小学校低学年ぐらいの男の子と幼稚園児くらいの女の子を連れた初老の女性が立っていた。
「——いつもていとをまもってくれて、おおきに！」

女の子がぺこんと頭を下げる。幼くとも見事な京言葉のイントネーションだった。男の子はティーガーズのキャップを脱ぎ、女性と一緒に深々と頭を垂れた。
気まずそうな顔の安芸が、咥えていた木の棒を袋にしまう。唯依達も居住まいを正して深々と頭をさげた。
あの家族はこの地域に生まれ育った地元民なのだろう。そしてあの幼子の行動は、恐らく祖母であるあの女性の教えなのだ。山百合女子訓練学校は長い歴史を誇る斯衛士官学校であり、地元の年配者ほど、誇りある皇帝の居都を守護する斯衛軍人に、正規・候補の別なく敬意と誇りを抱いているのだ。通学していた頃、そして休暇の道行きで、今と同じように年配者から礼を受けることは間々あった。だが、あのような小さな子供に声を掛けられたのは、生まれて初めての経験だった。
唯依達は、その家族が遠離るのを黙って見送っていた。誰ひとり一切口を開かず、ただその後ろ姿を見詰めていた。女の子は祖母に手を引かれながらも幾度となく振り返り、手を振る。その度に安芸は、全身を使って力一杯手を振り返した。その顔には邪気のない笑顔が貼り付いている。
「……なんか、こういうこともあるんだね」
志摩子が家族を見ながら呟く。
「なんていうかさ……元気もらった感じかな」

全身で手を振りながら、安芸が照れ臭そうに言った。
「でもさ……このままだと、あの子もあと数年で、軍隊に取られちゃうんだね……」
和泉の何気ないひと言は、その場にいる者達を再び沈黙させた。
唯依の脳裏に、夕空を背負って立つ巌谷が過ぎる。
《優秀な武器や戦術機が必要な理由はね、本来、唯依ちゃんみたいな若い人達を、戦場に送り出さなくて済むようにするためなんだよ》
《お父さんもおじさんも……大人達は皆、そう願いながら頑張っているんだ》
あの時、巌谷の瞳に宿っていた奥深い色。唯依は今、自分自身の瞳にも同じ色が宿っている様な気がした。

一九九七年一二月一四日　日本帝国　首都京都
帝国斯衛軍付属・山百合衛士訓練学校　教導官執務室

暗灰色の天蓋から舞い降りる純白の結晶は、静かに、そして確実に地表のすべてを覆

い隠す。帝都は今年も白一色の世界となっていた。

数十年に渡って続く大戦によって放出された大量の塵とガス。ＢＥＴＡによるユーラシア大陸の地形改造と、それに抗するために人類が発生させる重金属粒子。それらは地球規模の気候変動を引き起こしており、日本に於いても年々豪雪地帯が拡大しつつある。あらゆる敵対環境をものともしないＢＥＴＡは侵攻する際の天候を選ばない。従って、候補生の教練に於いても雪中訓練は重要な意味を持っていた。視界不良、極低温、潤滑性、ダクト閉塞――挙げれば数えきれない極悪環境に於ける冬期訓練は、候補生が実戦で生存するための莫大な財産となる。だが、リターンはリスク無しに得られるものではない。多くの衛士を輩出する訓練校にあって、毎年この季節に、その大きなリスクを負う者が必ず出るのもまた事実である。そして――。

けたたましいサイレンが白い愛宕山麓に響き渡る。暫(しばら)くして、高地全体を揺るがすかのような爆発音が轟いた。格納庫に隣接する戦術機発着場に黒煙と炎が立ち上る。白を背景に輝く橙と墨のような黒が映える。殺到する緊急車両と化学消防車。轟音、怒声、爆発――。候補生達がざわめく中、炎を中心にして慌しく人が入り乱れる。

炎と煙と泡から突き出す半壊した戦術機の主脚。脱落した右主腕。地面に溜まる化学消化剤に、ひび割れた機体から染み出す闇色の液体。揺らめく炎を反射させるそれは、潤滑剤なのか搭乗者の血液なのかすら判別できない。

「――ッ!!」

大きく舌打ちをして、首席教導官である真田晃蔵はモニターの再生を止めた。そして大きくため息をつく。

ブラックボックスから回収した主観映像。僚機や他の機体、基地の観測カメラが捉えた客観映像。百種類近くの墜落記録映像を、この数時間何度も見返していた。

乱暴にめくられたまま机上に放置されているレポートに、真田は目を落とす。そこには、バイタルデータをベースに、総合的に予測される事故原因が記載されていた。

空間識失調――身体への加重と視覚が引き起こす錯覚。強化装備の感覚欺瞞やデータリンクは、これを最大限制御している。だが、人の手になるものに完全はない。仮に装置や機構、プログラムが完全であったとしても相手は人間。体質から感情そのすべてが千差万別であり、無限のパターンを持っている。そのため、薬物や後催眠暗示などの人体側を規格化するための補正処置も導入されており、搭乗員保護の徹底が図られている。しかし、それでもシステムに合わない特殊な体質の持ち主は存在する。そのような異物を濾し取るのもまた、訓練校が負う使命のひとつなのだ。だが――。

「――バカ者共がッ!!　だから早すぎると言ったんだッ!!」

真田は拳で執務机を力一杯叩いた。そして、己が立場の無力を呪う。

大陸の前線で負った重傷により内地送還され、疑似生体の移植を受けたのが数ヶ月前。

組織が定着するまでの間、その経験を活かせと命じられ、斯衛軍開発部隊に出向した。その当初任務は、リハビリを兼ねた次期主力機の技術プラットフォームを調整する開発(テスト)衛士(パイロット)だった。だがその裏には、城内省直轄の斯衛軍薬理研究機関が存在していた。そして最終的に派遣されたのが、この衛士訓練校だった――。

また、こういう想いをしなければならないのか――真田の脳裏に過ぎる、大陸での最後の戦闘。

「――くそッ！　さっさと手を引いておきながら……今更慌ててどうしようというんだッ!!」

来るべき本土決戦への備えとはいえ、実戦データも統計も臨床サンプルもすべての絶対数が不足していた。現状の安定性とコンバットプルーフを得るために、帝国軍が大陸派兵という実験場でどれだけの血を流し、生命を捧げたのか――城内省の高級官僚達がその現実を理解しているとは到底思えなかった。

「衛士をなんだと思ってやがる……!!　子供達の生命を……何だと……ッ!!」

大きくため息を吐き、事故を起こした候補生の資料を見据える。そのあどけなさが残る顔写真に、愛娘の面影が一瞬重なった。

「すまない……蓮川。許してくれ……」

絞り出すような呟きが、首席教導官執務室の空気に染み入った。斯衛軍も帝国軍もな

い。真田にとって訓練生はすべて教え子——まして人間であり、誰かの娘なのだ。

一九九七年一二月23日　日本帝国　首都京都
帝国斯衛軍付属・山百合衛士訓練学校　正門

雪が、降っていた。あの墜落事故が起きた日と同じように。午後に入ってからは幾分その勢いを弱めていた——まるで別れを惜しめと言わんばかりに。
蓮川候補生——いや、元候補生が正門に立っていた。傍らにはその両親。学校長である斯衛軍少将を始め、真田以下、数名の教官が降雪の中、ずらりと居並んでいた。
蓮川元候補生は振り返って学舎を仰ぎ見ると、大きく笑って力強く手を振った。
「みなさ〰〰ん、いってまいりますわね〰〰!!」
Ｊ小隊の者たちが、そして友人のひとりであった志摩子が、寒空に窓を開け放ち、身を乗り出して腕を振る。その後ろには小隊長であった上総が、表情の読めない視線でかつての部下を見下ろしていた。窓際に立ち、退校の様子を見詰めていた他の候補生たちも、各々手を振って応える。
深々と頭を下げた両親が、無邪気にはしゃぐ娘をなだめ覆い隠すように車に乗せる。

表情こそ降雪に煙って窺えないが、その動作からは労りらしきものより、苦々しさや忌々しさといった負の印象を受ける。
ボリボリと雪を噛む金属チェーンの音と共に蓮川家のリムジンは発進し、白い闇に消えていった。

「……これ、蓮川さんの手紙」
その大きな瞳を潤ませ、志摩子は有名な子猫のキャラクターが印刷された封筒を差し出す。唯依は怖ず怖ずとそれに手を伸ばし、そっと受け取った。
昼休みの視聴覚室。誰もいないところで話したい――いつになく真剣な志摩子の懇願に応え、唯依たちはこの場所を選んだ。志摩子と向き合って手紙を持つ唯依の両脇に和泉、安芸が並ぶ。
「あの子が事故に遭った日。演習から戻ったら、私のロッカーにこれが……っ」
上擦る声を必死に制御していた志摩子は、嗚咽で語尾を噛み切った。
総合失調による記憶障害と精神錯乱――それが蓮川の退校理由だった。幸い蓮川は、戦術機の堅牢な搭乗員保護機能によって全治7日の軽傷で済み、事故後に規定されている検査入院のみで済んだ。だが、事故のＰＴＳＤが引き金となり、これまで耐えてきた重圧の堰が決壊、一気にその精神を蝕んだ。一見、何ら問題ないように思えるが、記憶

の一部欠落、思考の幼児退行、コックピットでのてんかん発作などの症状が併発。回復も別兵科への転科も絶望視され、傷痍退校扱いとなったのだ。
「見て……いいのね」
志摩子は嗚咽を堪えながら頷く。唯依は丁寧に封筒を開き、几帳面に畳まれた便箋を開いた。
「「「——ッ!?」」」
唯依、和泉、安芸が、同時に息を呑んだ。激しく、深く——。
「え……？　だってこれ……事故の前だよね……？」
あからさまに動揺する安芸の問いに、志摩子は嗚咽を堪えず、ただ頷く。
「じゃあ……蓮川さんは……事故の前から、もう……!?」
和泉の言葉に何の反応もせず、志摩子は俯き、ただ涙を流すだけだった。そんなことわからない——握りしめた拳が、そう言いたげだった。
「これは……山城さんには……見せない方が良いと思う……」
唯依は力無く呟いた。誰よりも、自分自身に言い聞かせるように。そして、もう一度便箋に視線を落とす。
紙面いっぱいの大きさに、小首を傾げる子猫のキャラクターがうっすらと印刷されている。その極限まで記号化された無表情な目が唯依を見詰めていた。そして、定規で引

いたような楷書のペン字が、子猫を塗り潰すかのように、隙間なくびっしりと書かれている。その文章は一定の文字列を繰り返していた。何度も、何度も。

《えのこなぱっりはさずかろしまや》

それが、志摩子に宛てられた手紙の内容だった——。

一九九八年——

一九九八年一月二六日　ユーラシア大陸
大韓民国　全羅南道　光州市近郊

黎明の紫が東の地平から燃え立つ。明けない夜はない——そして陽はまた昇る。それが照らすものは移りゆく無常。山間（やまあい）には、数機のF－5戦術機に守られながら、軍港のある木浦を目指して進む避難民の列が延々続いていた。

避難民の警備誘導を命じられた大東亜連合軍のグェン大尉は、高機動車の後部座席からその様子を見ていた。

頭上には雷鳴にも似た轟き。目に見えない無数の弾頭が空を駆け、遥か望む光州に落ちて爆ぜる。平和な時代の夏を知る者はその音で、遠い場所で行われている花火大会を連想するに違いない。紫から蒼へ。やがて白み始めた空が、無理矢理棄てさせられた故郷の姿を淡く曝（さらす）す。瓦礫の山と化した市街。夥（おびただ）しい異星起源種の骸（むくろ）。ひしゃげて燃えさかる無数の戦車、あるいは戦術機だったもの。力無く機械的に歩を進める人々は、それを虚無の目で見つめている。

光州作戦——朝鮮半島東南部からの国連軍と大東亜連合軍撤退を支援する、日本帝国軍と統一中華戦線の共同作戦は、大局的観点に於いて成功しつつあるらしい。ただその

犠牲は大きく、国連軍司令部が陥落、指令系統の混乱から麾下の部隊は後退中に大打撃を受けたという。

今はどうでもいい——グェン大尉はそう呟き、くわえた煙草に火を付けた。

元より戦力温存のための撤退作戦。ここは朝鮮半島の南端部。成功だろうが失敗だろうが、今日を境に人類が更に押し込まれることに違いはないのだ。そのような窮地で拾ったもの——大尉にとって、いや、最前線という地獄に在る者達にはそれがすべてだった。絶対の死を覚悟したのはたった数時間前。ＢＥＴＡの圧倒的な侵攻圧に絶望し、どこに逃げても同じだと避難を拒んだ住民達。その救出を命じられたグェン大尉が所属する戦術機甲部隊と彼の部下達。その殆どが、今こうして生きている。それだけで充分なのだ。

グェン大尉はゆっくりと紫煙を吐き出しながら、彼方で擱坐している帝国軍のＦ－４Ｊ戦術機を祈るような気持ちで見つめる。そして、黙して心からの感謝を捧げた。この作戦で戦死した多くの将兵に。戦況的には絶対あり得ない規模の援軍を差し向けてくれた、日本帝国軍の指揮官に。

——そして、グェン大尉は妙なことに気付く。日の丸を肩に付けたその戦術機は白かった。良く目を凝らして見ると、それはＦ－４Ｊに似て非なるものであることがわかった。

「なんだあれは……新型か？　いや……あれはどう見ても第一世代機だが……」

◇　◇　◇

寂寥（せきりょう）が眼前に広がっていた。鏡のように滑らかな平野が延々と続いている。干上がった巨大塩湖の如きその遥か遠景に座す異形の山。鋭利な岩盤が幾重にも折り重なったかのようなその威容。死によって研かれたＢＥＴＡの大地。すべてを均（なら）された世界は美しいほどにシンプルであり、時を止めているかのような趣がある。だが、その停滞を台無しにしているものがあった。死の調和に抗う躍動は生の証。無機質な世界の主とそれを犯す者。対称的なそれらの容姿は有機と無機。ソリッドなその世界に相応しい端正な容姿を持つのはむしろ侵入者達。対して主（あるじ）達は複雑かつ多様――世界から搾取した生を無秩序に体現しているかのようだった。

「――く……ッ!?」

翻（ひるがえ）る衝突回避警告と警報の大合唱。視線をダイアログに――間接思考制御システムが唯依の統計データから意図を照合――瞬時に警報音が止む。

戦域（シング）マップには青い友軍光点（ブリップ）が４。敵性の赤は見渡す限り。唯依はそこを噴射地表面滑走（サーフェイ）で突っ切る算段。

上腕を振りかぶる要撃級(グラップラー)。機体を捩(ねじ)って躱す——衝撃、揺れるコックピット。唯依は瞬時に機体ステータスに視線。被害軽微——装甲表面材の剥離のみ。

「このままじゃ……保たないッ！」

進路前方から前腕衝角の雨霰(あめあられ)。だが、高度は取れない——無数の敵は光線(レーザー)から身を守る盾でもあるのだ。

87式突撃砲の１２０㎜を兵装選択——砲撃。自律回避不能な打撃を繰り出す個体のみを排除し、群れを縫うように滑り続ける。

「——しま……っ!?」

警報——急旋回する要撃級(グラップラー)が繰り出す一撃。砲撃——前腕衝角に弾かれる砲弾。その衝撃でずれる打撃軌道——センチ単位ですり抜ける。もし本体を撃っていたなら、今頃前腕で押しつぶされていた。だが肝を冷やす暇もない。打撃の集中豪雨は続いている。

敵制圧地域にある戦術座標への到達——このシンプルな任務に、唯依の小隊は悪戦苦闘している。光線(レーザー)属種の隣接想定下、遮蔽物が一切無い平野に３０００の要撃級(グラップラー)。装備弾薬は初期携行のみ。目的と条件の提示だけ。戦術に何ら指示がないのはいつもの如しだった。

格闘機動を続けながら、唯依は視線を戦域マップに——全周映像に重なるマップ、そのどちらにも焦点を置かず全体を把握する認識視野拡大術は衛士必須のスキル。強化装

備の電子的な補助もあって慣れは早い。マップの一部を一瞬焦点し座標を表示させる。
「――ワグテイル1より小隊各機っ！　指定座標まで後退ッ――敵前衛を誘引して主力を分断、側面に突破口をつくる!!」
視界に立ちあがる安芸の通信ウィンドウ。
『――無茶だ！　数が多すぎて隙間なんかできない――距離が増える分じり貧になるだけだ!!　――このまま強行突破しよう!!』
またださ――唯依は苛立ちをかみ殺す。だが、意見の具申は許されている。
『――命令に従いましょうワグテイル2！　さっきもそれで……』
『――作戦目標は座標到達だよ！　それを優先するべきなんだよ!!』
志摩子に安芸が喰ってかかる。割り込むように和泉の顔がポップアップ。
『――どっちでもいいから早く決めて!!』
虚空に並ぶ3人の目が唯依を捉える――機器の仕様でそう見えるだけなのはわかっている。だが、唯依の感情が各々の視線に勝手な意味を持たせてしまう。
「――先の命令を優先!!　各機隊形を維持しつつ後退開始――!!」
唯依は同期生達の視線を振り払うように叫んだ。

◇

一九九八年三月一七日　日本帝国　首都京都
帝国斯衛軍付属・山百合衛士訓練学校　シミュレーター・ルーム

文字通り停滞したＢＥＴＡの世界にハニカム模様が走って暗転。圧搾ガスの噴出音と駆動音を伴い、シミュレーターの天蓋がゆっくりと後退すると、見慣れた屋内訓練室の天井が視界に広がる。
「また全滅だ……」
唯依はため息を吐いてコンソールのロックリリースを引き上げ、腰部と頸部をバックレストの拘束から解き放った。
実戦想定のシミュレーター演習は、今月に入ってから急遽繰り上げられたものだった。
度重なるカリキュラム変更は、大陸の戦況悪化が原因だろうと皆が囁(ささや)いている。何にせよ、基礎動作に終始する退屈な初期教程が短縮されたことは幸いだった。この応用課程で使われる総合仮想情報演習システム(JIVES)は、加減速やＧ変換などの感覚再現も含め、いつ

経験しても本物の戦場と見まごうばかりで、退屈する余裕などまったくない。それは強化装備の感覚欺瞞(かんかくぎまん)と実戦部隊が戦闘で得たデータを組み合わせたもので、実機演習でも使えるという。感覚欺瞞の強度を強めれば、訓練であるという認識をブロックすることも、痛みを再現することもできるらしい。だが、その精神的負担に耐え得るのは、実戦を生き抜いた正規軍の衛士に限られるため、最大強度での新兵教練は禁止されているという。そのような噂話も、満更嘘ではないと信じさせるリアリティなのだ。それだけに今回の結果は、実戦に於いても同じことが起こるだろうと唯依に強く思わせた。今日がシミュレーター演習最初の実力評価試験だっただけに、その実感は二重の意味で重い。

　唯依は近付く別小隊の足音を聞くと、そそくさとシミュレーターマシンを降り、搭乗する同期生の補助に備えた。

「あの全滅を呼び込んだ最大の理由――言ってみろ」

〝戦術鬼(せんじゅつき)〟真田(さなだ)の隻眼が唯依達を射貫く。シミュレーター脇のブリーフィングルームに緊張が走る。演習待ちの同期生達が別室にいることが唯一の救いだ。壁伝いにくぐもって聞こえるシミュレーターマシンの駆動音。壁掛け時計の秒針。デブリーフィングでの発言は自由とされているが、訓練小隊(ワグティル)の4名は一様に押し黙ったままだった。生存時間こそ着実に延びてきているものの、いつもの通りの全滅。しかも今回は、後退に従わな

かった安芸の独断専行に引き摺られ、自ら発した命令を唯依自身がなし崩しにする結果となっていた。

「――は。私の状況判断、指揮能力の欠落によるものです」

「ここで必要なのは、そんな通り一辺倒で曖昧な責任論ではないぞ、篁(たかむら)候補生？」

真田が浮かべた表情は、白亜紀の暴君竜を彷彿とさせた。

「どうやら知らないようなので教えておいてやる。生憎俺は平民でな。だからお武家さん方とはちがい、貧乏くさくてみみっちい〝合理性に基づく近代的な軍事教育〟なんてものを受けちまってる可哀想な奴でな……」

いつもの言い回し。いつものパターン。

「――目が飛び出るような値段の装備ッ！　――10年は遊んで暮らせるほどの育成費ッ！　ついでにッ――お殿様と奥方様の夜のお楽しみがおまけで授けた生命(いのち)ッ!!　そいつがまとめて4つもパーになったっていうのにだッ!!　ご立派で優雅な責任論聞かされて納得するほど、俺は高貴でも高尚でもないッ!!」

唯依達4人は斜め上を見たまま直立不動。そこに真田がぐっと顔を近づける。

「頼むから俺みたいな平民にもわかる――明確でッ！　具体的でッ！　わかりやすくかみ砕いた言葉で宜しく頼めねえか!?　お武家さん同士でしか通じないもんは一切取っ払ってだ!!」

唯依は真田にそう指摘されることなど最初からわかっていた。技能、能力、経験を積むためのシミュレーター演習で、それらの不足は課題の確認にしかなり得ないのだから。同時に、何を明言しないことが真田を苛立たせているのか——それも理解しているつもりだった。

元より衛士訓練課程の演習に於いて、目的の提示以外あれこれと注文がつかないのは理由がある。座学と訓練で得た基礎やセオリーを、柔軟性と独創性を以て応用し、刻々変容する戦場に自力で対応できる衛士を錬成するためなのだ。データリンクの導入以降、軍に於けるプロイセン型の指揮系統は崩壊し、従来のピラミッド構造から、多重スター構造へと変容を遂げた。多くの情報と大きな裁量権を与えられる末端衛士には、より高度な判断力と柔軟な対応が求められているのだ。

故に意見具申など、状況に対する積極的発言は正規軍でも奨励されている。戦闘中の平易な会話が容認されている理由もその範疇だ。だが、一度下った命令に対して従わないとなれば話は別である。正規軍なら抗命罪。場合によっては銃殺もあり得る。だがここは育成部隊。指揮権は形式上のものであるため現実的な咎はない。当然、教育的見地による形式上の咎は存在するが。

「——私の勝手な行動が最大の原因です、教官殿」

唯依が責められることに耐えかねたのか、安芸が自ら申告した。ほう——そう言って

真田は安芸の前にのっしのっしと移動し、ほぼ真上から見下ろす。
「なぜそれが最大の原因だと？　言ってみろ！」
「転進しなかった私を孤立させないために、戦闘最小単位(エレメント)の能登(のと)候補生が続き、最終的に篁候補生と甲斐(かい)候補生も合流。その結果連携が崩壊し、全滅したからです」
「——そんなことはモニターしていればわかる。俺が聞いているのは、見た目に依らず日頃基本に忠実な貴様が、何故そんな大それた真似をしたかということだッ!!」
斜め上を見上げ上官の目を見ない基本姿勢——だが、その身長差によって真田の貫くような眼力を安芸はもろにその眼で受ける形だ。だからといって基本姿勢は崩せず、顔を背けることも、目を逸らすことも許されない。
「その時は——私の判断の方が正しいと思ったからです！」
真田は安芸を睨み付けたまま何も応えない。それは何かを待っているようでもあった。言い様のない重い沈黙が暫(しば)し続く——。
「……６分から７分だ」
真田が徐に口を開いた。唯依はそれが何を意味するか理解できない。『死の８分』には少し足りない。並んで立つ安芸と和泉からも同じような戸惑いが感じられる。
「石見候補生……貴様、何を焦っている？」
「私は——焦ってなどいません教官殿!!」

安芸は僅かに目を見開いて答えた。逆に真田は目を細める。
「ここ最近、貴様は演習の度に強硬な具申を繰り返しているが……その殆どが6分から7分の間なのは偶然か？」
「……ッ！」
安芸は微かに唸る——唯依は反射的に真田と安芸を見てしまいそうになった。
「そして今日に限っては具申に止まらず、行動に出た。今回が実力評価試験だったことは無関係だ、とでも？」
「……ッ……!!」
安芸は奥歯を噛み締め真田を見据え続ける。
「その答えは貴様が一番わかっているはずだ——いいかッ、目的と手段をはき違えるなッ!!　そのことを自分の頭でよく考えろッ!!」
顔の真ん前で怒鳴られる安芸——だが、目を逸らさない。下唇を噛み締め、真っ直ぐ見詰める。
ふん、と鼻を鳴らし、真田は全員に向き直る。
「——どいつもこいつも女学生気分だッ！　仲良く助け合って素敵なお友達かッ⁉　部下を庇ってお殿様ゴッコかッ⁉　——いい加減にしろ穀潰しどもッ!!」
ひとりひとりの顔の前で怒鳴り付けた真田は、入り口に向かい、のしのしと歩き、半

身で立ち止まった。
「……これだけは言っておくぞ。斯衛軍(このえぐん)にどんな思惑があるか知らんが——俺は貴様らを絶対に甘やかさん！　嗜みや習い事レベルで済まされると思ったら大間違いだ‼」
腕立て50回、グラウンド30週を言いつけて真田は出て行った。唯依の緊張が解けていく。
「は〜〜、〝戦術鬼〟、今日は一段とご機嫌斜めだったね〜」
「それにしてもさ、いちいち言い回しが腹立つよね、あいつ……」
志摩子と和泉が安芸の肩にそっと手を添える。生返事だった安芸が、唯依に近付き——
「——あの、唯依……ごめん、私のせいでこんな」
「ううん、こっちこそごめんなさい。私がもっと的確に——安芸にも納得してもらえるような判断ができてたら……」
「え……、いや、それは……」
唯依は自覚していた。今の自分の言葉こそ、正に真田が指摘したままの綺麗事なのだと。今の安芸を、これ以上追い詰めたくない——だから綺麗事を言うしかない。だが、それすら自身への言い訳であることもわかっていた。
「罰則が終わったら今日の件、みんなでおさらいしよう。大事なのは過ぎたことより、これからのことだよ。同じ失敗、繰り返さないためにも」

「うん、そう、だね……」

安芸は視線を落として口ごもる。自分から口に出さない以上、安芸が抱える事情に踏み込む気はなかった。それはお家事情多々ある武家では一般的な処世術でもある。だが、なにより唯依自身がそうされたくないと思うが故の線引きだった。

◇

ブリーフィングルームを後にした真田は、上下に揺れるシミュレーターを忌々しげに睨み付け、舌打ちをした。

「——どうしました、真田さん」

不意に掛けられた声は教導官のひとり、藤堂のものだった。

「えらい剣幕でしたね、ここまで聞こえてましたよ。……石見の件、ですか？」

「ああ、いや。そうなんですが……いつになく頑なだったもので」

あれがここまで聞こえていたのか——そう思うと真田は居たたまれなかった。立場からではなく、感情に絆された怒声など、人に聞かれて気分の良いものではない。近付いてきた藤堂は並んで立ち、声を潜める。

「ではやはり……石見はあのことを？」
「……ええ、知ってますね、恐らく。家族から聞かされたのでしょう。みっともない話ですが、ついカッとして怒鳴り付けてしまって」
　真田は安芸とのやり取りを想い返しながら、ブリーフィングルームを一瞥した。
「……大陸帰り（われわれ）はみな同じですよ。このところ苛つくことばかりです——特に、あれはないですよ、いくら何でも」
　藤堂が揶揄（やゆ）しているものは、ここの教導官であれば誰でもわかる。この半年間、ことある毎に教程の短縮が繰り返されており、衛士候補生の技能習熟率は適格審査基準の60％程度まで落ち込んでいる。それにもかかわらず、2日前、城内省は任官時期の繰り上げまで指示してきたのだ。大陸で多くの戦友や、速成あがりの部下を失ってきた教導官達の怒りは尋常ではない。だが、斯衛軍が一度決定した教程は現場では動かせない。従ってその分、候補生には生き残って欲しい一心で、つい厳しくあたってしまうのだ。特に真田には候補生と同じ年頃の娘がいる。上の息子は既に任官しているが、娘は基準緩和によって遠からず帝国軍の徴兵対象となろう。いま目の前で候補生達が負わされていく過酷な運命は、娘の将来に重なって見えてならなかった。
「あの子たちは只でさえ速成です。こんな半端な教練だけでＢＥＴＡと戦わせるなんて、斯衛の上層部はまともじゃないですよ……」

一段と声を抑えた藤堂。だが、その苛立ちは一切隠さない。
「年末から大陸で強行してますよね、82式最新ブロックの実戦テスト。あれを慌ててやってるのも、今回の任官時期の短縮を見越してのことなんじゃ……」
「確かに、いま実戦データを押さえておけば、速成教程の効率化にも国内配備機のアップグレードにも使える。充分あり得る話です」
藤堂の指摘はもっともだ。ＢＥＴＡの日本侵攻が時間の問題となった今、82式の実戦運用データは喉から手が出るほど欲しいだろう。実戦慣熟目的の大陸派遣を、斯衛軍は80年代に既に打ち切っているのだから。そして、それ以上に斯衛軍が欲しているもの――。
「実戦未経験の斯衛衛士が、ＢＥＴＡ相手にどこまで戦えるのか――それを知るための実験だったとしても、俺は驚きませんよ。……斯衛(やつら)ならやりかねない」
真田は藤堂の話を黙って聞き流した。確かにそれは単なる推測に過ぎない。だが、もし事実だったとしたら――そこで得たデータを反映した機体、そして事前処置を受けて安芸が戦うことは、あまりに悲劇的だった。いや、仮定の話に俺はなにを――真田は自省した。自身が兄妹を授かっているため、石見姉弟の話はその分余計不憫に感じてしまうというのか――。
「――苛つくっていえば、真田さん」

更に声を潜めた耳打ちに、真田は我に返る。藤堂の眼は鋭さを増していた。
「例の光州の件で、彩峰中将（オヤジ）が責任追及されるって噂ですけど……何か知ってますか？」
その声色には、これまでとは別の種類の怒りが感じられる。そしてそれは、真田の心中にあるものとほぼ同じだった。
「そんなバカな話、現実にあるとは思えませんが……。あの彩峰中将（オヤジ）に限って、そんなことは……」
「今の政府は国連にべったりじゃないですか。連中の機嫌取るためなら、あいつら何でもやりそうで……」
真田は、かつて所属していた部隊の指揮官に想いを馳せる。あの人が居なければ、今ごろ俺は……。
そして不意に思い出す。大陸の前線基地。その酒場で中将に見せられた愛娘の写真を——。真田は横面を張られた想いがした。
「……藤堂さん、俺もその件は正直気がかりだ。確かにこのところの苛立ちは、それも原因のひとつです」
その言葉は自身を戒めるようにゆっくりと紡ぎ出された。
「だが、俺達には何もできない。——だから今は、自分達の手の届くことに全力を尽くしませんか」

深く頷く藤堂。

「わかっていますよ真田さん。いろいろ不満はあるが……斯衛の動きは結局、大陸帰り(われわれ)の想うところと重なる。今は、連中に雇われの身。状況を見守るしかないでしょう」

藤堂に頷き返しながらも、真田は諦観していた。これが、子を持たぬ者の限界か、と。

一九九八年七月七日　対馬海峡

観測史上最大の台風が遥か南の海をゆっくりと北上している。その存在を伝える激しい風雨と鋭く歪む海面。だが、荒天をものともせず堂々と鎮座する鉄(くろがね)の城があった。帝国海軍・第六艦隊を率いる旗艦・出雲(いずも)だ。衝撃と砲火が弾け、空間を抉る砲声が轟く――

――繰り返し繰り返し繰り返し幾度も。

「――神風、か。皮肉なものだ」

山口(やまぐち)提督は舷窓に打ち付ける雨を見つめて呟いた。

「どうやら天は、我等に与(くみ)しないようだ」

「は――連合艦隊の主力は沖縄近海で足止めされております。日本海の第三、第八打撃戦隊も急行中ですが――」

副官は沈痛な面持ちで言い淀む。その言外には、大時化（おおしけ）による集結の遅れが示されていた。かつて二度の元寇を退け日本を侵略から守った神の差配が、此度は重い足枷となって敵に利している——いや、加勢しているのだ。それは衰えることなく勢力を増しながら北上、九州縦断が予測されている。

「選りに選ってこのような日に……！」

山口提督は口惜しさを憚らなかった。

「本土の防衛体制は万全とのことですが、記録的豪雨による土砂災害などで兵站（へいたん）に障害が発生しているようです」

「それは我々も同じだ——この荒天で補給がままならない以上、艦隊の砲弾は間もなく底を突く」

「は、現在——ッ⁉」

——副官の言葉を裂いて響く警報。艦橋にいる全員が、奥歯を噛み締めた。

「——軍団規模ＢＥＴＡ群、対馬海峡に入水！　後続規模不明——計測限界超‼」

状況を淡々と伝える観測官の声——それは、どこか断末魔の悲鳴にも似ていた。

数時間後　日本帝国　北九州沿岸部

分厚い雲から落ちる豪雨――そして沿岸に降る鉄の雨。内陸からはMLRS、近郊からは自走砲、近接地からは90式、74式の間断ない砲撃が続く。津波のように押し寄せるBETA――神をあざ笑うかのようなでたらめな造形。その異形の肉塊と体液が爆発で攪拌(かくはん)され、北九州沿岸は何れもこの世のものとは思えない色彩と化していた。もぬけの殻となった臨海都市はすべて、それ自体が侵攻を遅滞させるトラップとして整備され、敵の本格上陸を待ち構えている。

――この日、日本は最前線に昇格した。

2日後　日本帝国　第二帝都・東京
首相官邸地下　危機管理センター

内閣官房長官・瀧元敏史(たきもととしふみ)はその報告書を執務机に放ると、深いため息を吐いて目頭を揉んだ。

端的に言えば〝想定外の状況〟なのだろう。この日に備え、かねてから進めてきた防衛計画は、天の差配によって木っ端微塵となったのだ。
観測史上最大の台風——この超大型熱帯低気圧の突発的な発生と急激な発達は、近年全地球規模で発生している異常気象や気候変動と同じく、ＢＥＴＡによるユーラシア大陸の急激な地形改変、大戦の大厄災で大気中に放出された大量の変動源物質による温暖化の影響によるものと言われている。人類がばらまく重金属粒子による寒冷化効果が無くなれば、その影響は更に加速するとも——。
「……なぜ、今日なんだ」
今日、少なくとも数十万人が口にしたであろう言葉。瀧元もまた、その言葉を吐き出さずにはいられなかったのだ。

——北九州沿岸部への大規模上陸から始まったＢＥＴＡの日本侵攻は、観測史上最大の台風とその停滞が正に追い風となった。これにより帝国軍及び米軍は、艦船と航空機による支援をほぼ封じられたのだ。頼みの陸戦兵器も暴風雨による水害と土砂災害によって展開が制限され、兵站ラインの分断以降は継戦不能に陥り、各地で文字通り全滅する部隊が続出した。
北九州上陸の僅か数時間後、長崎・佐賀にＢＥＴＡ第二波が上陸し九州南西部の防衛

線が混乱。その更に数時間後、中国地方に数百キロメートルの縦深陣を展開していた帝国本土防衛軍・西部方面部隊の主力は、同地方日本海沿岸部より散発上陸したＢＥＴＡ群に側面を突かれ、北九州からの挟撃と台風通過という不運も重なって僅か数日で組織的抵抗が不可能となった。このようなケースに対し、四方を海に囲まれ九州と中国地方に隣接する四国は、側面支援と反攻の拠点として機能する想定であった。だが、ＢＥＴＡの電撃的な侵攻速度と暴風雨の影響で瀬戸大橋を始めとする巨大橋群の爆破が間に合わず、陸続き同様の蹂躙(じゅうりん)を許す結果となっている。以来、本土防衛軍及び帝国軍の各部隊は、最前線の向こう、敵の支配地域となった九州島、四国島、中国地方の各地に於いて、山岳部で孤立しながらも絶望的な防衛戦を継続している。重金属雲によるデータリンク障害に悩まされながらも、連合艦隊による海上支援砲撃と細々と続けられる決死の補給を頼りに。

２日前——戦線の拡大と指揮系統の混乱に対応すべく、帝国議会は戦時特例法に基づき、近畿地方以東の三軍共同防衛方針を発表した。即ち、日本帝国軍——本土防衛軍含む——に加え、在日米軍と国連太平洋方面軍である。

瀧元は机上の報告を一瞥して再びため息を吐いた。その脳裏に過ぎる数字。生命の数。これは日本だけの悲劇ではない。この30年、欧州やアジア諸国でも度々起きたことな

のだ。やはり、先例に学ぶべきだったのだ。繁栄と平和な日常にあぐらを掻き、都合の良い現実しか選ばない楽観主義者達。人権や法律をたてに避難を拒む人々——そして遠隔地から大挙して殺到し、それを支援する市民団体。すべて、軍事力で強制排除すべきだったのだ。

《——我々が守るべきは票ではない。……選挙など、次にできる保証はないのだぞ！》

答弁に立った首相の怒声が脳裏に蘇る。

辛うじて全島疎開を終えていた九州以外の地方では、死者・行方不明者合わせ既に一千万人以上を数え、数時間毎にその数を４桁ペースで増やしていた。昨日、兵庫、大阪、京都、滋賀、奈良、和歌山、三重などの近畿地方に避難命令地域が発表され、福井、岐阜、愛知の民間人も自発避難を開始している。光線属種（レーザー）への警戒から航空機の航路制限が発令されているため、東海道新幹線を始めとする鉄道の下りは、24時間運行するも常に２００％の乗車率を維持、旅客船も常に定員超過で運行中だ。主要幹線道路及び高速道路は上りが全線、下りは近畿以西が軍事優先となり、規制のない道には避難の車列が築かれ、東名高速下りでは２４０㎞に及ぶ空前の大渋滞を記録、ガス欠や諦観による車輌放棄から、水や食糧の供給から仮設便所の設置まで、各県警と消防がその対処に追われている。この避難が原因の死傷者は千数百人に達し、西日本は完全な機能停止に追い込まれているのだ。

だが、不幸中の幸いは産業界の打撃が実質的にほぼゼロであったことだ。経済に影響力を持つ大手各企業は製造・産業拠点の海外移転を進めていたため難を逃れていた。これは来るべき日本侵攻に備え、10年前から進められてきた官民一体の国家プロジェクトによる成果であり、閣僚時代より同計画を主導してきた現内閣総理大臣に対する評価――産業空洞化を推進する国賊、といった類のものは、一夜にして覆った。特に軍需産業は、海上輸送網など物流を含めた整備が徹底されていた。沖縄諸島及び小笠原諸島の大規模再開発と、南西太平洋経済圏のハブ化推進によるオセアニア、オーストラリアルートが構築され、正面装備、戦略物資の安定供給によって、日本単独の継戦能力は依然担保されているのだ。

だが、如何に兵器や物資が潤沢にあろうと、人がいなければ何の役にも立たない。自律制御技術の発展は目覚ましく、先進的な研究開発が各国で進められている。だが、未だ人間は必要とされているのだ。ＢＥＴＡ大戦の勃発で世界人口が激減する中、一億五千万人を擁する日本は、世界有数の人的資源保有国だったのだ――数日前までは。

「……何れにせよ、この国では人が死にすぎた」

瀧元はそう言って立ち上がり、定例会見に向かった。

一九九八年七月一〇日　日本帝国　首都京都
帝国斯衛軍付属・山百合衛士訓練学校　候補生寄宿舎・あざみ寮

「――いやあぁぁぁっ!!」
　和泉は叫び声をあげてその場にへたり込んでいた。黒電話からだらしなくぶら下った受話器が、くるくると回っている。声を聞いて駆けつけた唯依は、その場にいた志摩子と安芸の顔を見て、何が起きたのかを察した。
「――いやだあああ……なんで……なんでそんなことに……!!」
　和泉は額を廊下に押し付けて泣き叫ぶ。丹念に整えられていた髪は無残に広がり、その隙間から嗚咽が漏れ出ている。多くの同期生が距離を取ってその様子を見詰め、沈痛な面持ちを浮かべていた。その場にいる者はすべて、他人事ではいられない。明日は我が身――いや、自分宛の凶報が来るのは、数秒後かも知れないのだ。
　唯依は通話が切れていることを確認して受話器を戻し、和泉の背中をそっと撫でた。安芸は眼を潤ませて歯を食いしばり、志摩子は唯依に倣って和泉の肩に手を添える。
「……忠道（ただみち）っ……忠道忠道忠道……忠道ぃっ……うあぁぁあぁぁ忠道いぃ!!」
　今は斯衛軍の衛士候補生だが、ここに居る殆どの者達は元々、軍籍には無縁の人生を

歩むはずだった。ＢＥＴＡ大戦、そして武家の矜持によって、その歩みはいとも容易く枝道に導かれた。最初は体裁に過ぎなかったその道は、想定外の天災と歴史的な大敗北によって知らぬ間に本道にすり替わり、候補生達の歩みは今や有無を言わさぬ行軍となって、その上を突き進んでいるのだ。

「――いったいどうしましたの⁉」

上総が小走りに駆け寄り、和泉の傍らにしゃがむ。彷徨う視線が志摩子を捉えた。

「和泉の許嫁が……九州に……」

その陰鬱な表情から染み出る軋むような声。呑み込んだ言葉の間。上総の視線での問いかけに、志摩子は首を振った。

「そう、でしたの……」

憐憫の眼差しが和泉に落とされる。唯依はその表情をただ見詰めていた。

超大型台風とＢＥＴＡに蹂躙された九州、四国、中国の各地方では、最前線の後方で孤立した部隊が未だ戦闘を継続していた。ＢＥＴＡの九州上陸、続く北九州陥落の報に接しても和泉は毅然と振る舞い、許婚の生存を信じて祈り続けていた。それが既に願望に近いものだということは、本人もわかっていたに違いない。だが、つい数分前にかかって来た電話が、その願望を打ち砕いたのだ。どのような内容かは知る由もないが和泉の狼狽を見るに、確証を伴った戦死確認が為されたことは想像に難くなかった。

「あたしの従兄夫婦も、鳥取に……。避難が混乱して……」
周囲に集まっていた候補生の誰かがそう呟いた。
唯依は居たたまれず、部屋に連れ帰ろうと和泉を抱き起こす。上総と志摩子がそれを助けて支える。
「やだあぁ……やだようぅ——なんでこんな目にっ!?　……なんでっ……なんでえぇぇ……」
何も映さない和泉の虚ろな瞳。虚空に伸びた掌から銀のロケットペンダントが滑り落ちた。唯依は慌ててそれを拾おうとして手を止める。志摩子が息を呑む。
廊下に落ちた拍子に蓋が開いたのか——幸せそうに微笑む和泉が、斯衛軍の制服を着た青年に寄り添っていた。
上総がそれをそっと拾い上げ、蓋を閉めて和泉の手に握らせる。
「あぁぁぁぁ……うぅ……うぁあああ……あ……」
和泉は両手でそれを胸に抱き、俯（うつむ）いた。唯依にできることは震える身体を抱きしめることだけ。
「和泉、お部屋に戻ろう？　ね……」
泣きじゃくる和泉を志摩子、上総と支えながら歩く。眼を真っ赤にした安芸が力無く後に続いた。

『――これに対し、日本帝国軍及び本土防衛軍、在日米軍、国連軍は舞鶴と神戸を結ぶ首都京都前面に三軍共同の防衛線を構築、日本海、瀬戸内海、大阪湾に連合艦隊を……』

無機質な声が廊下まで響いている。ＢＥＴＡ上陸以来、ほぼ点けっぱなしになっている食堂のテレビだった。ニュースキャスターが読み上げた配置の中に、帝国斯衛軍の名がないことに唯依は気付いた。

和泉の許嫁だけではない。伊勢や出雲を始め、多くの斯衛軍部隊がＢＥＴＡの侵攻に対し、果敢に戦ったはずだ。なのに何故斯衛の名を示さないのか――唯依の心にやり場のない怒りが煮え立った。

固唾を呑んでテレビの前に群れる同期生達を一瞥し、安芸がポツリと呟いた。

「任官の繰り上げって、やっぱりこれか……」

何故か唯依は、その呟きに何か覚悟めいたものが宿っているように感じた。

同日　日本帝国
琵琶湖運河　山科大橋

天を劈く壮麗な巨塔を擁するその巨大橋の上を、葬列の如き行進が行く。聞こえるのは引きずるような足音。力無く俯き黙して進むその流れは、京都から延々と続くどす黒い大河のようでもあった。

その橋——山科大橋は、大阪湾と琵琶湖を連結する大運河——近畿水道に架かる巨大橋のひとつだ。最大主塔高２３０ｍ、橋上構造物の最大海面高度は80ｍを誇る2階建ての鉄道・道路併用橋である。上面にある片側4車線の自動車道下り線は、外側の1車線を除き、規制前に殺到した避難民の車輌が渋滞の列を成したまま遺棄され、その骸を曝していた。

反対側の上り車線を陸軍車輌が列を成して走り抜ける。だが、誰一人それに関心を示す者はない。

その高度と強風から、危険を理由に歩行者専用路は設けられていなかった。だが、目前に迫る未曾有の危機に際し、上下両端の緊急車両専用の一車線が徒歩避難用に解放されていた。誘導のために点在する警察官。その表情にも憔悴が滲み、家族を案ずるのか心ここに在らずといった様子だった。

「——わしは、京都に戻る！」

俯いて黙々と歩き続ける避難民の列から、ひとりの老人が踵を返す。その表情には並々ならぬ決意が漲っていた。

「――お義父さん！」
脚を止め振り返った義息。周囲の者達はまったく関心を示さず、俯いたまま歩を進める。
「――お前達は行け！　京都が堕ちたら、どこに逃げても一緒だ……！」
「お、お父さん……!?」
娘夫婦を一度も振り返ることなく、老人は来た道を戻っていく。
1千年以上の間、日本の首都であり続けた古都。日本人の成してきたすべてを具現化した都。生を受けた時より共にあった京都を見棄てることは、帝都民にとって身体の一部を失うのと同義であった。
「まってくださいお義――!?」
老人を追いかけようとする義息を、その実の娘が立ちはだかって止める。抜け殻のような目を潤ませ、ゆっくり首を振る――その腕には赤子が抱かれていた。
しばらく伏せていた目をぎゅっと瞑り、義息は家族と共に京都に背を向け歩き始めた。
その遥か足許、巨大運河の水面を滑る巌のような艦（ふね）があった。アメリカ海軍第七艦隊に属する原子力空母――CVN-71・セオドア・ルーズベルトが数隻の駆逐艦を従え、琵琶湖に向けて遡上する。フルサイズの屋外競技場を優に倍するであろうその飛行甲板には第103戦術歩行戦闘隊（VF-103）“ジョリーロジャース”のF-14D・トムキャットが発進体勢を整えつつあった。

だが、橋を行く葬列は、それに何の関心も示さなかった。

一九九八年七月一二日　日本帝国　首都京都

民間人退避命令から数日——京都市街に聞こえるのは、浴びるような蝉時雨（せみしぐれ）、雀や烏などの野鳥の鳴き声、そして風の類だけだった。だが、留守支度（るすじたく）がきちんと為された家屋や店舗が列為す街並みは、膨大な住民が急いで退避したとは思えないほど整然としている。ゴミの散乱や放置、あるいは略奪など混乱の痕跡（こんせき）は皆無であり、凜とした寂寥に沈む日の出直後の一齣（ひとこま）と見まごうばかりだ。街そのものが、明日にでもこれまでと同じ日々を迎えられる身支度をしたまま、主たちの帰還を待っているかのようだった。失われた早朝風景との決定的な差はそれ程多くない。シャッターを下ろしたコンビニエンスストア。タクシーや乗用車のない車道。街路を彷徨う夥しい数の犬や猫。見渡す限りの赤く点滅する信号。市街の至る所に待（さぶら）う装甲車輌や戦車、そして戦術機。道を行くものは軍用車輌ばかりとなり、時折思い出したかのように報道、政府機関、武家衆などの公用車が通り過ぎるのみだった。

東進するＢＥＴＡに対する人類の布陣――最外郭である第一防衛線（宮津―丹波―明石）を帝国陸軍中部方面軍の第17師団と第21師団、朝鮮半島から日本へと離脱できたアメリカ陸軍第８軍団を主力とする残存国連軍と大東亜連合軍の主力が固め、第二防衛線（舞鶴―篠山―神戸）を帝国本土防衛軍第10師団、帝国陸軍第15師団と第22師団が主力として布陣。更には帝国海軍海兵隊所属のＡ－６Ｊ海神(わだつみ)一個旅団に加え、緊急展開した帝国陸軍第５師団の一部、及び在日アメリカ陸軍を主力とした国連軍戦術機甲二個師団が予備兵力として展開し、万全を期す。最終防衛線（小浜―亀岡―大阪）を帝国本土防衛軍第３師団及び帝国軍第18、20師団、そして帝都近縁の絶対防衛線（京都外郭高地及び京都市街）を、増強された帝国本土防衛軍第１師団及び斯衛軍第１連隊及び第２連隊が預かる。絶対防衛線の西南域に広がる天然の要害たる丹波高地一帯には、小型種浸透対策の山岳地雷帯、長距離支援用の砲撃陣地が数多く設置され、光線(レーザー)属種照射誘引範囲、及び面制圧の有効範囲でその全域をカバーしている。加えて嵐山、桂、壬生、二条城などの常設基地以外にも、仮設の駐屯地、補給基地が戦域一帯に数多く配され、奈良・大阪市街の仮設基地、砲撃陣地と連携し、ＢＥＴＡの物量侵攻に対処する。そして帝都背後の琵琶湖には、帝都鎮守の帝国海軍第二艦隊の戦艦３隻、重巡９隻、支援ロケット砲艦14隻の他、アメリカ第七艦隊が控え、琵琶湖沿岸西部から伊賀にかけては、中部、関東から抽出された戦術機甲部隊三個師団相当がその守りを固めていた。また、九州、四

国、中国地方での苦い戦訓が活かされ、各戦線間のエリア、主に平野部には戦術機甲部隊用の野戦補給コンテナが多数事前敷設されており、各部隊任意の補給を可能とする事で継戦能力を高めている。更に舞鶴沖の日本海、大阪湾には連合艦隊と国連太平洋艦隊が展開し、柔軟で機動性の高い状況対処によって、丹波高地砲撃陣地群がカバーしきれない戦域の長距離側面支援を担う。

日本人が連綿と積み重ねて来たすべてを受け容れ続けた千年の都——それは今、星界より来たる敵性生命体がもたらす絶対の危機に備え、人類史上空前の城塞都市へと変貌を遂げていた。それを中心に近畿一帯が堅牢盤石な城郭として構え、日本の命運を懸けた決戦に臨もうとしているのだ。

そして、襲来予測を数日後に控え、そこに残った人々の胸には様々な想いが去来していた——。

同日　帝国斯衛軍付属・山百合衛士訓練学校　候補生寄宿舎・あざみ寮

帝都の風情ほどではなかったが、山百合衛士訓練校のあざみ寮もまた、幾ばくかの寂寥感に包まれていた。速成教練を終えた武家の息女達は簡易な任官式を済ませた後、初

陣前の一時帰宅が許されていたのだ。だが、軍役にない武家家族の多くは既に京都を離れていたため、そこに住まう殆どの者は寮内の何処かで、貴重な半日休暇を思い思いに過ごしていた。

◇

ようやく傾き始めた陽を追って、東の地平から深い藍色が滲み出る。あざみ寮の食堂横にあるテラス——市街を一望できるベンチに腰掛け、和泉はひとり街並みを見詰めていた。

忠道は、この時刻が好きだった。世界が淡い藤色を帯びる夏の黄昏前が、一番好きだった。和泉は想い出の地を視線でなぞる。帰宅以外の理由で外出は許可されていない以上、和泉にできることはそれだけだった。

京都タワーの展望台——お付きの者の同行もなく、初めてふたりきりで待ち合わせをした場所。定番だったのは河原町から新京極。ウィンドウショッピングやカフェでの他愛のないおしゃべり。大人ぶって背伸びしたのは南禅寺。木々の緑と水路閣のレンガ色が今も眼に映る。小雨の降る中、ひとつの傘の下寄り添って歩いた哲学の道。休暇の最終日はいつも京都駅ビルの屋上庭園で別れを惜しんだ。初めてデートした京都タワーが

見えるその場所はふたりのお気に入りだった。休暇で帰京する度、その姿を見つける幸せと、繋いだ手を離す辛さを味わった中央改札口——そして、別れ際に交わした初めての口づけ。

　手にしていた手紙がぱたたたと鳴る。気付かぬうちに頬を伝い落ちる涙。

《——ところで、次の休暇は二日間だそうなので、ようやくそちらに戻れそうです。もし教練の合間に少しでも都合がつくなら、会う時間をください。いま私は和泉と一緒に、もう一度想い出の場所を歩きたいと思っています。なぜなら、私たちの生まれ育った京都を、和泉の住む街を護るために戦うのだと、きちんと自分の胸に刻みつけておきたいのです。大陸の戦況が芳しくないという報に触れる度、その想いは募るばかりです。もちろん、斯衛の衛士として戦う覚悟はかわりません。ですがその他にも、田上忠道（たがみただみち）として戦う理由をしっかり見据えておきたいと、心から思っています。斯衛のくせに情けないと、がっかりさせてしまったでしょうか。それでも私は、君という掛け替えのない人を、この手で護るのだという実感をきちんと確かめたいのです。それを得られるなら、私は戦場で鬼神にもなれましょう。万が一ＢＥＴＡがこの国を脅かそうと、不動明王のごとく勇戦してみせるでしょう。君が戦場に立つ必要がなくなるように——》

何度も読み返した最後の手紙。その一部が許嫁の声と像を伴って脳裏に甦り、和泉は想い出の地を視線で巡る。

「……ぅ……あ……ッ……！」

沸いて漏れ出る嗚咽を、食いしばって噛み切る。だが涙は、はらはらと伝って滴り続けた。

《愛しい君に会えることを願って――忠道》

「……嘘つき……っ」

想い出の地をなぞりながら、和泉は呟いた。憎んでも怨んでもいない……だが、そう洩らさずにいられなかった。

田上忠道少尉は2日間の休暇を得ることなく、ＢＥＴＡの波に呑み込まれた。忠道が所属する斯衛部隊は、帝国軍・博多守備部隊主力の山間部後退を支援するため宗像に止まり続け、文字通り全滅した。それが確認されたのは2日前――あの電話の前日だった。山間部に後退した帝国軍と接触した強行補給部隊が、データリンクのログを持ち帰ったことで確認されたのだ。

包み込むようなあの笑顔を見ることは、もう二度とない――。

あの穏やかで優しい眼差しを見ることは、もう二度とない——。
あの繊細で長い指が頬を撫でることは、もう二度とない——。
初めて忠道に会ったのは五歳の時——両親と共に訪れた田上家の屋敷だった。武家の作法に従い辿々しく挨拶する和泉を、3歳年上の忠道が見詰めていた。格好良くてやさしいお兄ちゃん。それがその日、一緒に遊んで得た印象だった。和泉はね、忠道様のお嫁さんになるんだよ——帰路の車中で父が言った。それを聞いて無邪気に喜んだのを今でも憶えている。許嫁の意味も、その縁組みが持つ意味も知らず、〝優しくて格好いいお兄ちゃんのお嫁さんになる〟という事実だけに浮かれ、ただはしゃいでいたのだ。両親が苦労の末に漕ぎ着けた田上家との縁談。それが能登家にもたらすもの。そして、それこそが武家に於ける末姫の存在意義そのものであった。
だがそれは、何の問題もなかった。その意味を知った時、和泉は既に心から忠道を愛していたからだ。ＢＥＴＡさえ帝国に近付かなければ、すべてが丸く収まったのだ。父と母が和泉に望み、和泉と忠道が望むものは美しく調和していたはずなのだ。
「ありがとう……忠道……。私……確かめられたよ……」
在りし日の許嫁が望んだ追憶の巡礼。その魂と共に巡り終えた和泉は、右手で手紙を胸に当て、左手でロケットペンダントを握りしめた。
「能登和泉が戦う理由……確かめられたよ……」

◇

「――101ッ……102ッ……103ッ……!!」
リズミカルに軋む金属音と、緊張を孕んだカウントが続く。同室の和泉が居ないのを良いことに、安芸は自らの限界に挑んでいた。
二段ベッドとロッカーに渡した懸垂台――実機演習が始まって仲良くなった整備実習生に、軸受けと鉄パイプを横流ししてもらって造った安芸のお手製だ。使い終われば取り外せるため、毎日の点呼でばれたことは一度もない。もし見つかっていたら――。
「――逆にッ……褒められてたかもなッ……!」
身体を持ち上げながら、安芸は歯を食い縛って笑う。日頃あれほど〝基礎を軽んじるな〟とうるさい教官連中が、とやかく言うなら矛盾というものだ。
よく言えばおおらか。悪く言えば大雑把。安芸は幼い頃から、考えるより行動を重んじていた。うじうじ悩むより身体を動かして発散し、衛士の基本である体力増強を図ることは一挙両得。心に迷いが生じたり、総戦武の前など緊張を強いられた際にはいつもこうして鍛えている。外に出られるなら長距離を走り、部屋であれば懸垂腹筋などの別メニューも織り交ぜつつ、激しく身体をいじめ抜くのだ――まるで何者かと競うかのよ

うに。
《安芸は女なんだから、基礎体力じゃ俺にかなうわけないんだよ》
「——うる……さいなッ……いつかッ……勝ってやるよッ……！」
腕を巻き上げながら、安芸は誰とも無く答える。周囲に人がいない時には、いつもこうだ。
《だから言ってるだろ？　考え無しに動きゃいいってもんじゃないって》
「——わかってるってばッ……でもッ……身体が先に動いちゃうんだよッ……！」
その会話の相手は安芸の弟、尚成(ひさのり)。かつて指摘された言葉の記憶に、口答えしているのだ。
《だったらおまえはさ、基本をみっちり叩き込んで、考えないでもそのとおり動けるようにするしかねえよ》

「――だからやってるだろッ……ずっとッ……あんたを越えるためにッ……！」

双子の弟――その存在は安芸にとってライバルそのものである。だからといって仲違いをしているわけではない。むしろ最初は、手を差し伸べるべき〝か弱い存在〟に過ぎなかった。お絵かきから剣術のまねごとまで、安芸は、幼年期をその生物学的な男女の成長格差によってリードし続けた。そしていつしか〝姉は常に弟に優る〟こと、〝弟は自分に助けられる存在〟という当時の状況を、永遠の確定事項だと子供ながらに思い込んだ。だが、歳を追う毎にその差は縮み、気が付けば何に於いても尚成の後塵を拝するようになった。以来安芸は生来の負けず嫌いも手伝って、死に物狂いで弟に食らいつこうとしてきた。脱着式の懸垂台を手作りするなど、稀に発揮される小器用さは、工作や大工作業でも弟に対抗した経験値と、地味な努力の積み重ねによって得たものだった。それ故、生まれ持った不器用さは改善されていない。だが、基礎を反復して身体に叩き込む根性と、弟への対抗で得た広範な経験値があればこそ、難関の衛士選抜を突破できたのである。安芸はそれをすべて認識、自覚しているからこそ、その努力を継続しているのだ。頭の中では常に弟と競い合っている。この懸垂もある意味勝負――弟の記録に対する挑戦なのだ。

《なあ安芸……。おまえ、何焦ってんだよ……？》

《石見候補生……貴様、何を焦っている？》

ドクン——。

弟の顔に、真田の怒鳴り顔が重なる。

《別にいいんじゃないの、俺を越えようとしなくても》

「——ダメだッ……私はあんたを越えなきゃ……ダメなんだッ……！」

同い年でありながら〝男子であるが故〟、年齢制限が引き下げられた徴兵の対象となり、1年先んじて任官した尚成——その任地は伊勢。出雲と並ぶ斯衛の重点防衛地域だ。そして今、そこはBETA支配地域である。

《おまえは女なんだしさ、無理する必要ないだろ》

「——そっちこそ男のくせにッ……なんでッ……なんでなんだよッ……！」

だが、石見家の名を背負う次期当主・尚成は、その時その場はにいなかった。BETA日本侵攻の約半年前——皇帝と政威大将軍の守護を預かる斯衛に在りながら、海を越

えた異郷の戦場に果てたのだった。
「――ぅッ……うぅっ……くぅッ……!!」
溢れ出で、はたはたとこぼれ落ちる涙。食いしばる歯の隙間から滲み出る嗚咽。
和泉が、羨ましかった――名誉ある死に様を見せて果てた許嫁が。唯依が、鬱陶しかった――何も奪われていない者が吐く正論が。志摩子が、腹立たしかった――唯依を崇拝し家臣のようにふるまう様が。そして許せなかった――自分自身が。同期生にそんな想いを持つことも、考えるより先に身体が先に動いてしまうことも、一度も尚成を超えられないことも――女であることも。
「――だからっ……私がやるしかっ……ないだろ……」
小刻みに震える身体。両腕に力がうまく入らない。弟の残した最高記録まで、あと51回。
「――私がっ……濯ぐしかっ……」
弟が残した声の記憶――安芸の問いに答える言葉は、何も聞こえなかった。

◇

志摩子は唯依の居ない自室で、壁に掛かる卸したての軍服を見上げていた。

「……行って参ります」

志摩子はやさしく呟いた。母への出陣の挨拶は数日前に済ませてあった。京都からの退避と任官の祝いを兼ね、留守を預かっていた母が掛けて寄越した電話だった。故にその挨拶は、第二帝都で精勤に励む父と義兄に向けたものだった。

純白に金糸が奔(はし)る斯衛軍・甲一種軍装を、志摩子は見詰める。縫腋袍(まつわしのうえのきぬ)や狩衣(かりぎぬ)の意匠を宿す斯衛兵(このえつわもの)の証。父と義兄が纏(まと)っていたあの制服に、自身が袖を通す日が来たことが信じられなかった。志摩子は父、そして母への想いを噛み締める。親藩・上篠(かみじょう)家の家臣筆頭を代々預かる甲斐家の名誉を、女である自らも担う——訓練校に入校した時でさえ、夢にも思わなかった。武芸や家督は、幼い頃に無縁となったはずだったのに……。

10歳の誕生日から数日たったある日——突然、兄ができた。甲斐の家名と家督はその義兄が継ぐことになって以降、志摩子は末姫として良妻賢母となるべく育てられた。武家ではない普通の家に生まれ、普通に学生生活を楽しみ、普通の日常に一喜一憂し、普通のかわいいものを見て友達とはしゃぐ——そんな夢想に耽った時期もあった。父母にとって自分はもう不要な人間なのだと我が身の悲運を嘆き、生まれを恨んだこともあった。斯様(かよう)に無為な日常に疲れ、諦観し、自らの運命を受け容れ始めた頃——ＢＥＴＡという名の神の悪ふざけがすべてをひっくり返した。再び甲斐家を背負い、武芸を精進する道に志摩子を引き戻したのだ——その果てに何も存在せず、何も待っていない道に。

そして、この山百合女子で出会った。志摩子が望むすべてを持つ、篁唯依に。
志摩子はゆっくり立ち上がり、二段ベッドの前に立つ。過日、天井のシミが怖いからと嘘をついて譲った上の段。家格の礼儀では説得できない唯依を、上に寝かせるための嘘。入寮前からそうしようと決めていた。下段の天蓋越しに、唯依の存在を見詰めて眠る夜毎(よごと)の幸を得るために。
とくんとくんと心臓が胸を打つ。呼吸の度に上下する胸。暫し唯依の寝床を見詰めていた志摩子は、爪先で探るように梯子にその脚をかけた。
「あぁ……っ」
早鐘を打つ鼓動に急かさせるように、登る勢いのまま身を投げ出す。几帳面に角を揃えて畳まれた掛布に顔を埋め、志摩子はゆっくりと、そして深く息を吸う。鼻腔と気道を経由し、両の肺をいっぱいに満たす唯依の薫り。
「唯……依……っ……！」
これまで何度も試みながら、背徳感に阻まれて踏み出せなかったその行為も、明日をも知れぬ身となれば容易かった。酩酊にも似た幸福感と絶頂感に包まれ、志摩子は我知らず艶やかな声を漏らした。
気が重かった京屋敷を離れての入寮。ルームメイトが唯依であるとわかった時のとき

めき。総戦武の不甲斐ない結果に、掛け布を被りひっそりと流した涙。無邪気に笑い合い、励まし合った日々。瞬く間に駆け抜けた唯依との一年三ヶ月の想い出が、一頻(ひとしき)り自らを鎮め終えた志摩子の瞼(まぶた)に甦る。

「……ばかだな、私」

いつもの困り笑顔でそう呟くも、志摩子の胸に罪悪感の類は一切なく、むしろ清々とした心持ちであった。

いいんだ、これで——唯依の知らないところで、唯依を想って、唯依のことだけを考えて動く。これまで通りだ。他の人にどう思われるなんて関係ない。唯依にだけ必要とされていたい。使えないって思われてるのもわかってる。可哀想って思われてるのもわかってる。でも、唯依の傍にいられるならそれでも良いんだ。

未だ火照りが残るまま着衣を整えて床に降り立ち、乱してしまった唯依の寝具を軍の作法に則って整える。そして、再び壁を見詰める。煌びやかな甲一種軍装の隣には、京の青空と嵐山の緑を思わせる山百合女子の制服。良く言えば質素で清潔感溢れ、悪く言えば地味で無個性。だが、その制服には色々な思い出が染みこんでいた。それは正に過ぎ去った日々の象徴だった。そして明日、志摩子はそれを脱ぎ捨て、斯衛の証を纏う——。

「できればもう少し、可愛らしい制服を着たかったなぁ……」

山百合女子の制服を見詰め、志摩子は誰憚ることなく、あっけらかんとひとりごちて微笑んだ。

◇

ひたひたと洗面ボウルに滴る水滴。上総は濡れた顔を拭こうともせず、鏡に映る己と対峙する。顔から首筋を伝う雫が、Ｔシャツの襟首から胸に冷たい染みを広げていく。
この数時間で何度顔を洗ったことか。両親への手紙を書いていても、横になっても、心のざわめきが収まらない。闘志なのか、畏(おそ)れなのか——あるいはその両方なのか。すべてが曖昧。そんな境地にある己が苛々しい。父も兄達もかつて通った道——山城(やましろ)に列なる者として、初陣を控え、このような蒙昧(もうまい)な気分に呑まれている場合ではない。上総にはまだ、為さねばならないことが山ほど在るのだ。
「山城上総、しっかりなさい……！」
自身の眼を睨み付け、上総は低く呟いた。

◇

燃えるような夕雲の下、篁武家屋敷の門前で、唯依は母・梅納の抱擁を受けていた。上品な香のかおり——絽のさらりとした肌触りが頬に心地よかった。

間を置いて並ぶのは、既に挨拶を済ませた使用人達。屋敷を払う準備は既に整っているというのに、唯依の一時休暇を知り、母と共にこの日まで止まっていてくれていたのだ。その頬を伝う涙は、立派に成長した姿に感極まってか、その行く道に待ち受ける苦難を偲んでか。

ややあって、どちらともなくゆっくりと身体を離す。唯依の背中と髪を撫でていた母の手は、頭から首筋、そして肩から腕へと滑るようにしてその両の手を捉える。母子は互いの眼を見詰めた。母が湛える表情は艶やかで深かった。慈愛、感謝、覚悟、哀愁、憂慮——様々な想いが集約している。自分は今どんな顔をしているんだろう。ちゃんと立派な顔をしているのかな——唯依はあふれ出る父母への想いに心揺さぶられ、その表情を保てているという自信を持てなかった。

「唯依……篁の家名に恥じぬよう、国と民に尽くすのですよ」

「はい。母さま」

父と同様、母の言葉に別れの挨拶はない。唯依は懐に忍ばせた文に制服の上からそっと手を添える。先刻母から受け取り、居間で読み進めた時の想いが再び胸の圧を高める。剛毅や激励とはほど遠く、別れの挨拶すらない、訥々とした父らしい手紙。娘の任官、

そして初陣に際しても面会叶わぬ父が、筆無精を圧して懸命に認(したた)めたであろう思いの丈を、唯依は嗚咽抜きに読み進めることができず、幼少以来久方ぶりに母の膝に伏して泣いたのだった。

　母の後ろに立ち、しきりにハンカチを眼に当てる〝ばあや〟。込み上がる想いに絆されて、唯依はもう一度その前に立った。血管の浮き出た骨張った手。唯依が生まれる以前から篁家に仕え、いつも傍にいて面倒を見てくれてきた、祖母のような女性。常に見上げていたその柔和な顔は、いつの間にか胸の高さに。かつて唯依を負ぶってあやしたその背中は、こんなにも小さく弱々しい。

「ばあや、身体に気を付けてね。東京に行っても……母さまと父さまをお願い」

「畏(かしこ)まりました……。唯依さまこそ、どうかお身体に気を付けて……。ご武運をお祈りしております」

　唯依は黙って頷き、数歩下がる。そして、名残を惜しむかのように生まれ育った屋敷をゆっくりと見渡す。再びこの屋敷で皆揃って暮らせるよう己の心に誓い、その姿を眼に焼き付ける。未練とならない按配の暫し後、唯依は制帽(せいぼう)を被り、姿勢を正して母の眼を真っ直ぐ見詰めた。

「――では、行って参ります」

敬礼一閃(いっせん)。茜色の陽を浴びて、唯依が纏う斯衛軍・甲一種軍装の山吹は、目映い黄金

となって輝いていた――。

一九九八年七月一四日　日本帝国
第一防衛線　丹波戦区

日本帝国陸軍が誇る90式戦車――その三個中隊を含む戦術機甲一個大隊が県道7号線沿いに防衛線を構築し、BETAを待ち構えていた。対レーザー装甲モジュールに換装(かんそう)された砲塔の正面、その主兵装たる120ミリ滑腔砲はすべてひとつの方向を睨んでいる。それは疎開を終えた無人の市街。燃え上がる焔は天蓋の如き暗雲を紅く染め、主が打ち棄てた家屋敷を何条もの煙に変えて天に還す。そして遥か上空、低く垂れ込める雲海の上には無人偵察機(UAV)が遊弋(ゆうよく)していた。その、人在らざる者はふたつの重大な使命を負っている。正にその時、搭載された多目的センサーのひとつ、赤外線シーカーが雲と煙を透してひとつ目の使命を果たした。

それらは地球上の如何なる生物とも形状が異なっていた。進化論も創造論も当てはまらない異形が、群れを為して無人の平野を征く。最前列を行く個体群は次々に対BETA地雷の餌食となり地に伏す。だが後続群は、何ら躊躇することなくそれら屍を乗り越

えて行く。擱坐と前進を繰り返しながらも、その速度は殆ど減じることなく、分散配置された自律砲台をなぎ倒しながら異星起源種の進撃は続いていた。
無人偵察機(UAV)が捉えた情報——その詳細は瞬時に戦域データリンクで共有され、遥か後方の琵琶湖艦隊を始めとする支援砲撃部隊や戦術機甲部隊、果ては機械化歩兵部隊や歩兵の個人端末にまで行き渡る。その一瞬の後(のち)——人在らざる者は自身の蒸発を以て、最も重要なふたつ目の使命を果たした。

「——D－21及びA－19ロスト！　光線属種(レーザー)の存在を認むッ!!」

京都の比叡平に置かれた帝都防衛作戦総司令部に充満する低い呻きが、希望的観測の霧散を現(あらわ)した。兵庫までの侵攻が早かっただけに、脚の遅い光線属種(レーザー)が最前衛に追い付いていない可能性が示唆されていたのだ。
遮蔽物や土地の高低差を勘案したレーザー照射警報が即時発信され、各部隊展開地域の飛行高度が制限される。

「——第22機動偵察小隊、宮津南西方約６０００にて接敵。識別34－K群——交戦を開始」

「——18－E群及びF群、移動開始——予測目標、姫路」

「——第１１４戦術機甲中隊、福知山市街にて接敵。識別24－T群——交戦開始」

ひっきりなしに入る接敵報告。総司令部正面の大型ディスプレイに表示された近畿全体の作戦図に、データリンクに連動して次々と赤い敵性光点(ブリップ)が広がっていく。
――その数秒後、京都の西側は真っ赤に塗りつぶされた。

同日　日本帝国首都・京都
帝国軍嵐山基地　仮設補給所

夜の帳(とばり)が愛宕山一帯を覆う。低く垂れ込める暗雲が遥か彼方の焔を映し陰鬱な朧光を放つ。緑生い茂るその南斜面中腹に聳(そび)える強化コンクリートの城塞(じょうさい)――帝国軍嵐(あらしやま)山基地である。本来は陸軍、斯衛軍が共用する帝都鎮守部隊の外郭拠点(がいかくきょてん)だが、ＢＥＴＡ侵攻に備える首都防衛計画により同部隊が前面展開しているため、戦術機専用の臨時補給基地として運用されていた。京都に点在する基地や駐屯地は何れも同様であり、最終防衛ラインの兵站、部隊補給を一手に司る重要拠点となっている。
初めて配属された本格的な軍事基地は、唯依達新任衛士をあらゆる意味で威圧した。発令中の防衛基準態勢(DEFCON)1の緊張に基地全体が包まれる中、着座調整などの機体整備に於いても、拝領した初搭乗機の感慨に浸れる雰囲気などあるはずも無く、母校・山百合女

子の近隣に在ることだけが細やかな心の安らぎだった。

「——最後に言っておく。我々の任務はこの補給施設の死守にある！」

戦術機格納庫(ハンガー)に轟く怒声。強化装備に第三種待機(Cウォーニング)補助装備を羽織った女性——中隊長の如月佳織(きさらぎかおり)中尉が、整列するファング中隊衛士の前を苛立たしげに行き来する。強化装備の色は血のような濃い紅——親藩武家の出自を示していた。冠位十二階の位階を継承する斯衛の家格識別色は、マスコミには差別的だと揶揄されているが、その主たるは衆人環視による行動規範の補強であり「高位は高徳を要す」の現れであった。紫は政威大将軍個人のみ、青は煌武院(こうぶいん)、斑鳩(いかるが)、斉御司(さいおんじ)、九條(くじょう)、崇宰(たかつかさ)の五摂家(ごせっけ)、赤は五摂家に近い親藩武家出身者、黄は譜代武家、白は外様武家、黒は武家以外の将兵に供され、その在り様を常に曝しているのだ。

「——帝都に迫る異星起源種どもの規模と圧力に抗するため、正規戦力の殆どを前線に抽出した今、貴様ら新任にできることは、この兵站の要衝(ようしょう)を守りきることだけだ！」

ベリーショートの髪に手をやりながら、如月は忌々しげに言い放つ。何故私がこんなところで、新任どもと——心の叫びまで聞こえてきそうな仕草。高位の者ほど先頭に立つ斯衛にあって、如月の苛立ちは充分理解できる。家の事情か、あるいは個の能力不足か……。

「——実戦経験もない、ましてや教程も満足に終えていない半学徒衛士には過ぎた名誉

だ！　いいか、功(こう)に逸(はや)るな!?　自分は〝足手まとい〟なのだと常に自覚しろ――わかったかッ！」

唯依達は黙して恭順の意を示す。

「――ブリーフィングは以上だ。別命あるまで詰所で待機。尚、貴様達の戦域データリンクへのアクセスは制限されている。待機中は通信とバイタルモニター以外機能しないことを肝に銘じておけ――以上、解散ッ！」

中隊１１名が一斉に敬礼――如月は雑に答礼して立ち去った。

嵐山基地の衛士詰所は、一個大隊36人の衛士を優に収容できるスペースがあった。その一角、格納庫(ハンガー)が見える内窓の周囲に、ファング中隊の11人は小隊毎に固まって座っていた。整然と並べられた長机とパイプ椅子。しばらく誰にも使われていないかのような清潔さが、寒々しさを余計引き立たせる。

「足手まとい、か……。そんなこと言われるために頑張ってきたわけじゃないのに」

志摩子が格納庫(ハンガー)を眺めながらこぼす。その視線の先には、整備ガントリーに居並ぶ瑞鶴(ずいかく)があった。恐らくは自身の白い機体を見ているのだろう。

「……私達だって任官したんだ。いつまでも学徒兵呼ばわりするなっての！」

一番手前の整備ガントリーには如月の紅い瑞鶴。安芸はそれを睨み付けながら吐き捨

てた。
「忠道の仇……討てると思ったのに……」
そう呟く和泉は、ただひたすらロケットペンダントの写真を見つめている。
初陣、そして死の８分――内なる恐怖を制すため、ここ数日懸命に気張って来ただけに、和泉達の落胆の色は深かった。兵站が軍に於ける生命線である以上、補給基地の警護は重要な任務である。だがそれだけに、本格的な戦闘がないということでもあった。仮に嵐山基地で本格的な戦闘が行われる場合は、最終防衛の瓦解を意味する。従ってそれ以前に即時撤退命令が下されるはずであり、結局戦闘にはならない。だからこそ新任衛士を配属し、せめて戦場の空気に曝して経験だけでも――という軍司令部の思惑が透けて見える。中隊を率いる指揮官が本来の大尉ではないことや、唯依と上総が少尉でありながら小隊長を拝していることも、その裏打ちであろう。要するに斯衛司令部は、唯依達の戦力を正規兵一個小隊相当と見なしているのだ。
《――人は、自分がそう思いたいようにしか理解しない》
《――だから、ひとつひとつを考え過ぎたり、気にしすぎたりしなくていいんだ》
未だ衛士ですらなかったあの日、巌谷（いわや）から授けられた言葉が、脳裏を過ぎった――。

「……仕方ないよ、如月隊長の言ったことは、本当のことなんだし」
「唯依……？」
安芸と和泉の目に、鋭いものが僅かに宿っていた。
「――でもそれって、時間とか状況とかが原因で、私達がどうこうできる問題じゃないでしょう」
唯依は自らの責務――小隊長が為すべきを果たそうと、安芸と和泉がどう思うかという思考を意識の外に追いやる。どれだけ言葉を尽くそうとも、事実を見ようと、人は、思いたいようにしか思わないのだから。
「だから、こうなったのは私達のせいじゃない。そんなことを気にするの、やめよう？　切り替えていこうよ」
安芸がため息を吐いて天井を見上げた。
「そうだね。ちょっと気を張ってたからさ、肩透かし食ってイラ付いちゃった」
「前線で戦っている先任のためにも、私達は冷静でいましょう。小規模の取りこぼしが迷い込んで来ることだってあるんだから」
「うん、そうだね……」
志摩子は困り笑顔で頷く。
「いつか必ず必要とされる時が来る。今はその時までやるべきことやって耐えよう」

「わかってる……。大丈夫だよ」
「……うん」
和泉は唯依を見なかった。納得していないのだろう。だが、唯依はそれ以上の言葉を紡がなかった。愛する者を奪われるという経験を持たないが故に、責務上、それ以上何を言っていいのかわからなかった。

「——随分落ち着いているのね、篁少尉」
振り返ると、上総が壁を背に立っていた。和泉から逃げるように入った士官ラウンジ——唯依はディスペンサーで冷たい緑茶をカップに注いでいたところだった。
「あなた自身言ってましたわね。小規模戦闘に直面する可能性はあるって」
「やだ、聞いてたんだ……」
「つまりそれは『死の8分』に直面するということですわ。なのにその落ち着きぶり……」
「そんなの……事前処置を受けているから、当然だよ」
「催眠薬物処置は全員受けていますわ。……でもね、どうしても、思考は『死の8分(そこ)』に向いてしまう」
実戦任務に就く衛士の殆ど——新任は全員、出撃前に〝処置〟を受ける。恐怖心や戦

死者への感傷などは、適度であれば士気高揚に繋がるが得てして合理思考を妨げ戦闘に支障を来す。そのような精神的混乱を薬で抑制し、それを越える錯乱や恐慌を後催眠暗示によって完全に制御する――それが〝事前処理〟である。極端な感情の起伏のみをノーマライズするため、常態で無感情になることはないが、本来の性格傾向が強調されるという副作用がある。その発現・程度は個人差や精神の影響が著しいものの、任務遂行に問題を発生させる程ではないとされている。また、衛士が処置による制御状態となった場合、外見的には無感情傾向が顕著となる。そのため第三者には〝己を律して冷静に行動している〟かの様に認識される。その際の衛士の主観は〝感情自体は認識〟しながらも、〝それを客観視〟する状態となる。例えるなら、映画で感動し嗚咽している自分の映像を見ている状況だ。その観察対象への嫌悪、憎悪などが原因となり、〝悪酔い(バッドトリップ)〟と呼ばれる劇症反応が発現するケースがある。

「……私(わたくし)の小隊も皆、極度の緊張と弛緩に苦しみ、ぴりぴりしていますわ」

上総は軽くため息をついて続ける。

「私も同じ。事前処置のせいか、自分の感情に妙に客観的になってしまって。後方配属に安堵している気持ちを見つけて、情けない思いを冷静に噛み締めているところですの」

「別に、私だって同じだよ……不安だらけだし」

「そう見えないのは、あなたの覚悟がさすが、ということかしらね」
上総は薄く微笑む。唯依は黙って首を振る。
「そんな、買いかぶりすぎだよ」
上総が数歩近づき、ディスペンサーの紙コップに手を伸ばした。
「篁さん。……正規配属で離ればなれになる前に、正直にいっておきますわ」
冷茶が注がれる音が士官ラウンジに響く。正規配属という言い回しが上総らしい。
「あなたはあの３人を……いえ、自分以外の者を心の中でバカにしている――」
ドクン――。
事前処置していなければ、あからさまに動揺したに違いなかった。
「見下していると言った方が正しいかしら。――山百合でのあなたを見ていて、私はそう思えてならなかったわ」
バカにしていた……？　見下していた……？　私がみんなを……？
前も今もそんなことはあり得ない。むしろそれは逆だろう――そう思いながらも、唯依は事前処置されていることに安堵している自分に気付く。何かを誤魔化すように、唯依は上総に軟らかく微笑んだ。
「どうして、そう思ったのかな……」
上総は目を瞑り、うふふ、とどこか嬉しそうに含み笑った。

「……以前の私にそっくりだったからですわ」
「……えっ!?」
「蛇の道は蛇、とでもいうのかしら。無邪気すぎる同世代の言動に辟易としながら、距離をおいて生きてきた——あなたからはそういう臭いを嗅ぎ取れましたの」
ドクン——。
「そんな人に出会ったのは生まれて初めて。とても興味を持ちましたわ」
「……!?」
過日、コンビニで出会った上総は、あえて庶民的な氷菓を買っていた。今の言が本音だとするなら……あの行為は思い遣りなどではなく、完全に割り切った人心掌握術だったということになるが……。
ドクン——。
あの夏の日、ひとりラウンジで本を読む上総の姿が過ぎる。そして、事前処理がもたらす客観性のせいか、唯依は突然理解した。あれは、本当の意味で上総の安息だったのだということを。そして、その孤高を羨望した自身の心情と、敗北感の意味を——。
上総はクスっと笑う。
「でもあなたは、良い子ちゃんの仮面を被っていた」
ドクン——。

「そのせいで、不当な評価を被(こうむ)ってもずっと平気な顔をしていた。まるで、〝自分に原因があるなら、相手の理不尽はすべて受け容れる〟とでも言いたげな、愚かな美学に酔ってるみたいに」

ドクン——。

「——だから、私が助けてさしあげようと思いまいしたの。武を競い合うことでね」

どくん——。

「あなたがタオルを貸して下さったとき、同じだって確信しましたわ」

上総は何かを懐かしむように、天井を見上げる。

「だって、あんな時間に強化装備のまま校舎裏にいる理由なんて、限られてますもの。——特に、私達のような者にとっては」

講堂で、廊下で、教室で、演習で——あらゆる場所で見た、上総のビジョンがフラッシュバックする。

どくん——。

そうか……。そうだったのか——唯依は気付いた。上総が向けていたあの何とも言い様のない視線。あれは、唯依に対する憐憫……そして決意の眼差しだったのだ。

「私は、山城家に悪意を向ける多くの者達を見返すために、我が身を研ぎ澄ましてきたの」

同じだ――唯依は得心した。視界の端、上総が唯依の横顔を見詰めているのがわかる。
「私の家に纏わる噂話はご存知でしょう？　経済大名や成金などと揶揄され、山城の者は皆、必死で武を研きますの」
唯依は恐る恐る上総を見る。だがその目は、両手で持った紙コップに注がれていた。
「だから私も、中等部では全教科でトップ。皆に対して良い子ちゃんを演じきりましたわ。山城をバカにする者達に、山城より劣ることを身を以て思い知らせる――それが私の、いえ――」
ドクン――。
これは上総の話だ。自分ではない。上総の身の上話なんだ――唯依は心中で繰り返す。
「――山城に生まれた者が背負う復讐でしたの。私の兄たちも同じように、そうやって生きていましたわ」
「山城さん、お兄様が……？」
「ええ、ふたりとも斯衛の大陸派兵に志願し、戦死してしまいましたけれど……」
「え……!?　そうだったの……お気の毒に……」
上総は黙って首を振り、寂しそうに微笑んだ。
「その時、私は……ふたりの兄を失った時に、気付いてしまいましたわ。突然、はっきりと」

「え……？」
ドクン――唯依は胸騒ぎを覚える。これ以上は聞きたくない、不安にも似た気持ちが込み上がってくる。
「なに……を？」
「私、自分自身が戦う理由……何も持っていなかったってことに、気付いてしまいましたの」
「――ッ！」
ドクン――。ドクン――。鼓動が強くなる。
「身内の死という個人的な動機が出来て初めて気付くなんて、情けないにも程がありますわね……」
遠い目で微笑む上総。唯依は何も返せない。
「それ以来、良い子ちゃん仮面は棄てましたの。戦う理由を手に入れた私には、もう必要のないものでしたし」
「……そう、なんだ」
低く唸るディスペンサーのモーター音だけが、場を埋め尽くす。
唯依は動揺していた。出発点となる感情や動機が似ている上総が、もしそうだったというなら……。恋人をＢＥＴＡに殺された和泉に、何を言っていいかわからないのは―

―唯依自身が、戦うための個人的な動機を持たないからではないのか……。
「ごめんなさい。余計な身の上話に付き合わせてしまいましたわね」
山城は徐に茶を呷ると、伸びをした。
「う、ううん。なんか……気にしないで」
「……私も、事前処置に悪酔いしているのかしらね」
上総はそれ以上言葉を紡がずに、天井を見上げる。
唯依は床の汚れを見詰める。この作られた間が、自身に対する上総の問いのような気がしてならかった――さあ、あなたはどうかしら？
「私、は……」
上総は黙して唯依を見詰める。
「私は……そういう山城さん、やっぱりすごいなって思う」
ドクン――。
「素直に尊敬する。私が同じなんて……おこがましいよ。全然、似ても似つかないよ」
薄笑いする唯依を、上総は黙って見詰める。
「そんな大層なものじゃなくて、もっと薄っぺらいっていうか……。なんか凄く鈍感なのかも」
上総はただ、唯依を見詰めていた。そこにかつての鋭い視線はない。あの目を見なく

なったのは、いつぐらいからだっただろう——唯依は誤魔化すように茶を呷った。
　嘘という程のものではない。だが本音でもない。唯依が上総に応えたものは、つまりそういうものだった。自分でも良くわからない、という意味では正直なのだ。だが唯依は、上総の本音——そう思いたい——に触れ、とてつもなく不安になると同時に、初めて、同年代の理解者を得たような安心感を覚えていた。いつか上総にすべてを語れる日がくる。それまでには、自分自身の言葉を用意できる。そう信じさせてくれるに充分な想いを知ることができた。しかし、事前処置が無ければ、もっと激しく動揺し狼狽えていただろう。いやむしろ上総は、そういう状態だからこそ、打ち明け話をしてくれたのかもしれない。本当は、その想いに少しでも近付きたい——でも今はできない。そんな葛藤が巡る中、せめて心の距離が近付いた証が欲しい——唯依は上総への思い切った提案を決断した。いや、それすらも事前処置の成せる業だったのかも知れない。
「……ねえ、山城さん」
「……なにかしら」
「私達……あの……」
　言い淀む姿がおかしかったのか、上総はふっと鼻を鳴らす。唯依は意を決して上総の目を見詰めた。
「あの、私達、そろそろ名前で……呼び合わ、ない……？」

先程までとは別の意味で鼓動が早まる。たぶん、耳まで紅い。上総は一瞬目を丸くして、微笑みながら瞼を閉じる。

「そうね……。心を通わせたもの同士であれば、名前を呼び合うのも悪くないですわね……」

どくん――。

心を通わせた者同士――唯依にとって、それは甘美な言葉だった。そして気付く。山城が名で呼ぶ者がひとりもいないことに。そして、その最初のひとりが――唯依の心は躍る。

「でも、止めておきましょう」

ドクン――。

何も言葉が出なかった。舞い上がっていただけに落胆は大きい――処置がなければ、後先考えずこの場から立ち去ったであろう。だが、さすがに表情に出ていたのか、上総は困ったような笑いを浮かべて、

「まったく、自信家なのか、忘れっぽいのか……。私達初陣ですのよ？　そういう約束は縁起が悪いと相場が決まっていますわ」

どくん――。

「だから、今はやめておきましょう。でもいつか、そう呼び合える日がくるといいです

わね」
「山城さん……」
唯依はそう言って頷いた。そして、うれしかった。冷徹な上総が験(げん)を担ぐという意外性。その事実を知る者は差程多くあるまい。山城さんも怖いんだ——秘密の共有、弱さの開示。唯依は上総をより身近に感じることができた。今はそれで満足だった。
「やっぱり今日は、あなたも私も変ですわ。事前処置の影響、バカになりませんわね」
唯依はそれが話題転換のサインだとわかった。
「うん。訓練期間にやった処置検査だって実戦強度だったのに、こんな風にはならなかった。やっぱり、精神状態や状況の影響が大きいのかな」
「そうですわね。元々効果や影響に個人差が出やすい不安定な技術だから……」
上総は詰所の方向に目を遣って、軽く息を吐く。
「それにしても、能登さんのあの様子、心配ですわ。事前処置が悪い方に出ていなければいいけれど」
「うん……そうだね。色々あったばかりだからね」
もし、上総が和泉の小隊長だったらどうするのだろう。同じような境遇の者に、どんな言葉を掛けるのだろう——唯依は、その思考を頭から追い出す。今考えるべきではない。衛士のバイタルは、データリンクによって遠隔モニタリングされている。だから何

か異常があれば、部隊長に臨戦待機を解除されるはず。それを決めるのは唯依ではないのだ。
「……ごめんなさい、邪魔してしまいましたわね」
上総はそう言いながら紙コップを捻って潰し、リサイクルと書かれた穴に放り込む——
—切り上げの合図だ。
「ううん、そんなことないよ。こちらこそ、気を遣わせちゃってごめんなさい」
唯依は慌てて頭を振った。
じゃあ——と言って、上総は詰所に向かう。強化装備の靴底が、乾いた音を刻んで遠離って行った。
「——山城さん」
唯依の呼びかけに、出入り口間際で上総は足を止める。
「……ありがとう」
上総は軽く首を振る。そして、目だけで唯依を捉えながら、
どくん——。
「まだ一日目……長くなりそうですわね」
上総はそのまま出て行った。唯依は出入り口を見詰めたまま、遠離る靴音を聞いている。そして——。

《——人は、自分がそう思いたいようにしか理解しない。たとえどんな事実を見たとしてもね》
《——だから、ひとつひとつを考え過ぎたり、気にしすぎたりしなくていいんだ》
出際に上総が唯依に向けた視線。想い還した瞬間、再び巌谷の助言が過ぎった——。

同時刻　日本帝国　第二帝都・東京
首相官邸地下　危機管理センター

内閣官房長官である瀧元は、それを見た瞬間、血の気が引くのを感じた。連合艦隊司令を従えた国防大臣はその表情を変えず、自身が渡した書簡を見つめている。
「——ばかなっ！　このオプションはないと総理は言ったはずだっ！　なにを今更……!!」
思わず声が上ずる——要職にありながら人目も憚らず大声を出した。構いはしない。ここにはもう、そんな些事を気にする余裕のある者などいないのだから。

「派遣されている第七艦隊司令の個人的な配慮です。かねてから親交のあるこちらの八雲(やくも)長官宛に、内々に通達がありました。無論、本国の命を受けてのことでしょうが……」

連合艦隊司令は小さく頷いた。瀧元は記憶を辿る――現・第七艦隊司令……。なるほど、同じ米国人将官でも日系なら、こちらの構え方も変わるという目論見か。

「配慮……か。皮肉の間違いではないのか……」

瀧元の呟きに、国防大臣と艦隊司令は黙して応じた。

帝国と米国(アメリカ)が戦った前大戦に於いて、彼の地で迫害を受けた日本人移民と二世たち。二つの祖国を持ち、その狭間で苦しみ抜いた末の決断。同胞の名誉を回復し、米国への忠誠を証明するために欧州で流されたあまりに多くの血――第442連隊戦闘団〝名誉(パープル)戦傷勲章部隊(ハート・バタリオン)〟。そして今、その血を継ぐ者が〝同胞の未来のために〟、流血を伴う救済策を携えて先祖の国に還って来たのだ。

「未曾有の天災が重なったことは誠に悲運。ですがこうなった以上、現戦況を覆す手段を講じなければなりません」

国防大臣は官房長官を真っ直ぐ見据えながら続ける。

「光線(レーザー)属種以上の脅威は、押し寄せるＢＥＴＡの物量。このまま京都が陥落すれば、東海――いや、関東まで一気に押し込まれることになるでしょう」

天災によって麻痺し、ズタズタに引き裂かれた防衛体制。最前線の向こう――BETA支配地域に孤立し今も絶望的な抗戦を続ける多くの部隊。孤立部隊に対する決死の補給と兵站による消耗。どこかで体勢を立て直す時間を稼がなければならない、それは百も承知だ。だが――。

「朝鮮半島南端は既に重光線種の照射圏に呑み込まれ、候補地とはなり得ない。長官、北九州がそうなってからでは手の打ちようがありません。軍事的には勿論、国際政治的にも、です」

極東防衛の要を謳いながら、たった数日で国土の三分の一を明け渡し、軍事的混乱を続ける日本への失望。それは、海外諸国に限った話ではないだろう。国内世論もさることながら、与党内部にも公然と政府を非難する者達がいるのだ。だが、敵支配地域には、未だ多くの友軍部隊と逃げ遅れた国民が残っている。そして最前線では、多くの将兵が戦っているのだ。それを敵もろとも――。

「瀧元さん――総理を説得できるのは、あなたしかいない」

同期当選の盟友は、瀧元の視線を見て訴えかける。その目に宿る情熱は一年生議員となった当時のまま、一切の曇りはない。

「既に各国から日本の対応に非難が出始めている。オセアニア諸国が帯同するのも時間の問題。そうなれば――」

日本が単独の継戦能力を失うことになる――国土を失えば、日本が整備した海外インフラは諸外国の管理下に置かれ、日本以外の戦いのために使われるに違いない。
官房長官は奥歯を噛み締め、黙考した。
小倉――今時侵攻に於ける最大の上陸継続地点であり、九州と中国地方の侵攻分岐点。倉敷と尾道――四国への侵攻分岐点。戦況次第では鳴門も候補になる――。
「……わかった。やれるだけやってみよう」
瀧元は深く息をして言った。
「だが、総理は第三の道を決断する場合もある。その際は……宜しく頼みます、八雲長官」
「は、必ずや」
八雲の皺深く精悍な顔立ちが、更に鋭さを増す。
「たとえこの手でルーズベルトを沈めることになろうとも、必ずや核攻撃を阻止してご覧にいれます」
それもまた皮肉な話だ――前大戦より数十年。祖を同じくする盟友同士が矛を交える。
その状況を想うだけで、瀧元はうんざりした気分になった。

――数刻後
嵐山基地　衛士詰所

「――皆さんお聞きになって！」
詰所に走り込んできた上総の声には緊張のニュアンスが漲っている。日頃冷静な者のそれは、中隊全員に凶報を予感させた。上総に向けた強ばる表情が言葉の続きを促す。
「……敵の前衛が突出して、西ケ嶽付近まで迫っているそうですわ！」
「西ケ嶽だって……!?」
「目と鼻の先じゃない!?」
安芸には怒りが、志摩子には戸惑いが見える。それが見て取れるのは、感情の振れ幅が事前処置の制御対象外である証。だが、その状態が長く続く保証はなかった。上総は定時報告で如月中尉の元に出頭していた。つまり、もたらされた報は風聞の類ではないのだ。帝都絶対防衛圏の最外郭が最初に接敵してまだ数時間。即ち上総の報が意味するのは、この短時間で3つの防衛ラインが突破され、最良でも一部が綻(ほころ)んだということである。〝千丈の堤も蟻の一穴から〟の故事に依らずとも、その重大性は明白なのだ。
「……くっ！」

「――和泉っ⁉」
押し黙っていた和泉が詰所を走り出る。唯依は反射的にそれを追った。命じられているのは詰所待機――その行動は、小隊長としての責務か、それとも。
「――待って和泉ッ、どこに行くんだよ！」
「――和泉い！」
背後から安芸と志摩子の声――床を打つ靴底の音が声の数より多い。恐らく和泉を気に掛けていた上総だ。
「――和泉、待って！」
唯依は和泉の背に向けて叫ぶ。恋人が戦死して以来、憔悴し思い詰めている様子だった。上総が指摘した事前処置の〝悪酔い〟が出ている可能性もゼロではない。だとすれば今の和泉が極端な行動に出ないと、誰が断言できようか。
どくん――その時唯依は、頭から何かが染み出していくような感覚に襲われた。もつれそうになる脚にムチを入れ、そのまま追う。和泉は格納庫(ハンガー)を走り抜け、昇降口からテラスに走り出た。そしてその勢いのまま、倒れ込むように鉄柵に――テラスの地上高40m以上。如何に強化装備があれど、飛び降りれば生存は難しい。
「――和泉！」
追いついた唯依は背後から必死にしがみつく――だが、不思議な感覚だった。激しい

感情があるのは認識できるが、それを遠くから眺めているような空虚感。自身の表情がいたって平常なこともわかる。ああ、事前処置が作用したんだな、と唯依は淡々と理解した。

「……見て、唯依」

「……え？」

和泉は西を指さしていた。眼下に広がる漆黒——山間から続く山林と里山は何事もないかのように静寂と闇にどっぷり浸かっている。だが、その遥か向こう——地平線が、燃えていた。立ち上る黒煙は焔を照り返し、赤黒い壁のようだった。

和泉にその気がないと認識したからか、粘性の高い液体が染み込んでくるような不快感を伴い、感情と主観が一致し始める。と、同時に〝僅かな不安〟というパズルが、心の中で組み上げられていく感覚を経験した。

「なにあれ……。なんであんなに燃えてるんだよ……？」

「変だよ……。近すぎるよ……。最終防衛線はどうしたのよ……」

いつの間にか追いついていた志摩子と安芸が、燃える地平を見つめていた。恐らく自身もわかりきったことが、その口から止めどなくあふれ滴り落ちていた。

呆然（ぼうぜん）と見ている間にも、新たな破裂から焔と黒煙が生まれ出（い）で、赤黒い壁を分厚く上塗りし続けていた。

「あいつらが……来ているのよ……！」
和泉は微かに笑っている――声色からそう感じた。だが、唯依にその表情は見えない。和泉にしがみついたままだったことにようやく気付き、怖ず怖ずと腕を解いて一歩下がった。
「見てよ唯依……。忠道を殺したやつらがすぐそこまで来てる……！」
「……っ!!」
素人目に見ても〝綻んだ〟などというレベルではないことがわかった。〝敵前衛の突出〟という言葉は、その解釈の幅というベールで多くのものを覆い隠していた。データリンクへのアクセス制限……その理由は、まさか――。
「――おい、あれっ!?」
安芸が西の空を指し示す――赤黒い壁に逆光の漆黒と青白い瞬き。ひとつ、いやふたつか。データリンクがあればズーム映像で追えたはずだった。
「どうやら、戦術機のようですわね……補給……いえ、伝令かしら」
目を細めて鉄柵まで歩み出る上総――その指摘どおり、補給であれば最低でも小隊単位で行動するはずだ。だが、わざわざ伝令を出す状況は、戦域データリンクの障害以外あり得ない。唯依は視界の隅を見たが、部隊内通信と被バイタルモニターのステータスは正常だった。

「帝国の77式だ……。あれ、でも……なんか……？」
それは確かにF－4J撃震（げきしん）だった。最少戦闘単位（エレメント）を組み、基地にランディングアプローチしているのだ。だが、安芸と上総が訝かしむのも無理はなかった。お世辞にも匍匐飛行（NOE）とは言えない高度を不安定に上下している。そして、接近がそのディティールを露わにし始めると、和泉以外の全員が息を呑んだ。
「あれ……ぼろぼろじゃんか……」
重装甲を誇る第一世代機が、見るも無惨な姿を曝していた。機体各所が歪に波立ち、その右手腕が、左主脚が、肩部装甲ブロックが脱落している。地表を這う匍匐飛行（NOE）など出来ようもない状態だった。
眼下の着陸デッキ——照明が点灯する。不安を煽るようなサイレンが立ち鳴り、回転灯を明滅させた化学消防車輌が周辺に待機した。
「な、なんか、燃えてない……？」
損傷が酷い撃震の背面から何かが濛々（もうもう）と尾を引き始め、その根本はぶくぶくと泡立ちながらオレンジ色の輝きを増す。
「——緊急着陸よっ！　危ないから詰所に戻っ……‼」
落雷だと思った——近くに落ちたのだと。世界が白く瞬き、少し遅れて轟音が圧となって降ってきた。強化装備の感覚欺瞞がなければ、一瞬びくんと身体を揺すり、恥ずかし

い思いをしていただろうな――唯依はそう思った。
ドクン――。
「……え……っ!?」
ドクン――。
件の撃震は胸部ブロックが前に爆ぜ、綺麗なオレンジ色の筒状孔を呈している。そして、糸の切れた傀儡のようにそのままの姿勢で前のめりになり、高度を落としながら分解した。
「……レー……ザー……？」
誰かが何かを呟いた。そうだな、こわいなと思った。だが、その意味がよくわからなかった。
残った撃震がさらに不安定に空を彷徨う。至近照射された極超高出力レーザーが発するプラズマ奔流の衝撃で、更なる損傷を負ったのか。あるいは必死の回避なのか。背部から尾を引き始める対レーザー蒸散塗膜の蒸気――煮え立って赤熱する複合装甲――空が瞬く。
「あ……」
跳躍(ジャンプ)ユニットごと右下半身を失った撃震は、オレンジ色に輝きながら多軸錐揉み回転に陥り、破片や部品をまき散らしながら漆黒の植林に沈んだ。

落とした線香花火の牡丹みたい――唯依の心は恐怖を遠くに眺めながら、素直にそう思った。

「――ッ⁉」

即時戦闘態勢を告げる警戒警報が不吉なサイレンに取って代わる――網膜には、緊急出動（コンディション・レッド）の明滅。

『――中隊規模BETA群接近、西南西距離約1万4000、待機中の全衛士は出撃準備。繰り返す、中隊規模……』

ヘッドセットの耳元と館内スピーカーでディレイが掛かる。

ドクン――。

不意に、脳裏に言葉が過ぎる――。

《――いつからだろう。生者が死者の数を数えるのをやめたのは》

《――この世界は本当に滅びの道を歩んでいるのだろうか》

昔、どこかで知った言葉だ。冷戦期の作家だったはずだが、誰だったか思い出せない。

こんな時に、なぜ？

「――皆さん行きましょうッ！」

上総の号令に鞭打たれたかのように、その場の全員が一斉に走り出す——。
轟々と低く鳴り渡る音圧——基地所属の野戦砲部隊が面制圧を開始した。
回せ——中隊の全衛士が口々に叫びながら疾走する。唯依は譜代武家を現す山吹色の瑞鶴を目指して走った。
強化装備のブーツが整備パレットを打ち鳴らし、第三種待機補助装備を脱ぎ捨てる。
父、祐唯が手がけた戦術機が視界に迫る。
どくん——事前処置されていても高鳴る心臓。激しい感情が抑えられていなければ、感極まって落涙していたかも知れない。
「父様……母様……!!」
口に出さずには居られなかった。呼びかけずにはいられなかった——本物の斯衛になる時が、遂に来たのだから。視界を埋め尽くす山吹色の瑞鶴。その鎧武者を彷彿とさせる頭部モジュールに、第二帝都・東京で、帝国を救うべく新型機開発に粉骨砕身する父——そしてそれを傍で支える母の面影が過ぎる。
「これまでいただいたご恩に——唯依は必ず報います——!!」
自機の整備パレットに駆け込んだ唯依を、機体付き整備兵が追い立てる——。
「——篁少尉急げッ!!」
引き出された管制ユニット内のコックピットへ、するりと滑り込む——腰部と頸部の

固定ジョイントがバックレストの雌型ジョイントを噛む——網膜に着座接続を報せるダイアログが明滅——立ち上がるステータスウィンドウ。管制ユニットブロックが、ゆっくりと瑞鶴の胸部に引き込まれていく。

圧搾空気音と衝撃——コックピットの気密が完了すると、機体のモニターシステムと強化装備がリンクし、一気に全周の視界が開ける。視点はあくまでコックピットレベル。視界に干渉する機体各部はＣＧ処理で消されているため、まるで10数メートルの高さに据えられた管制シートに座っているかのようだ。

『——進軍速度が速すぎるっ⁉　前線部隊はなにやってんだ！』

『……後方の補給基地なのに……なんで⁉』

虚空に四角く切り取られた安芸と志摩子の表情が、事前処置に濾し取られた怒りと緊張でやや強ばる。

「ここはもう、最前線なのよ……！」

唯依は誰に返すでもなくそう呟いた——恐らくは自らへの戒めとして。

ざらざらと文字列が流れて起動完了——眠っていた複合材の巨人に推進触媒の血が巡る。

『——ファング1より全中隊に告ぐ』

網膜に如月の通信ウィンドウが立ち上がる。数秒の間——如月の網膜には中隊全員の

顔が並んでいるはずだ。恐らく、それを見渡しているのだろう。
　ふん、スッキリしたようだな——そう呟いた如月の瞳に、どこか哀れみの色が差している。それは、新任達の悲運に対してか、あるいは。
『——貴様達は実に幸運かつ効率的だ！　無駄飯も2食しか喰わず、一度の惰眠も貪らず、着任したその日に実戦を経験できるんだからな！』
　跳躍(ジャンプ)ユニットに火が入り、金属的な咆吼が斉唱となって格納庫(ハンガー)内に充満する。
『——今のところ即時撤退命令は出ていない——であるなら、持ち堪えれば戦線が維持される可能性が高いということだ！』
　そうだ、やるんだ——そうすることでしか恩は返せない。
『——斯衛の矜持、とくと見せつけろッ！　ＢＥＴＡにも帝国軍にもアメ公にも——ついでにマスコミどもにもだッ!!』
　微かに喜色を含んだ了解の唱和が、強化装備のレシーバーに轟く。
『——ようし！　だがその前に、まずは訓練どおりやってみせろッ！　武勲(ぶくん)を挙げるのはそれからだ——わかったかッ!?』
　再び了解の唱和。それを聞くと如月は敬礼し——貴様たちの健闘を期待する、といって通信を閉じた。
　ハンドサインで発進準備の完了を伝える機体付き整備兵。迫り上がっていく整備パ

レット――居並ぶ整備兵が直立不動の敬礼で唯依達を見送っている。相手に見えていないのは承知の上で唯依は答礼した。
「……行って参ります」
『――アラシヤマ・コントロールよりファング中隊各機、規定に従い発進位置へ』
「――こちらファング2。規定に従い発進位置まで前進」
がこん――復唱と同時に整備ガントリーの固定ボルトが解放され、ファング中隊の各機は発進順に自律制御で前進を開始した。
この状況に在って思考は一段と明晰だった。テラスで体験したあの呆けたような感覚は、事前処置の影響だったのだろう。決して気分の良いものではないが、レーザー照射による死が如何なるものかを目の当たりにしても、そのおかげで何の動揺もない。
譜代山吹を纏った父の戦術機に抱(いだ)かれ、唯依は深呼吸をした。
がつん――突き上げる衝撃と同時に前進停止。立ち上がるウィンドウ。カタパルト接続完了。機体はやや前傾して膝を折る発進姿勢へ。
『――アラシヤマ・コントロールよりファング中隊各機、発進を許可する――武運を』
跳躍(ジャンプ)ユニット主機の咆吼――金属音が更に高まる。
ドクン――。ドクン――。ドクン――。
心音にリンクした赤いシグナルが、明滅しながら下がっていく。そして――。

ドクン――。

青が灯る――右脚を踏み込みスロットル。

「――ファング2・篁――ブラストオフッ!!」

瞬間――轟音と共に迫る嵐山の戦場。跳躍(ジャンプ)ユニットの推力に背中を蹴られ、唯依は生存を賭けた初陣の地に舞い降りた。

数秒後　京都　嵐山基地前衛
亀岡戦域東端

遥か前方――赤黒い帳の手前に爆炎が次々と上がる。嵐山基地の砲兵部隊による面制圧だ。間隔をあけて照射されるレーザーの迎撃。それを無効化せんとする飽和攻撃。生存を賭けた綱引きが続く空の下、陣形を組んだ戦術機一個中隊12機は、水平噴射跳躍(ホライゾナルブースト)で自らの戦域を目指す。匍匐飛行(NOE)する機体の主脚直下では、排気後流が針葉樹林に航跡波を棚引かせていた。

唯依は2時方向に向けて敬礼をした――それがセンチメンタリズムだということはわかっている。今日一日だけでも数え切れない人々が生命を奪われているのだ。だが、そ

うせずにはいられなかった。戦って死ぬという冷酷な事実を、目の前で示した英霊に、頭を垂れずにはいられなかったのだ。

『――突出した中隊規模ＢＥＴＡ群は予測進路を進行中。総数約２２０。先頭は突撃級(デストロイヤー)。後続に要撃級(グラップラー)。光線級(レーザー)は最後尾だ』

レーザーに射貫かれる撃震が瞼に過ぎる――見ていてください。心中でそう呟き、戦域マップの熱量分布――その最も白に近い一帯を睨んだ。

『――いいか、基本に忠実にやれ。目玉野郎は真っ先に潰す。熱源センサーだけじゃない、気象データも重要だ。特に居場所を教えてくれる光線属種積乱雲(レーザークラウド)は絶対見逃すな。奴等は味方撃ちをしないからな――敵を盾にして肉薄し、擂りつぶしてやれ！』

了解の唱和――網膜に戦術マップが開き、部隊の布陣、展開がアイコンとアローラインで表示される。

『――隊形扇三型(フォーメーション・クァドラントスリー)。第三小隊は、光線級(レーザー)の漸減(ぜんげん)を優先。山城少尉ッ、砲撃支援(インパクト・ガード)の実力、証明して見せろッ!!』

『――ファング３了解！』

『――私の第一小隊はその直援。たかってくる小型種共を蹴散らす！』

戦域マップに表示された四分円状の三重陣――最外殻のラインが点滅。

『――第二小隊は前面に展開。大型種の掃討を主とし敵の死骸(しがい)で防壁を構築、適宜遊撃！

篁少尉ッ、突撃前衛長（ストームバンガード・ワン）の名に泥を塗るなよッ!?』
「――ファング２了解！」
『――後退する残存部隊と増援が防衛線を再構築するまでの辛抱だ。基地の支援砲撃に当たるな――末代の恥だぞッ！』
辛抱――その言葉に如月の本音が垣間見えた。いや、現実的にはそれすら分不相応。これまでに用いられた威勢の良い言い回しはすべてはったりでしかないのだ。
『よし――以降、各機兵器使用自由ッ!!』
「――了解!!」
網膜に並んだ如月と上総が折りたたまれて消える。虚空に被照射危険地帯警報が点滅――中隊は作戦に従い高度を落とし地表へと降り立った。
「――目標座標Ｗ‐２７１、第二小隊、続けッ!!」
『『――了解ッ！』』
唯依に続き志摩子、安芸、和泉が待ち伏せ座標まで進出し展開――布陣完了後、座標固定で待機。あらゆるセンサーを最大限に使って四方を睨みすえる。前方には嵐山基地の面制圧――爆炎が荒れ狂う。
とうとう来たんだ――唯依は今、本当の戦場に降り立ったのだ。視界の隅で忙（せわ）しなく時を刻む６桁の数字を嫌でも意識してしまう。まだ二分も経過していない。もう数十分

も待機しているような錯覚——。引き延ばされた主観感覚に焦れた唯依は、小隊の通信ウィンドウを視線で呼び出す。
　襟元をやたらといじる志摩子。そして、浅い呼吸を繰り返す安芸。
　暑いのか？　いや——と、唯依は一瞬で自身のそれを否定する。強化装備が体感温度調整している以上そのようなことはあり得ない。バイタルモニターはやや緊張状態を示すも、全員適正値内だった。事前処置で感情の起伏は押さえられていても、ストレスによる反復行動が出てしまっているということだろうか。だとすると、気がかりなのは和泉だった——何かを手に殆ど微動だにせず、虚空のウィンドウを睨んでいる。映像をズームして、唯依は息を呑んだ。
「あれ、は……!?」
　ロケットペンダントだった。戦死した恋人の写真を収めたものだ。斯衛の軍規——唯依はそれしか知らない——では、コックピット内に私物を持ち込むことはあらゆる理由から禁じられている。
「…………」
　唯依は通信で何かをいいかけ、それを飲み込んだ。和泉は厳罰も覚悟の上で、恋人の写真を持ち込んでいるに違いないのだ。死の8分。レーザー照射による戦死。斯衛の使命。何れも今この瞬間、新任衛士達に重くのし掛かっている現実だ。

だが、唯依には〝篁家の名誉〟という自身が戦う理由がある。それは上総の言う〝己が戦う私的理由〟ではないのかも知れない。だが、公に生きる唯依にとってそれは、何にも替えがたい揺るぎないものであった。もしそれが心になかったとしたら、事前処置だけでは持たないだろう。仮に生還しても、処置が解除された瞬間精神に変調を来す可能性が高いのだ。であるなら、今は何も言うまい。その者にとって己を鼓舞できるものであれば、公であれ私であれ、戦う理由など何でもいいのだ。内々に注意するにしろ、今やるべきではない。生還叶って基地に戻ってからでも十分なのだ。――と、その時。

――敵性移動体の接近を報せる警報が鳴った。音振センサーは11時方向から迫る震動源をトレースし続けていたが、それが数十秒後、有効射程内へ侵入すると報せているのだ。

波形照合――突撃級（デストロイヤー）12、要撃級（グラップラー）8。小型種計測外。瞬時にデータリンク共有。

唯依は視線で兵装選択、120㎜滑腔砲――砲弾選択、装弾筒付翼安定徹甲弾（APFSDS）。志摩子、安芸、和泉がデータリンクで唯依に倣う。立ち上がったトリガータイミングを報せる6桁の数字がカウントダウンを始める。

「――こちらファング2、攻性接敵（エンゲージオフェンシヴ）！」

『――ファング1了解。近接格闘は斯衛の本分ッ！　異星起源種どもを血祭りに上げろ!!』

了解——と、返して、唯依は虚空に並ぶ部下達を見た。志摩子が、安芸が、和泉が、硬い面持ちで頷く——互いに、見ていたのだ。

『——ファング8よりファング2』

安芸からのコールだった。通信ウィンドウにはぎこちない笑顔が貼り付いている。

『——いつものヤツ、たのむよ。あれ、私達の基本だからさ』

和泉が頷く。志摩子もぎこちなく微笑む。唯依も自然に微笑んでいた。そして大きく頷く——。

「——第二小隊ッ、おかっちませぇッ!!」

『『——かしこわあッ!!』』

腹の底から絞る声。如月のお咎め無し——基本であればさもありなん。

ぴぴぴっと予鈴——全員の顔が引きつる。

彼我(ひが)距離４０００——トリガータイミングゼロ。

「——ファング2、フォックス１ッ!!」

「——ファング5、フォックス１ッ!!」

「——ファング8、フォックス１ッ!!」

「——ファング11　フォックス１ッ!!」

一斉に火を噴く滑腔砲。唯依達の戦争が、今始まった。

主のいない住宅を次々と粉砕する突撃級(デストロイヤー)の後方——群れなす要撃級(グラップラー)めがけ、装弾筒付翼安定徹甲弾(APFSDS)の弾芯が飛翔。数瞬後、赤紫の分厚いベールが棚引く。超音速で激突する弾芯の凄まじい貫通力は、ＢＥＴＡ群に縦深的なダメージを与えた。

唯依達は最長射程兵装による攻撃符丁を口々にしながら、ありったけの砲弾を叩き込む。

「——突撃級(デストロイヤー)は構わないで！　引き付けるのよ!!」

『——そうそう、基本に忠実にね！』

唯依の指示に安芸が応じる——実戦を得た斯衛の矜持か緊張か、やや昂ぶっているようだ。

突撃級(デストロイヤー)——その鏃(やじり)を想わせる装甲殻を抜くには、１２０㎜でも1発では不可能。それだけに光線(レーザー)属種の照射を遅らせる遮蔽物にはもってこいなのだ。充分引き付けて弱点を突き、積み上げるに限る。

「——第二小隊装弾ッ!!」

『——第一小隊前へッ!!』

横間隔を広く取った一列目——第二小隊各機の隙間に、二列目の第一小隊が押し上げ、砲撃を開始。その間、第二小隊機は大腿部兵装コンテナに収容されている弾倉を装填。

予備が無くなれば戦域に散らばる補給コンテナが頼りだ。
動揺か焦りか、第一小隊の新任衛士が放った１２０㎜砲弾が逸れ、偶然突撃級（デストロイヤー）に命中、その装甲殻を1発で粉砕した。
『——ふん、どうやら基地の面制圧が機能しているようだな！』
如月の声色に微かな安堵が漂う。突撃級（デストロイヤー）の装甲殻が脆くなっている。それは、AL弾（対レーザー弾）によって作られた重金属雲が、光線属種（レーザー）の砲弾迎撃率を下げ、進撃するＢＥＴＡ群に効果的なダメージを与えている証拠だった。
『——だからといっていい気になるなよ！　あくまで基本を守れ！』
了解の唱和——吸い込まれる火線。異形の臓器と体液、そして瓦礫を巻き散らしながら迫るＢＥＴＡ群。唯依、装弾完了。ステータスチェック。
安芸、和泉、装弾完了——志摩子が遅れた。弾倉交換は副腕（サブアーム）による自律装填。だが——。
『——こちらファング5ッ！　ごめんなさいッ！　街路樹がっ——副腕（サブアーム）にっ‼』
「慌てないでファング5、大丈——ッ⁉」
警報——前衛の突撃級（デストロイヤー）が彼我距離４７０を切る——約十秒で激突。
『——ファッ、ファング5装填完——』
「——第二小隊装填完了ッ！」

志摩子の言葉を遮るように唯依――如月の号令で第一小隊が後退。視線で被照射危険地帯確認――クリア。

「――戦術高度50っ！　対突撃級（デストロイヤー）戦闘ォ――今ッ!!」

唯依の号令一閃、跳躍（ジャンプ）ユニットのロケットモーターが点火――瑞鶴が放物線を描いて突撃級（デストロイヤー）群を飛び越えて舞い上がる。装甲殻のない無防備な背部が曝された――。

『――はあああああ!!』

怒気を孕んだ和泉の叫び――36㎜砲弾が後部体節をズタズタに引き裂く。だが――。

『――うっうううううッ!!』

「――志摩子ッ!?」

志摩子機は地表に突っ立ち、両腕に突撃（デストロイヤー）砲二門構えで１２０㎜を連射し続けていた。砲火の明滅に合わせ闇に機体の白が瞬く――。先頭はなんとか連射で御（ぎょ）した。2体目――装甲殻を削るように砕きながらも致命傷は与えられない。

『――無駄弾を使うなバカ者ッ！　はやく跳べぇッ！』

『――うっうっううううっ……！！！』

如月の叱責は届かず、志摩子はトリガースイッチを押し込み続ける――残弾ゼロ。だが、トリガースイッチは押し込んだまま――小山のような生命体が最大時速１７０㎞で迫る。如月が舌打ち――。

『――あううッ!?』

呻きを洩らし志摩子が打たれたように引きつる。遠隔カウンターショック――如月の指揮官権限だ。

「――訓練を思い出して志摩子ッ!!」

『――突撃級（デストロイヤー）の弱点はッ!?』

唯依と安芸の絶叫――我に返った志摩子は身体に染みついた操作で噴射跳躍（ブーストジャンプ）。主脚先端すれすれのタイミングで通過する突撃級（デストロイヤー）――逆噴射制動から垂直軸反転（バーチカルターン）。押し続けるトリガー。プログラムが火器管制を自動転換。36㎜砲が劣化ウラン弾を吐き出す。

『――うわあああああああ!!』

突撃級（デストロイヤー）の後部体節に赤黒い孔が穿たれる――そして迸（ほとばし）る歪な臓器と体液。最前衛の数体が絶命し、前のめりに突っ伏す。後続の個体が次々に追突して横倒しになった。

志摩子の砲撃――突撃級（デストロイヤー）の後背節がちぎれる。だが尚も肉片と体液を引きずりながら、装甲殻と一対の主脚のみで這い進んでいく。

『――いっただきぃッ!!』

着地した安芸機が背後から轢断面に砲撃――第一小隊のライン約40m手前で絶命。

『――私っ――私は――足手まといなんかじゃないっ!!』

「――志摩子!?」

唯依は目の前の個体に36㎜を叩き込みながら志摩子のバイタルチェック――だがすべて正常値。
志摩子機は立て続けに垂直軸反転(バーチカルターン)を打ち、36㎜の撃ち下ろしで敵を薙(な)ぐ。
『――私はっ、お荷物なんかじゃないよねっ⁉』
「え……っ？」
志摩子の瑞鶴は独楽のように宙を舞い、更に敵を屠る――。
『――唯依のお荷物なんかじゃないよねえっ⁉』
「志摩子……⁉」
瞬間、その縋(すが)るような目に囚われる唯依――視界に何かが翻り、何かが鳴っている。
その正面に割って出る四角い如月――。
『――高度を下げろバカ者ォォッ！！！』
『え……』
ドクン――！
軸回転する志摩子機から乳白の煙が渦のように広がっていく。みるみる白く煙っていく視界の向こうに、輝くオレンジ色の輪が見えた。和泉が、安芸が、上総が、如月が、口々に何かを怒鳴っている――警報がうるさい。
ドクン――‼

志摩子の表情には何の感情もなかった。ただ、子供のようにきょとんとして、周囲を見回していた。

『……これ……なんだっ……け……？』

「――志摩子ォ、はや――ッ!?」

その時――世界のすべてが輝いた。轟音と閃光は即時フィルタリングされ――志摩子の瑞鶴だったものは、回して切ったリンゴの皮のように、だらしなく螺旋状に伸びながら四散した。

ドクン――――!!!

「――志摩子ぉッ!!」

安芸が名を呼ぶ。和泉は目を見開いて黙っている。

『――直接見て納得したかッ!?　寝ぼけてなきゃ初期照射受けてからでも充分回避できるッ！　戦友が残したものを無駄にするなよッ!?』

「――了解!!」

心に、悲しみと怒りが込み上がってくるのがわかる――他人事として。事前処置のリミッターが効いているのだ。だとすれば志摩子を失ったことは、私にとってそれほど悲しく辛いという証明だ――唯依は客観的にそう捉え、安堵した。

『――ファング9、照射源補足！　距離、約1万3000ッ!!』

ファング９が捕らえた光線（レーザー）属種に上総機がデータリンク照準――長距離狙撃用の支援突撃砲を構える。

『――第一第二小隊は全周警戒ッ！　ファング３に敵を近づけるな!?』

了解の唱和がレシーバーに響く――もう、11人分ではない。三機編成になった唯依の第二小隊は、各機の間隔をやや広めに取り、要撃級（グラップラー）を中心とした第二波に備え弾倉交換を行う。データリンクで上総のステータスを呼び出して共有する。

上総は長距離狙撃モードを選択。すると、戦術機の筋肉とも言える電磁伸縮炭素帯（カーボニック・アクチュエーター）が電圧で硬化――砲撃時の安定性を確保する。

別ウィンドウには照準画像――農道のような場所に、眼のような黒い照射皮膜を対で持つ光線級（レーザー）がいた。あれが志摩子を――心中の客観的な憤怒を唯依は眺める。

『――ファング３、フォックス１』

上総の瑞鶴が三点射――気象条件の変化など、データリンクによってリアルタイムで弾道修正を行う自律誘導砲弾が、約13㎞先に立つ３ｍの標的を粉砕した。唯依は想わす驚嘆する。

「すごい……！」

『――いちいち感心してる場合かバカ者ッ――来るぞ！　第三小隊は目ン玉（レーザー）狩りを続けろ！』

『——ファング3了解！』

唯依は戦域マップを呼び出す——有効射程圏まであと300。

◇

「——はぁ、はぁ、はぁ……っ！」

激しい呼吸がコックピットに残響する。暑い——石見安芸は強化装備によって調整された体感温度とは無関係にそう感じた。強化皮膜がぴったりと覆う胸が、大きく上下する。網膜に警告が閃く——。

「——要撃級（グラップラー）ッ!!」

散乱する骸を乗り越えて現れた数体の要撃級（グラップラー）に36㎜砲弾を叩き込む。

「——BETA群に於ける大型種の約6割を占めるッ!!」

安芸は教本の内容を叫びながら右手腕を長刀に換装——止（とど）めを刺すため、和泉機そして唯依機の3機連携で斬り込む。基本に忠実に——それがあの忌々しい統計数字を遠ざける唯一の方法。安芸はそう確信しているのだ。

志摩子を失いながらも、ファング中隊は敵の第一波である突撃級（デストロイヤー）をほぼ殲滅した。

今戦っているのは第三波。第一波の突撃級（デストロイヤー）に対する跳越背面攻撃後、着地するスペー

スを確保するために、初撃で仕留めておいた第二波要撃級の、更に後続集団であった。
「――二対の前腕衝角による打撃ッ！　近接攻撃範囲、最大直径39ｍッ!!」
正面からの攻撃は命取りである。敵集団を縫いながら〝食いしばった皺顔〟に見える感覚器尾節を斬撃――動きが鈍ったところに和泉機、唯依機の止め。
視界に唯依の通信ウィンドウが翻る。
『――三機連携よファング８っ！　２機じゃないことをもっと意識して!!』
「――了解っ!!」
だが安芸は、何かにせかされるように斬り込む――緑とも紫ともつかない体液に塗れた肉塊が、堆く積み上がっていく。
「――機動特性は二次元的ッ！　だがその驚異的な定常円旋回能力は警戒しなければならないッ!!」
警報が鳴る。積み上がった死骸の影――背後から忍び寄っていた個体が大きく振りかぶる。背部兵装担架が起動し、自律砲撃――要撃級は土下座するかのように大地に崩れる。更に続く後続――左腕と右背部の突撃砲が36㎜砲弾の自律砲撃――安芸は斬撃に集中。和泉の間合いに踏み込む前に砲撃。劣化ウラン弾に穿たれた無数の孔――爆ぜる感覚器官。ファング小隊の前衛３機は既に要撃級の体液塗れとなっていた――。

教本内容を叫びながら攻撃——視界の隅に瞬く６桁。
「——くそぉっ！　まだかよっ!!」
安芸が毒づくと同時に警報——四方から襲い来る要撃級（グラップラー）、その数５。コンビネーションで唯依機が先行——砲弾を浴びせる。
『——敵に引っ張られてるぞ第二小隊ッ！　——陣形の規定距離を忘れるなッ!!』
網膜の如月が怒鳴る——戦域マップを確認。孤立気味の第二小隊に合わせ、中隊全体が押し上げる形になっていた——。
「——くそおッ、基本から外れるッ!!　あとちょっとなのにッ!!」
何かに追い立てられる感覚が安芸にのし掛かる——だが感情はフラット。事前処置の許容範囲内。
唯依機に向け旋回する要撃級（グラップラー）に砲撃——偶然か意図してか前腕衝角を翳（かざ）して凌ぐ。
視線で兵装選択——。
「——前腕衝角は硬度ッ、靭性共に既存物質を凌駕しているッ!!」
上段の１２０㎜滑腔砲が——選択不能。
「——なにッ!?」
敵味方識別装置（ＩＦＦ）が威力超過による味方誤射回避のため選択をブロック——解除できるのは指揮官権限。

「――コンのおぉぉぉぉぉぉぉーーーッ!!」
雄叫びと共に押し込むトリガー。前腕が弾いた跳弾で、露出する体節表面を徐々に削がれながらも進み続ける要撃級。網膜の残弾表示をゼロが浸食していく。翻る警告。
「――ああッ!?」
36㎜残弾ゼロ。弾倉交換勧告ダイアログが明滅――今は無理だ。反射的にサイドステップ――背部兵装のアームが伸延、砲撃を開始――だが。
「――その驚異的な定常円旋回能力は――ッ!!」
要撃級は安芸機の軸移動に即応し距離を詰める――噴射地表面滑走で肉薄――。突如警報――警戒ダイアログ点滅。
「――うあああああッ！！？？」
衝撃と二軸スピン――和泉機と交戦中の個体と衝突し、機体は前転しながら30m進んで停止。
『――安芸ッ!?』
和泉と唯依のユニゾン――視界一杯に広がる要撃級のアオリ――高々と振り上げられる前腕衝角。
ドクン――。
「――ひ……ッ!?」

緊張と熱と恐怖と怒りが奔流となって吹き出す——それを客観視する思考。その時——。

ドクン——。

「——いい……ッ!?」

うめきが洩れる。網膜の視界一面に体液が降る——そこから現れる四角く切り取られた如月。

ドクン——。

『——1個体に固執するなッ——死ぬぞッ!!』

安芸機が転倒したことで射線が通り、如月の狙撃が要撃級(グラップラー)を粉砕したのだ。山吹色だった唯依機が至近に着地、カバーに入る。鉄の味を感じて安芸は舌打ち——くそっ、口の中を切ったか……!

『——いいかッ、殺すのは光線種(レーザー)だけッ！　他は無力化で充分なんだッ——いままで何習ってきやがったッ!!』

通信ウィンドウの如月は明らかに機動格闘戦中だった——隊長は戦闘機動中に気が散ってるな。まるで基本がなってないよ。

「——基本通りにやってるんだ！　弟(あいつ)だって——そうやって頑張ったのに!!」

鳴り続ける警報と消えないダイアログ——うるさいわかったよ、立ち上がればいいん

だろ。でもそんなのは自律制御がやる仕事だ。そんな基本も知らないのか⁉
安芸は視線で機体ステータスを確認しようとして——その視界の隅に目が止まる。
どくん——。
「——え……っ⁉」
思わず声が漏れ、カウンターに目を奪われる。
どくん——。
通信ウィンドウの隊長が何か怒鳴ってる。８人の了解も如月の通信も耳障りだ——邪魔しないで欲しいんだけど。
安芸はその表示をもう一度確認する。間違えないように。
どくん——。
カウンターの表示——作戦開始から９分以上経過していた。
「——やっ……た……！」
声にならない。心中で膨らんだ歓喜が破裂。痺れに似た安堵がさざ波のように広がる。
そっか、こういう気持ちは制限されないんだな——と、安芸は客観的に認識していた。
この地球の何れに在っても、衛士となる者に纏わり付く〝死の８分〟という名の死神。
安芸は今、その追い縋る血塗られた手を振り払ったのだ。そして戦域マップにＢＥＴＡを示す赤い光点（ブリップ）はもうほとんどない——。

「は……ははっ……」
喉の奥からかすれたような笑いが漏れ出る。止めようがない。
網膜に映る如月が怒鳴り、和泉と唯依が何かを叫んでいる。如月と和泉はさておき、穏やか・・・・・・・・・な表情で不安げに怒鳴る唯依の絵面は滑稽だった——なんだ、まだ気付いてないのか。やれやれ、これだから譜代のお嬢様は手間が掛かる。
どくん——。
「……やったよ……唯依」
無表情で小さく口を開く唯依——たぶん〝えっ⁉〟って言ったんだな。
どくん——。
再び急かす唯依の滑稽な絵面。漏れ出る笑いが止まらない——これ、教えてやったら驚くだろうな。
「——やったんだよ！　私達、『死の８分』を乗り越えたんだっ‼」
唯依は、音量も声色も完全に制御された叫びをあげた。自身の声が管制ユニットに内に反響する。
「——早くして安芸ッ‼　何やってるの早くッ‼」
『——何やってるファング２ッ⁉　負傷者の回収は後だバカ者ッ‼』

唯依は網膜の如月を無視してコールを続ける。うっすらと怒気を秘めた表情の和泉が、・・・・・・その冷静な叫びを重ねている。

『……やったよ……唯依』

ドクン――。

「――え……っ⁉」

ドクン――。

プクプクと湧き出る紅い泡と微かな笑い声。無表情で見開いた目は紅い網目模様。

『――やったんだよ！　私達、〝死の８分〟を乗り越えたんだっ‼』

ドクン――。

「――早く！　緊急脱出（ベイルアウト）して安芸‼」

心中に渦巻く様々な種類の激情――だが、口から迸るのは事前処置に濾過された強めの呼びかけ。それを客観視する唯依の認識は、か細く泡立つ言葉を捉えた。

『私は……やったんだ……これでやっと……弟（あいつ）の……』

赤黒い塊混じりの何かが、絞り出した声で口から押し出される。

ドクン――。

それが石見安芸が最期に紡いだ言葉だった。バイタルフラット――視線で確認するＫＡＩ（戦死）ダイアログ。

上半身だけになった安芸の瑞鶴——胸部ブロックの右脇に穿たれた孔を一瞥し、唯依はスロットルを踏み込んで解放。和泉機と戦闘最小単位（エレメント）を再編した。

◇

真っ黒な照射皮膜の奥に青白い燐光が瞬く——。

「——お生憎さま」

山城上総はトリガースイッチを押し込む——網膜ウィンドウの光線級（レーザー）は赤紫の霧となって爆散する。だが、上総の視線はそれを捉えていない。脅威度の高い次の標的を追って、データリンク照準ウィンドウの虚空表面を滑っている。戦術ポジション・砲撃支援（インパクトガード・ワン）長を任される天賦の才が迸る。

彼我距離1万4000に光線級（レーザー）が2。どちらも対空迎撃姿勢——トリガー。爆散——トリガー。爆散——視線は再び滑る。

光線（レーザー）属種の脅威認定優先度は、自身に向かってくる飛翔体が最も高い。BETA大戦の黎明期、爆撃機を大量運用した中国軍との戦いで学習したという説が有力だ。それ故、重金属雲環境下での間接飽和攻撃は光線属種狩（レーザー・ハント）りには非常に有効なのだ。その間、光線（レーザー）級はすべて空を見上げ、重金属雲の照射出力減衰効果によって、儘（まま）ならない対空迎撃に

長い時間を費やす。あとは縁日の射的が如し。上総は心で感謝を捧げる――AL弾（対レーザー）という発明が無ければ、人類はとっくの昔に絶滅していただろう。

「――させませんわ」

第一小隊のファング7と10を囲む要撃級（グラップラー）に照星（レティクル）――トリガー。撃破――トリガー。無力化――上総は舌打ち。無力化個体に再度トリガー。撃破――トリガー。中破――ファング7の斬撃、撃破――装甲特級射手（グランドマスター）の瞳は次の獲物を求める。

上総は既に部下を一名失っていた。実機教程で上総に次ぐ装甲一級射手（シャープシューター）の称号を得た優秀な衛士だった。基礎訓練の時から上総の戦術を良く理解し、どのような難問であろうが黙々と取り組み、最後までやり遂げようとする真面目な少女だった。

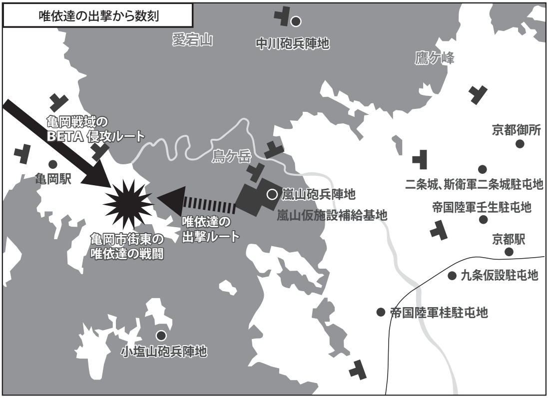
目標補足――トリガー。撃破――彷徨う瞳。

だが、その少女の優れた技能と木訥とした従順が自らを殺した。3機となった第二小隊をカバーするため押し上げた陣形。第二小隊が展開していた戦域での中隊支援砲撃。瞬く間に積み上がるスコア。潜在不安に抗するために肥大する自信。8という数字を目指して時を刻むカウンター。そして少女は、任務に忠実であるが故に見落とした。殆ど大破して擱坐する要撃級（グラップラー）を。それは昆虫のような反射行動だったのかも知れない。死んだと思われた個体は、砲撃ポジション確保のために近付いたファング6に打撃を加え、そのまま絶命した。その前腕衝角は胸部ブロックを両側から押しつぶしていた。歪んで

裂けた装甲の隙間から、幾条もの赤黒い筋が純白の装甲を伝って地に滴った。バイタルラインは既にフラット——死と呼ぶにはあまりに呆気なく、間が抜けていた。

　戦場で死は平等だ。部下とはいえ同じ階級、同じ経験しか持たない衛士の死に、立場上の責任しか感じない。上総の気がかりはもっと別なところにある。中隊の戦死者が出る度に、それが繰り返し思い浮かぶ。

　本当は如何なるものだったのか——明晰な思考に混ざるノイズ。目の当たりにする初陣衛士の死。その無意味で憐れな実態が、勇ましく感動的に伝えられた兄達の死に様を曇らせる。ＢＥＴＡ相手の戦場に於いて、勇猛果敢で自己犠牲的な死などあり得るのだろうか。己の戦務動機を揺るがしかねないそのノイズを、上総はただひたすら客観視する。最



山岳・森林地帯

※ MAP 解説は P.410 へ

早、振り払うことは諦めていた。

目標補足――トリガー。トリガー。トリガー。

上総は認識していた。自分に今できる対処は、そのノイズを標的に重ね、射貫き続けることだけ、と。

戦域マップに残る最後の敵性光点（ブリップ）――トリガー。

『――ファング1より中隊各機ッ！　敵第三波の掃討完了ッ――後方３０００、野戦補給場まで後退するぞッ!!』

眼前の虚空に如月の睨顔（げいがん）が翻った――。

数分後　亀岡戦域東端　嵐山基地近傍

野戦仮設補給場

「――では城内省本営はッ……あくまでここを死守せよとッ!?」

如月佳織は、網膜に浮かぶ京都防衛司令本陣のＣＰ将校（コマンドポストオフィサー）を睨み付けた。

『各防衛線は分断されながらも、亀岡に於ける侵攻勢力の漸減は未だ遂行されている。

従ってその最後衛たる貴隊は、帝都外郭高地からの支援砲撃が継続している限り、嵐山

当該戦域の支配を維持されたし』
　抗命こそ斯衛の名折れ——されど、仕儀の傍証なれば其にあたらず。如月は鼻から深く息を吸い、ゆっくり吐き出す。通信が秘匿回線であることを再確認した。
「ならば、幾ばくかの戦術機甲戦力を手配いただきたい。既に一個小隊を失い、残るは学徒兵ばかり。此度持ち堪えたのは奇蹟に他なりません」
　斯衛軍のＣＰ将校(コマンドポストオフィサー)は何の表情も変えず言い放つ。
『それは奇蹟に非ず。亀岡戦域は山間部故に火力集中が容易であり、侵攻阻止が比較的有効に機能している。加えて、貴隊が預かる東端戦域には、嵐山砲撃陣地の専有的な支援がある。これだけでも懇篤(こんとく)の遇(ぐう)と知れ』
「それは重々承知の上！　されど実際の彼我戦力差は比較論では片付きません——目的が帝都外郭高地の堅持ならば、せめて前線戦力の再編、あるいは——」
『——くどい！　それ以上は抗命と見なす！　他所から回せる戦力など一機たりとない‼』
　この外様風情が——コンソールを叩きそうになる拳を、握りしめて堪える。対ＢＥＴＡ戦に於いては支援砲撃が命綱。その前衛を死守という理屈は至極真っ当。如月とてそこに異論はない。掛け替えのない京都を——日本の首都たる千年の都を護れるのであれば喜んで生命をも差し出す。其れこそ武門の誉れ——如月家の負う責務なのだ。だが、

進んで犬死にする気など毛頭無い。重要であるというなら応分の施策というものがある。作戦司令本陣にせよ城内省本営にせよ、本気で京都を護る気があるとは到底思えないのだ。
「一木(いちぼく)を以(も)って大廈(たいか)の崩(くず)るるを支(ささ)うる能(あた)わず――ならば、親藩武家たる如月の端くれとして問うッ！」
　ＣＰ将校(コマンドポストオフィサー)の顔色が明らかに変わる。
「戦略レベル情報へのアクセス制限が、部隊指揮官にまで及ぶのは何故(なにゆえ)かッ!?　死守の令を下しておきながら斯様な――」
『――いけないな、如月中尉。その方途(ほうと)……雅(みやび)やかではない』
「――!?」
　網膜投影に翻る新たな秘匿回線ウィンドウ――如月は思わず息を呑む。
『格在る者、徒(いたずら)に位(い)を翳(かざ)すべからず――であるぞ。ひとつ違(たが)えば一門に累を及ぼす羽目になろう』
　その青年の切れ長の目が、如月を慈しむように見詰める。穏やかな口調はまるで和歌を吟(ぎん)じているかのようだ。
「いっ、斑鳩少佐……!?」
　御身(おんみ)の干渉こそ正に位を翳すに等しいだろうに――そのあまりにも場違いな青年の介

入に、如月は面食らった。斑鳩崇継（たかつぐ）——纏う強化装備は高貴の蒼。それは政威大将軍を輩出する五摂家の証。

貴官は下がってよい——斑鳩の命に応じ、ＣＰ将校（コマンドポストオフィサー）の通信ウィンドウが消える。

『山間（やまあい）は敵の進行速度（あし）が鈍る。レーザー遮蔽も良好……言わば天然の要害。故に、帝都外郭に列（つら）なる砲陣が配されておる』

「は、如何にもにございます」

『して、貴官も存じていようが、今、舞鶴―帝都―大阪を結ぶ防衛線は第一、第二共に綻び、最終防衛線も既に異形の浸潤を許しておる』

わかりきったことを——如月は焦れる。悠然と見下ろす斑鳩少佐は、まるでその様子を楽しんでいるかのようだった。

『——では、これを』

言葉と同時に浮かぶ広域マップ。そこには、中国地方東端から京都、大阪を含む防衛線展開図が表されていた。

「——なッ……これはいったい……ッ!?」

如月は衝撃に耐えかね、思わず言葉を洩らした。

『……貴官が見たがっていたものだよ』

斑鳩少佐の口元の薄笑いが僅かに鈍る。それまでの公的な言葉遣いは突然鳴りを潜め、

砕けた口調となっていた。まるで秘密の共有による距離の接近を演出するかのように。
ＢＥＴＡ侵攻の主力を示す太い赫ラインが二本――綾部から亀岡に延びる第一群。そして明石から寝屋川に延びる第二群。加えて、無数の細い矢印が、最終防衛線全域に突き立てられている。第二群に対する砲撃ラインが播磨灘と淡路から明石に伸びる。大阪湾と岩出、橋本、大和郡山、長岡京からは大阪府一帯に。第一軍に対しては、京都西部の山間部一帯から亀岡、南丹、豊能、高槻の山岳部全域に延びていた。
「――大阪が……既に……ッ!?　ばかなッ――何故このような重大な情報が隠匿さ――」
『――そう、統帥としてはまともじゃない。公式には〝想定を超える重金属雲による原因不明の障害〟ということらしい。大戦初期でもあるまいに……』
斑鳩少佐の苦笑。如月は絶句し、増援なき死守命令の理由を理解した。そして、その視線は一点に釘付けとなった。強化装備の体温調整をあざ笑うかのように、背にはべっとりと汗がへばりつく。これは――。
『さすがだね如月中尉――ご明察だ』
如月の心の声が聞こえたかのように、斑鳩少佐は応える。戦域マップのポインターが輪を描くと、亀岡の南東――京都を囲う丹波高地南端と、大阪と奈良を隔てる生駒山地北端に挟まれた地域が拡大される。京都市街まで続く淀川流域の平野、帝都の南門・八

※ MAP 解説は P.411 へ

幡市。そして、そこに隣接する高槻、寝屋川こそが現在の最前線だった。
「……八幡が堕ちれば……帝都は……ッ!?」
平野続きの丸裸同然。思考はあらゆるネガを拾い、動揺する。こんなことであれば事前処置を受けておくべきだった。であれば、この状況さえ客観視できただろうに。如月はゴクリと喉を鳴らす。
なるほど、八幡の突破を阻止するには、地峡を挟んだ高地からの支援砲撃は必須。その一翼、北に位置する釈迦岳から島本一帯の砲撃陣地を防衛するために、西の山岳一帯を面制圧しているのが、嵐山基地の砲撃陣地なのだ。
『――ただね、この状況の裏には帝都防衛以外にもうひとつ、厄介な話がある』
如月は身構える。斑鳩少佐の表情、声色は何も変わっていない。逆にそれが恐ろしかったのだ。
『八幡が堕ちたその瞬間――在日米軍は即時、戦術核を使うそうだよ』
「――せ、戦術核……ッ!?」
『そう。八幡が突破されれば、山科水道から琵琶湖が丸見えだ。つまり、展開中の第七艦隊空母戦術機動部隊が、光線(レーザー)属種の的になるということだね』
瞬間的に湧きあがる憤怒が充満していた驚愕を霧散させる。空母一隻の安全を確保するために……日本帝国の首都、千年の都を核で焼き払い、半永久的な汚染地帯にするな

ど言語道断。如月は内圧の高まりで小刻みに震えた。

「そのような暴挙が、誠に——」

『——元より在日米軍（かれら）はそのつもりだよ。小倉、倉敷など数カ所が標的、敵の後続を寸断するためだそうだ。その手間が少し増えるだけの話なのだろう』

　腐っても軍人——合理をすべてに優先すれば是であることは理解できる。人のみが只そこに在ればいい。今のみに生きればいい。そのような生き様であれば受け容れられもしよう。だが、如月にはそれができなかった。古代から連綿と列なる事象——それらすべてが顕在化したものが今という瞬間であり、己という存在なのだ。その象徴たる帝都を核で汚される屈辱と喪失感。如月はそれを想像するだけで目眩を覚える。

　そして納得した。この戦略情報が隠匿されている理由を。もし公になれば、極限状況にある志気の高い者達が逆上し、在日米軍を攻撃しかねない。加えて、志願兵の比率が極端に下がった帝国軍に在っては、任務放棄も続出しかねないからだ。それらは完全に如月の想像でしかなかったが、己を納得させるにはそれで充分だった。いや、真の理由を質す気などない。知らされない情報を詮索することで負う身の丈にあわない責任——そんなものにはもう、これ以上耐えられそうになかった。

『これでわかったろう。貴官は学徒兵を率いる術に長け、機動防衛に有能であるが故に、嵐山を託されていると』

「は、勿体なきお言葉です、斑鳩少佐」
斑鳩は優雅に頷き、その声色に微かな感傷の色を添えた。
『いま内閣では、その最悪の事態を回避するための策を協議している。我等斯衛にできるのは時間を作ることだけだ』
「斑鳩少佐……！」
とある男の顔が脳裏に過ぎり、如月は歯を食いしばる。内閣総理大臣・榊是親(さかきこれちか)――帝国をこの窮状に導いた諸悪の根源。国賊にも等しい売国政策を続ける男。そのような者が率いる内閣に、いったい何ができようか。
『それが法治であり民主政治というものだよ中尉。将軍殿下も堪えておいでだ。故に、今少し耐えて見せて欲しい』
「は。肝に銘じましてございます」
斑鳩は瞼を閉じて深く頷く。
『間もなく私も出陣する。いずれ戦場で相まみえることもあろう――』
通信を終えた如月は敬礼を解き、脱力したかのようにバックレストに身を預けた。封印されていた戦況、その受け容れがたい現実に狼狽する精神が、逃避先として憎悪の対象を欲したのだろうか。怒りは一向に収まらない。

「――何が内閣か……ッ！　陛下の国事総代は将軍殿下ぞ……‼」
悔しさのあまり声が漏れる。前大戦の敗戦により、皇帝の国事全権代行である政威大将軍の実権は形骸化され、名誉職に貶められていた。法治が聞いて呆れる。これも連綿と列なる仕儀の果てとはいえ、噛み締める奥歯に更に力がこもる。
「だからこそ……この戦、勝たねばならないというのに……」
如月はヘッドレストに頭を押し付けたまま視線を巡らせる。イミテーションの視野に横たわるのは、斯衛軍ＣＰ将校（コマンドポストオフィサー）に〝懇篤（こんとく）の遇（ぐう）〟と称された戦場。
大地から昇る稲妻の如き光線（レーザー）属種のプラズマ光――。
垂れ込めた雲の天蓋を支える赤黒い壁――。
大地を覆う夥しいＢＥＴＡの骸――。
予めばらまかれていた数台の補給コンテナ――。
全周警戒する第一、第二小隊機――。
弾薬補充と兵装交換を行う第二小隊の２機――。
《――貴官は学徒兵を率いる術に長け、機動防衛に有能であるが故に、嵐山を託されていると》

補給行動を続ける部下に、斑鳩少佐の言葉が重なる。
「……やはり、事前処置は受けておくべきだったな」
如月は深いため息をついて目を瞑る。そして、部下達への想いを呟いた。
「……気の毒だがおまえ達も斯衛。覚悟は既に出来ていよう」

数刻後　京都　嵐山基地前衛
亀岡戦域東端

《――ＢＥＴＡ最大の脅威は光線属種に非ず、その物量なり》
唯依達ファング中隊の新任衛士達は、教本にあったその言葉を改めて実感していた。
最終防衛線を最初に突破した中隊規模群を殲滅して以降、同規模以上の浸透が絶え間なく続いている。バカのひとつ覚えのように延々繰り返される物量突撃。初陣とは言え、新任達の対処もさすがに効率化する。だが、いつ終わるとも知れない単純作業は、如何に生死を懸けているとはいえ脳生理学的な隙を生じさせる。そして、その僅かな隙を物量は絶対に許さない。思い出した頃にあっけなく無残に戦死する同期生。そして強いられる弛緩からの急激な緊張――延々と繰り返される反復物量戦術の脅威。それは、物理

的状況だけを指すものではなかったのだ。
〝慣れ〟という脅威に対抗するため、強化装備に備わっている圧力注射が遠隔操作によって幾度となく動作し、栄養剤と覚醒効果のある非常習性薬品を少女達の体内に注ぎ込む。時としてそれは、特定の感情を抑制するための脳内物質の場合もあった。それらは恐怖や退屈、そして死から少女達を護るための施策だっだ。広域データリンクや通信の部隊内制限もまた、一側面に於いては同様の処置なのだ。衛星と地上波を介して瞬時に拡散、共有される戦術情報は戦争に大革命を起こした。だがそれは、望まないものまでも等しく広めてしまう諸刃の剣だった。擱坐した機体に閉じ込められ、徐々に追い詰められていく者の嗚咽と錯乱。生きながらＢＥＴＡに捕食される者の見聞きする一部始終。壊滅する前線部隊が直面する凄惨な過程。戦略的視点が欠落する者が得てしまう、凄惨で過酷な事実——そして生み出される上層部不信。そのような不都合な真実の伝播速度は、驚異的であり決定的であり致命的でもある。ＢＥＴＡ大戦黎明期、徴兵戦力を主とする部隊の多くが、敵に一発も撃つことなくデータリンクによって壊滅したケースが後を絶たなかった。薬物処置、後催眠暗示、情報制限、その他——衛士に施されるすべては、数十年に渡る対ＢＥＴＡ戦の戦訓から抽出された〝人道的措置〟なのだ。
誰かが『ふるさと』を歌っている——唯依は幻聴を疑っていたそれに音律を捉え、よ

うやく認識に集約させた。

兎（うさぎ）追いしかの山
小鮒（こぶな）釣りしかの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき故郷（ふるさと）

視界いっぱいに広がる異形の臓物と肉片。そして赤紫の体液。曳光弾と光線（レーザー）属種の迎撃光。体液に濡れ斑（まだら）に艶めく複合素材の巨人達が、死をまき散らしながら征く。行進曲はオープン回線に重なっていく、少女達のか細い歌。

如何（いか）にいます父母（ちちはは）
恙（つつが）なしや友（とも）がき
雨に風につけても
思い出（い）ずる故郷（ふるさと）

殆どの者が殺しながら歌っていた。いつの間にか、唯依も口ずさんでいた。如月中尉

のお咎めはない。だったら構わないだろう。撃って吹き飛ばし、蹴って踏みつぶし、掴んで引き摺り出し、叩き切って穿(ほじく)る。なんだかとてもリズミカルだ。

　志(こころざし)をはたして
　いつの日にか帰らん
　山はあおき故郷(ふるさと)
　水は清き故郷(ふるさと)

そう言えば子供の頃、うさぎが美味しいのかと思ってたっけ——92式多目的追加装甲のスパイクで、要撃級(グラップラー)の脇腹から松果状の大きな臓器を抉り出しながら、唯依は己の過去を客観的に懐かしんだ。

◇

「——この物量……！　八幡はっ……未だ健在なのか……ッ!?」
もんどり打って倒れる要撃級(グラップラー)に重なる戦域マップを一瞥し、如月は独りごちた。広域情報は未だ更新されずエラーダイアログが翻っている。

CP将校（コマンドポストオフィサー）の言葉が耳に甦る。
《――亀岡戦域は山間部故に火力集中が容易であり、侵攻阻止が比較的有効に機能している》
だとするなら、この頻発する中規模浸透は最終防衛線の完全な分断、あるいはBETAの物量が面制圧に勝（まさ）っているということに他ならない。如月にはそれが、この戦域だけに発生している現象だとは到底思えなかった。仮に支援砲撃の飽和性が弱まっているのだとしても、導き出される結論は同じだった。
「――忌々しい無能共めッ！　学級会はまだ終わらんのか……!!」
如月は内閣に対する苛立ちに抗えず、吐き捨てた。聞こえたとしても、今の部下達にはどうせ何もわかるまい。
「絶対に死守しなければならないのだ！　何としても……!!」
最後の砲弾を撃ち尽くす――噴射定常旋回（ブーストターン）の勢いで突撃砲を投げつけ更に半回転。弾いた前腕衝角の脇に長刀を叩き込む。
『――アラシヤマCP（コマンドポスト）よりファングリード』
「――こちらファングリードッ！」

視界にポップアップする通信ウィンドウ——機動格闘戦を続けながら応じる。
『——現個体群の殲滅を以て前衛戦域を放棄、基地の直援にあたられたし』
「——いったい何があったアラシヤマC P（コマンドポスト）!?」
『——現在、北西山間部より旅団規模小型種群が浸透。愛宕砲撃陣地の警備部隊と交戦中。防衛線は堅持しつつも敵個体数尚も増大。警戒を要す』
如月は心中で舌打ち——観測班は何をやってたんだ!?
「——ファングリード了解ッ！」
震動と音紋でBETAを探知・特定する音振センサーだが、これだけ大規模な戦闘が一帯で行われている場合、小型種の捕捉はほぼ不可能となる。通常の侵攻であってもそれは困難であり、BETAの規模推定も基本的には大型種で算定されている。小型種の割合は統計的な推測値を付加しているに過ぎないのだ。小型種のみの侵攻であればそれらは可能だが、山間部は地盤や地形の他、植生地下茎の影響もあり、探知そのものが困難になる。
今度は本当に舌打ちして、視界に散らばるウィンドウを目でひと撫でする。
「……何れにせよ潮時か」
敵の残存個体は2——だが既にファング中隊はその半数を失い、戦域に散在する補給物資もあと少しで喰い尽くす。堆（うずたか）く聳（そび）える屍骸の山は、遮蔽の利よりも格闘機動の害が

勝り始めている。第三小隊が1体仕留めた——残敵1。

丹波高地南東部——京都盆地外郭に点在する砲撃陣地は今や帝都の命綱。最悪でも嵐山の砲撃陣地が残れば、八幡への支援砲撃は継続できる。

楽しいお遊戯の時間はお終いだ——如月はそう呟き、後催眠暗示の解除コマンドを視線で起動。解除キーとなる四行詩が部隊内通信網に放たれ、オープン回線に流れる『ふるさと』の合唱が機械のようにぴたりと止む。

後催眠暗示の経験の浅い僚機が一瞬動きを止める。隙在りと殴りかかる要撃級（グラップラー）を袈裟斬りにしながら、如月は命じた。

「——ファング1より中隊各機に告ぐ！　全周警戒にて傾注!!」

◇

唯依の網膜に、如月の通信ウィンドウが開く——戦域マップに輝いていた最後の敵性光点（ブリップ）が消える。

『——現時刻を以て前衛戦域を放棄。嵐山基地の直援に向かう』

亀岡駅が起点となっていた戦域マップが東南東に滑り、愛宕山東斜面の砲撃陣地が点滅。北西の山岳部から無数に延びる赤い矢印。帝国陸軍の機械化装甲歩兵二個大隊と軽

装機動車輌二個中隊の部隊マーカーが陣地アイコンの周囲に現れ、矢印を堰き止める。
『丹波高地西部一帯に敵小型種が浸透。現在愛宕陣地は散発侵攻を受けている。我が隊は愛宕、烏が岳間の稜線に防衛ラインを構築、斜面を活かした陣地防御、及び高地砲撃による亀岡戦域敵勢力の漸減、と同時に小型種の排除を行う』
愛宕砲撃陣地の南東、烏が岳・南斜面に位置する嵐山基地が明滅する。その中間に引かれた防衛線に、機械化装甲歩兵二個中隊のマーカーが並ぶ。その後方、基地の周囲には軽装機動車輌二個中隊。画面が西へ滑り、現座標に戻る。点滅する中隊マーカーから部隊移動ラインが東微南に延び、国道9号に沿って烏が岳を迂回、御陵北大枝山町から基地前衛の展開指定座標に至る。
『経路は見ての通りだ。光線属種のリスクを考慮し、高地を盾に裏から這い登る。従って移動は噴射地表面滑走が基本だ』
山岳地帯はBETA大型種の移動が鈍る。それ故に機動性の高い小型種の浸透が先行するのだ。斜面や森林が多い山岳部で戦車や装甲車は殆ど役に立たない。対する陸戦警備部隊は3m弱の強化外骨格——機械化装甲歩兵を以て迎え撃つ。〝着る戦車〟あるいは、戦術機に掛けて〝戦術歩行戦闘着〟とも呼ばれる歩兵装備であり、個人による重火器の運用、戦車級を凌駕する格闘戦能力と耐久性、跳躍ユニットを活かした高い機動性など、戦術機に次ぐ対BETA正面装備として拠点防衛や市街戦に投入されている。

『突撃級(デストロイヤー)の侵攻が絶え、支援砲撃による光線(レーザー)属種の照射誘引が機能している今、この掃き溜めに止まる理由はない。我々の移動後は基地からの敷設弾で地雷がばらまかれるので注意しろ。――第一小隊が先行する――以上ッ！』

続け――の号令と共に畳まれて消える如月。今や半数となった中隊は、3機編成の二個小隊に再編されていた。敵小型種の迂回潜伏を警戒しての第一小隊先行だが、データリンク範囲がより広い指揮官機をリスクに曝す非合理性は、正に斯衛の斯衛たる所以(ゆえん)である。それでも如月の配慮が伺えるのは、変則小隊の人員配置だった。各小隊は近接戦2機、支援砲撃装備1機の編成だが、第二小隊に第三小隊長の上総を配すことで、小隊戦力の均衡を可能な限り図っていた。

「――何をやっているのファング11っ!?　――和泉っ‼」

第一小隊を追って移動開始の号令を発しようとした唯依は、我が目を疑った。和泉の瑞鶴が三機連携を離れ、擱坐した要撃級(グラップラー)に向かって長刀を振り上げたのだ。

「――後退よファング11っ！　そいつは放っておいても死ぬから‼」

瑞鶴を認識したのか、擱坐した個体は前肢を失い短くなった左右の肢節を力無く振り回す――突き立てられる長刀。

『――ッ！　――――ッ‼　――――――ッ‼』

レシーバーに和泉のつまった呻き。長刀が突き刺さる胴体が痙攣する度、その勢いは

※ MAP 解説は P.412 へ

激しさを増す。如何に数キロメートル四方に大型種の反応がないとはいえ、それはあまりに無防備だった。唯依は全周警戒で機体を寄せ、通信ウィンドウを見据えた。

「和泉っ、そいつはもう死んで——」

『——いやっ!!』

怒気を孕む涙声——既にシチュー状となった異星起源種の胴体に尚も突き立てられる長刀。

『——逃げるなんて出来ないッ！　仇を……ここで仇を討つんだっ!!』

「——能登少尉っ！」

『——うるさい邪魔するなッ！　何も知らないお姫様のくせにッ!!』

ドクン——。唯依は思わず息を呑む。

『——忠道は私のすべてだったんだ!!　忠道と結婚することが——田上家との縁組みがッ！　私が能登家の役に立てるッ——能登家に必要とされるたったひとつのことだったんだッ!!』

ドクン——。和泉が突き立てる刃に更なる力がこもる。何度も何度も繰り返される圧力注射の音。だが、和泉は収まらない。

『あんたにはわからない！　摂家遠縁の縁組みで救われた家に生まれ、何不自由なく生きて来たあんたには——絶対にッ!!』

ドクン——。でも、それでも私は……ッ!!
『だからあんな青臭いことばかり言えるのよッ！　何が同じ訓練生よ!!　何がみんなで頑張ろうだよ!!』
ドクン——。ひどいよ和泉……本当はそんなふうに思っていたの!?
『家格替えがあって摂家に繋がるあんたはさ、上に行けるって知ってるのかもしれないけどね——私達は何をやろうが一生外様なんだよっ!?』
ドクン——。それは私のせいじゃないよね。私もその制度を受け容れて生きているって、わからないかな？
『——上に行けないってわかってるのに、なんであんたと同じ頑張り方しなきゃいけないのッ!?　私達はね、そういう——あんたから見たら哀れな範囲で幸せを満喫できるように生きるしかないんだよッ!!』
ドクン——。それは全体目的と個々の問題解決が一致しているからだよ、和泉。生き様の問題にすり替えちゃだめだよ。
心臓が胸を打つ度、唯依の心は明晰になっていく。噴出する感情の渦を、遠くから見下ろす。
『——余計な夢見させないでよッ！　そんなことしてあんたッ……責任取ってくれんのッ!?』

ドクン――。確かに責任は取れないよ。でも生まれを選べない以上、進むことを止めれば変化はないから。それを選ぶ責任は和泉にあるんじゃないかな。

『何もわからないくせに――出しゃばらないでよお姫さ――』

――瞬間、轟音。

「『――ッ!?』」

翻る警告――警報。割って入る通信ウィンドウ。

『――わかりませんわね。ええ、まったく』

網膜に浮かぶ上総。その隣の和泉は、無言で呆けたような表情――兵装ステータスには赤い警告が点滅。ＢＥＴＡに突き立てた和泉機の長刀は、刀身半ば(なか)で砕け折れていた。

「山城……さん……!?」

上総は、この戦闘で敵味方識別装置(IFF)の友軍誤射防止プログラムの認識範囲を完璧に把握したのだろう。和泉が長刀を要撃級(グラップラー)に突き立てた瞬間、その突き刺さった部分を胴体ごと撃ち抜いたのだ。

唯依の中で、ゆっくりと感情と認識が融合し始める。それは一定の割合以上混ざらないようになっているかのようだったが、徐々に強くなる吐き気と頭痛がそれを気にさせなかった。ただそれも、圧力注射によってすぐに解消された。

『許嫁を持たない私に、それを失った悲しみなど、わかりようもありませんわ』

『……だったら……出しゃばらないで……っ』
和泉は呆然としたまま､絞り出すように呟く。上総は兄ふたりが戦死している――と、唯依は喉まで出かかる。それを制するかのように上総はただ、淡々と言葉を紡いだ。
『――それでも、戦友を失った悲しみはわかりますわ。……貴方はいかがかしら、能登少尉』
どくん――。
唯依は、その問いが自身にも向けられているような気がした。
『……くッ……そんなのっ――あたりまえでじゃないっ！』
上総は――そう、と短く言葉を句切り、声色を和らげる。
『でしたら、貴方の戦友が、貴方を失いたくないと想う心――理解できますわね？』
『……わかってるっ……てば……っ!!』
噛み締めた歯の隙間から洩れる和泉の答え――上総は声色を重くし、毅然と言い放つ。
『では、貴女がここで許嫁の弔いをする分、まだ生きている戦友を死に近づけていることとは――ご存知？』
『…………!!』
和泉は俯いてぎゅっと目を閉じ、歯を食いしばっている。その肩が小刻みに震えている。

「――山城さんもう充分よ。ね、和泉――後退しよう？」
暫し黙したままだった和泉は絞り出すように同意し、折れた長刀を投棄した。
噴射地表面滑走（サーフェイシング）で先行した和泉機を見送り、唯依は上総に詫びる。
「私が不甲斐ないばかりに……ごめんなさい」
次発する上総の瑞鶴――その映像に重なる通信ウィンドウには、あの時と同じ色の視線。
『虫酸が走りますわね、あなた方の関係……。散々ぶら下がって甘やかし放題。見るに堪えませんわ』
ドクン――。
遠離る上総機を目で追いながら、唯依は明晰な思考で確信していた。
――ああそうか。山城さんは事前処置の悪酔いであんなことを言ったんだな。

◇

ようやく動き出した第二小隊のマーカーを見て、如月は舌打ちして呟く。
「あれはもう、使い物にならんかも知れんな……」
会話もバイタルもモニターし続けていた結果、そう判断し得えた。否、錬成半ばの学徒衛士がここまで持ち堪えたことこそ、喜ぶべきなのだ――考えを改め、如月はため息

を吐いた。だが、自我乖離現象を示す部下達の中に在って、山城少尉が示す事前処置への高い適応性は、唯一の光明だった。この戦いを生き延びたなら、必ずや後世に名を残す衛士となろう。だが、万に一つもそうなる可能性はあるまい。自身を含め、生きて帝都を出られる者などないはず。それ程に状況は逼迫(ひっぱく)しているのだ。山岳部に浸透した小型種の侵攻――それが始まった以上、京都外郭の砲台陣地群が堕ちるのも時間の問題。山間(やまあい)にばらまかれた対戦車級(タンク)地雷の殺傷効率、そして警備部隊の弾薬がいつまで持つか次第だった。

「場合によっては、釈迦岳砲撃陣地の直援を優先すべきか……」

だがそれは、独自判断による行動――つまり、嵐山死守という城内省本陣の命令に背くということだ。

如月は戦域マップを一瞥――国道９号線を噴射地表面滑走(サーフェイシング)で進む第一小隊は、老ノ坂峠にさしかかりつつあった。この峠を抜ければ西京区、京都盆地南部が見渡せる。漠然とではあれ、広域データリンクが無くとも八幡の状況を目視、あるいは光学センサーによって確認できるだろう。

ビープ音と警告――前方にトンネルが近付く。総延長約２３０ｍ、最大直径約11ｍ。レーザー照射に対してもっとも安全な噴射地表面滑走(サーフェイシング)で全高19・４ｍの瑞鶴が通過するには最低でも18ｍ、限りなく機体を寝かせた水平噴射跳躍(ホライゾナルブースト)の場合でも最低15ｍが必要で

ある。だがそれもあくまで理論値であり、現実的にはプラス５ｍは確保しなければ考慮の対象とはならない。従ってこのトンネル区間だけは、匍匐飛行(NOE)で稜線を超えなければならないのだ。

「——ファング1より中隊各機。老ノ坂トンネル区間の匍匐飛行(NOE)によるフライパスを許可する！」

支援砲撃による照射誘引は未だ機能している——あとは運次第。目玉野郎の気まぐれ任せ。

「——高度制限25以下ッ！　82式は木にぶつかった程度じゃ壊れないッ！　数秒の我慢だッ、びびって高度あげると黒こげにされるぞッ——わかったかッ!?」

了解の唱和——第二小隊は未だ後方２２００。

「——第一小隊ッ、続けッ！」

トンネルまであと３００。噴射地表面滑走(サーフェイシング)から匍匐飛行(NOE)に移行する如月機——自律制御では出せない滑らかな姿勢転換だった。虚空に翻る高度警報、そして衝突回避勧告——部下達は最も低い位置にある機体爪先が高度25ｍ。対して如月は最も高い位置にある頭部センサーマストが25ｍ。

「——死にたいのかバカ者ッ！　制限高度は脚じゃないッ——頭だッ!!」

突然、けたたましい警報——翻るレーザー照射警告。瞬時に自律射出される気休めの

対光線発煙弾（アンチレーザースモーク）。指揮官機権限でデータリンク——全機同時にロケットモーター点火。
「——ぐおおおおおッッ！！！」
対光線発煙弾（アンチレーザースモーク）効果無し。照射警告ダイアログの８桁カウントダウンが赤くなる——最大出力照射とのチキンレース。峠の頂点を抜ける——降下。
「——ッ!?」
　最も高度を取っていたファング９が白煙を曳きながら赤熱して泡立つ——網膜の少女が目鼻と口から桃色の蒸気と泡立つ体液を噴きながら膨張してホワイトアウト。機体はそのまま飛び続け、数百メートル先に墜落。ファング４は健在——背部のレーザー蒸散塗膜喪失。装甲の一部が融解。
「——くっそッ!!　ファング２ッ!!　ギリギリま——ッ!?」
　警報と警告の洪水に頭から呑み込まれる——如月は一瞬状況を理解できなかった。機体は三軸回転で地面に激突、峠の林をほじくり返しながら転げ下る——。
「——くっそ……ッ!!　いったい……何が……ッ!?」
　ようやく停止した機体の中は警報の土砂降り。ノイズ混じりにぼやける視界の色彩が狂う——フィルタリングが墜落でいかれたか、それとも何か燃えているのか。それとも機体の一部をズームしてしまっているのか。
　朦朧とする意識——圧力注射。徐々に焦点が定まっていく。

目の前に翻る警告ウィンドウ——その最も大きいダイアログは〝搭乗員脱出勧告〟。ばかな、あり得ない——視線でキャンセル。その次に大きな警告に視線——そこには、〝付着敵性体即時剥離勧告〟とあった。

視界一面が真っ赤な理由を、如月はようやく理解できた。

耳鳴りの向こうに、ファング4の呟きが聞こえる。そして——沸騰する何かが映った通信ウィンドウがホワイトアウト。

『——やだ……。やだぁ……』

「バカな……ヤツだ……ビビって高度を……あげたのか……」

だがそれも仕方がない。教練の座学で、その恐ろしさをたっぷり刷り込まれているはずなのだから。足元一面に絨毯の如く蠢く戦車級（タンク）の絵面は刺激が強すぎたのだろう。

檜林の頂点をかすめる如月の匍匐飛行（NOE）——その高度な技能が徒となった。峠を越して高度を下げた際、浸透して山林を埋め尽くし堆（うずたか）く重なる戦車級（タンク）の群れに主脚を掴みかかられ、引き摺る群れを更に多くの個体が掴み、遂に墜落に至ったのだ。

如月は操縦桿（スティック）とフットペダルを何度も操作する。だが、主機こそ反応するも機体は震動するのみで微動だにせず、ステータスは既にその異形種と自機の色に染まっていた。ゴリゴリと管制ユニット内に共鳴する切削音。自決装置も作動しない。通信もデータリンクも死んでいる。

もしかしてファング4（あいつ）、これから起こる出来事を見たくない一心だったのかもしれないな——警報と機体切削音に浸りながら、如月はぼんやりとそう思った。
そして、皇帝と政威大将軍に己が無能を詫び、部下達の名を呟いて後、9㎜自動拳銃の銃口をその口に含んだ。

同時刻　滋賀県　琵琶湖
日本帝国軍海軍　第二艦隊旗艦・尾張　第一艦橋

アメリカ海軍第七艦隊に属する原子力戦術機空母・セオドア・ルーズベルトが、艦載戦術機の発着艦を繰り返している。帝都防衛の支援——それが在日米軍の任務だった。世界最強の海軍戦術機といわれるF-14Dが、匍匐飛行（NOE）で複雑な地形を縫い、光線属種（レーザー）の死角から長射程の多弾頭巡航ミサイル〝フェニックス〟をお見舞いするのだ。
「向こうさんもよく動いてくれている……」
第二艦隊司令・小沢久彌（おざわひさや）提督は、数キロメートル先に浮かぶ巨艦を見つめながら言った。その周囲には最新鋭の駆逐艦が配され、航空戦力を持たないBETAの攻撃に目を光らせている。アメリカ艦隊から距離を置いて投錨しているのは、帝都鎮守を預かる第

二艦隊に属する戦闘艦船群。伝統的に各国海軍は、海に生きる者としての連帯感を持っている。だが、日米のそれは同盟国海軍という以上に、あらゆる意味で特別だった。前大戦で死闘を演じた者同士——国家の存亡を賭して対峙した者同士でしか結び得ない、複雑で深い絆なのだ。

「だが……やらせるわけにはいかんのだ」

小沢提督は舷窓外の巨大空母を見据えたまま、自らの決断を確認するかのように、言葉を絞り出した。

「……司令！　何卒ッ……何卒、八雲長官に確認をっ！」

参謀である安倍(あべ)大佐が血相を変えて進言する。顔を紅潮させながらも歯を食いしばり、その怒りを必死に押さえようとしていた。八雲長官からはすべてを預かってここに来ている——双方その意味は重々承知してのことだ。事ここに至っては、最早決断あるのみ。

「……もう一度言う。主砲、発射準備」

小沢提督は振り向きもせず、淡々と言葉を紡ぐ。

「——長官ッ!!」

参謀の語気には某かの覚悟が秘められていた。だが——。

「——聞こえなかったのかね安倍参謀。主砲、発射準備、だ」

静かだが強靱な意志が込められた口調だった。目を大きく見開いて口を真一文字に結

んだ安倍大佐は、鼻から胸に大きく息を吸う。その拳は小刻みに震えていた。そして——。
「——全艦に秘匿通達ッ！　全砲門発射準備ッ——データリンク照準開始ッ!!　」
小沢提督は巨大空母から目を逸らすようにして、黒い水面を見遣る。
まさかこのような日が来ようとは——冷徹に立ち振る舞っていても、その胸中には寂寞とも慚愧とも付かない感情が渦巻いていた。帝国を——日本を護るためとはいえ、自身が命を下す所業の何と罪深きことか。安倍の怒りと悲しみは、我が事のように理解できる。だが、誰かがやらなければならないのだ。歴史に汚名を刻むことになろうとも。
小沢提督は姿勢と制帽を正し、自らが破壊しようとしているものを真っ直ぐ見据えた。
「第七艦隊司令・クゼ提督に警告。——我、砲撃の準備有り。至急艦載機を帰投させられたし」

同時刻　京都
嵐山基地前衛　亀岡戦域東端

「——ファング1応答願いますッ！　ファング2よりファング1ッ！」

確認できたのはレーザー照射による撃墜2。だが、隊長機は最大照射前に峠を遮蔽にして無事だったはず――データリンクのログはその直後にマーカーロストとなっていた。
『状況から言って撃墜されたと見るべきですわね。これ以上は時間の無駄よ』
網膜の上総が目を細める。老ノ坂トンネル手前４００――小隊は全周警戒で座標固定していた。
『そ、そんな……！じゃあ私達だけで戦えって言うの!?』
「少なくともしばらくは……嵐山基地に戻るまではそうなると思う」
『思うって……』
『しっかりなさい能登さん。この戦域の斯衛軍はもう私達だけですのよ。基地に戻ったとしても警備部隊は帝国軍。都合良く指揮下に編入してもらえるなどと、考えないことですわ』
『そんなの……わかってる……！』
通常会話形式は上総の提案だった。実戦経験のある指揮官を失った以上、形になど拘ってはいられない。少なくとも正規兵不在の状況を脱するまでは、最も効率の良いコミュニケーション方法を選択すべきという判断だった。
『――篁さん、引き続きあなたが指揮を。家格序列から言っても妥当ですわ』
「うん……わかった」

そうは答えたものの、唯依は迷っていた。

《虫酸が走りますわね、あなた方の関係。散々ぶら下がって甘やかし放題。見るに堪えませんわ》

・・・・・・・・・・・・・・如何に事前処置の悪酔いとはいえ、上総の揶揄は的を射ている。さすがに己の指揮能力欠如を疑わざるを得ない。だが、家格序列に背くつもりはなかった。自身の言動には篁家の名誉が掛かっているのだ。高位は高徳を要す——ここで責務を放棄すれば、父や母の顔に泥を塗ることになる。

「とにかく、如月中尉の命令を実行しよう。嵐山の死守は任務の原点だから」

『わかりましたわ。そうなると問題はあの峠ですわね』

『あの高度で照射されたとなると……支援砲撃が減ってるってこと？　もしかして……戦車級が砲撃陣地を次々と……!?』

「今はそれを考えても仕方ないよ。とにかく、如月中尉がやったように、低く跳んでロケットモーターで突っ切るしかない」

上総が頷く。

『そうですわね、では早——』

警報と共に目の前に翻る警告ウィンドウ――視線は反射で戦域マップへ。３人が同時に息を呑む――。

「……か、亀岡戦域西端に……旅団規模ＢＥＴＡ群……ッ!?」

ドクン――。識別と分布予測が立ち上がる。突撃級(デストロイヤー)・１８００超――要撃級(グラップラー)・２３００超――光線属種(レーザー)を含む小型種、２０００から計測限界以上――。

『――この熱量ッ……光線属種(レーザー)がこんなに……!?』

ドクン――。戦域マップはみるみる真っ赤に染まる。支援砲撃の被撃墜率がみるみる跳ね上がる。

「――急いで峠を抜けましょうッ!!　じゃないと――」

『――ちょっと待ってっ!!　なに……あれ……!?』

唯依の言葉を遮った和泉の目には絶望の色が滲み出ていた――。その視線の先。正確にはフィルタリング処理された望遠映像に映る烏が岳の南斜面――。

ドクン――。

愛宕山から烏が岳にかけての一帯が、巨大なベルベットのシートで滑らかに覆われていくように見える。

「――あッ……あれは……ッ!?」

明晰な思考ではもう何かわかっている。だが、唯依はそれを口に出したくなかった。

光学センサーがデジタルズームに切り替わる——。

ドクン——。

『——戦車級(タンク)……!?　あれがすべて……戦車級(タンク)ですって!?』

上総が珍しく声を上ずらせた——。

ドクン——。

——学術名：*manderium:Ungulam crus*(マンデリウム・アングラム クルース)。国連呼称・エクウスペディス。全高4・4ｍ・全幅1・9ｍ・全高2・8ｍ。BETA群に於いて最大の個体数を誇る中型の多足歩行種。最大歩行速度は約80㎞。学術名の和訳は〝蹄のある脚を持つ噛みつくもの〟。その名の通り、戦術機の複合装甲を易々と噛み砕く強靭な歯と顎と、握力13ｔの強力な前肢を持つほか、極めて高い対人探知能力も備えている。数十から数百以上の群体で行動し、捕食対象には密集して取り付き、食い尽くす。最も多くの衛士を〝機体ごと〟喰い殺したBETAといわれ、怖れられている——。

唯依の思考に教本の一節が呼び起こされた。天然の要害である山岳地帯が、逆に戦車級(タンク)の浸透を助けてしまったとでもいうのか。

愛宕山の南斜面を埋め尽くした戦車級(タンク)が、鳥が岳中腹に穿たれた嵐山基地の発着場や戦術機発進ゲートに流れ込んでいく。誰かが抵抗を試みているのか、爆炎や光の明滅が見えていたが、やがてそれも途絶えた。

ドクン――。
そして、それまで絶えず聞こえていた遠雷のような音が止む。烏が岳の東面に在る砲撃陣地も、遂に喰い荒らされてしまったのだ。
『――篁さんっ！　ご覧になっててっ!!』
蠕動（ぜんどう）する赤い烏が岳――老ノ坂峠を挟んだ小塩山の北斜面を、幾筋の赤い泡状のものが這い上がっていた。
ドクン――。
『……なによ……完全に……囲まれてるじゃない……!!』
和泉の声が微かに震える――事前処置がまったく効いていないかのように。
ドクン――。
思考は明晰で、あふれ出る様々な感情を客観視することはできても、次に何をして良いのか唯依にはまったくわからなかった。前面には無数の戦車級（タンク）。後方には旅団規模の大BETA群が迫る。四面を山に囲まれた亀岡盆地からの離脱を図るには跳ぶしかない――だが既に支援砲撃は一切止み、光線級（レーザー）の数は数十倍に増えている。そして、友軍は3機のみ――。
『……私達、食べられちゃうのかな……？』
ドクン――。

何の感情もない和泉の呟きが、レシーバーから漏れ出る。
『あいつらに……機体ごと食べられて死ぬのかなあ……』
ドクン——。
瑞鶴——父の手なる篁の誇りが……その象徴が——喰われてしまう……!?
篁への中傷、罵倒、嘲笑を、その行動を以て跳ね返す使命を背負ったこの身と共に、喰いちぎられて無に帰されてしまう……!?
ドクン——。
そんなことを許すわけにはいかない……。どうすれば——いったい何をすればそのような理不尽に抗えるのか。
「——諦めるものか……!!」
唯依は低く唸ってデータベース、戦域マップ、あらゆるものを立ちあげる。
『——その通りですわ！　何か——まだ何か手はあるはずッ!!』
上総も検索を開始——か細い可能性の糸を必死で手繰り寄せようとする。視界に踊る戦術マップには、後方からせまる６０００体以上のＢＥＴＡを示す赤い帯。その面積はみるみる広がっている。
どくん——。
「——!?　これ……は……!?」

一瞬の光明に唯依は思わず息を呑んだ――だが、鳴り響く警報がばらまく警告ウィンドウが視界を埋めていく。視線ですべてを振り払う。戦域マップには国道9号線に並走する片側3車線の高速道路、そして峠のそれより大きなトンネルが点滅する。ここを通ることができれば――。

ドクン――。

「……最大直径……14……メートル……!?」

噴射地表面滑走(サーフェイシング)は勿論、水平噴射跳躍(ホライゾナルブースト)でも抜けられない。警報の大合唱の中、両肩に絶望が重くのし掛かる。

「そん……な――ッ!?」

重なるように立ち上がった警告ウィンドウ――そこには〝即時域外退避勧告〟の文字が点滅。

『――し……支援……砲撃……が……ッ!?』

和泉が目を見開いて呻く。表情こそ抑制されているが、恐怖と絶望が洩れ伝わる。

ドクン――。

『――いいえ……これは……琵琶湖からの艦砲射撃ですわ……!』

上総の声色からは、完全な諦観が滲み出ていた。

全員の網膜に映る戦域マップ――そこには亀岡盆地とその隣接戦域が表示されていた。

その一帯をすべて覆う数珠つなぎの黄色い円。それは艦砲射撃の弾着と被爆範囲を示すものだった。

――唯依たち第二小隊のマーカーは、そのほぼ中心に位置していた。

同時刻　滋賀県　琵琶湖
日本帝国軍海軍　第二艦隊旗艦・尾張　第一艦橋

第二艦隊麾下の戦闘艦船群――その側面に巨大な火球が爆ぜる。白く照らされる艦体が漆黒に並ぶ様はあたかも白骨、あるいは墓標のようでもあった。一瞬遅れて爆音が圧力と衝撃になって駆け抜けると、間を置かず別の戦列の傍らに火球が爆ぜる。

その輝きで送り出されるのは、極超音速のＡＬ（対レーザー）砲弾。光線（レーザー）属種の迎撃で気化し、重金属雲を発生させる。迎撃されなくとも、強力な運動エネルギー兵器として機能する特殊砲弾だ。

『――京都市街域に重金属雲発生ッ！　減衰濃度です！』

『――第参戦隊、ツ―11号砲弾装填完了ッ!!』

「――目標、嵯峨野、上桂、日向！　師団規模ＢＥＴＡ群ッ!!　――てぇーッ!!」

号令に応える砲声。衝撃と轟音が艦体を震わせる。

第二艦隊司令・小沢久彌は微動だにせず、精密に連動、制御される艦隊データリンク砲撃の狙う先を睨んでいた。

帝都が、燃えていた。紅く明滅する地平とそれを照り返す暗雲。日本人が積み重ねてきたすべてを受け容れ、具現化してきた千年の古都は、今また日本人の手になる戎具(じゅうぐ)を受け止め、灰燼に帰そうとしているのだ。

「この手で帝都を撃つことになろうとは……ッ。無念です……っ！」

斜後に進み立った安倍大佐が、絞り出すようにうめく。

小沢は前を見据えたまま答えた。

「帝都砲撃、その一切の責は私にある。諸君はただ、命令に従ったに過ぎない」

「長官……！」

「安倍君、よく見ておきたまえ。……そして、この屈辱を決して忘れてはならん」

艦体を揺さぶる轟音は止めどなく続く。そして安倍は気付いた——小沢が握りしめた拳もまた、微かに震えているのを。

「このような仕儀が如何にして導かれたのか——決して忘れてはならん！」

「は……っ！」

安倍は唇を噛み締めて燃える京都を見据えた。頬に熱いものが伝おうとも拭うことな

く、ただそれを睨み付けた。
　第一艦橋に在るすべての者と同じように——。

十数分後　京都・西京区
京都縦貫自動車道　沓掛インターチェンジ

　阿修羅地獄というものがこの世に顕在化したとしたら、そのような光景だろうか。降り注ぐ鋼鉄の砲弾。濃霧のような燃焼煙。一面に立つ火柱と土煙。最早元の形状すら判別できない異形の肉塊が折り重なり、その一部であった腕や脚とおぼしものが敷き詰められた大地。至る所に焔が燃え立ち、炭化した建造物の名残、樹木、異星起源種が墓標のように林立する。背後の地からは迎撃の光条が数多く立ち上り、空には鉛板のような重金属雲が赤黒く垂れ込める。遥か遠景には長岡京が、そして八幡が、渦巻く業火と爆炎の海に沈んでいた。
　帝都が——京都が燃えている。千年の都が……その目の前で燃えていた。
『——正に間一髪、見事な状況判断でしたわ』
　視界に広がった壮絶な光景——と、客観認識しているもの——に一瞬目を奪われてい

た唯依は、網膜の上総に慌てて首を振って見せた。
――前方の老ノ坂峠一帯には無数の戦車級（タンク）。跳躍は完全にレーザーに押さえられ、後方には旅団規模6000超のBETA群。そして頭上からは飽和攻撃の砲弾群が殺到。唯一の脱出口と思われた高速道路の大型トンネルは直径不足。正に絶対の危機。だが、それを回避させたのは、シンプルな事実の組み合わせだった。
艦砲による飽和攻撃の直前、唯依が発見したのは、京都縦貫自動車道の新老ノ坂トンネルだった。京都縦貫自動車道は、第一防衛線北端の宮津から八幡の北東・久世群に至る区間名称であり、BETAの本土侵攻に備え、軍事運用に耐えるよう整備拡張された片側3車線の首都圏高速自動車専用道の一部である。亀岡と西京区を繋ぐ老ノ坂峠の地下には、国道9号線に並走して全長1080m、最大直径14m、強化コンクリートの耐爆構造を持つ新老ノ坂トンネルが東西に貫いていた。直上の峠を夥しい数の戦車級（タンク）が南下していたにもかかわらず、爆破封鎖が行われていなかったのは正に偶然としか言い様がない。それは一定個体数通過によって作動する自律防衛システムによって作動する。従って、結果的には亀岡東端を死守し続けた事が、巡り巡って自らの退路を確保した形になったのだ。そして、最大の問題であったその最大直径。全高19・5m、最大全幅13・6mの瑞鶴が如何にして14mのトンネルを突破し得たのか。それは――。
『――陸送モードなんて、よくも咄嗟に思い付いたものですわね。恐れ入りましたわ』

「私はただ……必死だっただけだよ」

唯依は機体ステータスを見た。両前腕のナイフシース、背部兵装担架の長刀、突撃砲の表示が無くなっていた。

それは何れもトンネル突入前に自ら強制パージしていたものであり、機体最大幅を可能な限り減じるための処置だった。その上で機体姿勢を陸送モードに、肩部装甲ブロックを胸部ブロックの両脇に折りたたむことで、最大直径を約10ｍまで絞り、機体姿勢をほぼ水平に保った極限の匍匐飛行(NOE)でトンネルを駆け抜けたのだった。ＢＥＴＡ大戦以降、トンネルの最大直径は14ｍと決められてる。これは大型種の通過を妨げ、尚かつ自走担架(トレーラー)による戦術機陸送を可能とする数字として導き出されたものだった。やはり座学で学ぶものには、ひとつの無駄もない——唯依は30年の戦いで研かれた衛士錬成カリキュラムの実効性を噛み締め、心から感謝した。

『これからどうするの……？　京都……あんなになっちゃってるし……』

和泉が周囲を見渡しながら問うた。奇妙なことに、その表情には怯えのようなものが色濃い。

ドクン——。

戦車級(タンク)の赤い波に呑み込まれる嵐山基地が、フラッシュバックする。既に死守すべき目標はない。何とかして次なる命令を、自力で受け取りに行かなければならないのだ。

だが――。

「まずは兵装の入手を最優先しましょう。じゃないと……生き延びた意味が無い」

了解、と上総と和泉。生命と引き替えの選択だったとはいえ、今は近接防衛用の65式短刀まで失った丸腰。数体の戦車級(タンク)ですら致命的脅威となり得るのだ。唯依は音振探査を開始、音紋でBETAの分布をスキャンする。だが、この大規模面制圧の中に在っては、戦術精度の情報が得られるのはせいぜい半径数百メートルがいいところだろう。スキャン結果を待たず、唯依は戦域マップに目を遣る。

「ここから5㎞東に帝国軍の桂駐屯地がある。兵装を入手したらここを目指す――」

戦域マップには他に、野戦補給コンテナの所在地が点滅している。広域データリンクが機能していないため、その存在は確認できても、具体的な残存物資が何なのかまではわからない。ビーコンで判別できるのは兵装や推進剤、砲弾などのコンテナ種別のみだった。

「半径2㎞圏内に野戦コンテナは3つ。規模順で1・5㎞南の大原野インター横、約2㎞南東の高校、約1・8㎞東微南の運動公園」

『空振りのリスクが少ないのは残存物資が多いインター。でも山岳部近傍は戦車級との接敵リスクが高い――となれば、駐屯地に近い運動公園一択ですわね』

『データリンクさえ回復してくれたらなあ……』

『前より重金属雲濃度が高くなってますわ。障害の復旧など望むべくもないでしょうね』

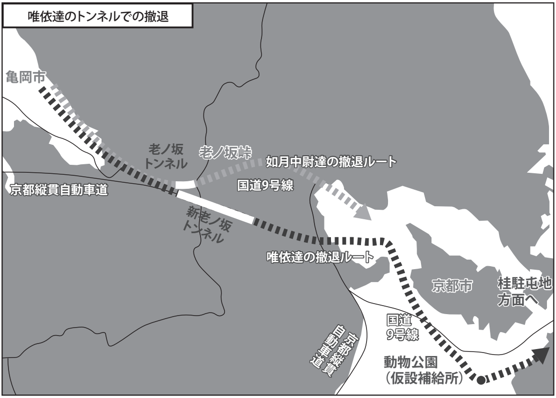
亀岡、高槻、八幡地区の重金属雲は、教本でも見たこともない様相と濃度を示していた。それだけ大量の砲弾と光線（レーザー）属種の攻防があったという証だった。この濃度では、例えBETAを退けても、重金属汚染で……唯依は音振照合でコース選定をしながら、暗い現実を口にした。

『とにかく他の部隊を見つけて近接データリンクに接続するしかないですわね。斯衛であれ帝国軍……いえ、国連軍でもかまわない』

音振走査終了――もっともBETAリスクの少ないルートが網膜に点滅。近接データリンクで各機に共有する。

ここから、本当の戦いがはじまるんだ――

唯依は操縦桿（スティック）を強く握りしめ、唇を噛んだ。



山岳・森林地帯

※MAP解説はP.413へ

志摩子が、安芸が、部隊の同期生達が、そして、如月の面影が瞼に過ぎる。そしてその背景には、煌々と燃える帝都があった。
深く息を吸い、目配せ。上総と和泉が頷く。
「――ファング小隊、前進……！」

数十分後　京都・西京区
帝国本土防衛軍　桂駐屯地

「――こちら帝国軍嵐山基地所属、斯衛軍第３３２独立警護中隊、現在指揮官を失い、３名で孤立しています！」
唯依はオープン回線を使って全軍に呼びかけ続けていた。だが、未だ応答は一度もない。
廃墟となった無人の駐屯地――建ち並ぶ半壊施設。その狭間を埋め尽くす夥しい大型種の屍骸。薬物に抑制された絶望が疼く。
「――こちら帝国軍嵐山基地所属、斯衛軍第３３２独立警護中隊っ、CP（コマンドポスト）、HQ（ヘッドクオーター）、近接部隊の何れかは、至急応答願います！」
推進剤を補給しながらの全周警戒――リスク分散のため各機コンテナを移動させ、比

較的状態の良い建造物を背に、正面をカバーし合う内向きの三角陣形で同時補給を行っていた。結果から言えば運動公園は空振りだった。１２０㎜砲弾や多目的追加装甲は残っていたが、肝心の突撃砲本体、長刀の類は一切無かった。そしてそれは、この桂駐屯地も同様だったが、底をつきかけていた推進剤が残っていたのは幸いだった。ただし、推進剤補給は装備の補充に比べ時間を喰う。無防備となる野戦補給の時間伸延はリスク増大に他ならない。推進剤切れによる行動不能とのトレードオフでなければ、間違いなく先送りにするだろう。故に、被補給機に対して同等数以上の直援機を当てるのが規定であったが、丸腰の二機でそれに従う意味はないと判断し、全機同時に補給を行っているのだった。

『……志摩子って、いっつもああだったよね』

レシーバーに和泉の呟き。誰に語るでもなく、心から滴るような言葉。

『……あの子、いつもいつも唯依の背中、カバーちゃってさ。総戦武の時も、模擬戦の時だって、ず～っと……』

コールを続けながらも、唯依はその呟きが気になる。戦死した者の生き様を語る〝衛士の流儀〟にはまだ早い。それは自分達が生還した後にすべきことなのだ。

『死角消すためにいっつも勝手にポジションずらしてさ……当の唯依に何度注意されても、あの子……バカのふりして繰り返して……』

志摩子がバカのふりって――唯依の意識は和泉の声に手繰り寄せられる。
『ほんとバカだよね……実戦でもその癖出ちゃって……副腕（サブアーム）に街路樹噛ましてさ……結局、錯乱して死んじゃうんだから……』
ドクン、と心臓が跳ねる。もしその話が本当だとすれば、入校して以来、演習で志摩子が見せてきた失敗の多くは意図したもので、唯依のためにやっていたということになる。そして唯依は、それに気づかず志摩子を評価し、庇って労るような態度を取ってきたということに。出撃前から様子がおかしい和泉の妄想なのか、それとも……。
『安芸だって……ホントバカだよ……。何にも言ってくれないで……。そんなんじゃこっちだって……踏み込めないじゃないよ……』
口調に籠もる贖罪のニュアンス。コールは続けていても、唯依は既に上の空。
『隠すなら完璧にやってよ……。私が見えるところに手紙なんて忘れないでよ……。末代の恥とか戸籍抹消とか……重すぎるよ……』
「え……？」
唯依は我知らず声を漏らす――かすれて殆ど声になっていないのが幸いだった。安芸が石見家から除籍される？　何か家名を汚すようなことをしていたというのか？　唯依はもう言葉を発してはいなかった。
『そんなもの私に置いて逝かないでよ……。錯乱して味方に被害出そうが……5分で死

のうが……弟は弟……あんたはあんたじゃない……』

ごくり、と喉が鳴る。これまでの呟きは、和泉の妄想などではない——唯依はそう確信した。客観的で明晰な思考のおかげだろうか。安芸と志摩子の言動。そしてその死に際。疑念と不審。軽侮と諦観。入校から今日まで、それぞれとの関係と出来事が作っていた多くの歪な窪みに、和泉の語った言葉のすべてがぴたりとはまり込んだ。そして、その瞬間——。

「——ッ⁉」

警報と被照射危険地帯警告。網膜の上総と和泉が一斉に目を見開く。

稜線の彼方から幾条もの閃光が瞬き、垂れ込めた鉛板の如き雲に突き刺さった。遅れて聞こえる遠雷の如き音でそのおおよその距離が把握できる——亀岡戦域西端。網膜に表示された光線(レーザー)属種座標予測とほぼ一致。照射角、迎撃座標を算出——そして、警報は続く。

『——近いッ⁉』

和泉の叫声——視界に翻る近接域着弾警報。

重金属の雲を突き破り日向市一帯に鋼鉄と炸薬(さくやく)の豪雨が降る。その距離僅か２㎞。市街に紛れ込んだ異星起源種の大軍を、辛うじて難を逃れていた市民生活の痕跡ごと粉々に粉砕、焼却する。閃光と衝撃波、そして轟音と激震が駐屯地を覆い尽くす。半壊した

駐屯地司令部ビルが更に崩れ、隣接棟との狭間で擱坐する突撃級(デストロイヤー)の屍骸に瓦礫を叩きつける。動揺減衰機構(スウェイ・キャンセラー)が作動しているため揺れは感じない。だが、その映像だけで面制圧の凄まじい威力が伝わる。

不意に、老ノ坂峠での危機がフラッシュバックする。もしあの時、逃げ遅れていたら――その問いの答えが、目の前で生々しく展開していた。

『いつあれがまた頭の上にって思うと、すごく嫌な気分……』

それまでの呟きなどなかったかのように、和泉は嫌悪を吐き出す。それまで黙り込んでいた上総は、やや天を仰ぎ、

『これまでの観測状況から見て、京都にいる限りいつそうなってもおかしくないですわね』

分厚い重金属雲の影響により、戦術機搭載レーダーによる飛来砲弾の探知範囲は、直前にまで狭められている。友軍の砲撃を避けるには、先のように光線属種(レーザー)の迎撃角と勘で着弾地域を推測する以外ない。ＢＥＴＡによる捕食死――生きたまま咀嚼(そしゃく)され轢断される恐怖に曝される中、面制圧も警戒し続けなければならないこの状況。事前処置と薬物投与がなければ、とっくに精神が崩壊していたに違いない――。

『市街地まで友軍が砲撃するなんて……おかしいよ。だって、帝都なんだよ……？　おかしいよ、そんなの』

先ほどまでの呟き、そして繰り返す不安定な言動——網膜に映る和泉を見て唯依は目を細める。状況に対するネガ発言の顕著化は、処置投薬下でもあり得る症状だ。だが和泉は、その顔と声色に表情が出すぎているのだ。

『この駐屯地だってそうだよ……。来る途中も同じ……！　どこに行ってもどうせ誰もいないよ……！』

出撃前から、和泉には明らかに事前処置の〝悪酔い（バッドトリップ）〟症状が出ていた。その上、亀岡離脱前は極度の錯乱状態に。感情の起伏が多くなればその分、自律注射によって安定剤の消費が増す。今の和泉は大量投与によるオーバードーズ——あるいは残量が底を突き、薬剤の効果が徐々に切れ始めているのか。最悪なのは後者だ。この狂気の戦場で、事前処置や薬物投与の効果がなくなれば、それこそ……。

『もう……帝都は……』

感覚外の激しい震動——そして更に崩れる司令部ビル。崩れ墜ちる瓦礫。

「——まだよ、和泉」

『……え？』

唯依は和泉にその先を言わせない。この場にいるすべての者と、なによりも自身のために。

「砲撃は地域ごとに行われている。そこにＢＥＴＡが浸透しているのは事実よ。でも逆

に考えれば、組織的な抵抗がまだ続いている証拠でしょう」

この重度データリンク障害の中、如何にしてそれを実現しているのかはわからない。唯依自身がそう信じたかっただけなのかも知れない。だが、観測した事実から推測される最良の可能性がそれなのだ。指揮官権限解除コードを持たない唯依に、部下達の強化装備・薬剤残量を確認する術はない。であるなら、和泉には可能な限りポジティヴな思考を持たせる以外、全員が生き延びる道はない。この状況下に於ける人数の減少は、致命的リスクの上積みに他ならないのだ。

『――だとすれば、音振探知やデータリンクが無くても、接敵率が低く友軍が潜む地域が見えて来ますわね』

上総がコンソールで何かを入力――同時にマップ上に表示されていく数値やオブジェクトを見て、唯依はその意味に気付いた。

「そうか！　砲撃地域の統計を精査すれば……！」

やはり上総はすごい――唯依は戦域マップに目を奪われ続ける。面制圧の被爆範囲を示す円が、西大路通から堀川通の一角に重なり続ける。京都市街の北域が空白として浮かび上がる。上京区から中央区にかけての一帯。

「――ッ!?」

全員が固唾の呑む。そこには二条城、そして京都御所（ごしょ）があった。

『……御所鎮守の斯衛主力が——敵の侵攻を食い止めている……⁉』
冷静な上総の呟きに僅かな喜色が漂い、和泉の表情に光が差す。唯依自身も表情が綻んでいるのを自覚した。
「補給コンテナを拾いながら、二条城の本陣を目指しましょう！　そうすれば司令部直下の指揮管制——ッ⁉」
その時だった——唯依機正面の司令部棟の側壁が崩壊、そして——。
「——うわあああああっ⁉」
衝撃と警告と警報と横転が同時に唯依に覆い被さり、視界がブラックアウト——。
『——唯依ッ⁉』『——篁さんッ⁉』重なる絶叫。
機体が仰向けになっているようだった。だが視界はブラックアウトのまま。鳴り響く警報の中、唯依は首を振り、近接データリンクで和泉、上総機のモニター映像を繋ぐ——そして息を呑んだ。
ドクン——。
唯依はそれが信じられない。自機の背後にあったビルに突撃級がめり込んでいた。そして、その装甲殻と醜い主体節、崩れ落ちた大量の瓦礫の下から、山吹色の主脚が横倒しに突き出ていた。
ドクン——突撃級が、なぜ——いったいどこから⁉

『――あいつ、死んでたんじゃ……ッ!?　だって挟まったままッ……ぴくりとも……ッ!?』

『――能登さん何やってますのッ！　供給バルブを排除なさいッ――はやくッ!!』

和泉と上総の叫声が圧壊警報に溶ける――機体ステータスにダメージはない。だが、機体は身を捩る突撃級（デストロイヤー）に合わせて軋み、揺れるのみで動かない。左肩部のアーマースパイクがその腹節に突き刺さり、体液を掻き出していた。反射的にスロットルを踏み込もうとする右脚――。

『――だめよッ誘爆しますわッ!!』

コンテナから推進剤のリーク。上総機の画像が主脚走行で突撃級（デストロイヤー）に迫る――。そしてマニピュレーターをその後背節に深々と突き入れた。鯨の共鳴に似た重低音が機体を震わせる。和泉機の映像には、返り血に染まる上総の瑞鶴。その左右上腕を繰り返し突き入れては、ふざけているとしか思えない形状の臓物を掴みだしていた。それでも尚前進しようとＢＥＴＡは猛然と足節を漕ぐ――だが進まない。唯依機に乗り上げて右に傾ぎ、左足節はすべて宙を泳いでいた――。

その映像に被って翻る警告ウィンドウ――立ち上がる音振探知チャートの立体波形。

ドクン――。

『――うそ……でしょ……』

かすれる和泉の呟き。戦域マップには赤い敵性光点（ブリップ）。面制圧被爆地帯から北上する大隊規模ＢＥＴＡ群――大型種５６６、小型種は計測上限値。進路予測円の狭い扇形――桂駐屯地の光点（ブリップ）はその範囲内にあった。

ドクン――。

「――離脱して本陣に向かってッ!!　このままじゃ全滅するッ!!」

己の死。そして己が存在しない世界がそのまま続いていくという現実。その絶望と恐怖を、唯依の精神は冷徹に見下ろしていた。

『――おどきなさいバケモノッ!!　――早くッ早くッ――早くッ!!』

上総の瑞鶴は両腕のマニピュレーターが破損、すべての保持指があらぬ方向に折れ曲がっていた。戦域マップの自機座標に無数の赤い光点（ブリップ）が迫る――その距離は６００ｍを切った。市街地とはいえ到達に数分とかからない。

「――もういいッ、山城さん早くッ！　なにやってるの和泉ッ――逃げてッ!!」

『――ごめん唯依ッ――ごめんなさいぃッ!!』

和泉の瑞鶴は突撃級（デストロイヤー）に突進――そのまま主脚の爪先を横腹に叩き込む。何度も、何度も。

『――あんな言ってごめんなさいッ！　酷いこといってごめんなさいぃ!!』

「そんなことどうでもいいッ！　あれは〝悪酔い（バッドトリップ）〟が――」

『――よくないッ！　だれのせいにもできないッ――処置のせいになんかできないよぉッッ‼』
ぐちゃぐちゃになった和泉の泣き顔に重なる赤い光点(ブリップ)の津波――嗚咽混じりの絶叫が警報を凌駕する。
「――もう１００切ってるからッ！　はやくにげてッ‼」
ドクン――。心音に重なる短い空気音。唯依の耳元、そして上総の音声にも圧力注射の音。と同時に、恐怖も絶望も焦燥も更に小さく圧縮され、ふたりの目は淡々と網膜のマーカーを追い、その思考はリスク評価を始める。
「――ファング1よりファング3、即時戦域を離脱、司令部本陣にて本隊と合流せよ――以降の指揮権を託す、以上！」
『――ファング３了解。介錯すらできず、申し訳ないですわね』
上総の顔、声共にほぼ無表情――だが、最後のひと言を付け加えさせたのは圧縮された感情か。
「搭乗員が生きている方が囮には効果的よ。さあ、早く行って」
黙して頷く上総と唯依。
『――後退しますわファング11、誘爆圏外まで走り、噴射地表面滑走(サーフェイシング)で戦域離脱！』
『――うううッッ……‼　唯依いいいいいッ‼』

和泉機はまだ蹴り続ける。反転し走り去りかけて停止する上総機。
『——しっかりなさいファング11っ！　犬死にする気ですのっ⁉』
「——和泉！　あなたは許嫁の仇を討つんでしょう⁉」
『——ッ⁉』
「——お願い和泉！　生きてそれを為して——あなたの死に場所はここじゃない！」
『——ああ…………うあああ……あああ‼』
号泣と嗚咽。そしてゆっくりと身を転じる和泉の瑞鶴——。
『——能登さん避けなさいッ‼』
『——え……っ⁉』
唯依の網膜で和泉が目を見開く——その背後には上総機視点の映像。
ドクン——。
和泉の瑞鶴に飛びかかる4体の戦車級（タンク）——その後ろには数体の要撃級（グラップラー）が蠢く。そのすべてが、スローモーションのように見えて——。
「——和……泉！」
唯依はもっと叫んだはずだった——だが、口から出たのはやや勢いのある短い呼びかけのみ。そして——爆散。
爆ぜて爆ぜて爆ぜる。和泉機に降り注ぐ赤黒い組織と体液——それは戦車級（タンク）だったも

の。その背後では、要撃(グラップラー)級達が、赤黒い孔を無数に纏いながら地に伏していく――。

『――推進剤は残しておいてくれたか？　――こっちは大食いなもんでな』

どくん――。

オープン回線のレシーバーに響く野太い声――思考が記憶の深淵をまさぐる。翻る通信ウィンドウには、記憶と完全には一致しない――だが、確実に知っている顔が浮かび上がる。

『――〝死の８分〟を越えて、少しは衛士らしい面構えになったか、ああ？』

呆然としながらも、唯依達の声が揃う。

『「――真田……教官……ッ!?」』

にやりと引き上がる口角――そのほくそ笑み、宛(あたか)も暴君竜。だが既に隻眼に非ず、戦意に滾る両の眼(まなこ)は揃っていた。

『――式がチャチ過ぎて自分が任官したことも忘れたのか？俺はもう貴様らの教官じゃないぞ！』

家族の立ち会いも来賓もない簡素な任官式――退場口に敬礼で立ち、上官となった唯依達に敬語で祝辞を述べる真田達教導官の姿が脳裏に過ぎる。

『――だが調子に乗るなよ？　だからと言って貴様ら斯衛の下っ端でもない――帝国軍の出戻り大尉だ！』

上総機の背後に屹立する影が一歩踏み出す――浅葱色に燐光するセンサーが視界に残像を曳く。その様相、漆黒の海原に浮かぶ幻火の如し。至近着弾の爆炎がその機体を照らし上げる。二本差しの長刀。背には二門の突撃砲。無骨ながら伸びやかな肩部装甲ブロックに映える、丸紅白縁(がんこうはくえん)の国籍章。機体を大きく縦に貫く紺と白灰の段だら模様(フェリス・カモフラージュ)。腰部装甲ブロックにあしらわれているのは『誠』の一文字。鍛え上げた短距離走選手を想起させる流麗堅牢(るれいけんろう)にして躍動的な形姿(なりかたち)――。

『――こちらウルフ1、乳歯(ファングス)どもの安全を確保――もうぶっ殺していいぞ!!』

荒々しい了解の唱和が降る――真田機の背後から同じ発光配置を持つ七つの影が短距離跳躍(ショートジャンプ)で唯依達を跳び越え、BETA群に猛然と襲いかかる。その機動力、運動性、柔靭、瞬発――すべてが瑞鶴とは別次元だった。

「……あれが、帝国軍の第三世代機――94式・不知火……!!」

『――いやちがう。こいつは機動強化型の壱型丙だ』

94式・壱型丙――唯依は反芻してその名を呟く。

『バカ食いと過敏な操縦特性が嫌われ、１００機で調達打ち切りの問題児。だが、大陸帰り(オレ達)にはこれぐらいが丁度良い按配でな』

既に絶命した突撃級(デストロイヤー)の撤去を待つ間、唯依はその壮絶な機動格闘戦闘に見惚れた。

多くの機体が損傷を受け、完全な状態にはない。だが、すべての機体が銀盤を滑るよう

に戦域を縫いながら、次々にBETAを解体していくのだ――。
『――ありがとうございました真田大尉、お陰様で命拾いしましたわ』
『――ふん、俺達も壱型丙も、斯衛に拾われたからな……ほんの利息払いだ』
『では……藤堂教官や芹沢教官達も、この部隊に⁉』
和泉の目に希望が灯る。だが、真田の表情は厳しいまま、
『ああ、さっきまではな。ふたりとも、ひと足先に九段に向かった』
何と言っていいかわからず、黙する唯依達。真田はふん、と鼻を鳴らし、
『それにしてもよくやった。うちの中隊ですら既に4機喰われてるってのに……貴様ら、よく、ここまで生き残ったな』
和泉が何かを言いたそうにして、言葉を呑み込んだ。唯依達の首席教導官であった真田は、教え子達の配属先を知っている。誰が死んだかなど一目瞭然、それでも生き残ったことを褒めたのだ。その意は酌んで然りだろう。
「真田大尉、戦況はどうなっていますか？　広域データリンクが殆ど死んでいて、状況が掴めません」
屍骸の撤去が完了し、機体を起立させながら唯依は問うた。同時にステータスチェック。両腕に多少の機能低下が認められる以外、目立ったダメージはない。
『――高濃度重金属雲による障害だそうでな、こっちも最新の状況ではないが』

そう前置きして、真田は近接データリンクで戦域マップを立ち上げる。
『琵琶湖艦隊の全力砲撃もあって、今回東進して来た敵主力の7割は既に肉片になった。だが、第一、第二、最終防衛線、加えて大阪市街がほぼ壊滅。組織的な軍事行動が機能しているのは京都外郭高地の内北とその東側だけだ』
京都市街の北域がズームされ、南北を貫く大通りの数本に赤いラインが引かれる。
『京都市街も西半分は艦砲の面制圧対象、上京、中京、東山、山科の四区以外はＢＥＴＡの浸透を許しているのが現状だ。京都御所一帯を死守するため、二条城駐屯地の斯衛軍帝都鎮守連隊と、壬生駐屯地の俺達、帝国軍首都防衛連隊が前面展開している。加えて、本土防衛軍の中部方面隊主力が、琵琶湖に繋がる山科を死守するため出張っているところだ』
砲撃地域の統計から推測した上総の読みはほぼ当たっていた。直線でほぼ7㎞。光線(レーザー)属種が隣接する市街地の移動、尚かつ砲撃迂回を考慮するとしても十数分の距離。だが向かう先は現在の主戦場。死角だらけの市街に無数のＢＥＴＡが潜んでいるのは間違いない。所要時間以前に、生きてそこに辿り着けるかの問題が一番大きいのだ。
『俺達別動隊の任務は、物資を拾いながらこの戦域を遊弋し、大阪から北上して山科に向かう糞虫どもを踏みつぶすことだ。推進剤が心許なくなって駐屯地(ここ)に接近したところ、オープン回線が何やらやかましくてな。文句のひとつも言ってやろうと乗り込んだ次第

だ――で、貴様達はこれからどうする。通信から察するに、何の命令も残されていないはずだが』

　自分達にも何か出来るのではないか――唯依は一瞬、真田の任に同行する選択を思い浮かべ、すぐにそれを撤回した。死が充満する戦場で巡り会ったかつての教導官。その存在感に寄り掛かりたいというのは完全な逃避だと自覚してのことだった。それ以前に、機体性能の格差を見れば足手まといなのは明白。同行など拒絶されるに違いないのだ。

「私達は二条城の本陣を目指し、斯衛本隊に合流します。その上で新たな命令を受領するつもりです」

　真田は僅かに目を細め、そうか――と言った。

『貴様らが向かうは市街戦の最激戦区だ。無論、その途中に浸透している敵密度も高い。――だったらまず京都駅に行ってみろ』

「京都駅……ですか？」

『烏丸中央口前のバスターミナルが臨時の物資集積所になっている。戦術機系なら一通りの兵装が揃うはずだ。うまくいけば簡単な整備が受けられるかも知れん。駅周辺は戦術機甲一個中隊と機械化装甲歩兵一個大隊が守りを固めているが、万が一の場合は壬生駐屯地に行き、副教官だった斉藤中尉を探せ。何らかの融通は利かしてくれるはずだ』

　真田の壱型丙が背部兵装担架を前方展開し、手にしていた長刀一振と突撃砲二門を差

し出す。
『──持っていけ。これしか分けてやれんが、丸腰よりはましだろう』
「──ですが、それでは大尉が……っ」
数を増した警報が唯依の声を遮る──探知範囲の敵性光点(ブリップ)は増え続ける。
『俺がなんだって？　フン、なめてるのか貴様──良いから受け取れ』
各々礼を述べながら装備を受け取る。和泉は突撃砲を、上総はそれを左の兵装担架に。
最後に唯依が長刀を受け取る。真田の言葉の意味を唯依は噛み締める。長刀一本あれば充分だということなのか。それとも補給所を巡れば回収できるという意味なのか。何れにせよ、唯依が受け取った長刀の重さは、真田が負う任務、部隊の命運。そしてその生命の重さだった。
『さて、同窓会はそろそろお開きだ。安心しろ、ＢＥＴＡ(やつら)に追撃はさせん。邪魔だ──早く行け！』
敬礼をする間も与えず、真田の通信ウィンドウが畳まれる。壱型丙は長刀を振りかざし、戦域に向き合った。唯依達は主脚走行で漏洩範囲を脱し、噴射地表面滑走(サーフェイシング)で北東に向かう。
「ご武運を……」
唯依はモニターに映る壱型丙に向け、噛み締めるように呟いた。

かつてあれほど憎々しかった鬼教官達が、背後で戦っている。教え子を救うために回避可能だった戦闘を仕掛け、今またその退路を確保するため、戦い続けている。如何に大陸帰りの精強とはいえ敵の総数は２５０倍超。砲弾には限界があり、頼みの機動近接戦も、元より推進剤残量が少ないのだ。まして貴重な兵装を、役に立つどころか生き残るかさえ怪しい半学徒衛士に分与する。帝都危急の折、真田に期待されているものの大きさ、合理の面から言えば背任にも等しい選択ではないのか。大陸での実戦経験を後ろ盾に、そのような惰弱を強硬に否定し続けたのは、今、唯依達の背後で戦っている大人達ではなかったのか。この矛盾を説明し得るのは如何なる理屈なのか——。

《——その下らん美学は、多くの戦友を殺す》

事前処置と薬物投与で得た客観的で明晰な思考。それを以てしても、唯依には明確な答えが見つけられなかった。

◇

戦域マップ上を遠離る教え子達のマーカーを一瞥し、真田は鼻を鳴らした。

「結局、繰り返しちまうのか……俺は」

瞼を過ぎる記憶――合理を是として臨んだ大陸での戦闘。積み重ねてしまう夥しい酷死と惨状。贖罪を求め縋るように耽溺した美学、正当化、自己欺瞞。大恩ある部隊指揮官への反発。そして、部下の生命を道連れにした負傷と内地送還――。

『――結局俺らは彩峰中将(オヤジ)の掌の上なんですよ。どこまで行ってもね』

網膜の衛士がほくそ笑む。短距離跳躍(ショートジャンプ)で後退してきた2番機が隣接着地し、突撃砲を一門差し出す。

「……中々どうして、器用には振る舞えんものだ。大人になればできるだろうと、高を括っていたんだがな」

真田はコンソールに貼った写真を見詰め、含み笑った。今は亡き妻に寄り添う、幼き息子と娘。美学も合理も超越した真田が生きる理由。そして、戦う理由は今、戦場に隣り合う者達の生。

教え子達のマーカーを一瞥し、敵性光点(ブリップ)で埋め尽くされた戦域マップを睨む――。

「――ウルフ1より中隊全機ッ!!」

真田の咆吼が業火の戦域に轟く。京都を守護する七匹の壬生狼は、更なる殺戮の予感にその血を滾らせた。

数分後　京都・下京区　唐橋平垣町近傍
東海道本線・線路帯

　京都駅烏丸中央口前の臨時物資集積所を目指し、３機の瑞鶴が東海道本線の線路帯を噴射地表面滑走（サーフェイシング）で疾走する。それは分の悪い賭けだった。だが、それ以外の選択肢はすべて、より最悪だった。

　広域データリンクの消失。大規模面制圧の震動による探知範囲の狭窄。レーザー迎撃による着弾域予測とその観測画角の確保。不十分な兵装と戦力。満身創痍の機体。その内一機は両主腕のマニピュレーター損壊により、常態的兵装運用が不可能——。これだけの悪条件を抱え、ＢＥＴＡが浸透する市街地を横断することは自殺行為だった。見通しが悪く障害物の多い市街での不期遭遇戦。そして桂駐屯地で唯依が陥った危機的状況——面制圧の強震による建造物の崩落と、そこに填塞（てんそく）していた大型種の解放による突発攻撃。現状に於いて、それらは何れも致命的だ。敵への露見リスクを冒してでも、ある程度の格闘機動空間と視界の確保、移動距離と時間の短縮を優先するしかなかった。だが、移動速度的に優る噴射地表面滑走（サーフェイシング）は、機体が接地しないため音振センサーが使えない。
　広域データリンクが喪失している今、何のトレードオフも無しに前に進むことなど出来

なかった。

「――こちら帝国軍嵐山基地所属、斯衛軍第332独立警護中隊！　駅駐留部隊指揮所（ステーション・コントロール）応答願います！」

『ずっと応答がないなんて……！　大規模部隊が護ってるはずじゃないの!?』

『この先を抜ければ視界が通る――駅までどのみちあと数秒、行けばわかることですわ』

視界の後ろに飛んでいく景色の中央、東海道本線の線路帯は、数キロメートル先にある山陰本線合流までの長く緩やかな右カーブを描く。3機の瑞鶴は警戒速度まで減速し、進路上の敵と左翼からの襲撃に備える。東海道本線の北側は視界が開けていて観測には有利だが、その分、無防備だった。右翼である南側には新幹線高架が並走しているため視界的な不利はあるものの、直撃を受けにくいという点で防御的には幾分の利がある。

『――ご覧になって！』

視界が開け、壮麗な京都駅が目に飛び込む。上総の声に唯依はコールを止め、状況を観測する。

『あれは……』

網膜上の和泉が呆然と呟いた。爆煙も炎もない――駅の周囲に目立った戦闘の痕跡は見て取れない。駅ビル越しに京都タワー展望台の健在も確認できた。

『駅の外観を見る限り、特に損害はないようですわね……』
訝しむように上総。唯依は頷く。集積所を警護しているはずの戦術機甲一個中隊と機械化装甲歩兵一個大隊——その反応がないことへの警戒だ。駅ビルが猛スピードで迫る。彼我距離が８００ｍを切った。ここは念を入れるべきだ。
「——全機減速、12時方向４００で接地、音振探——ッ⁉」
唯依は反射で回避機動——一瞬遅れて警報と警告。10時方向からの攻撃——垂直軸回転しながら地上を滑る機体。感覚欺瞞を凌駕する高Ｇに呻きが洩れる。
『——これはッ——衝角腕ッ⁉』
『——まさかッ——要塞級がッ⁉』
上総と和泉の叫声——鞭の如き衝角腕の多重攻撃を躱すのが精一杯。表情など見る余裕もない。
「——ッ⁉」
老舗ホテルの回転展望楼の向こう側に、そいつらはいた。胎児を思わせる頭節と大型甲虫の幼態を想起させる尾節。その左右には、バージェス動物群の有爪動物が列なったかのような双胴の主体節と五対の棘状歩脚。全高60ｍの出鱈目で醜怪な生命体が身動きひとつせず、闇と高層建造物に一体化して並ぶ。その数９体。尾節から延ばした衝角付きの俊敏な触腕によって唯依達を貫き、その先端から分泌する溶解液を浴びせようとし

ているのだ。噴射地表面滑走(サーフェイシング)による視点の低さと仰角による上方死角域の拡大。加えて、要撃級(グラップラー)などの大型種全高を基準とした警戒。そして何より、〝要塞級(フォート)は侵攻の最後列に存在する超大型種〟という先入観がその発見を妨げたのだ。痛烈な実戦経験の不足——。

「——うううううッ！！！」

迫る触腕——減速する間もなく唯依は必死の回避制御。ドンという衝撃(ソニックブーム)を伴って至近を薙ぐ衝角。溶解液の飛沫が装甲に煙吹(けぶ)く斑を描く。耳に入るのはけたたましい警報——上総と和泉の揺りつぶすような呻き。交信する余裕は誰にもない。

『——いやあああッ!!』

和泉の絶叫——視界のすみから36㎜砲の火線が要塞級(フォート)の体節に吸い込まれる。だが、傷ひとつ付けられない。正面から衝角腕3．京都駅まであと僅か——加速して強行突破しかない

「——はあああッ!!」

唯依、渾身の斬撃——だがその反動で機体がぶれ、空を切る切っ先。

「——しま……ッ!?」

警報と警告と衝撃——三軸回転する機体。神速の回避も間に合わず、膝下から右主脚を貫かれ、更に左跳躍(ジャンプ)ユニットの後端をもぎ取られた。機体制御不能——即時脱出勧告。

「——うあああああああああぁぁぁッッ！！！」

朦朧とする意識の中で唯依が最後に見たものは、激しく回転しながら猛然と迫る駅ビルのヘリポートだった。

◇

「——うわああああああああ！！！」

激しい衝撃に和泉は悲鳴をあげる——警報と警告の嵐。躱し損ねた衝角が、肩部装甲ブロックごと左主腕を引きちぎっていた。その衝撃で意図せず機体が浮き上がり上総機と接触——。

『——能登さん何をやってッ——ああッ⁉』

押し出された上総機は通過するビル屋上の給水塔に接触——錐揉み状態に陥り、そのままの速度で京都駅西端方向に突っ込んでいった。

「——山城さんッ⁉　唯依いぃッ‼」

その問いかけに応える者はいない。早鐘を打つ心臓。収縮する胃。和泉は眼を剥いてマーカーを確認する——自機以外すべて赤。

「やだ……。やだよ……ひッ⁉」

警報の大合唱――迫る衝角腕の束。薬物や後催眠暗示の庇護を失った和泉の精神に突き刺さる剥きだしの現実。そして、行動の指針を示す者は誰もいない――自分以外は。

「――やだやだやだやだやだあッッッ！！！！」

突撃砲を乱射しながら降下――辛うじて初撃を躱すも、なお追い縋る衝角腕。

「――助けて忠道いッ！　私をッ――私を護ってえええッ!!」

恐慌に追い立てられながらも染みついた技能が手足を動かす。機体は噴射地表面滑走(サーフェイシング)で奈良線のホームを縫うように回避を続け、それを追う衝角腕が次々に線路に突き刺さる。衝突回避警告――正面、その行く手を阻むように衝角腕が突き立てられた。

「――うわあああああああッ!!」

衝突の瞬間、絶叫と共に撃ちだした１２０㎜砲が正面に突き立った衝角腕を吹き飛ばす。衝突予測座標通過と同時に一斉に立ち上がる警告と警報――跳躍(ジャンプ)ユニット主機出力低下40％。機体装甲に融解ダメージ。突撃砲機能不全。座標通過時に衝角腕断面から吹き出した溶解液を浴びていたのだ――。

「――ひっ……!?　何っ……何なのよおッ!?」

跳躍(ジャンプ)ユニットの咳き込みで激しくノッキングする機体――和泉は必死で制御する。だが――。

「――うわああああああああああああッッ!!」

左右から振り下ろされた衝角に右装甲ブロックと左大腿部を貫かれ、和泉の瑞鶴はもんどり打って地表に激突。線路の敷石を巻き上げながら数十メートル転がって停止した。
バシンとカウンターショックの衝撃——和泉は息を呑んで覚醒する。
「……あれ……は……？」
朦朧とする思考と視界が具体化する。網膜一面に即時脱出勧告と緊急脱出(ベイルアウト)不能警告が翻っていた。無意識に右手が主梁(メインビーム)の機外作業用ヘルメットに、左手がモード転換レバーに延びる。緊急破壊(パワーアウト)脱出のウィンドウが閃き、爆圧ボルトが胸部上面ブロックを吹き飛ばしてコネクトシートが立位に——管制ユニットを囲むように構成する四本の主梁(メインビーム)に収納されていた腰脚部、頭腕部モジュールがシート基部に接続され、6秒弱で89式機械化歩兵装甲への換装が完了。腰背部のロケットモーターが点火、やや仰向けに擱坐した機体から射出された。
「——あぁッ!?」
和泉は首回りに感じた軽い抵抗に狼狽え、それを掴もうと装甲された右腕を伸ばす——
——。だが視界の胸部ブロックはみるみる遠離り、機械化歩兵装甲は自律制御で線路帯に着地、その姿勢のまま十数メートル後方にスライドして停止した。
「——待ってッ!!　忠道があッ!!　忠道がまだッ!!」
和泉の絶叫を他所に、濛々と煙を立ち上げる機体は要塞級の溶解液に浸食され、くた

びれたように萎びていく。コックピットブロックの空洞にボタボタと滴る溶解液は、そこに残っているであろう許嫁の写真と共に、金属以外の物質を溶かし尽くすだろう。

「――いやあああ――いやあああああああああッ……いッ――!?」

和泉の視線が捉えたそれが、絶望の叫びを断ち切らせた。煙を上げて崩れ行く機体――その奥に聳え立つそれに、視線は釘付けになる。そして、我知らず口から漏れ出るその名――。

「……京都……タワー……」

ドクン――。

忠道と初めて待ち合わせした場所……。

ドクン――

そういえば、ここは京都駅だ……。

ドクン――。

そうだ、いかなきゃ……。

ドクン――。

忠道が待っている……。

ドクン――。

「だって……休暇で帰ってこれるって……手紙に書いてあったから……」
和泉は吸い寄せられるように幽然と一歩を踏み出した。線路に沿ってザリザリと刻まれる敷石のリズム。それは次第に早まり、東海道本線の駅舎内ホームに消えていった。

◇

「……ん……ッ……くっ……!!」
視界は一面赤だった。意識を取り戻した唯依は、数度目をきつく瞑って首を振る。そして世界が赤のモノトーンである理由を徐々に認識し始める。
「非常……灯……。そうか……私……」
脳裏にフラッシュバックする撃墜の――要塞級(フォート)の衝角腕に貫かれ、京都駅の併設ビル屋上に墜落したのだ。視界の右端で時間を確認。あれから10分近く気を失っていたらしい。その間、カウンターショックによる覚醒維持機能が動作しなかったこと、そして外部の映像が切れていることから、強化装備に某かの機能障害が出ているのは明白だった。
やや右前方に重力を感じながら、唯依はステータスチェックを行う。
「これは……」
あまりの惨状に言葉が漏れ出る。案の定、強化装備は生命維持機能以外の殆どを失っ

ていた。搭乗員保護機能が発動し、激突時の機体情報フィードバックから衛士を遮断するため回線をショートさせたのだ。機体の損害は更に深刻であり、跳躍(ジャンプ)ユニットは左右共に脱落。右主脚と左下腿、右上腕、頭部モジュールを失っていた。動力源であるメインジェネレーターも完全に損壊、搭乗員離脱用の予備電源が辛うじて確保されているに過ぎない。要塞級(フォート)の攻撃で破壊されたのが右下腿と左跳躍ユニットのみであったことを考えれば、墜落の衝撃が如何なるものかが測り知れる。頑強な胸部ブロックの中の更に堅牢な管制ユニット——その極太の主梁(メインビーム)に収められた機械化歩兵装甲モジュールさえ損傷させ、強化装備をショートさせなければ遮断できないほど激しい激突だったのだ。唯依が無傷であることは奇蹟と呼ぶ他ない。搭乗員の保護を最優先するその設計思想、それを実現した技術力が心から誇らしかった。

「父さま……ありがとう……」

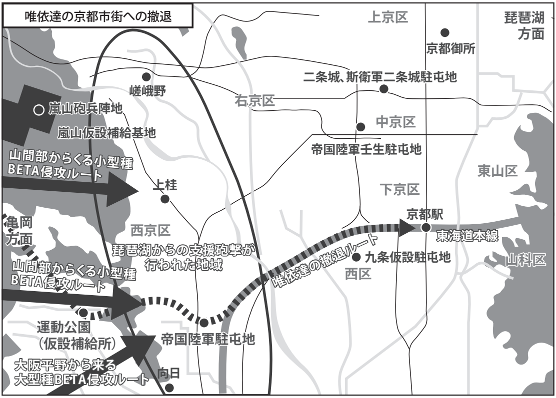
意図せず呟きながら戦域マップを確認する。センサーが集中する頭部モジュールと電源たる主機を壊失した今、機体に残るログと機能不全に陥った強化装備の脆弱なセンサーだけが頼りだった。網膜に投影された戦域マップはブロックノイズが酷く細部が判然としないが、位置の把握は可能だった。唯依の現座標は東西に長い京都駅ビルの西端、〝大空広場〟と表示される屋上施設とヘリポートの間にあった。そして、中央コンコースを挟んだ東端——〝東広場〟には上総機のマーカーが確認できる。搭乗員の生死は不明。

機能不全に陥った唯依の強化装備では、現在の彼我距離でバイタルやステータスまでは確認できなかった。だが、少なくとも機体主機は稼働状態にあるということだけは確かだった。そして、和泉機のマーカーは何処にも見あたらなかった。

「和泉……」

マーカーが確認出来ない場合の可能性はふたつ。センサーの探知域外にあるか、探索対象機の故障・損壊の類だ。前者は戦域の離脱、後者は撃破や敵捕食による解体も含む。機体の高出力探知機器が使えない今、強化装備の内蔵センサーで探知できる範囲は非常に狭い。和泉がその域外に擱坐、あるいは生存している可能性は充分にあった。

唯依はモード転換レバーを引き、機械化歩兵装甲への換装機構が作動しないことを確認



山岳・森林地帯

※ MAP 解説は P.414 へ

した。ステータス上で理解はしていたが、現状のケースでは表示エラーの可能性もある。電子部品が介在する場合は、何に於いても実際に動作確認を行うことが基本なのだ。

「やはり、徒歩で行くしかないのか……」

唯依は曖昧な平面マップを見ながら、脳裏にその位置関係と構造を立体的に思い浮かべる。それこそ京都駅は子供の頃から何度となく訪れている場所だ。最近も志摩子や安芸達と放課後に何度となく来ただけに、かなり詳細に脳内に再現できる。座標から上総機まで直線距離でおよそ３００ｍ。だが、複雑で立体的な構内の構造から、徒歩での実距離は2倍近くになるだろう。その後、斯衛軍司令本陣がある二条城まで行くとなれば、最低でも４㎞の敵中踏破を覚悟しなければならない。

機械化歩兵装甲が使えないという状況は、ただでさえ低くなった現状の生存率を更に圧縮するものだった。だとするなら、唯依と同様に墜落しても生存している可能性が高い上総機への到達を優先すべきではないか。マーカーが生きている以上、機体は放棄されていない。上総も唯依のように気絶しているか——墜落の衝撃で死亡しているか、なのだ。仮にそのような最悪の事態であったとしても、稼働状態の機械化歩兵装甲を入手できる可能性は非常に高い。勿論、物資集積所にも機械化歩兵装甲が存在する可能性は少なからずあるが、真田の言から判断するに、その主たるは戦術機兵装、砲弾の類だろう。生身の唯依に益するものがどれほどあるのかは未知数なのだ。——唯依は圧縮された感

情から垂れ流される自己嫌悪を客観視しながら、冷徹に状況分析を続けていた。

「やはり……いくしか……」

上総の生死に関わらず、斯衛軍本隊に合流する可能性を高めるためには、直接行って確認するほかない。集積所に機械化歩兵装甲が存在する低い可能性も担保し選択肢を増やすなら——大階段を1階まで下り、中央コンコースを横断しながら集積所を目視確認。その結果次第で、東広場に昇って上総機に辿り着くのを優先するか、後にするかを決定すればいい。

行動計画は決まった。唯依は意を決したように管制ユニット主梁（メインビーム）の収納ボックスから、簡易ヘルメットを取り出して被った。頸部アーマーユニットのリングジョイントでロックした後、リングの縁から引き出した軟性樹脂装甲とヘルメット顎下を繋ぎ、二重の気密ジップを慎重に締める。ステータスを何度も見ながら、厳重に気密の確認を行った。

今の京都のような高濃度重金属環境下で何も着けずに呼吸すれば、金属粉塵による肺機能不全で1時間以内に窒息死する危険があるからだ。仮に吸入量が少なく生還できた場合でも、重金属中毒や多臓器障害に陥り、壮絶な苦痛にのたうちながら数年かけて死に至る。如何に四肢や視聴覚器官の疑似生体技術や再生医療が発達しているとはいえ、高機能で複雑な臓器の多重移植には限界があるのだ。まして、一介の衛士を戦線復帰させるために、そのような高額医療が施された前例はない。

気密チェックを終えた唯依は、収納ボックスの扉裏にはめ込まれている96式拳銃と91式騎兵銃(カービン)の一式を取り出す。それぞれ弾倉確認し、スライドとコッキングレバーで初弾装填。セイフティを確認し、拳銃は左腰のハードポイントに装着した樹脂ホルスターに。騎兵銃(カービン)には被発見率を低減させるサプレッサーと、SWAT式スリングを装着して襷掛(たすきが)けに。ひとつしかない20発装弾の予備弾倉は左のハードポイントに。黙々と進められる地獄行の準備――唯依はそうすることで、己(おの)が覚悟を塗り固めようとしていた。共産圏諸国が衛士補助火器に採用しているAK等の7・62㎜弾であればまだしも、5・56㎜弾の騎兵銃(カービン)で対抗できるのは精々小型種のみ。戦車(タンク)級などの中型種に遭遇した場合は逃げろと教えられている。拳銃に至っては閉塞擱坐した際の自決用に過ぎず、装弾数もフルマガジンですらない。だが――。

「気休めでしかない……だけど、時間稼ぎにはなる」

唯依は深く息を吸い、管制ユニットの解放スイッチを押す。圧搾ガスの放散音に続きコックピット全体が前進を開始、駆動音が赤い闇に充満する。唯依はコンソールのロックリリースを引き上げ、腰部と頸部をバックレストの拘束から解き放って降機に備えた。右のコンソールと主梁(メインビーム)に腕を添えて重力に抗する。

ドクン――。

徐々に露出するコックピット。満天に紅く垂れ込める重金属雲が、燃える京都市街が、

黒く聳える京都タワーのシルエットが、闇に沈む屋上広場が、ゆっくりと視界に滑り込む。唯依は身体を主梁に預けながら、騎兵銃（カービン）の引き金に指をかけた。センサー類はほぼ死んでいる。蓋を開けてみればＢＥＴＡに囲まれている状況もあり得るのだ。

ドクン——。

管制ユニットが動きを停める。唯依はの主梁（メインビーム）の影からゆっくりと顔を出し、屋上庭園の様子を窺う。かつて見慣れた憩いの場が、生命を脅かす程の緊張を強いる。制御された緊張を噛み締めながら、暗闇に目を凝らし、耳を澄ます。低く籠もった砲声。コンクリートを伝う震動。それ以外は何も聞こえない。永遠にも感じる数十秒間の後、身を捻りながら慎重に脚から滑り降りる。それでも強化装備の靴底は硬質な着地音を響かせた。露天だけに音は抜けるが、唯依は着地の勢いのままに庭園建造物の影に飛び込んで周囲を伺う。

ドクン——。

辺りには何の気配もなかった。蹄状の脚端を持たない小型種は移動静粛性が高い。だが、待ち伏せや身を隠すなどの狩猟的戦術は一切取らず、大型種と同様に突撃して群がるのみ——。唯依は教本の一節を心で諳んじて自身を納得させる。小さく安堵の息を吐いて立ち上がると、ゆっくり振り返った。山吹色の瑞鶴が右前に傾ぎ、屋上施設側壁に凭（もた）れている。唯依は短い付き合いとなった初めての搭乗機を見詰め、深々と一礼した。

「護ってくれて……ありがとう」
無残なその姿を見て込み上がる自責が、言葉となって漏れ出る。
「ごめんなさい……私が……未熟なばかりに……」
残悔(ざんかい)を振り払い、頭を上げた唯依は振り返って歩を進める。デザインコンシャスな屋上広場のそこかしこに散らばる候補生時代の想い出。それらも振り解いて唯依は進む。身を低く保ち、周囲を警戒しながら。視線の先には、かつてクラシックコンサートを楽しんだ大階段がある。その吹き抜け構造の巨大な空間は、奈落への入口にしか見えない。漆黒の闇がパックリと口を開け、サーモセンサーも赤外線フィルタも機能しない唯依を待ち構えているのだ。
ドクン――。
総段数171段。高低差は11階建てビルに相当する35m。全幅26m、全長70mの大階段は、どっぷりと闇に沈んでいた。その左隅にある停止したエスカレーターを、唯依は一段一段慎重に降りてゆく。左右の遮蔽に加え手すりの内側版がガラス製で視界を確保できること、何よりそのステップ幅が、全幅1・4mの兵士級(ソルジャー)を阻むことがルート選択の決め手だった。当然デメリットもあるが、どのみち集団に囲まれれば広い階段ではひとたまりもない。僅かでもリスクの少ない消去法的選択をしたに過ぎなかった。だが、視界の良さ故に、目の端の闇に何かが過ぎる錯覚に苛まれる。その度に抑える衝動――

騎兵銃(カービン)のレイルシステムに装着されたフラッシュライトを照射したくなる。しかしそれは最終手段のひとつ。ＢＥＴＡの対人探知が何によって行われているのか不明である以上、遠方からの被発見性は考え得る限り抑えておくべきなのだ。警戒しながらも、ようやく目印にした赤く四角いオブジェを通過すると、うねるトラス構造の天蓋によって深まった闇にバイザーの自律調光機能が感応し、視界が徐々にクリアになる。だが、烏丸中央口の巨大コンコースは更に深い闇に沈んでいた。段丘と谷を思わせる複雑な構造のフロアが見通しを阻む。

ドクン——。

目を足元に下ろした唯依は絶句した。眼下の階段、そして４階の高さにある室町小路広場に、大量の肉塊や体液が散乱していたのだ。それは地球、異星といった起源の別なく等しく混在し、満遍なくぶちまけられていた。もしヘルメットを着けていなかったとしたら、その湿度とドロリとした生臭さに咽せ返っていたに違いない。そして、事前処置を受けていなかったとしたら、ヘルメット内に嘔吐していただろう。

ドクン——。

そういうことか……周囲を見渡して唯依は呟く。壁一面に弾痕、或いは携行火器による損傷が著しい。

「京都駅は……小型種の襲撃を受けたんだ……」

駐留部隊の返答が無かったこと。目立った戦闘の痕跡がなかったこと。要塞級（フォート）が存在したこと。要塞級（フォート）は胎内に小型種を収めていること。頭の中ですべてのピースがはまった——この物資集積所は既に壊滅していたのだ。だが、それでも前に進むしかない。唯依に残された僅かな生存の可能性は、この先にしかないのだから。

ドクン——。

「だとすれば……迂回するしかない」

1階まで降りて集積場の目視確認を行うという当初プランを、唯依は切り捨てた。京都駅を襲ったのが対人探知能力の高い小型種であれば、地上要員や警備部隊が多く集まっていたであろう場所には絶対に近づけない。残留個体が潜伏しているリスクに加え、死体が多ければ多いほど、屍肉をあさる小型種が集まっている可能性が高いからだ。従って、集積場となっていた駅前バスターミナルと中央コンコース1階フロアは危険すぎる。だとすれば選択すべき経路はひとつ。4階位置の室町小路広場を右に折れ、南広場を経て対岸の烏丸小路広場に抜け、東広場に至るルートのみである。

ドクン——。

社寺の如き朱色のモニュメントを一瞬戦車級（タンク）に見紛い、唯依は肝を冷やす。そして身をかがめて走り、背中でへばり付いた壁から意を決して身を乗り出す——暫し警戒し、安堵する。南広場には肉片と体液に塗れた闇しかなかった。極度の緊張と弛緩が幾度と

なく繰り返される。曲がり角。連続する構造柱の影。ありとあらゆる場所が警戒と畏怖の対象だった。

《要塞級の存在は、今回東進したBETA群の最後尾が京都駅まで到達した証――つまり、あと一息で第一次侵攻を退けられるということ》

薬物と後催眠が抽象化する絶望と不安を更に圧縮するため、唯依はポジティブな可能性を繰り返し思考しながら、壁から壁へ、駆けては凭れ身を乗り出しを繰り返し、南広場の中程まで進む。

《この帝都戦域――私は、ひとりで戦っているんじゃないんだ》

右手には新幹線ホーム越しに大阪まで至る燃える市街――真田達が戦う戦域が。左手には4000枚の硝子で覆われた全高60m、全幅150mの大アトリウム――黒い網目模様に区切られた重金属雲と紅く燃える帝都市街のパノラマが広がっていた。赤黒い空を背に立つ京都タワーのシルエット。そして、無数のコンテナが積み上げられたバスターミナル。集積物資への未練か、自らの選択の正しさを確認したいがためか、唯依は1階フロアを慎重にのぞき込んだ。

ドクン――。

そこは正に餓鬼地獄だった。散乱する帝国軍の機械化歩兵装甲や装備。その合間にある床という床が蠢いていた。重金属雲が照り返す微かな赤。それを浴びた表皮が朧気に

浮かび上がり、漆黒の中で蠕動している。耳を欹てると、通り抜ける風の音に紛れ、粘り気のある数多の咀嚼音が、細波の如く揺蕩っていた。

ドクン――。

唯依はその違和感に目を奪われる。

ドクン――。

それは、ほぼ真下にある改札から数メートルの所にあった。1階フロアの数カ所に擱坐している、帝国軍の機械化歩兵装甲とは違うもの。見るからに軽装備であり、緑と薄茶の迷彩が施されていないそれ。唯依が訓練などで見慣れたものだった。

ドクン――。

無性に喉が渇く。少し息苦しい。唯依は衝動に抗えずフラッシュライトを照射する。

ドクン――。

漆黒に白く切り取られた円の中で、血濡れる89式機械化歩兵装甲の中に寝そべった和泉が、繰り返し頷いている。

「和……泉……？」

半分になった簡易ヘルメットから覗く赤黒く濁った目は虚空を彷徨い、自慢のまとめ髪は解けて、表情の無い顔一面にへばり付いていた。頭から右肩、右上腕だけが普通で、その他に在るべきものはごっそり無くなっているか、垂れ下がった赤い繊維と筋、だら

しなくはみ出した薄橙色や薄紫の管や塊だけになっている。その周囲には真っ赤に塗れた青白い傘のようなものが沢山蠢いていた。和泉は、傘たちの動きに合わせて頷き続けている。

「……そこで……なにやってるの……？」

ぬらぬらと赤く輝く手が和泉の頭を掴み、そこに傘が重なると、刃を途中まで入れた西瓜を無理に割くような、くぐもった音が響き渡った。

ドクン――。

青白い傘が脇にのくと、和泉の顔が半分になっていた。残った部分も別人のように歪んでいて、正直、誰だかわからない。

耳元で圧力注射の音がする――唯依は跳ねるようにライトを消して身を隠す。

ドクン――。

《能登少尉は機体を撃墜され機械化歩兵装甲にて緊急破壊脱出（パワーアウト）、或いは緊急脱出（ベイルアウト）後に機械化歩兵装甲に換装。バスターミナルにある物資の確保、若しくは山城少尉の救出に向うも、兵士級（ソルジャー）の襲撃によって戦死》

唯依は冷静かつ客観的に状況を推論した。一瞬、爆発的に湧き起こった〝兵士級（ソルジャー）を皆殺しにしたい〟というどす黒い感情は、悲しみや恐怖と一緒に小さくパッケージされ、遠くに置かれていた。ひとつだけ引っ掛かったのは、和泉の倒れていた位置と向きだった。

結果的に1階フロアに物資は無かった。その取得が目的であるならもっとバスターミナルに近い位置に――いや、退避するにせよ戦闘を継続するにせよ有利な中央コンコースの外にいてもおかしくないのだ。仮に上総機の探査が目的であっても、東広場に繋がる階段はバスターミナル寄り――つまり出入り口側にあるのだ。血溜まりの量と形状を見る限り、引き摺られるなどして動かされた形跡はない。まして、BETAは動物のように捕らえた獲物を安全な場所に運んで喰うような習性はなく、殺したその場で貪るのだ。和泉は間違いなく著しく不利なこの閉鎖環境に止まり、あの場で絶命したのだ。バスターミナルに背を向け、中央改札口の前で、誰かを待つかのように。

唯依は無駄な推論を打ち切り、足音を忍ばせて南広場を一気に駆け抜ける。このフロアに小型種はいない――その大胆な行動には一定の根拠があった。新鮮な糧食を目の前にして、来るかどうかもわからない獲物を求めて彷徨うような兵士級（ソルジャー）などいない。そしてこれまでの屍骸を見る限り、更に脅威度が高い闘士級（ウォーリアー）は、京都駅侵攻群に存在しないはずだった。如何に闘士級（ウォーリアー）が俊敏であろうが、1体も倒されないことなどあり得ないからだ。

『……か……むら……ん……め……』

「――ッ⁉」

レシーバーに微かな声――上総だ。映像はない音声のみの通信。だが上総は生きてい

る——唯依のシュリンクされた感情が昂まる。烏丸小路広場を抜けた唯依は、その勢いのまま1フロア駆け上がり、東広場に昇るエスカレーターの角に背中から凭れて周囲を警戒する。

『……た……むら……さ…………て……』

唯依の強化装備か、或いは上総の機体側の問題か。その声はデジタルノイズで歪に上擦り、途切れ途切れだった。だが向こうは、主機出力を維持した機体の高出力センサーを使って確実に唯依を捉え、語りかけて来ているのだ。

「——待っていて山城さん、今行くから」

その声が上総に届いているかどうかはわからない。だが唯依は、語りかけずにはいられなかった。この角を曲がり階段を昇れば、そこはもう東広場なのだ——。

〝新郎新婦とすべての人の幸せを祈る〟ベルモニュメントと白いガゼボが配された、ウェディングガーデン風の吹き抜け広場。いつ結婚するのだと安芸が和泉を冷やかし、志摩子がそれを素直に羨む——あまりにも眩しく、あまりにも儚い去りにし日々の光が、唯依の瞼を過ぎる。

私は、誰も助けられなかった。だからこそ——。

唯依はエスカレーターを選び、一段一段踏みしめるように昇る。見上げる視線の先、頭上左手を覆うトラスの天蓋が無残にひしゃげ原型を止めていない。上総機の激突痕だ

ろうか。天空には赤黒い重金属雲。砲声と爆音、そして金属が軋むような籠もった響きが次第に大きさを増す。フロアが視線と同じ高さになる段で足を止め、周囲を伺う。大階段のそれとは違い左右の手すりが金属製で幅も狭いため、見渡せる画角は狭かった。墜落の影響か、恐らくは天蓋の鋼材が至る所に突き立ち、エスカレーター正面に並んでいるはずの照明塔やガゼボ、ガーデンチェアが薙ぎ倒され散乱している。

『……だ……こな…で…たかむ……ん……に…て……』

「――ッ!?」

唯依は思わず息を呑む。右頭頂部挫傷、左前腕及び左下腿粉砕骨折、右肩関節の脱臼――それは上総のバイタルデータだった。突然のデータ更新は距離が近付いたためか、或いは遮蔽が無くなったためか。同時に更新された機体ステータスは更に残酷な事実を示していた。

『……かむら…さ……い……で……』

「――山城さん!?」

ドクン――。

反射的にフロアに躍り出た唯依は絶句。暫しして言葉を洩らした。

「……タ……戦車級(タンク)……!?」

最初に目に入ったものは、それら。東広場左奥にある巨大な赤い塊。金属が軋む音の

正体。思考がその像に意味を持たせるまでにコンマ数秒——ホテル棟の側壁に寄り掛かって擱坐した上総機。恐らくは天蓋に激突して姿勢転換、そのまま背面から激突したのだろう。そしてそれにたかる数十体の戦車級(タンク)。４ｔトラックほどの大きさの多足生物は、主体節前面にある巨大な口で機体に齧(かじ)り付き、あるいはクレーンの様な角度で突き出た一対の腕で装甲を引きはがし、強靭な顎と並びの良い黄ばんだ歯で咀嚼して嚥下(えんか)する。その上下動に合わせ、鬼灯(ほおずき)を彷彿とさせる体節前上部の器官が忙しなく揺れ、そこから無数に突き出た黒い茸(きのこ)状の感覚器が不規則に突起と陥没(かんぼつ)を繰り返していた。その隙間から見え隠れするのは、装甲をほぼ失い、電磁伸縮炭素帯(カーボニック・アクチュエーター)や歪んだフレームが露わになった瑞鶴の骸。垂れ下がる光ファイバー束(そく)やモジュールの隙間からは、全身を循環する推進触媒(すいしんしょくばい)が滴(したた)っている。

『……たか……むら……さん……』

ドクン——。

「山……城……さん……」

デジタルノイズが弱まり、弱々しい上総の声が鮮明化する。

『……逃げ……て……来ては……だめ……』

ドクン——。

「早く……早く……そいつらを振り払って……ッ！」

それができる状態ではないことは百も承知だった。だが、そう言ってしまった。視界の隅で戦車級と同じ色で点滅する機体ステータスが、唯依の愚行をあざ笑っているかのようだった。

上総のバイタルを現状に至らしめたもの。それは側壁への背面激突だった。その衝撃で左兵装担架と懸架状態にあった突撃砲が丸ごと機体にめり込み、胸部ブロックごと管制ユニットを内側から圧壊させ、上総に重傷を負わせたのだ。強化装備がなければ恐らく即死だったはず。だが、主機稼働状態で燃料リークも懸念される中、緊急脱出も緊急破壊脱出も不可能――激しく歪んだコックピットに挟まれ身動きできない現状が、即死よりましだと誰が断じることができようか。せめて片腕が使えていたとすれば、とうに拳銃自決していてもおかしくない程の絶望的状況だった。それでも尚、唯依を遠ざけようとする上総の冷静さは、事前処置や投薬に因るものか。或いは生来の気質に因るものか――。

『あなたはッ……生き延びて…戦うのよ……篁…さん……ッ……』

切なげな剥離音と歯の浮くような金属咀嚼音に上総の呻声が重なる。

「――山城さん……ッ!?」

『はや……く……なにを……やっていますのッ……』

ドクン――。

胸部ブロックのメインフレームを戦車級(タンク)が噛みちぎる。露出するコックピット。約1m幅に圧縮されたその奥——バックレストに力無く凭れる上総がいた。ヘルメットに覆われていないその顔が、血濡れているのがわかる。

「……や……ま……しろ……さ……」

喉の奥から声にならない擦れた息が漏れ出る。耳元で鳴る圧力注射——。

ドクン——。もう一度鳴る圧力注射。客観性と貧血じみた視界狭窄と嘔吐感、そして頭痛が始まる——

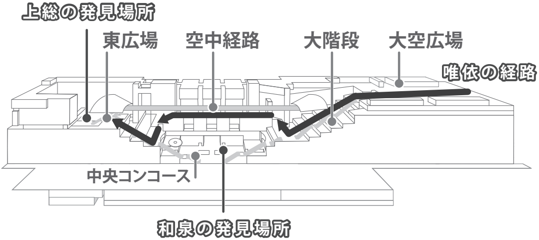
「——ふざッ……けるなぁ……っ……！」

コックピットに延びる物欲し気な赤い手——

唯依は腕を突き出してサイティングすると、騎兵銃(カービン)の引き金を絞った。サプレッサーに圧された乾いた咳の如き連射音が東広場に籠もる。

だが戦車級(タンク)は何事も無いかのように銃撃を無視

京都駅での唯依の経路



して食事を続ける。稀に手を引っ込めるような動作をさせることはできるが、やはり5・56㎜ではまったく歯が立たない――。

『……ばか……ッ……やめ…なさい……篁……っ……！』

耳元の歎声――唯依は嘔吐感と頭痛と客観性を堪えながらマグチェンジ――。

『……おねがい……やめ……て……ッ……！』

フルートで40発すべて撃ち尽くした唯依はスリングをリリース、騎兵銃(カービン)を投げ捨て拳銃を構える。

『――やめてよおッ!!』

ドクン――。

「――ふぅッ……ふぅッ……ふぅッ……ふぅッ……!!」

絞り出すような上総の叫声に、唯依は凍り付いたように動きを止めた。食いしばる歯の隙間から洩れる呼吸だけが、時が流れていることを証明していた。

戦車級(タンク)による解体が進み、歪んだコックピットは既にほぼ露出している。

『……弾丸(たま)を……無駄にしないで……』

「……え……？」

ドクン――。あの視線だ――見えるはずのない上総の表情が、唯依にはわかった。

『お願い……私を……撃って……』

ドクン——。頭痛と吐き気と客観が酷くなる。

『撃ってよ……お願い……だから……！』

ドクン——。圧力注射——心拍が上がり、視界狭窄と耳鳴りが激しくなる。

『……餌になる前に……っ……殺してよぉっ‼』

「あ……ああ……あ……あああ……っ……！」

唯依の口から狼狽が零れる——。

『——お願い撃って、早くっ‼　撃ってよぉぉッッ‼　こいつらに食われる前に——ッ‼』

ドクン——。その一瞬の間、唯依は上総と目があったような気がした——。

『——撃ってよ唯依いいいいいいぃぃぃぃぃぃ！！！！！』

ドクン——。上総に初めて呼ばれる名——。

白い闇——引き延ばされた主観時間の中、唯依はフラッシュバックの奔流に溺れる。

《心を通わせたもの同士であれば、名前を呼び合うのも悪くないですわね》

ドクン——。

《でも、止めておきましょう》

ドクン——。

《いつか、そう呼び合える日がくるといいですわね》

ようやく理解できた――上総は唯依の取り繕いを、あの時上塗りした嘘を黙って受け容れたのだ。そして――。

《以前の私にそっくりだったからですわ》

ドクン――。

《ふたりの兄を失った時に、気付いてしまいましたわ。私、自分自身が戦う理由……何も持っていなかったってことに》

ドクン――。

《身内の死という個人的な動機が出来て初めて気付くなんて、情けないにも程がありますわね……》

心を明かせないもの同士が名を呼び合う意味。上総は自身の死を、唯依が個人として戦うための動機にしようとしているのだ――撃って、生きろ、と。

どくん――。

「――うわあああああああああああぁぁッッッ！！！」

堰き止められていた感情の奔流が、一気に表層に噴出した――。上総の顔面をサイトし、歩を進めながら、何度も何度も引き絞る銃爪（ひきがね）――。

「――うわああッ!!　うわああッ!!　うわああああッ！！！」

志摩子が、安芸が、和泉の死に様が重なっては消える――。

「ああああああ……ああ……あ……あ……」
スライドがロックし、銃爪が抵抗を失う——。感情が急速に圧縮され、目眩を伴う頭痛と吐き気、が膨張し、唯依はその場でへたり込んだ。
「うあああぁぁ……ああ……ぁ……」
上総は呆れたように首を傾げ、不自然に身体を捩って宙に浮く。その左肩口を掴む赤い手が、歪んだフレームに挟まった上半身を執拗に引っ張り、3倍以上の長さに延びた黒い強化皮膜と共に腕がちぎれた。他の個体が挟まった上半身を競って奪おうとする。
「ぁあ……ぁ……あ……」
バイタルは既にフラット——唯依の放った弾丸は一発とてその原因にはならなかった。競い合った2体が譲らず、蟹の甲羅を剥がすように、上総の胸郭が前後に割かれ、内容物だらりと滴る。脊髄と頸部プロテクターの作用か、頭が繋がったままの背中側はその個体の口に運ばれる。噛み切った勢いで口から飛び散る液体や塊。その落下物は唯依の膝元まで転がって、動きを止めた。
ドクン——。
・・・
あの視線だった——下顎を失った上総の首。その血濡れた両眼に湛えられていたのは、同情とも侮蔑ともつかない涼しげな眼差し。
「ぅ……あ……ぁ……ぁあ……ッ」

恐る恐る両手を伸ばす。泣くこともわめくことも、後悔することも詫びることもできない心で、唯依はプログラムされた機械のように、上総の一部だったそれを、そっと胸に抱きしめる。そして、解隊されてゆく上総とその機体に生気の無い眼を向けた。数体の戦車級（タンク）が、コックピットに残った下半身を狙って隙間に腕を突っ込み、無理矢理引っ張り出そうとしている。コネクトシートのフットペダルに強化装備のブーツが引っ掛かっているんだ――唯依はその様子を見詰めながら淡々と分析していた。上総の首を追ってきたであろう、眼前で口を大きく開け威嚇する戦車級（タンク）など、まるで存在しないかのように。

せめてこれだけは、渡したくない――唯依は冷静かつ客観的にそう考え、身を捩って上総の遺骸を遠ざけた。わきわきと指を波打たせ、眼前に迫る巨大な薄橙色の歯。ヘルメットがなければ、戦車級（タンク）の猛烈な金属臭に辟易としているかも知れない――そう考えながら、人に似たその口腔を唯依はぼんやりと眺める。

その時――金属音の高鳴りと震動、そして熱風のようなものを感じた。

「――ぐあああああッ！！？？」

突然の閃光と衝撃――戦車級（タンク）に激突され、弾き飛ばされた唯依はエスカレーターを転げ落ちる。

「――く……ッ！　……いったい……何が……!?」

濛々と立ちこめる煙と埃。予備電源で作動するスプリンクラーと非常ベル。見上げると、後半身を失った戦車級（タンク）が天井とエスカレーターの間に挟まって絶命していた。断面から捕食した金属塊や体液が音を立てて落下している。

「……爆……発……？」

エスカレーターに併設されている階段は、往時には無かった瑞鶴のものらしき残骸や戦車級（タンク）の一部が散乱し、殆ど閉塞された状態となっていた。戦車級（タンク）が盾にならなければ、強化装備があるとは言え、唯依も無事ではなかっただろう。朦朧とする意識をつなぎ止めながら、唯依はステータス確認を反射的に行う。

「……まさ……か……」

瑞鶴のマーカーが消えている。衝撃と閃光の直前に聞いたジェットエンジンの金属音。何らかの原因で跳躍（ジャンプ）ユニットのスロットルが解放され、洩れていた燃料に引火、大爆発が起きたのだ。

「……ッ!?」

フラッシュバックする最後の光景――ひしゃげたコックピットをまさぐる赤い手。フットペダルに引っ掛かったであろう、上総の右脚――。

「……山……城……さん……？」

それは単なる偶然か、或いは上総の執念か――死して尚数十体の戦車級（タンク）を屠り、唯依

を救ったのだ。朦朧と混濁、冷静と客観が混在する今の唯依にその何れの仕儀かなどわかる由もない。だが、ひとつだけ明確に認識していたのは、上総の遺骸を手放してしまったことだった。唯依は鉛のように重い身体を引き摺り、それを探して瓦礫の中を這ってまわる。

「――あ……！」

烏丸小路広場に繋がるエスカレーターの手前にそれを見つけ、唯依は懸命に這い進む。瓦礫を避け、肉塊を乗り越え、体液に塗れながら、それを掴もうと懸命に手を伸ばす。あと数センチ――震える指先が、かつてあれほど長く美しかった黒髪の残滓（ざんし）に触れた――。

「――!?　あれは……！」

震える指先と上総だったものの向こうに、何かが動いた。それは網目模様に区切られたバスターミナルに屹立する巨大な獣たち――。

「……要塞級（フォート）ッ……さっきの奴等が……！」

その威容に慄然とする間もなく、這いつくばって接地している腹部に細かいサイクルの震動を感じる。遠くから迫る硬質な打撃音の氾濫――。唯依は身体を捩り、大空広場方向に眼をやる。先程唯依が下った大階段を、赤黒い濁流が流れ降り始めていた。それは数百体の――。

「……タ、戦車級……っ!!」

爆発に惹き寄せられたのであろうか——京都駅は今、BETAの一大集結点になろうとしている。唯依は上総の遺骸を再び胸に抱き、その場に身を横たえる。この期に及んではもう脱出など叶わない。これだけの数が集まれば、すぐにでも艦砲射撃の対象にもなろう。斯衛に在りながら帝都防衛に何ら貢献せず、自決さえ儘ならず、半端な死に様を晒す己が未熟——混沌とした精神にあっても尚、虚無感に苛まれた。その口から漏れ出るのは詫びの言葉ばかり。皇帝と将軍に。上総に。和泉に。安芸に。志摩子に。如月に。同期生達に。そして、真田と教官達に。巌谷に。梅納に。父・祐唯に——。

上空を行き交う複数の轟音。頭上の爆発音にガラスが一斉に震動する——艦砲射撃の開始かと唯依は半身を起こし、諦観の視線で大階段を見る。流れ落ちる戦車級の大河の向こう、次々に立ち上る火柱。その爆炎の中から進み出る山吹色の影が、群れなす赤い異形を次々に粉砕する——。

どくん——。

唯依は目を見開き、呆然とした。大破擱坐したはずの唯依の瑞鶴が——父の造った戦術機が黄泉還り、自らの意志を持って唯依を救いに来たのだ。

「——とう……さま……!?」

頭部メインセンサーが退紅色に一段と輝く。同時にその機体は、銀盤を滑るかのよう

な噴射地表面滑走(サーフェイシング)で中央コンコースに躍り込み、長刀と突撃砲の舞で一面の戦車級(タンク)を肉片と体液の混合物に変えていく。その踵部、下腿、上腕、保持指の先端に至るまで全身が鋭利な刃物であり、触れる異形の悉(ことごと)くを膾(なます)に斬って棄てていく。だが――。

「……あの機動……壱型丙……!?」

違う――機動性、運動性こそ先に見た壱型丙と酷似するも、その姿は山吹の瑞鶴――いや、瑞鶴に似て非なる未知の戦術機だった。

「……あれは――うぅッ!?」

轟音と震動――そしてガラスの破砕音が瀧のように降り注ぐ。大空広場に滑り出た山吹の機体と入れ替わるように、切断された要塞級(フォート)の衝角腕が飛び込んできたのだ。そこから漏れ出る溶解液が、辛うじて生き残っていた小型種と和泉だったものを根こそぎ溶かしていく。

上空を行き交う跳躍(ジャンプ)ユニットの排気音。

「――うわああ……!!」

再び轟音と震動――ガラス張りの構造壁とほぼ同じ全高を持つ要塞級(フォート)が、コンコース内に倒れ込んできた。そして、跳躍(ジャンプ)ユニットの最大噴射でその三胴接合部に深々と貫手を突き立てていた蒼い機体が身を捻り、２本の短刀が突き出た肘を喰らわせ、短距離(ショート)跳躍(ジャンプ)でステップバック。瞬時に長刀を装備しながら水平噴射跳躍(ホライゾナルブースト)、その右胴節を一閃で

切り離した。

どくん——。

僅か数十メートルの眼前で展開する見たこともないレベルの機動格闘戦に、唯依は声もなく、たた呆然とその機体を見詰めるばかりだった。赤黒い雲海を背に闇に立つ蒼い戦術機。その頭部は瑞鶴の面影がありながら、人食い鮫、或いは鎧武者の様でもあった。睨み眼の如きかつてない形状のメインセンサーが溶岩色に輝き、次の獲物を求めるように構外へ跳び立つ。バスターミナルには要塞級（フォート）数体の屍骸が横たわり、その傍らから同型とおぼしき深紅と純白の二機が後を追うように跳び立ち、最後に山吹の機体が視界を横切って消えた。

「……え……あ……？」

呆然と見送っていた唯依は、自身の周囲に光の円ができていることに気付いた。眼をそして首を、上体をゆっくりと捻り、背後に眼を向ける。数個の光源が闇に浮いて輝き、唯依を照らしていた。バイザーが自律調光を始めるとハレーションが収まり、いくつかの塊が見えてくる。すると、そのひとつが何か音を出して近付いてきた。

『マーカーB確保。マーカーAは現場到着直前に消滅。繰り返す——マーカーB確保。マーカーAは現場到着直前に消滅』

その音を聞きながら、唯依の意識は深い谷に落ちていった。

数刻後　伊賀市　帝国斯衛軍・開発試験部隊駐屯地

任務を終えて降機したその衛士は、自身が纏う強化装備と同色の機体に深々と一礼した後、詰所に向けて歩き出した。
強化装備の感覚欺瞞が解除された影響で、戦闘後特有のG疲労が全身に重くのし掛かる。無理もない。市街各所に孤立した斯衛軍部隊を支援し、帝国軍の戦域救助隊を誘導するという難度高いの任務——それをたった一個小隊でこなしてきたのだから。しかも、搭乗したのは前代未聞の高機動戦術機である。身体への負担は想像以上だった。だが、その怠さも鈍痛もすべてが心地よい。あの機体が量産され、正規配備されたなら——絶望の奈落に差し込んだ微かな光が、その心に希望を灯し、焔となって燃え上がっていた。
「——いやいや、お美事。とても雅やかだったよ、崇宰大尉」
不意に掛けられた声に、俯き気味だった顔を上げる。斑鳩少佐だった。同じく蒼い強化装備を纏い、軽く手を叩きながら優雅な微笑みを浮かべている。
「僅か一個小隊で、あの数の要塞級を数分で膾斬り——あれは特に良かった。とても有意義な性能実証ができたと、メーカーの技師らも斯衛の技官らも大層喜び、君に感謝していた」

崇宰恭子（きょうこ）は同じ五摂家の上官に正対すると最敬礼した。そして面（おもて）を上げると同時に、機体の印象が喜色を伴って迸った。

「いえ、礼はむしろ、こちらが彼の者達にせねばなりません！　試製98式、聞きしに勝る壮絶な性能です少佐！　あの機体こそ、帝国の未来を――ッ!?」

立ち眩みか疲労にせいか、よろめいたところを斑鳩に支えられる。

「はっはっはっ――さすがの〝鬼姫（おにひめ）〟も、あれの機動性能は相当堪えたとみえるね。試作強化装備の女性用があればよかったのだが」

「申し訳ありません、お見苦しいところを……」

ゆるりと身を離し、姿勢を正す。そして息を整えてから顔を上げた。

「ですが、本当に宜しかったのでしょうか。此度の仕儀、私（わたくし）に止まらず少佐にも累が及ぶのではと……」

恭子の脳裏に、出撃前の記憶が蘇る――。

◇

「――帝都への砲撃が始まった以上、事は一刻を争います！」

恭子は言葉と共に抑制した怒気を放った。

「市街に分散孤立している斯衛部隊は学徒ばかり。何れもデータリンク制限が解除されておりません！」

二条城・地下50ｍ――斯衛軍作戦司令本陣。強化コンクリートを伝う爆音と衝撃が、高い位置でまとめた黒髪に土埃を降らせる。だが気にしている場合ではない。

「元よりこの状況下に在っては、データリンクが完全であれ、自力の戦域離脱など望むべくもありません！」

第二帝都・東京との直通モニターに映るのは政威大将軍・斉御司経盛。その周囲には摂家衆の衛士と将校達が並び立っている。

「帝都蹂躙を許した上、遠からず怨敵ＢＥＴＡを滅す定めを担う若き斯衛を――見捨てることなどできましょうか⁉」

斉御司経盛は恭子の視線を受け止めて無言で頷き、揺るぎない声でそれに応えた。

『崇宰大尉の具申・至極もっとも。されど斯様な折に斯衛の独断専行、郷後の禍を生ずに相違ない』

「――殿下……ッ‼」

恭子は目を見開く。だが――。

『此度の件に関わり、斯衛軍の一機たりとも動かすこと罷り成らん。――本陣の移設を急げ。よいな』

恭子とその場の者達は敬礼で恭順の意を示す。政威大将軍が頷くと、モニターが黒に染まり通信が終了した。

「殿下とて断腸の想いであろう。誠に無念ではあるが、沙汰が下った以上、致し方在るまい」

「心得ております、九條卿（くじょうきょう）。お心遣い、痛み入ります」

恭子はそう答えて旧知の城代参議（じょうだいさんぎ）に一礼すると、奥歯を噛みしめながら指揮所に向かう。腹底に煮えたぎる無能感と憤怒、そして慚愧が内圧となって感情を圧迫した。

「——崇宰大尉、少しいいかい」

呼び止められ、表情を整えてから振り返る。

「は、斑鳩少佐。いかがされましたか」

斑鳩少佐は幼い頃とまったく変わらない、穏やかでやわらかい眼差しで恭子を見ていた。まるで平和な日々が未だ続いているかのような——。

「よかったじゃないか大尉。殿下のお墨付きを戴いて」

恭子は膨張する感情をねじ伏せて、斑鳩少佐の目を見据えた。意味のわからない冗談に付き合う余裕など、今は一寸もない。

「はっはっ、怖い顔も雅やかだね恭子。〝鬼姫〟の字（あざな）は伊達じゃない。いつもの凜とした微笑み——私はそちらがより好きではあるけれどね」

「少佐、今は服務中故、そのような——っ!?」

努めて抑制した拒絶と怒気を突きつけようとした瞬間、斑鳩少佐が一歩踏み込んだ。

互いの第三種待機補助装備（Cウォーニング）が、ガサリと擦れる。そして——。

「殿下は仰ったじゃないか。斯衛軍の一機たりとも、とね。つまり斯衛軍でなければ構わない——そう言外に含まれたのさ」

「おやめ……ください……」

あまりに近すぎる斑鳩少佐の瞳。身を捩って顔を背ける。

「そのような屁理屈。あなたは昔から……」

だが言葉とは裏腹に、爆ぜる寸前だった怒りの内圧が一気に霧散する。壁際に追い詰められた恭子は身を離すのも忘れて次の言葉を待った。斑鳩少佐は更に顔を近づけ、まとめ髪の埃を優しく払いながら微笑む。

「あるのさ。斯衛軍には未登録で、敵支配域への強行突入と密集機動格闘戦に耐え、尚かつ生還できる可能性を秘めた機体が」

どくん——。

耳元の囁き声に胸が高鳴る。

「試製98式——伊賀の開発試験場に4タイプ、ひと揃いしているよ。信頼できる部下を連れて行くと良い」

どくん――。

「案ずる必要はないよ。学徒兵の回収は帝国軍の救助隊をこっそり帯同させればいい。なに、その手の伝には事欠かないさ」

「……え……？」

思わず斑鳩少佐を見る。寛雅な眼差しが恭子を射貫いていた。

「ほらどうだい、斯衛軍は一機も動かしていないだろう？　ふふふ……」

そうだった。昔から何を考えているかわからない男だった。だが、粗略であったことも、虚言を弄することも終ぞなかった。

斑鳩少佐は瞼を閉じて微笑み、一歩下がった。恭子は身形を整え、質す。

「ですが試製98式は、少佐のために搬入されたものでは。確か、実戦での試験運用を……」

「そう、第二帝都で拵えている殿下の機体。その仕様決定のための基準データを取るはずだった。ところがね、戦況の悪化に驚いた城内省本営が、即刻送り返せなどと言ってきてね」

なるほど、そういうことか――流れが見えた。

「少佐はそれでもおやりになるつもりでしたのね、実戦試験を。即時出撃可能な由はそれ故でありましょう」

さてねえ——そう言って斑鳩は愉快そうに微笑んだ。

「それでは尚のこと、私が貸与いただくわけには——」

「いいさ、君に譲るよ。この期に及んで人様の檜舞台に縋り付くほど、無粋ではないつもりだ」

「……無……粋？」

斑鳩少佐は恭子の問いには答えず、更に目を細めて微笑んだ。

「それに……元より君は、行くつもりだったのだろう？」

◇

「——元より私は、行くつもりだったからね。お咎めあっても、どのみち同じだよ」

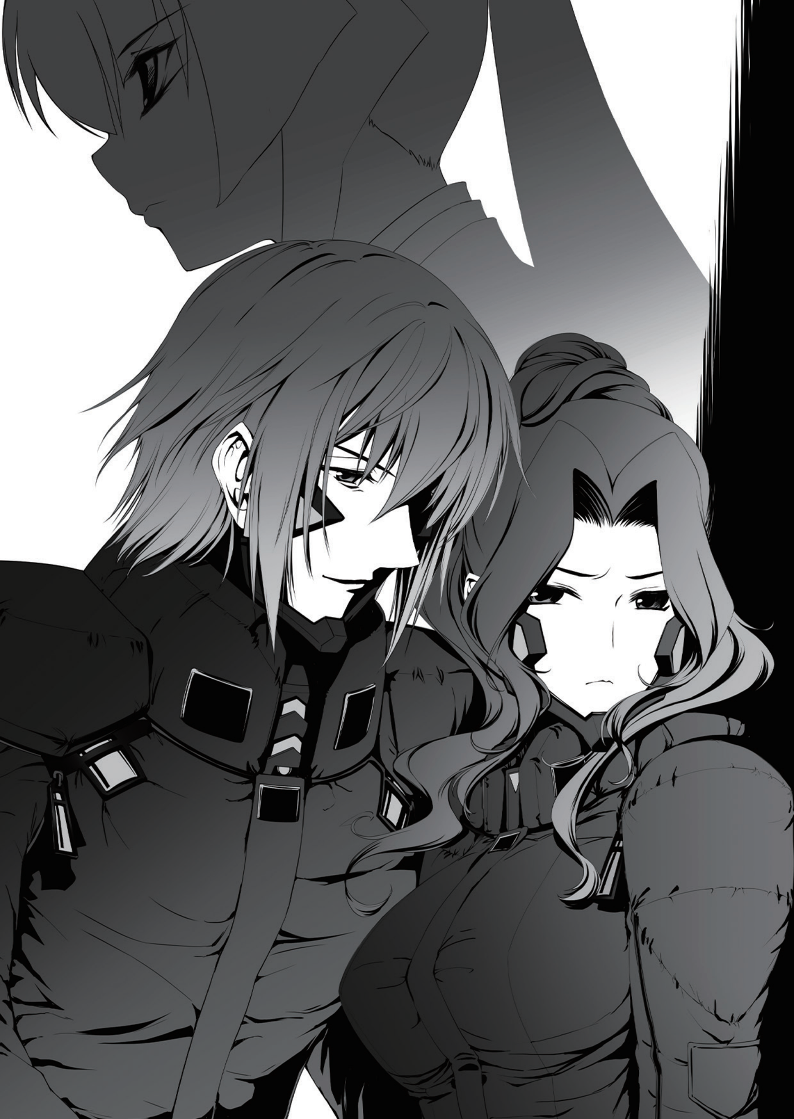
斑鳩少佐は恭子の問いに答え、更に目を細める。出撃前の記憶と重なる、その笑顔。

「同じ首尾なら、君を瑞鶴(82式)であの地獄に放り出さなかっただけ、上出来さ」

あのまま瑞鶴で出ていたなら、全員の救助は不可能。それどころか恭子自身も落命していたに違いなかった。

「少佐のお覚悟と高配に心から感謝申し上げます。無論私は、この仕儀に関わる如何なお咎めも受ける所存です」

「はっはっ、本気なところが実にらしい。だが君は今日、戦場の伝説を創った。しかも、斯衛にとって格別好都合なものをね。お咎めなど在ろうはずがないさ」
「そうであれば良いのですが――」
斯衛の機体でなければよいと陛下が言外に含まれた――斑鳩少佐の解釈を、恭子は真に受けてはいない。ただ、救出を最優先し、成功の可能性が高いと思える提案に乗っただけのこと。蹂躙される帝都を前にして、一向に出陣の命が下らない事態に苛立っていたこともあり、激情に駆られた側面は否定できない。五摂家に列なる者と在っては、処罰に於いても範となる覚悟だった。
「確かに、試製98式の性能と戦果は些か伝説的ではありますが、それが私の抗命を帳消しにするとは思っておりません」
「やれやれ、信を得られずは私の不徳か、君の篤実か……」
斑鳩は呆れたような、嬉しそうな微笑みを湛えて首を振った。
「砲弾雨と降り注ぎ異形跋扈する帝都。其の駆け巡るは神速、轟咆伴い空より来たりて群れ為す怨敵瞬刻に圧す。宛も雷神の降臨――そう確信しただろうね、取り残された戦場で、凄惨な死を覚悟していた者達は」
それはまるで詩のようだった。その流麗な語り口と印象深い声の響きには、単なる戦闘すら伝説譚の如く聞かせる魅力がある。



「しかも、それを見ていたのは君が救った者だけではない。救助に向かった部隊の者。斯衛は勿論、在日米軍や帝国軍の将兵、指揮官。そして――帝都を愛する余り、避難命令に従わなかった国民達も、だ。奇蹟の救助を成した雷神の如き戦術機――その搭乗衛士を罰するなどできようものか」

朗々と語り続ける斑鳩少佐。微かに昂揚(こうよう)しているように見えるのは気のせいだろうか。

「試製98式はもう、ただの戦術機ではないよ。戦域にその姿を現すだけで、全将兵の闘志を燃えあがらせる武神――雷神の顕現たる〝武御雷(たけみかづち)〟となったのさ」

「たけみかづち……」

それが、試製98式制式採用の際に与えられる予定の字だった。

「向後(こうご)、帝国は古今未曾有の苦難に塗(まみ)れるだろう。その嚆矢(こうし)として、僅か数日間で先進一等国の座から転げ落ちた。激減した人口は戦禍の継続によって回復せず、恐らく二度と同じ地位に返り咲くまい」

斯衛五摂家に在っては甚だ不謹慎――だが、正鵠を射ている。

「斯様な暗黒の時代、人々に必要なのは神話だ。そして、その時社会を総べるものは父性ではない――母性だよ」

斑鳩少佐は恭子を見詰める目に更なる熱を灯す。胸中に蠢く微かな胸騒ぎ。どの様な沙汰になるにせよ、覚悟は極(き)めている。なればもう潮時――これ以上、ここにいるべき

ではない。
「少佐、畏れながら御身が選する話柄としては、些か不心得（ふこころえ）かと……」
「ああ、すまないね。試製98式と君の活躍に、つい興奮してしまったようだ」
斑鳩少佐はふふふと笑いながら、降参とばかりに胸元で両手（もろて）を翻す。恭子は敬礼を以て、会話の終わりを暗に宣した。
「――そういえば、君が救出した学徒兵の中に――篁公の跡取りがいたね」
「……は」
答礼を下ろした斑鳩少佐の質し――恭子は背を向けかけていた動きを止める。
「いや、感動的じゃないか。父親の手がけた〝武御雷〟が、戦地に果てようとしていた愛娘を救うなんてね。そして――」
意味深げに間を置いた言葉の半身が、薄く笑うその口から紡ぎ出された。
「その機体の衛士が、遠縁にある五摂家の次期女性当主とはねえ……。美しい話だ……実に雅やかだよ」
ドクン――。
頭の中ですべてのピースがはまる。斑鳩少佐の――いや、幼馴染みでもある崇継の描こうとする画が、恭子にもようやく見えた。
「顕在化した雷神を駆る者――さしずめ君は、女神といったところか。――ねえ、恭子？」

一九九八年七月一五日　京都　東山区
五条橋東第三野戦病院

なんか遠くでうるさい……。頭の中と心の中でぐちゃぐちゃになってたものが、だんだん分かれてきて、形がはっきりしてきた感じ……。

「う………」

多分、目を少し開いてる。でも、目の前のものがなんだかよくわからない。なんか見たことはある。だんだん、何となくわかって来てるけど、たぶんもっと時間がかかる気がする。

ああ、そうか。あれって軍用のテントの屋根だ。どこかで見た気がしたんだ。

「あれ……なんで……こんな……」

見えているものや聞こえている音……それ自体は何かってわかるようになってきた。たぶん。でも、なんかひとつひとつでしか理解できない感じで気持ち悪い。それが何かはわかっているのに、その意味がわからない気持ち悪さ。

「……あ……ぅ……」
ちょっと起きてみようとしたけど。だめだ……すごく怠い。身体が重すぎるよ。
「あれ……」
私、こんな服着てたっけ？　なんていうのか、白い術衣のようなもの。でも、術衣ってなんだっけ……？
「……あ」
あの女の人って……あれだ、看護師さんだ。それくらいは格好でわかる。なんか驚いたような顔で私を見てるけど……なんだろう。
「……ぁの」
あ、まって……声が出にくい。ああ、行っちゃった。見えないところでなんか私のこと話してる。
「――先生っ！　篁さんが意識を取り戻しました!!」
先生……？　え～と、看護師さんがいるから……。
あれ、そう言えば、篁って……私のことだよね？
「先生、ここです！」
あ、頭の上の方から声がする。足音もだんだん近付いてくる。
「――篁唯依少尉、だね？」

どくん――。

「――いっ……たッ！」

頭、凄く痛い……。あ、今度は男の看護師さんと、おじさんが見える。そのおじさんがたぶん先生。ということはお医者様だ。だとすれば、この頭痛を何とかしてくれるかも知れない。

「聞こえていますか篁少尉、私の言ってることがわかりますか？」

「先生……頭が……痛いです……」

何とか声も出て来た。考えもちょっとずつ繋がり始めているみたい。あとはこの怠さと頭痛さえがなんとかなれば――。

「とても……痛いんです……どうしよう……」

先生は優しそうな笑顔で私の手首を押さえてる。ああ、脈を取っているのか。

「大丈夫ですよ、君はとても運が良い。身体も心も、回復する余地は十分にありますよ」

そうなのか……よかったのかな。とにかく頭痛、なんとかして欲しいです。

「先生、この症状は……やはり」

「記憶障害、幼児退行、思考力の低下……典型的な後催眠暗示の〝悪酔い(バッドトリップ)〟と過剰投与の副作用だね。斯衛軍は臨床例が少ないから、殆どこうなる」

後催眠……暗示……？
「特に今回斯衛軍が採用したものは、帝国軍より強度が高いものだ。その分、副作用も大きく、厄介だ」
どくん——。
「——ッ!?」
またた……頭が……。あれ……なんだっけ。
「先生……。私……なんか思い出しそうです……え～と」
「篁少尉、無理しなくて良いからね。今はまだ——」
「……いつから……だろう」
「……ん？」
「先生、篁少尉が……何か呟いてます」
「……生者が……死者の数を数えるのを……やめたのは……」
あれ……あまり頭痛くない。なんか……楽だ　スッキリする感じ……。前にこの詩を聞いたとき、隊長にも言われたような気がする。スッキリしたかって。なんでそんなことだけ覚えてるんだろう。
「……この……世界は本当に……滅びの道を、歩んで……いるのだ……ろうか……」
あれ……。え～～～と、この先、なんだっけ。

なんか凄く大事なことのような気がするんだけど……。
「え〰〰と……あれ……おかしいな……」
「どうしたんですか、篁少尉？　何がおかしいの」
「あの、ええっと……思い出せないんですう……大事な……とても大事なことだったはずなのに……」
「篁少尉、大丈夫ですよ。それは思い出せなくてもいいんですよ」
「でも……でもう……ぅ……ぅう……」
「泣かなくても大丈夫。いいんですよ、思い出せなくても」
「──先生、記憶障害があるはずですが。今のはいったい？」
「うむ……斯衛軍が今回の作戦のために導入した後催眠暗示の起動キーとなる詩だ。冷戦期のジャーナリストだか、報道カメラマンだかの言葉らしいが」
後催眠……暗示の起動キーって……なんだろう？
「後催眠暗示の効果は、被験者の精神的な基礎要因や動機、強迫観念が大きく影響する。無論、〝悪酔い（バッドトリップ）〟にもね。私は大陸の前線にもいたが、帝国軍も導入当初は酷いものだったよ」
「精神的基礎要因や動機、ですか」
「そうだ。薬物との組み合わせも含めて非常に重要な因子となる。例えば、志願兵用に

調整された処置を徴用兵に行えば、ほぼ100％〝悪酔い(バッドトリップ)〟するだろう。動機や強迫観念の在り方の組み合わせを誤れば、判断力を失い、攻撃衝動、或いは逃避衝動など、人によって様々な衝動が肥大化し、間違いなく錯乱する」

何言ってるかよくわからないけど……なんで私を見ながらそんな難しいこと言うの？

「この子達斯衛子女は、強迫観念的に志願気質を植え付けられてはいるが、実際には徴用兵の基礎精神構造と何ら変わらない。なのに用いられたのは暗示、薬品共に高強度の志願兵用。こうなるのも当然。……いや、それは最初から承知の上でのことだろうな。つまり、投薬実験の臨床サンプルというわけだ」

「だとすると……この患者、本当に、回復の見込みはあるのでしょうか……」

やっぱりなんか、私の悪口言ってるのかな。看護師さん、なんでそんな嫌そうな顔するの？

「どうだろうな。ただ、見込みはある。こうして生き残ったんだ。偶然、志願兵との精神的類似構造があったのかも知れん」

「そうであって欲しいものです……。でなければ、あまりに不憫です」

あ……？　なんか聞こえる……。あれは……。

「ん？　どうしました、篁少尉？」

「あの……なんか……赤ちゃんの泣き声が……聞こえるような……」

「ああ、あの子はね。昨日の晩、生まれたんですよ」
え……？　昨日って……？
「少尉達が頑張ってくれたから、あの子も生まれてくることができたんですよ」
「……赤ちゃんが……あんなに泣いてる……」
「先生。あの子にとって、このような地獄に生まれ出ることが、本当に幸せなのでしょうか……」
「最終的にそれを決めるのはあの子だよ。だがね――あの子が、幸せだと思える可能性を残すのは、間違いなく我々の仕事だ」
赤ちゃんは……なんであんなに泣けるんだろう……。
なんにも気にしないで……好きなだけ泣けるなんて……うらやましい……。
なんで……私は……そういう風にできなくなっちゃったんだろう……。
私だって……昔は……同じだったはずなのに……。
「ねえ……先生……」
「ん、なんですか篁少尉？」
「いつの間に私は……こんな風になってしまったんでしょうか……」
「む……」
「どうしたら……もう一度、赤ちゃんみたいになれるのでしょうか……」

「先生……これは……」
「私は……ぅうっ……いったいいつから……ぅ……うぅ……」
「——篁少尉～、聞こえますか？　とりあえず今は休んでください。もう泣かなくていいからね？」
「え……」
「明日には名古屋の病院へ搬送してもらえるからね。きちんと精密検査を受けて、ますは身体から治していこうね」
「……あ……はい……」
「じゃあね、お注射打ちますよ」
注射……打つのか……。なんか……針の注射って安心するなあ。
圧力注射はもうやだよ……。あ、圧力注射ってなんで打ってたんだっけ……？
「これはね、安定剤ですからね～。すぐに眠くなるから、遠慮しないで寝てしまっていいですよ」
「は……い……」
ああ……なんか、急に……凄く眠くなって……。
「ぅ………」
なんかもう……どうでもいいや……。

——爾今

一九九八年九月二四日　第二帝都東京　千代田区　帝都城北の丸
斯衛軍(このえぐん)第二帝都司令本部

「――ッ!?」
唯依(ゆい)は息を呑んで上体を起こした。そこは、既に見慣れ始めた部屋だった。作戦会議の後、立ち寄った崇宰(たかつかさ)大尉の執務室――そのソファで眠ってしまったようだった。
「またあの時の夢か……」
野戦病院の記憶――夢の内容もさることながら、大恩ある上官の執務室で寝落ちてしまった事実が唯依を苛む。唯依は頭(かぶり)を振り、覆い被さる陰鬱を払う。今はそのような些事に拘泥している場合ではない。ひとり生き延びてしまった羞恥と絶望に比べれば、なんということはないのだ。
むしろ、そのまま寝かせてくれた大尉の心遣いに素直に甘え、鋭気を回復したと感謝すべきなのだ――あの子であれば、そう考えるであろうか。
「……はあ」
激しい喉の渇きを覚え、執務机に置かれた水差しを目にして立ち上がった。
瓶の口に被せてあったコップに水を注ぎながら、ふと、窓に映る自身と目が合う。帝

都城の黒いシルエットを背負って浮かぶ亡霊のような斯衛軍女性衛士。京都の初陣から約2ヶ月。落ち窪んだ目、痩けた頬、そして僅かに延びた無造作な髪が、その間に経験した凄惨な戦いを物語っている。

あの後、帝都は約一ヶ月持ち堪えた。唯依は崇宰大尉の指揮する部隊に編入され、京都放棄から静岡まで、殿部隊として遅滞戦を続けた。そしてＢＥＴＡは富士川防衛線まで迫り、この第二帝都・東京までも脅かそうとしている。逡巡、あるいは後悔——そのような余事に気を割ける時間など、今は一瞬たりともないのだ。

「……!?」

決意に歪むガラスに映った己が凶相——そこに、懐かしい者達の面影が重なっては消える。夢見のせいだろうか、浮かぶのは京都防衛戦で鬼籍に入った者達ばかり。多くの同期生。如月中尉。そして——。

「真田大尉……」

真田の部隊はあの日の戦いを生き延びたものの、東進ＢＥＴＡ群第三波との戦いで帝都に果てた。

「貴方と壱型丙が育てた試製98式に……私は生命を救われました」

唯依は我知らず声を出していた。

「いつの日にか——この私が、必ずや壱型丙を……！」

必ずや――唯依は噛み締めるように呟く。
無邪気に笑う姿が、苦楽を共にした日々が、その死に様が――現れては消える
「和泉（いずみ）……。安芸（あき）……。志摩子（しまこ）……」
「ごめんね……私……まだ、なにもわからないよ……」
唯依は奥歯を噛み締める。
「だからお願い……私の生き様を、よく見ていて……！」
消えゆく安芸、志摩子、和泉。
「私が……退（しりぞ）かないように……見ていて……！」
そして、入れ替わるように浮かぶのは――。
「山城（やましろ）……さん……」
あの眼差しだった。憐憫と蔑みが入り交じった涼しげな視線を湛え、上総（かずさ）が静かに微
笑んでいる。
「私はまだ、あなたを名前で呼ぶ資格なんてない……」
嵐山基地――臨戦待機の士官ラウンジで買わした言葉が、洪水のようにあふれ出す。
「でも……いつか必ずなって見せる。あなたを名前で呼べるように」
京都駅舎の広場――上総の絶叫。唯依の名前。そして預けられた、生きて、戦う理由。
「山城さん……。私は、あなたのように生きたい……」

いや、あなたのように生きるんだ――。あなたのように振る舞って、いつかそれを自分のものにしてみせる。

「…………ッ」

皆が去った窓――そこに映る自身を見て気付く。いつの間にか、涙が頬を伝っていた。

「無様……な……」

唯依は袖で涙を拭い、忌々しげに歯を食いしばって己が不覚を恥じ入る――だが、目は逸らさない。それだけは、断じてしないと決めたから。山城上総であれば、そのような真似は絶対にしないのだから――。

どうやれば良いのかなど、まだ何もわからない。

何をすれば正しいのかなど、まったく見えてこない。

だが――だからこそ前に進むしかないのだ。

唯依は虚像の自身を鋭く一瞥し、踵を返して執務室を後にした――。

世界設定・地図解説

日本帝国軍・斯衛軍組織図

斯衛軍は帝国軍と共同作戦を行うことはあるものの、国防省、さらには総理大臣の命令系統下にもない、皇帝と将軍家を守るために存在する武装組織である。

日本帝国皇帝

政威大将軍
(日本帝国全権総代)

内閣総理大臣
国防省
帝国軍 / 帝国本土防衛軍

城内省
斯衛軍

撃震

京都防衛戦当時の帝国軍の主力戦術機。米国製 F-4に、長刀運用機能などが付加され、日本でライセンス生産された。

瑞鶴

撃震の改良型。少数精鋭の斯衛軍でのみ運用するため、整備性・生産性の悪化と引き替えに更なる性能向上を図っている。

斯衛軍と武家制度

１８６７年の大政奉還によって名実共に立憲君主国の元首となった日本帝国皇帝は、大政奉還に大きな役割を果たした武家である五摂家の者から、国事の全権を委任する政威大将軍を任命するようになった。この政威大将軍は、帝国議会の上位執政機関であり皇帝の執政を補佐する元枢府の長を務め、さらに帝国軍最高司令官をも兼任している。ただし第二次世界大戦の敗戦と米国の占領政策によって、政威大将軍は名誉職に等しい存在となっていた。それでも皇帝と政威大将軍の威光は大きく、斯衛軍という、皇帝と将軍を守るための独立武装組織を持つほどである。斯衛軍の人間は武家出身の者が多いが、武家出身でないと入れないわけではなく、また家柄の高さが直接斯衛軍の階級に影響しているわけでもない。

日本帝国の武家制度と政威大将軍の任命

政威大将軍

日本帝国皇帝

皇帝は政威大将軍を、五摂家当主の中から持ち回りで任命する。京都防衛戦当時の政成大将軍は斉御司経盛、2001年時点では煌武院悠陽となっている。

五摂家の中から皇帝が任命

五摂家

- 斑鳩
- 斉御司
- 九條
- 崇宰
- 煌武院

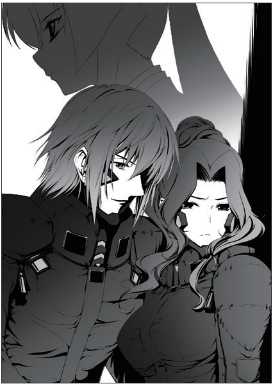
親藩武家

譜代武家

外様武家

試製９８式武御雷 Type-98XR

後に 00式戦術歩行戦闘機武御雷として制式採用される機体の試作機。京都で収拾された戦闘データは量産機の改良に生かされた。

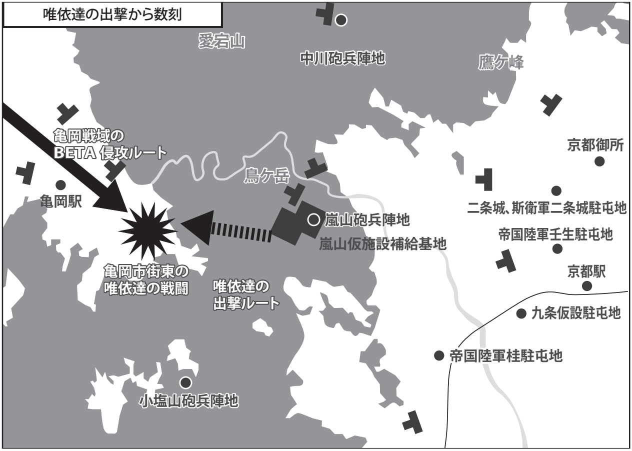


斑鳩崇継少佐（左）

五摂家の一家である斑鳩家の人間。武御雷の試作機として開発された試製 98式を、実戦での試験運用の名目で出撃させた。

唯依達の出撃から数刻

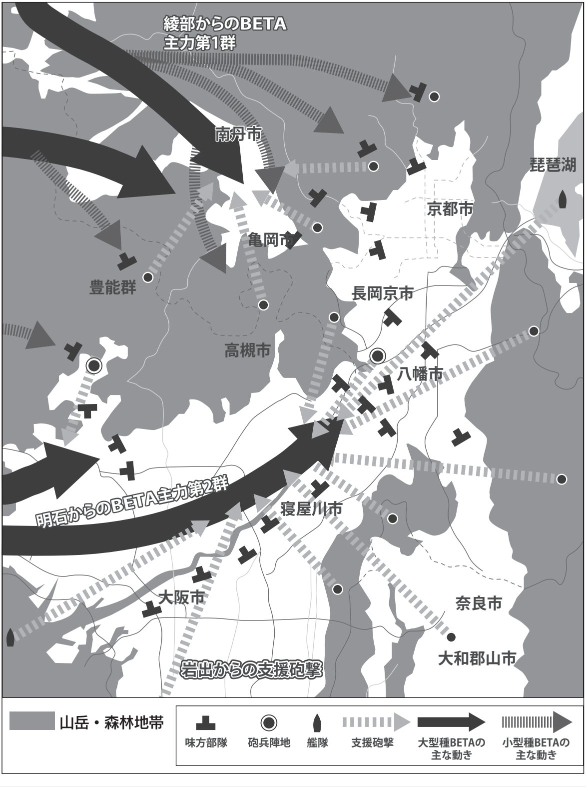
7月14日、京都第一防衛線の丹波戦区にBETAが接触。同日のうちに、唯依達には斯衛軍の戦術機部隊〝ファング中隊〟として帝国軍嵐山基地まで前進し、基地を防衛するよう命令が下された。中隊長は如月佳織中尉、中隊の装備は瑞鶴12機である。だが、訓練課程も満足に終えていない唯依達には華々しい活躍などもちろん期待されておらず、嵐山基地も戦線後方の臨時補給基地・砲兵陣地にすぎないはずだった。だが嵐山基地に進出後、西ケ嶽付近にBETAが接近しているという報が入る。つまり第一防衛線で接敵してから、わずか数時間で各防衛線を突破したBETAが絶対防衛線にまで侵入してきたことになる。さらに、嵐山基地の西南西、亀岡市方面に中隊規模BETA群が接近してきたため、唯依達の中隊にも出撃命令が下されることになった。亀岡市方面に出撃した唯依達は、亀岡戦域の東端で要撃級（グラップラー）や突撃級（デストロイヤー）のBETAと交戦。だが甲斐志摩子の瑞鶴が光線属種のレーザーに撃墜され、石見安芸は要撃級（グラップラー）の前腕衝角で攻撃されて死亡。9分にして唯依は小隊の僚機2機を失い、自分の他に生き残った小隊員である能登和泉と分隊を組み直して、戦闘を継続することになる。



山岳・森林地帯

京都戦線

斑鳩少佐が如月中尉に見せた戦況。大阪が突破され、大阪平野を進む大型種を中心としたBETAにより、京都の南門にあたる八幡市が脅威にさらされている一方、各所で山岳を越えて進む小型種BETAによって、京都を守るはずの各砲兵陣地も危機にさらされていた。だが砲兵陣地を守らなければ、防衛線が一気に瓦解してしまう恐れがあった。

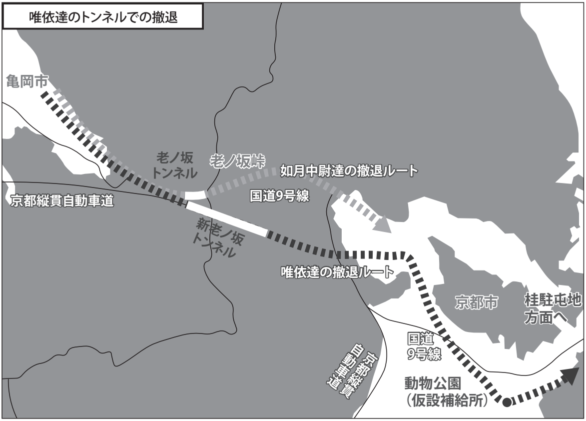


嵐山への撤退

嵐山の北西方面から、小型種ＢＥＴＡが接近。そのためファング中隊は亀岡戦域から離脱し、国道９号線沿いに移動し、山岳部をレーザーの盾としながら回り込みつつ嵐山へ向かって、嵐山砲兵陣地を直接防衛することにする。嵐山など高所の砲兵陣地は亀岡だけではなく、京都の南西の入口にあたる八幡にも砲撃支援を行える重要な場所だからである。

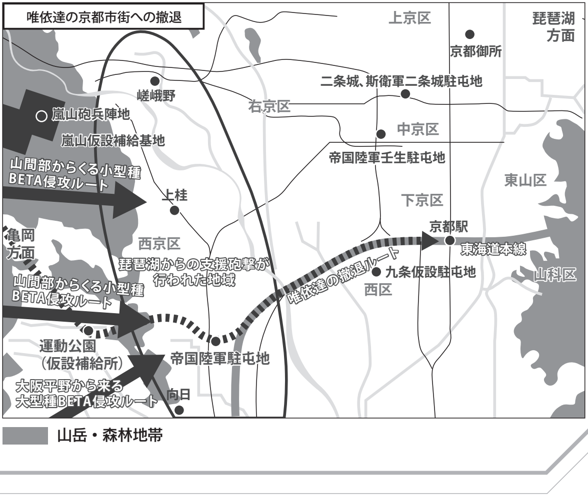
唯依達のトンネルでの撤退

大阪も席巻され、京都の南の入り口である八幡にまでBETAが迫っていた。八幡を守るためには、同地域に砲撃支援が可能な嵐山を死守せねばならない。だが、嵐山の北西方面よりBETAが接近してきたため、唯依達ファング中隊は亀岡から帰投して直接基地を防衛するよう命じられる。そのため後退することになったファング中隊は、国道9号線沿いに京都市に入ってから、山沿いに北上して帰還する予定であった。国道9号線の老ノ坂峠にある老ノ坂トンネルは戦術機が通るには狭過ぎるため、稜線を飛び越えなければならなかったが、先行した小隊は中隊長の如月以下全員が戦死した。高度を上げ過ぎた機はレーザーに撃ち落とされ、低く飛んだ機は戦車級（タンク）に取り付かれて地表に引き摺り下ろされてしまったのであった。中隊は唯依、和泉、上総の3名だけになってしまう。残された者の指揮を執ることになった唯依は、国道9号線沿いに進むのは不可能と判断。その一方で、国道9号線に併走していた京都縦貫自動車道の新老ノ坂トンネルを発見する。このトンネルは戦術機の陸送が可能な大きさだったため、唯依達は瑞鶴の武装を全てパージし、陸送モードでトンネルを通過。武装を補給するため運動公園、そして桂駐屯地へと向かった。



唯依達の京都市街への撤退

運動公園ではトンネルを抜ける時にパージした武装を補充することはできなかった。そのため唯依達は帝国陸軍桂駐屯地へ向かう。この地域はＢＥＴＡの接近により琵琶湖の艦隊からの艦砲射撃が行われていたため、残存ＢＥＴＡはきわめて少数で丸腰の唯依達でも無事に駐屯地まで辿り着くことができた。だが駐屯地も廃墟と化しておりもぬけの殻で、どうにか推進剤を補給することはできたが武装は無かった。さらに突撃級（デストロイヤー）と戦車級（タンク）の奇襲を受け為す術がなかった唯依達は、帝国軍に戻っていた真田晃蔵が率いる部隊に窮地を救われ、武装を分けてもらう。さらに、京都市内の各所にＢＥＴＡが侵入しているという現在の戦況を教えてもらった唯依は、残存機も武装も残り少ない現状だと、二条城の斯衛軍本陣に合流すべきと判断。そのことを真田に伝えると、まず物資集積所となっている京都駅に向かうことを勧められる。それに従い唯依達は、東海道本線沿いに京都駅へと向かうが、戦術機甲一個中隊が守りを固めているはずの駅は、無線で呼びかけても返答がない。そして唯依達は要塞級（フォート）の攻撃を受け、３機とも駅付近に墜落してしまった。



マブラヴ オルタネイティヴ
トータル・イクリプス
帝都燃ゆ

著者……………………………………………吉宗鋼紀
イラスト…………………………………………虚祇涼
CONTENTS ページイラスト　……………………フヂロウ
協力……………………………………田邊広高、教官

2023 年 9 月 22 日　………………………　電子書籍 発行
電子書籍：編集／デザイン…………　株式会社 aNCHOR

© Muv-Luv: The Answer

● 本書は、著作権法上の保護を受けています。本書の一部あるいは全部について、株式会社 aNCHOR から書面による許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で複写、複製することは禁じられています。
● 本書の内容・不良交換に関するお問い合わせは aNCHOR カスタマーサポートまで、お願いいたします。
● お問い合わせの受付は、祝祭日を除く月曜から金曜までの正午から午後 5 時までとなっております。MAIL：customer@ancr.jp